

Title	女神運動から紡ぎだされるつながり -イギリス南西部グ ラストンベリーにおけるオルタナティブ・スピリチュア リティの文化人類学的研究-(Dissertation_全文)
Author(s)	河西, 瑛里子
Citation	Kyoto University (京都大学)
Issue Date	2013-09-24
URL	http://dx.doi.org/10.14989/doctor.k17909
Right	
Type	Thesis or Dissertation
Textversion	ETD

博士学位請求論文

女神運動から紡ぎだされるつながり

ーイギリス南西部グラストンベリーにおける
オルタナティブ・スピリチュアリティの文化人類学的研究ー

河西瑛里子

論 文 要 旨

論文題目 女神運動から紡ぎだされるつながりーイギリス南西部グラストンベリーにおける
オルタナティヴ・スピリチュアリティの文化人類学的研究ー

申請者 河西瑛里子

論文要旨 (日本語で 800 字程度)

本研究の主な目的は、オルタナティヴ・スピリチュアリティという、現代のイギリス社会にみられる新しい形での宗教現象の現代的な意義を文化人類学的に考察することである。特にイングランド南西部のグラストンベリーという町で始まった女神運動を事例として、宗教以外の領域との関連や個人の日常生活にも注目し、つながりや共同性といった側面を取り上げている。

本論では初めにグラストンベリーでのオルタナティヴ・スピリチュアリティの発展について、イギリスの文脈において考える。続いてグラストンベリー女神運動を、グラストンベリーと女神運動の中に位置づける。その後、この実践に積極的に参加する人々の互いの関係のあり方を、3つの段階を踏んで明らかにしていく。第一に、儀式が一部の参加者の間に共同性を生み出す場であったゆえに隔たりが生じていたと述べる。第二に、その理由を探るため、当事者のグラストンベリーへの移住体験を取り上げ、親しい人を失った喪失感と新しい人間関係の希求の関係に着目し、その場を共有することで育まれるつながりが求められている様子を見ていく。第三に、その一方でこのような深いつながりが避けられてもいる様子を示し、親密性とプライバシーの間で揺れる共同性の形を提示する。そして、このようなつながりのあり方こそが、オルタナティヴ・スピリチュアリティに人々を魅きつける原動力となっている可能性を指摘する。

もう1つの目的は、調査の場で生まれている調査者と被調査者の関係の検討から、ヨーロッパ人類学の意義と民族誌の記述の仕方について考察することである。筆者のフィールドワークを事例として、調査の場では調査者と被調査者の関係がつねに明示されるのではなく、互いに個人として向き合い、ともに上記のような共同性をつくりだす一員だったことを示す。そして、ヨーロッパ人類学が文化人類学という学問の免罪符とみる視点を提起し、主観や口語表現を多用する民族誌記述の可能性を指摘する。

凡例

1、個人名の取り扱いについて

存命の人物の個人名は基本的に仮名で記した。なぜなら、相手が公開されるとは想定していないデータが含まれている可能性があるからである。ただし、女神運動を始めたキャシー・ジョーンズについては、Bowman [1993, 2004, 2005] や Welch [2010] でも本名で出ているし、彼女のかつての盟友バリー・テイラーもその著書を引用しているため、この2人は本名を出している。ジョーンズを本名で出す以上、その夫マイクも匿名にする意味はないと考え、本名を出している。また、テイラーのビジネス・パートナーだったヘリーン・コッペヤンもすでに死去していることもあり、本名を用いている。

2、用語の邦訳について

英語圏を対象として文化人類学の研究をする際、訳出の問題は避けられない。イギリスやアメリカ出身の人類学者が海外で調査した内容を英語で発表してきたという歴史的経緯から、分析概念としての訳語が定着している言葉も少なくないからである。本稿では分析概念ではなく、民俗用語として用いる場合、以下の表のように、文化人類学等でよく用いられる定訳とは異なる訳語を用いたり、カタカナで記述したりしていることを予め断っておく。なお、用語については用語集も参照してほしい。

英語	民俗用語 としての邦訳	定訳	英語	民俗用語 としての邦訳	定訳
ceremony	祝祭／儀式 (*)		spirit	スピリット	霊
magic	魔術	呪術	spirituality	スピリチュアリティ	霊性など
Priestess	プリーステス (男女ともに)	女司祭	witch	魔女 (男女ともに)	妖術師
Priest	プリースト (男性のみ)	司祭、 男司祭	witchcraft	魔女術	妖術

*ケルト人が季節ごとに催していたといわれる“seasonal ceremony”については季節の「祝祭」、それ以外は「儀式」と訳出した。なお調査対象の人々は自分たちの実践に“ritual”という単語を使用することは稀であり、本稿中の「儀式」は全て“ceremony”の訳語である。

3、記述の仕方について

- ・ インフォーマントの言葉の後の [] 内の年月日は、聞き取りをした日を示す。
- ・ 年齢は聞き取りをした時点のものである。プライバシーに配慮し、正確な年齢ではなく、年代を記している。
- ・ 引用文中の [] は筆者による注である。
- ・ 筆者が観察した事例のうち、インフォーマントどうしの相互行為がみられ、1日以内に完結した出来事に限り、フォントを変えて記している。
- ・ 調査者である筆者が特権的な立場からインフォーマントたちについて記すことを防ぐため、本稿では、ときに主観を交えて記述していることを、予め断っておく。

4、文献名の省略語について

“GCDT”とは町の雇用促進事業を担う信託団体 Glastonbury Community Development Trust のこと。

5、通貨について

イギリスでは「イギリスポンド (British Pounds)」を使用しているが、2008年秋から始まった経済危機の影響を受けて、日本円換算額は調査期間の初めと終わりで大きく変化した。調査を始めた2005年秋から2008年夏頃までは1ポンドあたり210~230円だったが、2008年秋以降は120~140円と半額程度まで下がった。そのため、2006年と2010年の価格を比べたとき、実際は値上がりしているのに、日本円に換算すると下がってしまう逆転現象が起こることもあった。このような誤解を避けるため、本文中で価格を記すときにはポンドでの値のみを記し、日本円換算額を表示していない。

女神運動から紡ぎだされるつながり
ーイギリス南西部グラストンベリーにおける
オルタナティヴ・スピリチュアリティの文化人類学的研究ー

要旨	i
凡例	ii
目次	iv
はじめに	1
第1章 序論	3
1、現代イギリスの新しい宗教現象	3
2、民族誌の中の調査者	15
3、調査の概要	21
4、本稿の構成	26
第1部 オルタナティヴ・スピリチュアリティの発祥と発展	
第2章 オルタナティヴな町	28
1、グラストンベリー一帯の概略	29
2、多彩なオルタナティヴ・スピリチュアリティ	34
3、オルタナティヴなライフスタイル	40
4、町の長い歴史と豊かな伝説	46
5、地元民からの視線	54
6、オルタナティヴ・スピリチュアリティの「聖地」	61
第3章 アヴァロンの女神たち	64
1、魔女から女神へ	65
2、生みの母の来歴	70
3、「アヴァロン」の創出	75
4、穏やかな姿勢	85
5、グラストンベリー女神運動の誕生	91
第2部 グラストンベリー女神運動にみられるつながり	
第4章 排他的な共同性	94
1、女神運動に携わる人たちの履歴書	95
2、季節の祝祭	103
3、隔たりを伴う共同性	113

第5章 移住という選択肢	116
1、グラストンベリー住宅事情	118
2、プリーステスたちと移住	118
3、在住プリーステスの求心力	136

第6章 つながりへの希求と忌避	141
1、「コミュニティ」の使われ方	141
2、雑談の場	144
3、適度な距離感の希求	152
4、女神の役割	160
5、つながりのあり方	162

第3部 フィールドにおける自己と他者の立ち位置

第7章 フィールドワーカーを迎えて	164
1、一参加者としての調査者	164
2、能動的な被調査者	166
3、エスニシティとの結びつき	168
4、調査者と被調査者の境界の曖昧さ	169
5、ヨーロッパ人類学という免罪符	172

第8章 結論	174
1、現代のイギリスにおけるオルタナティヴ・スピリチュアリティ	174
2、民族誌を記述する	180
3、今後の課題	181

おわりに	183
------	-----

謝辞	185
学会や研究会での発表一覧	187
初出一覧	189
引用文献	190

図	I
表	XII
写真	XLVI
登場人物一覧	LII
用語集	LIV

はじめに

私たちはみんな女神からやってきた、そしてそこに戻るのだ
海に流れゆく雨の雫のように

2006年の8月最初の日曜日、朝11時。イギリス南西部の町、グラストンベリーの町の中心部には、黄色や金色の衣装を身につけた人々が集まってきていた。その多くは女たちだ。ドラムやマラカス、鈴などを打ち鳴らしながら、体をリズムに合わせてながら、女神の歌を楽しそうに口ずさんでいる。

空気、火、水、大地の母
祖母、処女の母、出産の母
あなたを祝福します、私を祝福してください
あなたを祝福します、私を祝福してください
母、母、母、母、私たちすべてにとっての大母

大合唱がしばらく続いたところで、何の前触れもなく、一団は進み始める。行進の出発だ。美しく飾られた、柳の蔓でできた女神を担いで歩くのは男たち。歩き始めても、歌や楽器が鳴り止むことはない。200人ぐらいはいるだろうか、子供の姿も目立つ。

女神と一緒に歩いていこうよ、女神も私と一緒に歩いている
女神と一緒に歩いていこうよ、女神も私と一緒に歩いている
彼女は、澄み切った青い空の中の雲だ 私の足下の大地だ
彼女は、広い海であり、滴り落ちる雨粒だ 私の道を照らしてくれる閃光だ

こんな風に高らかに、にぎやかに歌いながら、沿道の人々の好奇の視線を誇らしげに見やりながら、交通規制が敷かれたハイ・ストリートを突き進んでいく。

母なる地球、あなたを骨の中で感じます
大地の上を美とともに歩きます
母なる地球、あなたの石に歌います
パワーの声と癒しの手

【2006年8月6日 グラストンベリー女神カンファレンス】

これは、現代のヨーロッパや北米などの英語圏に住む欧米人¹を中心に、関心が高まりつつある「女神運動」の祭典のひとつである。私のインフォーマントの1人がいみじくも「私たちの国はもはやキリスト教の国ではない」と語ったように、イギリス²では国教であるイングランド国教会をはじめとするキリスト教の制度や組織を離れ、それ以外の形で宗教的な実践に携わる人が増加している。

本稿の舞台であるグラストンベリーは、こうしたオルタナティヴ・スピリチュアリティに関心をもつ、イギリス、そして欧米各地の人々を引き寄せている。ケルト伝説の魔法の島アヴァロンとみなされてきたこの町は、人々に神秘的なイメージを呼び起こし続けてきたからだ。故郷を離れ、グラストンベリーに集う人々は、自分の生き方に誇りをもち、楽しく、力強く、エネルギーに満ち溢れて、毎日を過ごしているように見える。しかし、心の内には苦しみや悲しみを抱え込みながら生きている。本論文で私は、そんな彼らが綾なしてきた人と人との関係性を近い距離から眺め、そのあり方について考えていきたい。

¹ 本稿において「欧米」とは地理的な地域、つまり旧西側諸国のヨーロッパ、および英語圏の北米、オーストラリア、ニュージーランドを指す。また、「欧米人」とはその地域に住む旧西側諸国出身者、つまり移民を除く旧西側諸国のヨーロッパに暮らす人々と、彼らを先祖とするアメリカ人、カナダ人、オーストラリア人、ニュージーランド人を指すこととする。「西欧」「西洋」と呼ばれることもあるが、地理的な意味、民族的な意味では「欧米」を用いることにする。

² 日本語で一般的に「イギリス」として知られる国の正式名称は「グレート・ブリテン島、および北部アイルランド連合王国 (The United Kingdom of Great Britain and Northern Ireland)」であり、イングランド、スコットランド、ウェールズ、北アイルランドの4つの国の総称である。「イギリス」とはイングランドのみを指し、連合王国全体を指すときには「英国」と記されることもあるが、本稿では慣用に従い、「イギリス」を連合王国全体の意味で用いている。

第1章 序論

本稿の目的は、大きく2つに分けられる。第一の目的は、イギリスにおけるオルタナティブ・スピリチュアリティの現代的な意義を考察することである。具体的には、グラストンベリーという町で始まった女神運動を分析の対象とし、その生成と発展をグラストンベリーと女神運動の文脈から検討する。そして、儀式の場と実践者の生活世界の検討から、携わる人々の紡ぎだす親密な人間関係、本稿でいうところのつながり、および共同性のあり方を考える。第二の目的は、文化人類学における調査者と被調査者の関係の検討から、ヨーロッパ人類学の意義や民族誌の記述の仕方について考えることである。これは第一の目的で明らかにしていく被調査者たちの人間関係の中に埋もれた調査者を拾い出す試みでもある。

なお、本稿ではオルタナティブ・スピリチュアリティを、イギリスの伝統宗教であるキリスト教を含まない形でのスピリチュアリティとして想定している（詳細は本章 1-1）。また、フェミニズムと、キリスト教到来以前のヨーロッパにあったとされる信仰の復興運動であるネオペイガニズムが融合したような実践である女神運動を、オルタナティブ・スピリチュアリティの1つとして考えている（女神運動の詳細は第3章第1節）。

第1章では、現代イギリスの新しい宗教現象と文化人類学者とその調査者の関係に関する議論を概観し、筆者の立場を示す。その後に調査の概要と本稿の構成を説明する。

1、現代イギリスの新しい宗教現象

近年まで欧米に暮らす欧米人の研究は社会学が担い、文化人類学は欧米以外の地域、いわゆる発展途上国を研究するという「棲み分け」がなされてきた。そのため、欧米でみられる欧米人の宗教実践に関する研究は宗教社会学に蓄積があり、長期のフィールドワークに基づく文化人類学的な研究は始まったばかりである。そこで本節では、文化人類学だけではなく、宗教社会学におけるイギリスの宗教現象についての研究も含めて検討し、その問題点を指摘するとともに、本稿の視座を示す。

初めに、第二次世界大戦後のイギリスにおける宗教の状況についての議論を確認しておく、それは、世俗化論を基軸として説明されてきたといえる³。世俗化論とは、教会の数や出席者数、教会への所属者数の低下を受けて、1960～70年代に隆盛した社会理論であり、その概要は近代化に伴って社会における宗教の重要性が低下していくというものである（[ウィルソン 1979(1976) ; Bruce 2002] 参照）。

世俗化論はイギリスに限らず、欧米諸国を中心にもてはやされたが、中でもイギリスの

³ 世俗化論に関する以下の議論と整理は、伊藤 [2003]、岡本 [2012]、島藪 [1996, 2007] を参考にした。

状況は世俗化論を裏づけているとされてきた。たとえば、全人口に対するイングランド国教会やカトリックを合わせた、教会所属者の割合は1970年でも20.7%にすぎなかったが、1987年には15.0%まで落ち込んでいた（[Davie 1994: 38] 参照）。また1950年代初めでも、人口の45%は、洗礼、結婚式、葬式以外のときには教会に行っておらず、定期的に通っていたのは女性が11%、男性が7%にすぎなかった [スノードン&大竹 1997: 87]。

しかし、1990年代以降、イギリスの宗教の状況を世俗化とみる見方への反論もなされてきた。教会への出席率などから示される傾向は、制度的な宗教への信頼が低下しているだけで、個々人の宗教心は失われていないという捉え方である（[Davie 1994; Gill, Hadaway & Merler 1998] 参照）。

世俗化論をめぐる論争は、宗教をどのように定義するかという問題に関わっている。世俗化論の牽引役であるウィルソンは、宗教とは、欧米におけるキリスト教のように、超越的な宗教概念と教会のような制度や組織をもつと、実体的に定義していた [ウィルソン 1979(1976)]。それに対し、たとえばルックマンは、宗教とはそもそも個人の内面的世界に属するものであり、世俗化論で主張される「宗教の衰退」とは、宗教の私事化、すなわち個々人が宗教的に自立し、宗教表象を組み合わせ、個人に独自の意味体系をつくりあげることだと考える [ルックマン 1976(1967)]。後者のような、宗教の機能的な側面に注目して定義すれば、組織や制度、信仰体系が明確でなく、一見宗教にはみえない「オルタナティブ・スピリチュアリティ」のような現象も、「宗教」として取り扱われることになる。

オルタナティブ・スピリチュアリティへのアプローチは様々な側面からなされているが、欧米の文脈ではとりわけ、伝統宗教からの進化や主流社会の補完という視点から捉えられてきた。以下では、これらの議論を検討し、そのもたらした功績と問題点を指摘する。その前に、本稿の中で筆者がどのような意味で「オルタナティブ・スピリチュアリティ」という言葉を用いているのか説明する。

1-1 オルタナティブ・スピリチュアリティとは？

「スピリチュアリティ」の定義は研究者によって様々であるが、筆者は修士論文 [河西 2007] の中で、グラストンベリーに暮らす人々が「スピリット」、「スピリチュアル」、「スピリチュアリティ」という言葉を、日常会話でどのように使用しているのかを分析し、人間や生物などの実体のあるスピリットどうしが対峙することでスピリチュアルな状態になる、高位の存在（グレート・スピリット）と対峙してスピリチュアルな状態を目指す姿勢がスピリチュアリティであると定義した。つまり筆者は、「スピリチュアリティ」を、宗派や教義の違いや有無に関係なく、神のような存在と直接対峙しようとする能動的な試みだと考えている。ただし、ここでいう「神のような存在」とは、伝統的な「神」の概念にこだわらず、超越的次元、人間を超えた存在、高位の意識など、幅広く捉えている。本稿で

対象としている実践を、単に「スピリチュアリティ」と記さず、「オルタナティヴ」をつけているのは、調査中に会った実践者や Bowman [2000] と同様、イングランド国教会やカトリックなどの教会制度をもつ組織的なキリスト教を含まない形でのスピリチュアリティ、つまり 1960 年代以降に生まれた新しいスタイルのスピリチュアリティを指したいという意図からである。なお、(オルタナティヴ・)スピリチュアリティは、宗教に対置する言葉として研究者も実践者もしばしば用いているが、その場合の「宗教」は必ずしもキリスト教を意味しているわけではなく、制度や教義に縛られた伝統宗教一般を指している。

本稿では、オルタナティヴ・スピリチュアリティを「ニューエイジ」や「ネオペイガニズム」や「女神運動」を包括する言葉として使用していく。以下にその理由と、本稿におけるそれぞれの言葉が指す意味を説明する。

「ニューエイジ」⁴と呼ばれる現象の起源は 18 世紀以前の秘教思想⁵や 19 世紀後半の心霊主義⁶に遡るといわれるが、その直接の源は、1960 年代後半に全盛期を迎えた対抗文化運動⁷だとされる。その中でも人間に内在する「スピリチュアルなもの」を重視し、「意識変容が社会変革につながる」と主張する人々が源流の 1 つとされる [伊藤 2003 : 4]。1980 年代から盛んになり、宗教、医療、食事など、多岐の分野にわたって、規範とされているやり方とは別のやり方を求める。「ニューエイジ」に含まれる具体的な実践として Heelas は、ペイガンの教え（例として、秘教思想的または神秘主義的なキリスト教、仏教、ヒンドゥー、イスラーム、道教、ケルト、ドルイド、マヤ、ネイティヴ・アメリカン・インディアンを挙げている）、禅瞑想 (Zen meditations)、ウィッカの儀式、啓発集中セミナー、管理のトレーニング、シャーマンの活動、野外イベント、スピリチュアルセラピー、積極思考の形式などを挙げている [Heelas 1996 : 1]。そして、このような一連の諸実践によって、見失われていた本来の自己の取り戻しを試みると考えられている [Heelas 1996 : 18-20]。

オルタナティヴ・スピリチュアリティとニューエイジを比べてみると、前者は宗教的な事柄に対する姿勢、後者は具体的な実践ともいえ、両者の指す対象には微妙な違いがある。

⁴ 「ニューエイジ」という名称の由来は、海野 [1998 : 36-37] によると、以下の通りである。中世の神秘主義者のヨアヒム・ド・フロールは、人間の歴史を、父の時代（旧約聖書の時代）、子の時代（ローマ・カトリック教会の時代）、聖霊の時代の 3 つに分け、占星術では、父の時代を牡羊座の時代、子の時代を魚座の時代、聖霊の時代を水瓶座の時代だとした。これに、春分の日には太陽の裏側にある黄道星座が、西暦 2000 年頃、魚座から水瓶座に変わるという天文学的な事実を結びつけて、西暦 2000 年頃に水瓶座の時代という「新しい時代 (New Age)」に入るとみなされるようになった。

⁵ 「秘教思想」とは、ヨーロッパで発展した、自然の中の潜在力を認め、そこに操作的に関与することで自らを変容させるような術と知識であり、占星術、カバラ、薔薇十字主義、錬金術、メソンなどの思想と行法 [吉永 2002 : 174]。

⁶ 霊媒を介して死者の霊と交信すること。

⁷ 1960 年代後半から 1970 年代前半にかけて、共産圏を除く欧米諸国で広がった、既存の価値観や規範、社会体制に疑問をもち、政府などの権威に反抗する社会運動。特にアメリカではベトナム戦争への反対運動と相まって、かなり広がった。

しかし、「スピリチュアリティ」の探求のため、「ニューエイジ」に含まれる実践を用いることはよくみられ、両者の具体的な思想や実践の内容は重なり合っていることが多い。また Heelas [2006] は、ニューエイジ運動とは「ニューエイジャー」と呼ばれる人々が「自己のスピリチュアリティ」を追求していくことだとしているし、Beckford [1984] も比較的新しいタイプのスピリチュアリティにはニューエイジが含まれるとしている。しかも、1990年代の研究で「ニューエイジ」と呼ばれていた対象が、2000年代に入ってから「(オルタナティブ・)スピリチュアリティ」と呼ばれるようになってきている様子もみられる⁸。その背景には、実践者が「ニューエイジ」という言葉を嫌い、「(オルタナティブ・)スピリチュアリティ」という言葉を好むため、研究者が研究対象である実践者に配慮したこと、また実際の使用例に近い言葉を採用したことがあると筆者は考えている。以上の理由から、厳密には異なるものの、本稿ではニューエイジとオルタナティブ・スピリチュアリティを基本的には同じ一連の流れとして取り扱い、引用文献を除いて、「オルタナティブ・スピリチュアリティ」と記すことにする。

続いて、ネオペイガニズムと女神運動⁹の指す範囲と、両者をオルタナティブ・スピリチュアリティに含める理由を説明する。「ペイガニズム」とは、キリスト教が普及する以前の多神教的な自然崇拝の信仰を指す言葉であり、世界各地の一神教以外の土着の信仰のすべてを指すこともあるが、本稿ではヨーロッパにかつてあったとされる信仰に限定して用いる。つまりその復興運動であるネオペイガニズムも、ヨーロッパの土着の信仰の復興運動という意味で用いている。

女神運動は、女神を崇拝するなど共通点も多いため、ネオペイガニズムの一派とみなされることも少なくない。しかし、女神運動がフェミニズムから大きな影響を受けていること、ネオペイガニズムのように女神と男神ではなく女神だけを崇拝すること、女神のみの崇拝により主流のネオペイガニズムとの関係がよくないことなどから、筆者は女神運動と主流のネオペイガニズムを安易に同一視することはできないと考えている。

しかし、ネオペイガニズムも女神運動も対抗文化運動の頃に関心が高まったこと、オルタナティブ・スピリチュアリティと認識している実践者やニューエイジの実践を取り入れ

⁸ Bowman [1995] と Bowman [2000] など。また Heelas も 2000 年に出版された著書の中で、「ニューエイジ」ではなく、「表現的スピリチュアリティ」を使用することにしたと述べている [Heelas 2000 : 250]。

⁹ 筆者が「女神運動」と呼んでいる実践は、時代や個人の好みを反映して様々な名称で知られている。女神運動を対象としている論文や書籍の中で、この実践の名称を刊行年とともに示したのが、表 1-1 である。研究者自身、同じ論文の中でも複数の名称を用いることもあるし、実践者が自らの実践をいくつかの異なった名称で呼ぶこともふつうである。そのため、名称の違いを問題視する必要はなく、1つの大きな流れとして捉えられる。筆者が女神運動と呼ぶ最大の理由は、研究者だけでなく実践者もそのように呼ぶことが少なくなかったからである。そのため、本稿では基本的には「女神運動」と記し、引用文献やインタビューについてはその中の記述や発言に従うことにする。

ている実践者も少なくないことなどから、ネオペイガニズムと女神運動は重なるところは多いが別のものとしたうえで、ともにオルタナティヴ・スピリチュアリティに包括されるものとして取り扱う。

なお、本稿におけるオルタナティヴ・スピリチュアリティは、イギリスを中心とする欧米社会の事象として取り扱い、日本など全世界を射程には入れていないことを予め断っておく。

1-2 先行研究の視点

オルタナティヴ・スピリチュアリティという現象は、これまでどのような視点から研究されてきたのだろうか。1-1 でみた通り、幅広い領域を含むオルタナティヴ・スピリチュアリティは、様々な分野において、様々な側面から論じられてきた。そのすべてを網羅することは筆者の手には余ることだし、本稿の目的に対する答えに辿り着くのに必要だとも思えないので行わない。その代わりに、ここではオルタナティヴ・スピリチュアリティとは現代の欧米社会で伝統的および主流とされてきた事柄と相容れないものとして峻別してきた議論について検討したい。このような姿勢のもとに生まれた議論には、次の2つの方向性がみられる。1つは、オルタナティヴ・スピリチュアリティを伝統宗教や主流社会など、これまで当たり前とされてきた規範や価値観への違和感を背景に「進化」した現象とみる捉え方であり、もう1つはオルタナティヴ・スピリチュアリティを伝統宗教や主流社会などが失ってしまった事柄を満たす補完的な役割を果たしている現象とみる捉え方である。なお、欧米の文脈では、「伝統宗教」はキリスト教とほぼ同義であり、「主流社会」とは、近代化が進んだ現代社会一般とほぼ同義である。以下、順番に、イギリスとアメリカの事例を中心として、それぞれの詳細をみていく。

前者のようにオルタナティヴ・スピリチュアリティを進化的に捉えた代表的な研究としては、Heelas と Woodhead のケンダル・プロジェクトを挙げられる。Heelas と Woodhead を中心とした調査チームは、イングランド北西部の町ケンダルにおいて、質問表を用いたり、様々な集まりへの出席者数などを調査したりすることで、「伝統的な宗教」と「新しいスピリチュアリティ」の活動を明らかにしようとした。そして、主観的な生活を超越的な意味、よさ、真実をもつ、高位の権威に委ねることを鍵とし、コミュニティや伝統の一員として生きることで高位の権威が生き方を導いてくれ、価値を与えてくれる「宗教」の影響力は低下していること、その一方で、個人の主観的な経験に頼る生き方を好み、個々人が大切に意味があり、権威だとする「スピリチュアリティ」は隆盛していること、「宗教」から「スピリチュアリティ」への移行が生じていることを指摘した [Heelas & Woodhead 2005 : 2-4, 32]。ここでは、高位の権威に依拠する「宗教」の衰退と対照的に、個人主義を重視する「スピリチュアリティ」の姿が示される。

一方、Wuthnow [1998] が対象とするのは、アメリカ人の宗教意識であり、彼は先行研究の利用とともに、200 人のアメリカ人への数時間にわたるインタビューと大規模な質問表調査という社会学的調査を行った。Wuthnow によれば、住む土地さえもつねに流動的なアメリカ人は、信条、教義、社会的慣行を重視し、地元の教会に基盤をおく、従来の制度宗教のような「居住のスピリチュアリティ」から、自分でスピリチュアルなアイデンティティを探求する「旅としてのスピリチュアリティ」に移行しつつある。こちらにも制度や伝統的価値観に縛られた、従来の硬直的な「宗教」との差異を強調することで、個人の自由を重んじる「スピリチュアリティ」の現代性を浮き彫りにしている。

女神運動も、女性を抑圧してきたユダヤ教やキリスト教からの「解放」という視点から研究されてきた。女性たちが女神運動に魅力を感じた理由の 1 つは、欧米の精神的な価値観を形作っていたユダヤ教やキリスト教には見出せなかった、女性としての自分を肯定するような価値観を提示されたからだとされた。そのため、ユダヤ教やキリスト教が否定してきたものに価値を与えたり、これらとは異なるところが評価されたりする。たとえば「国民的なリーダーも、スポークスマンも、グルも、中心化された組織もない」[Rountree 2004 : 94]、「聖なる権威的なテキストがないので、(中略) 実践は流動的である」[Griffin 2000 : 15] というように、体系化された教義や組織構造を欠いた運動であると指摘されてきた。このような自由さと創造性は、ミサなど儀式が形式化され、ヒエラルキー構造のあるユダヤ教やキリスト教にはなかった「進化」として強調されるのである。

以上のように、オルタナティブ・スピリチュアリティは、「「ドグマ的で、死んだ何か」としての組織化された宗教」 [Hasselle-Newcombe 2005 : 312] から進化した形態の宗教現象として理解される。

もう 1 つの議論では、伝統宗教に代表される、これまでの伝統的な規範や価値観が崩壊したため、主流社会はそれまで保持していた多くのものを失ったが、オルタナティブ・スピリチュアリティはその不足を補っていると捉える。主流社会を不十分なものとみなし、オルタナティブ・スピリチュアリティをその補完として位置づけるのである。

本稿の舞台であるイギリスのグラストンベリーでみられる「ニューエイジ」を文化人類学的に調査した Prince & Riches [2000] は、主流社会と対照的な社会として、反主流のニューエイジャーによって構成される、「コミュニタス」のような「オルタナティブ・コミュニティ」を想定する。2 人によると、オルタナティブ・コミュニティにやってくる人々は主流社会で「困難やジレンマ」を経験しているが、この「困難やジレンマ」は主流社会が捨て去った事柄に由来している。それがどのような「困難やジレンマ」なのか、2 人は記していないが、そのような「困難やジレンマ」を背景に、オルタナティブ・コミュニティのニューエイジャーは結束していくとされる [Prince & Riches 2000 : 213-214]。オルタナティブ・コミュニティはニューエイジャーに対し、主流社会では見出せなくなった事柄

を与える理解されている。

同様の指摘は、女神運動やネオペイガニズムの研究においても頻繁になされてきた。ここでは、特に人間関係のことが言及され、しばしば家族の隠喩を用いて表現される。アメリカのネオペイガンの祭典を調査した Pike によれば、ネオペイガンは硬直したキリスト教の教義と道徳に縛られた世界にいる自分の家族から追放されたと感じているため、それに代わる故郷や部族 (tribe)、家族やコミュニティを探し求める [Pike 2001 : 222]。主流の価値観や規範になじめないと感じ、そこを逸脱したゆえに失った親しい関係性をネオペイガニズムに求めるとされるのである。同じくアメリカのネオペイガンのフェスティバルとニューヨークの少人数のグループを調査した Orion は、現代のアメリカ社会では、必要不可欠な社会関係をもたらす力を失ったので、ネオペイガンはそれに代わる社会的つながりを探していて、共通の信仰や実践に形づくられた魅力に基づく、親族関係を再創作しようと試みているという [Orion 1994 : 253]。また Berger は、アメリカのネオペイガンたちが友情関係の脆さを家族という隠喩で補おうとしていると指摘する [Berger 1999 : 54]。ネオペイガンの試みは、主流社会で失ってしまった人間関係を補うための創造的な行為として描かれるのである。

女神運動についても、類似の指摘がある。Preston は、エリアーデ監修の『宗教百科事典』に執筆した「女神信仰」の項目の中で、以下のことを特徴の 1 つに挙げている。

都市生活の寂しさ、現在の自立の強調、技術社会におけるペースの速さ、地球との関係の根本的な断絶によって、ポスト産業社会に住む人々は、しばしば神的な母のイメージを通じて、もっともよく表されるとされる聖なる本質に戻ることで、癒される可能性をもつと思われている、幻想からの覚醒¹⁰の深い感覚をもたらされる [Preston 1987 : 58]。

ここでも女神信仰は、現代人が失ったが、必要としている実践として提示される。このように現代の欧米社会に生きる人々にとって、オルタナティブ・スピリチュアリティは、主流社会の欠落や損失を補完する試みとしても理解される。

1-3 先行研究の問題点と本稿の視座

両議論の功績の 1 つは、オルタナティブ・スピリチュアリティを、現代の宗教現象の 1 つとして捉えたことである。堅固な組織と制度をもつ宗教のみを宗教と定義する中では、世俗化の象徴とされ、単なる娯楽として軽視されてきたオルタナティブ・スピリチュアリ

¹⁰ 原語は disenchantment。ここでは、ポスト産業社会という「魔法」にかけられていた人々が、女神信仰によって、真の生き方に目覚めるといった意味で使われていると思われる。

ティを、伝統宗教と同様の「宗教」として扱い、主流社会の中で位置づけることで、欧米社会の現代的状況を説明するキーワードにまで引き上げたのである。このことは、欧米の現代の宗教現象を考えるうえで、意義深い役割を果たしたといえる。

しかし、これらの議論に問題がないわけではない。どちらの研究でも、組織より個々の実践者を優先とするスタンスをとっているのに、実際の調査は、組織によって企画されたようなオルタナティブ・スピリチュアリティの実践が行われる施設内での儀式や催し物といった、宗教的な事柄を中心に行われてきた。このような場では、それぞれの実践が外部に向かって呈示したい「イデオロギー」が表れやすいため、伝統宗教や主流社会といった既存の価値観や社会と相容れないものとして、オルタナティブ・スピリチュアリティが位置づけられてしまっている。言い換えれば、伝統宗教や主流社会へのアンチテーゼという、両議論が依拠する立場に起因する問題である。以降、このような立場をとることで生じた、オルタナティブ・スピリチュアリティを抵抗として描くという問題と、理想的に描かれているという問題を考えたい。

1 つ目の問題は、差異が強調され、伝統宗教や主流社会への「抵抗」として捉えられている点である。オルタナティブ・スピリチュアリティを伝統宗教からの進化として論じている議論は、欧米社会の人々の精神的価値観を形成してきた伝統宗教としてのキリスト教は、ドグマに縛られていて硬直化したヒエラルキーを伴う組織があり、ゆえに現代人の宗教心を満たす役割を十分に果たしてこなかったという前提に基づいている。それゆえに、オルタナティブ・スピリチュアリティは、そのような状況を打破するために近年生じた、司祭制度や特定の教義に従属することのない「自由で創造的な実践」として提示される。つまり、オルタナティブ・スピリチュアリティは伝統宗教に対する対立項であることを念頭において論じられ、位置づけられてきたといっても過言ではない。また、現代の主流社会の補完とみなす議論においても、オルタナティブ・スピリチュアリティは現代人の望みを十分に満たしてくれない主流社会への反発から生まれた、逸脱した現象として描かれている。「ドグマ的な伝統宗教」対「自由で創造的なオルタナティブ・スピリチュアリティ」、「孤独感にさいなまれる主流社会」対「温かいつながりのあるオルタナティブ・スピリチュアリティ」というように、本質化された潜在的対立関係を想起させてきたのである。

筆者も、オルタナティブ・スピリチュアリティは伝統宗教や主流社会の規範や価値観とは異なるものだと考えている。しかし、オルタナティブ・スピリチュアリティは、つねに伝統宗教や主流社会との対比的な関係の中で、「抵抗」として理解されうるものなのだろうか。伝統宗教や主流社会とは対立関係にあることを分析者が予め決定してしまうことは、対象を一面的に描く危険性を孕んでいる。そして、伝統宗教や主流社会以外の領域からの影響といった「抵抗」以外の側面を等閑視してしまう恐れもある。つまり、伝統宗教や主流社会との対比に頼らない形での視座が必要なのである。

2 つ目の問題点は、オルタナティブ・スピリチュアリティを理想的なものとして提示しがちな点である。オルタナティブ・スピリチュアリティが、人間関係が「希薄」で「冷たい」主流社会とは異なる「温かさ」をもつとして美化して論じたり、「凝り固まった」伝統宗教と対比させつつ、オルタナティブ・スピリチュアリティの「自由さ」を賛美したりする。

このような議論の中では、オルタナティブ・スピリチュアリティは、病んだ現代から実践者を救い出してくれる「ユートピア」的实践として描かれる。しかしなぜオルタナティブ・スピリチュアリティは、ユートピアの源泉であるかのように提示されてきたのか。その理由は 2 つあると思われる。1 つには、主流社会の人間関係の薄さとそれを回復することの必要性や伝統宗教の硬直性を訴えることが、一般的に賛同も得られやすく、現代の欧米社会を語るうえでの 1 つの定式となっているからである。もう 1 つとしては、研究者がオルタナティブ・スピリチュアリティを「すばらしいもの」として提示することを、実践者である被調査者が期待していることが挙げられる。

これらはいずれも、オルタナティブ・スピリチュアリティの調査者と被調査者が同じ言語圏、特に英語圏に属していることが多い事情と関わっている。民族誌や論文を自国語で書くと、特に高等教育を受ける人々の割合が比較的高い先進諸国では、出版後に被調査者が読むことが容易に予測される。そのため、被調査者の機嫌を損ねないように過度に配慮している様子が散見される（[Lawless 1993 : 5, 18 ; Salomonsen 2002 : 17-18] 参照）。もちろん、倫理的観点から、被調査者への配慮は十分になされるべきである。しかしその一方で、特に宗教現象は信仰というデリケートな事柄を扱うため、研究対象である被調査者を不快にさせないため、批判することが難しく、結果として、被調査者が呈示したがっている良いイメージが示されやすい催し物やワークショップなどの場、そして著作物などを主な資料として利用して、分析してしまう傾向がみられる（[Ivakhiv 2001 ; Orion 1994 ; Pike 2001 ; Rountree 2004] 参照）。

たとえば女神運動には、確かにローマ・カトリック教会の法王やカルト組織のカリスマ的リーダーを頂点とする巨大な組織構造や、聖書やコーランのような「聖典」や宗教的指導者の思想書のように絶対的な教えはない。しかし、女神運動に関わる人々は、有名な女神運動の実践者の本を読んだり、ワークショップに参加したりして、その影響を受けている。また、ワークショップで出会った人々とグループを結成するなどの形で交流を続けたり、ワークショップを選ぶ際も自分と似た志向の人が開くものを読んだりするという事例も報告されている [Rountree 2004 : 79, 96]。しかも現在では、通常の新宗教運動よりは緩やかでも、ある程度、組織化された女神運動も生まれてきている¹¹。

¹¹ その 1 つにリクレーミングがある。女神運動の中でよく知られた活動家であるスターホークが始めた、女神運動の代表的なグループでサンフランシスコを拠点とする。Salomonsen [2002]

それにもかかわらず、研究者がそのような側面に目をつぶってきた背景には、英語で研究成果を発表する場合、被調査者である実践者がそれを読むことが予想されるため、かなりの程度、被調査者の主張を認めて記述せざるをえない状況があったからだと考えられる。Eller は、第 1 作 [Eller 1995] では女神運動に好意的だったものの、第 2 作 [Eller 2000b] では過去に女神を中心とした理想的な社会があったという女神運動の人々の主張が非現実的であるとして批判し、女神運動の実践者たちから裏切り者と激しく非難される結果を招いた [Dashú 2005]。このことから、被調査者を刺激するような研究成果を発表することは、危険を伴っているといえる。そのため、調査者が危険を避けようと、被調査者の主張をそのまま受け入れ、高く評価し、「スポークスマン」となっているきらいがある。

それでは、オルタナティヴ・スピリチュアリティを伝統宗教や主流社会へのアンチテーゼとして捉えている先行研究に対して、本稿ではどのような視座をとればよいのだろうか。それは、オルタナティヴ・スピリチュアリティに関わる 1 人ひとりにとって、それぞれの実践の考え方が記された著作物を読むことや、儀式やワークショップなどに参加することが、生活のすべてではないということ踏まえて、宗教的な領域以外の実践にも目を向けることだと思う。

先行研究の問題点として指摘した 1 つは、オルタナティヴ・スピリチュアリティを理想的に描いているということ、特に人間関係の点でその傾向がみられたことであった。それを避けるため本稿では、儀式などを参与観察したり、当事者の主張をインタビューやアンケートで調べたりするだけでなく、当事者個人の生活世界を長期的に参与観察していく。これは、日常のレベルでは、必ずしも実践者たちが語るような「すばらしい」関係ではなく、ときに自分の弱さをさらけ出していくような営み（[葛西 2002 ; Garrett 2001] 参照）だという認識を踏まえてのことである。しかし、オルタナティヴ・スピリチュアリティ全体を対象とし、制度的な宗教に帰属しないが信仰心は保ち続けているという「帰属なしの信仰」[Davie 1994] の様子を見ていきたいのではない。なぜならオルタナティヴ・スピリチュアリティは内部の多様性が高いため、全体的に捉えようとする、個々の実践者に目を向けにくくなるからである。むしろ、オルタナティヴ・スピリチュアリティの諸実践の中でも、比較的まとまりのある 1 つを取り上げ、そこでみられる儀式を眺める、当事者の話に耳を傾ける、当事者の相互関係に分け入る、という作業を通して、彼らのつながりのあり方を考察する。

それとともに、対象とする宗教現象をより大きな流れの中で位置づける作業が必要であろう。先行研究のもう 1 つの問題として挙げたのは、オルタナティヴ・スピリチュアリティが伝統宗教や主流社会の対立項としてその立ち位置を定められてきたことだったが、本稿では対立関係に基づいた形で外部のコンテクストに位置づけることはしない。それより

は、リクレイミングを対象とした、もっとも包括的な研究である。

も政治や経済といった近年のイギリス社会の変動と、それに伴うオルタナティブ・スピリチュアリティの発展のプロセスを、特定の地域社会に焦点を当てて示したうえで、その地域社会で始まった1つのオルタナティブ・スピリチュアリティがどのような文脈から生成したのかを明らかにする。

以上のような視点から、イギリスのオルタナティブ・スピリチュアリティが実践される意義を検討することが、本稿の第一の目的である。

1-4 つながりと共同性

後半の第4章から第6章では、グラストンベリー女神運動に携わる人々の具体的な営みを取り上げ、互いの関係のあり方について分析していく。本節では、この人と人との関係性や共同性を考える際、参考にしたい最近の人類学における議論を、Carsten、小田、大杉を中心に確認しておく¹²。

初めにみていくのが、文化人類学において親族研究の再考を行った Carsten [2000] のつながり (relatedness) の議論である。彼女は、生物学的な血縁関係を想起させる「親族 (kinship)」に代わって、「つながり」という言葉の使用を提起する。それにより、生物学的な血縁関係で結ばれた親族を超えて、より広い範囲の人々の関係性を、親族研究の系譜を引き継ぎながら研究の対象とすることができるようになった。それだけでなく、ネットワーク論では見過ごされてきた、具体的な人と人との関係性の実態を扱えるようになった¹³。Carsten の功績の1つは、人間関係を日常のやりとりの中から生まれるプロセスとし

¹² 本節の議論のうち、つながりについては田中 [2009] と高谷&沼崎 [2012] から、共同性については松尾 [2011] から示唆を受けている。

¹³ オルタナティブ・スピリチュアリティにおける人と人との関係は、しばしば「ネットワーク」という言葉で分析されてきた。固定化された組織や制度ではなく、個人のレベルでの関係性である。たとえば、1960年代後半のアメリカの社会運動の内部にみられる個々のグループの関係性については、SPINというネットワーク理論が提唱されている。SPINとは、「分節に分かれ、中心を複数もつ、統合されたネットワーク (Segmentary Polycentric Integrated Network)」の略語である。Garlach [2001 : 289-290] によると、「分節に分かれる」とは、発展し終焉する、分裂し融合する、増殖し縮小するような、多様なグループから構成されること (多くの人々は同時に複数の分節のメンバーであり、あるグループのリーダーが、別のグループでは追随者となることもある。このように構造や役割が異なるため、ここでいう「分節」と「部族的な」アフリカにおける、古典的な分節リニエージュ体系は異なっている)、「中心を複数もつ」とは、しばしば一時的でときには競合する、リーダーや影響を与えうる中心を複数もつこと、「ネットワーク」とは、旅行者、重なり合うメンバーシップ、共同の活動、共通する読み物、共有される理想や敵を通じた複数のつながりをもつ、緩やかで網状の統合されたネットワークを形成すること、を意味する。ファガーソン [1981(1980)] や York [1995] は、この SPIN 論を応用し、ある社会運動の内部が SPIN の構造をとるだけでなく、いくつもの社会運動から構成されるオルタナティブ・スピリチュアリティと呼ばれる現象それ自体も、SPIN 構造をもつ社会運動どうしが、SPIN 構造を形成している大きな SPIN だとみた。そこには、ネオペイガニズム、エコロジー運動、フェミニズム、女神運動などが含まれるとされる [York 1995 : 330]。「ネットワーク」という言葉で説明すると、現象の形態の様相をマクロに示すことができるという利点は

て捉えたことである。つまり、人と人との関係は固定的ではなく、流動的かつ創造的につくられているという理解である。

筆者の調査地では、“relatedness”は日常会話の中ではほとんど使用されておらず、類似語である“relation”や“relationship”は主に恋人関係にある二者を指す言葉として使用され、「つながり」に相当する語としては“connection”が一般的には用いられていた。しかし、Carsten [2000]にも“relate”と“connect”を互換的に使用している様子が見受けられる。そこで、本稿でも彼女の議論を分析の参考にし、日常の実践の中から生まれる構築物として、人と人とのつながりについて考えている。

続いて共同性の議論について、宗教的实践と関連するものを中心にみていく。文化人類学では、儀礼はその宗教的实践に携わる人々の結びつきを強化し、社会を統合する機能をもつと考えられてきた。たとえば、儀礼のもたらす恍惚感の共有により、成員どうしの間に一体感が喚起され、そこから感情を基盤とした共同性が生じ、共同体の絆を深めるといった具合である。フランスの社会学者マフェゾリ [1993] は、かつて教会の儀式が担っていた共同体構築の機能は、今ではキリスト教の外部にもみられると指摘し、その例として、代替療法、菜食主義、環境保護運動など、オルタナティヴ・スピリチュアリティに分類される事例を挙げる。そして、現代社会を特徴づけるのは、個人主義ではなく、こうした事例の中に見出されるイメージの共有に由来する一体感がつくりだす、新しい共同体主義なのだ、マフェゾリは指摘する。

各々が自立的な個人として生きられる社会を理想に掲げてきた現代の欧米社会では、すでに地縁や血縁に基づかない人と人との関係が構築されている。そのような関係が何らかのイメージの共有を基盤として結びついていることは、確かに理解できる。しかし、宗教的实践とは直接関連がない日常生活においても、その共同性が機能しているのか、いないのかといったことも含めて、共同性の性質を成員個人々の相互関係のあり方から分析していく必要がある。

本稿で取り上げるのは、もともとは見知らぬ者どうしがつくった共同性である。このような出会いの場はまとまりをつくるように均質化されていく方向に向かうだけではなく、相手との差異が保持され続ける場でもあるだろう。ナンシーは、同一性ではなく「分割＝共有」という自己と他者との差異から成立している共同性のあり方に注目する [ナンシー 2001(1999)]。このような共同性、つまりは非同一性の共有からなる共同体を、大杉はサバルタンや琉球の人々を念頭におきながら、根源的に異なる他者との差異といった、互いに埋められない断絶があるのに生じている「非充足的で非完結的な主体」が、他の「主体」たちと共出現し、決して共約できない各々の特異性の曝し合いをおこなう空間 [大

ある。しかし、そこに関わる個人々の人々が抱える葛藤などを捉えきれず、一面的に描いてしまう危険性がある。そのため、本稿ではネットワーク分析は行っていない。

杉 2001 : 289] として説明する。この議論を引きながら、小田はコートジヴォワールの「ワル」たちを引き合いに出しつつ、同じ空間を共有するという隣接性によって、「ずれ」ながらもつながることで、非一貫的なまとまりが生じていくこと、そして「生活の都合に応じて様々な境界をもつ共同体が、そのつど強調され、選択される場」としての非同一的な共同性をもつ流動的な可能性を指摘している [小田 2004 : 245]。このような流動的な関係性のあり方は、組織化の低さを特徴とするオルタナティヴ・スピリチュアリティの実践者の中にも見出せると考えられる。その一方で、大半の実践者の背景や属性は類似しているため、彼らの間に非同一性をもたらす差異は、大杉や小田の想定している差異とは異なっていると考えられる。

以上のことを踏まえ、本稿では、第一の目的の一環として、オルタナティヴ・スピリチュアリティに携わる人々の共同性とつながりの特徴について、主に第 6 章と最後の章で考察している。

2、民族誌の中の調査者

冒頭で記したように、本稿の目的は 2 つある。被調査者どうしの関係を扱う第一の目的に対し、第二の目的は、本章 1-3 で指摘した被調査者との付き合い方と調査後の調査結果の公表に伴う問題とも若干関係するのだが、調査者と被調査者が調査の場で、互いにどのような立場をとって接触しているのかということ、筆者のフィールドワークを事例として考えることである。そこから、ヨーロッパを文化人類学の研究対象とする意義や民族誌記述の方法についても触れたい。本節では、1980 年代の文化人類学界に論争を巻き起こした「ライティング・カルチャー・ショック」の議論のうち、民族誌の記述をめぐる力関係の議論をみていく。続いて、文化人類学における欧米研究の流れをヨーロッパを中心に確認し、イギリスに暮らす欧米人¹⁴を対象とする文化人類学の研究における調査者と被調査者の関係をみていき、本稿の位置づけを確認する。

なお本稿では、調査される人々や研究対象となる人々のことを基本的に「被調査者」と記している。ただし、筆者自身の調査における対象は「インフォーマント」と記している。

2-1 民族誌をめぐる力関係

かつて文化人類学者は、1 年から 2 年という長期間、特定の村なり集落なりに住み込んで、現地語を操りながらデータを集めたという実績から、その文化のエキスパートとして該当文化を描き切ることができるとされ、その記述の客観性も無批判に了承されてきた。しかし、この特権の有効期限も、マーカスとクリフォードによる『文化を書く』[1996(1986)]

¹⁴ 筆者も「欧米」の中にも、北欧と南欧、ヨーロッパと北米などの間には差異があり、決して一様ではないことは理解している。そのうえで、ここではやや単純化して記述している。

が一大センセーションを巻き起こすまでのことだった。1960年代にも、調査者と被調査者の間には、それぞれが属する社会の政治的、経済的な差異に基づく不平等な関係性が横たわっているという批判はあった。しかし『文化を書く』において、民族誌は客観的な記述というより1つの表象行為にすぎず、著者の主観の入った文学作品だとされてしまう。言い換えれば、書くという行為そのものの中に、書く側（文化人類学者）の書かれる側（フィールドの人々）に対する不平等な関係が隠されていたことが明るみに出されたのである。そしてこれ以後、民族誌の執筆に対して内省が促され、あるべき記述スタイルが模索されるようになった。

新しい記述スタイルの探求にあたって、マーカスらが注目したものの1つが解釈人類学である。1970年代にクリフォード・ギアツによって提案された解釈人類学では、ある事柄がある文化の中でどのように機能しているかではなく、その文化内部の人々に何を意味しているかということをも民族誌の中に表そうとする。調査者側の論理ではなく、被調査者側の論理から該当文化を捉えていこうとするのだ。マーカスらは解釈人類学を修正し、発展させる方向で2つの民族誌の記述方法の流れを示している[マーカス&フィッシャー1989(1986)]。

1つ目は文化的差異の表象の仕方への関心である。2人が挙げている3つのスタイルのテキストのうち、1つは解釈人類学以前の機能主義に基づくテキストである。しかし、後の2つのテキストでは、その社会のすべてを知り尽くした全知全能の「神」のような存在として調査者（著者）を隠してしまうのではなく、確かにその場で被調査者と語り合い、ともに暮らした1人の人間として民族誌の中に登場させる、つまりは調査者と被調査者の相互交渉の様子をそのままみせたり、調査者自身の主観を織り交ぜたりして記述する。これは、調査者が被調査者の文化を一方向的に描くことで、権力関係が生じているという批判への1つの反論の形だといえる。その一方で、調査者の姿を前面に出した、このような民族誌のスタイルは、客観性を欠くとして文化人類学の外部からは厳しい評価を受けることにもなった。

2つ目は、世界システムとの関連への関心である。これは、解釈学的な民族誌は現地の人々の視点を優先するあまり、政治経済といったより大きな文脈の中でみていないという批判への反論である。グローバル化が進む今日、文化人類学が対象としてきたような、ミクロなレベルでの人々の生活さえも、世界規模での政治経済の文脈に埋め込まれつつあるのは確かである。しかし、このような文脈を意識しながら書かれた民族誌は、世界システムから抑圧されている犠牲者として被調査者を描き出す傾向がある。そのように描くことで、世界システムをつくりだす側に立つ、自国の批判を目指しているのである。

この2つの流れに加え、筆者はここで民族誌の執筆一般の問題として表現技巧について触れたい。民族誌の中には、読解に多大なエネルギーを必要とするような難解な言い回し

で記述されているものがある。記述に際して言葉を選択するのは書き手(調査者)なので、理解が容易でない表現の多用は、書き手が読者層を限定し、執筆者としての権力を読み手に対して発揮しているということもできる。被調査者が潜在的な読み手であることを考えれば、被調査者への権力だともいえる。しかし、文章表現のもつ権力性は、執筆者個人というより、アカデミズム全体に由来している。なぜなら書き手である調査者は民族誌の執筆やフィールドの世界だけではなく、大学院や学会、助成団体といったアカデミズムの世界に同時に生きていて、論文や著書の出来栄を判断するのは、アカデミズムの世界の人々だからである。

以上、文化的差異の表象の仕方、世界システムとの関連、文章表現に関して指摘した。本稿では各章の冒頭を中心に、一部に主観的な記述を入れることで、主観と客観のバランスが取れた民族誌を目指す。そして、被調査者を犠牲者として描くことは避け、国家のシステムを効果的に利用している側面にも目を向ける。この2つにより、フィールドでのミクロな関係に注目する解釈人類学の視点とイギリス社会のマクロな動向を両方押さえながら論を進めていく。さらに、できるだけ平易な表現で記述し、本稿をより広い範囲の人々に開いていくことを試みたい。

2-2 欧米に背を向けてきた文化人類学

本節ではヨーロッパ人類学成立の流れを確認し、そこでの調査者と被調査者の関係を、イギリスを事例にみていったうえで、本研究をヨーロッパ人類学の中に位置づける。よく知られていることだが、文化人類学はもともと、欧米人による欧米以外の地域に暮らす「エキゾチックな他者」を研究し、そこから欧米社会の今を批判する学問だった。それゆえに生まれたのが、いわゆるオリエンタリズム批判である¹⁵。これは 2-1 の冒頭でも少し触れたが、地域ごとの経済格差や世界に与える政治的影響の違いによる不平等さを背景に、調査者である欧米人と被調査者である非欧米人の間には不平等な権力関係が存在しているとして、欧米人が欧米の論理で欧米以外の地域を表象することに対してなされた批判である。

とはいうものの、ヨーロッパに限っても 1950 年代にはすでに文化人類学の研究対象となっていた。しかし当初は、地中海地域や農村の小コミュニティ、移民等のマイノリティといった、権力の枠外の周縁の地域や人々に対象が限定されていた。ヨーロッパのマジョリティ、つまり地中海地域を除く西欧諸国の白人の研究が始まったのは 1980 年代のことであ

¹⁵ オリエンタリズム批判が生じたのは 1980 年前後であるが、1996 年にイタリアで開かれた、ある国際会議に参加した田中は、この場では、ヨーロッパからアジアへのアプローチを植民地主義的、帝国主義的とするスローガンは後退していて、ヨーロッパからの経済を中心とした新しいアジア理解、アジア認識の促進を、アジアからの参加者も含めて承認していく政治過程だったと述べている [田中 1996]。このように、単なる批判の段階を超えて、新しい形での関係性の構築を目指す試みもすでに萌芽している。

る。森はその背景として、1970年代以降の文化人類学が世界システムへの関心を高めていった結果、「エキゾチックな非西欧の（野蛮な）他者」としてきた研究対象も、調査者と同じ世界システムの内部に配置されることになったため、ヨーロッパの相対化が起こったからだとしている [森 2004 : 9-10]。それだけではなく、この時期には近代科学の合理性に対する懐疑が生じ、西洋近代がもつ価値観や認識が相対化された風潮をうけて、これらの世界観を生み出した欧米に光が当てられるようになったことも挙げておく。

欧米人を調査するという試みは、それまでの「他者」の概念的な対立項とされてきた、人々を再考することでもあった。なぜなら、文化人類学は長年、「エキゾチックな他者」の姿を欧米人に提示するとともに、この「他者」の鏡像としての欧米人も提示してきたからである [Parman 1998 : 2]。そのため、「中心」とされてきた欧米地域に暮らす「われわれ欧米人」を文化人類学の対象とすることは、これまで鏡に映し出されてきた人々の姿を、鏡を介さず真正面から見据える試みであり、オリエンタリズム批判から生まれた内省の 1 つの結果だったといえる。

その一方で、ヨーロッパ人類学における調査者と被調査者の関係は、従来の両者の関係より複雑化していた。ここでは、イギリスを舞台とした調査における、調査者の立ち位置を確認し、調査者と被調査者の関係をみていく。

筆者と同じイギリスのグラストンベリーを調査した、イギリス人 Prince とカナダ人 Ivakhiv¹⁶は、被調査者の中に「同化」しつつ、調査を進めていくことが可能だった。

Prince らによる *The New Age in Glastonbury* [2000] は、本章 1-2 でも触れたように、グラストンベリーのオルタナティヴ・コミュニティを対象として、ニューエイジ運動について分析した研究で、現地調査は 1989 年 10 月から 1990 年 12 月に行われている。本書は共著だが、調査は Prince が単独で実施しており、冒頭で自分の調査を振り返っている [Prince & Riches 2000 : ix-xii]。彼女はグラストンベリー近郊の村で育ったため、この辺りの事情に詳しく、地元の様々な団体の概要を把握していた。また、彼女自身、長年菜食主義者で、環境問題や実験的ライフスタイルに関心をもっていたため、オルタナティヴな事柄にも通じていた。そのため、『『類似性』のおかげで、調査地に近づくことはとても容易』 [Prince

¹⁶ ただし、Ivakhiv のエスニシティはウクライナである。2010 年 3 月の本人からの電子メールによると、彼自身はカナダで生まれ育ち、保持している国籍はカナダだけであるが、両親はウクライナからの移民であり、彼自身は自分のことを「アメリカ在住のウクライナ系カナダ人」と考えている。また、欧米か非欧米か、という二項対立的な枠組みで分類すれば、ウクライナは「欧米」に分類されるが、旧共産主義国であった東欧諸国をイギリスやアメリカと同じ「欧米」とは断定しがたい面もあると指摘された。Ivakhiv の指摘する通り、ヨーロッパや北米の国々を「欧米」という枠組みで十把一絡げに捉えてしまうことは、アラブ諸国、インド、東南アジア、極東諸国といった近東以東の国々を、すべて「アジア」という枠組みで捉えてしまうのと同じぐらい乱暴な議論であることを承知したうえで、ここでは Ivakhiv がエスニシティはウクライナであっても、カナダで生まれ育ち、英語を母国語としていたという点で、「欧米人」と表記した。

& Riches 2000 : x] であり、調査中の自分の立場について、以下のように述べている。

人類学者として調査をしていることははっきりさせていたが、20代の若い女性なので、表面的にはニューエイジャーとして通った。人類学者が一般に直面するように、侵入者としての私の存在が言語の壁や明らかな身体的差異で、すぐにわかってしまうわけではなかった [Prince & Riches 2000 : x-xi]。

調査中、彼女は菜食レストランで働き、オルタナティブ新聞の発行に携わった。また、女性グループ、ヨーガ、水晶のワークショップ、スピリチュアル・ヒーリング、満月の夜の瞑想、週末のスピリチュアル・リトリートに参加していた。また、調査中の大半の時間を、儀式に参加したり、ニューエイジャーと話したり、ニューエイジの書籍を読んだりして過ごした。

自文化を調査する人類学者 Prince と被調査者であるイギリス人は、身体的特徴も言語も文化的背景も共通していて、その違いは関わる事柄に対する姿勢と心構えだけであったという。つまり Prince は、調査対象であるグラストンベリーのオルタナティブ・コミュニティの一員に成りきることができたとしている。

一方、いわゆる「パワースポット」についての研究を行った Ivakhiv は、1990年代半ばの3年間、イギリスやアメリカにおける瞑想リトリート、心霊主義のフェア、集団でのヴィジュアルイゼーション、儀式のグループに参加したり、霊媒の活動や水脈探しの様子を見たりするなど、大規模に開催されるイベントを中心として、調査を行った。 *Claiming sacred ground* [2001] では、グラストンベリーとアメリカのセドナを取り上げ、分析しているが、自分と被調査者の関係については、以下のように述べている。

私は参加者としての役割に適合することができた。多くの場合、かなりよく適合した。この調査を始める前に、10年以上これらのオルタナティブな文化運動と接触していたし、多くの参加者がもつ探究¹⁷への衝動に共感したので、役割への適合は容易だった [Ivakhiv 2001 : 15]。

Prince とは異なり、Ivakhiv はグラストンベリーに長期間滞在していたわけではないが、調査を始める前からオルタナティブな事柄を実践していた点、英語を母語としている点、被調査者との間に遠目から見てもわかるほどの明らかな身体的差異がない点は共通している。つまり Prince 同様、被調査者たちの一員に成りきってしまうことができた。

¹⁷ 原語は *the quests*。特にオルタナティブの間では、自らの人生の意味を探し求めるといった意味合いを込めて使われる言葉である。

被調査者と言語や文化的背景そして外見的特徴を共有していた2人は、調査者としての「身分」を隠し、被調査者の中に隠れてしまいやすかった。いってみれば、調査者としてより、1人のオルタナティブ・スピリチュアリティの実践者として、被調査者とも平等な関係を築きやすかった。

それでは、非欧米人による欧米人研究はどうか。初めに非欧米人が欧米に赴き、欧米という場で欧米人に出会う状況について考えてみる。このような出会いは以前から存在していたが、それはたとえば明治時代時期の岩倉具視使節団のように、文化的にも政治的にも「遅れた」非欧米人が、欧米の「進んだ」文化やシステムを学びに行くという状況であり、そこでは欧米人が非欧米人に対して明らかに優位に立っていた。アングロ＝アメリカの人類学者たちは、いつの日かトロブリアン人やポロロ人やンデンプ人の人類学者がアメリカにやって来て、これまでのお返しに根本的に異なる異文化の視点からの批判的な民族誌を提供してくれるという幻想を抱いていたというように〔マーカス&フィッシャー1989(1986):284〕、欧米人に調査されてきた人々が、欧米に出かけて行って、欧米人を調査するという状況は、かつては夢物語でしかなかったのである。確かに50年前なら、欧米諸国は非欧米人の被調査者にとって遠いところだったかもしれない。しかし現在では、一部の非欧米人にとっては、欧米諸国は気軽に出かけられるところである。そして、欧米以外からやってきた者が、欧米の地で欧米人を調査するという状況も生じている。しかし、彼らは被調査者との関係をめぐって、欧米人の調査者とは異なる立場におかれることもある。

筆者と同じくイギリスで調査を行った日本人の酒井〔2011〕は、北アイルランドで紛争にまつわるライフストーリーを収集する際、語りのニュアンスが理解できなかった経験をもとに、第二言語による聞き取り調査の場で生じうる、調査者と被調査者の力関係について論じている。調査の場において、調査者は被調査者に対して権力的な立場にあると思われがちだが、つねにそうだというわけではない。たとえば、被調査者の社会的な立場が調査者より高い場合、また調査者が現地の事情に精通していない場合、調査者はしばしば従属的な地位におかれる。このような状況は、非欧米圏で調査を行った場合でも生じている。しかし、非欧米圏での調査の場合、帰国し、研究成果の発表に至る過程で、フィールドの価値規範を相対化できうるのに対し、欧米圏で調査した非欧米人は、同じ過程で欧米の価値規範を必ずしも相対化できるわけではなく、ときに引きずられてしまう〔酒井2011:95-96〕。さらに、今日の世界の中で英語はグローバル言語であるため、英語を母語としない者は調査者であっても従属的な役割を強いられる〔酒井2011:95-96〕。その一方で、言語的に不利な状況で聞き取りを行うからこそ、調査される側も教えるという立場をとりやすく、語りやすい空間が生まれている可能性を指摘している〔酒井2011:98〕。つまり、調査の場で優越的な地位にあったり、同じ地平に立っていたりするのではなく、従属的な立場にあったからこそ、ラポールが成立しやすかったのである。しかし同時に酒井の調査

は、ヨーロッパ人類学が目指そうとしていたヨーロッパという地域やその価値観の相対化が、必ずしも成功していないことを露呈している。

最後に本研究のヨーロッパ人類学における位置づけを考える。本稿で取り上げるグラストンベリーは田舎町であり、イギリス国内では中心というより、周縁地域に属する。しかし、イギリスは政治や経済の側面からしても中心のほうに分類されるし、調査対象であるオルタナティヴ・スピリチュアリティの実践者も移民ではなく、主にアングロ＝サクソン系のイギリス人である。さらに地理的には田舎でも、対象者の多くは都市やその郊外から移住してきた人々であり、いわゆる小コミュニティ研究とも異なる。つまり、本研究もマジョリティの欧米人を調査対象とするようになった 1980 年代以降の文化人類学の潮流の一端だといえる。

また、筆者が行ったフィールドに長期間住み込んでの調査は、スタイルとしては酒井よりも Prince や Ivakhiv のものに近い。そこでは調査者と被調査者の関係はつねに 1 対 1 ではなく、しばしば 1 対多と複層的であったし、日頃から言語によるコミュニケーションに留まらない付き合いが生まれていた。その一方で、酒井のような「従属的」な立場におかれやすい非欧米人調査者であったこともまた事実である。

これらを踏まえて本稿では、調査の場にみられた相手に対するふるまいや相手に求めるふるまいといった行為の側面から、調査者と被調査者の関係を見直し、ヨーロッパを文化人類学の対象として研究する意義や民族誌記述の方法の可能性を示す。これが第二の目的である。

3、調査の概要

続いて、調査の詳細について説明する。

3-1 調査地の選択、調査期間、使用言語

グラストンベリーを調査地にしたのは、色々な人たちの勧めがあったからだ。修士課程の授業でみた現代の魔女たちの姿に魅せられ、彼らを調査対象に決めたとき、指導教員から紹介していただいた、イギリス人の宗教学者を通じて知り合った Bowman 博士や、予備調査の際に出会った人々が口々にその名を挙げるので、行ってみた。そこは、筆者が思い描いていたような魔女の町ではなかったのだが、女神運動をはじめ、様々なオルタナティヴ・スピリチュアリティの実践が見られ、興味深く感じた。イギリスの女神運動の研究やグラストンベリーに関する研究も少ないことも考えて、最終的に調査地に決めた。

なお、調査を始めた当時、日本では江原啓之ブームにより、「スピリチュアリティ」が流行し始めていたが、筆者はそのような事柄とは距離をおいていたため、知識はほとんどなかった。魔女に魅かれたといっても、子供の頃、映画や物語で見た魔女に憧れていただけ

で、女神運動という言葉は耳にしたこともなかった。そのため、これらの知識の大半は調査を通して、インフォーマントから少しずつ学んでいった。

本稿のもとになった調査は、2005年10月～12月、2006年4月～10月、2008年6月～7月、2008年7月～8月、2009年1月～2011年2月、2011年9月～10月の合計3年間にわたって実施した。このうち、予備調査の2005年を除き、グラストンベリーを拠点とした。

使用言語は英語である。インフォーマントには英語を母語としない人もいたが、少なくともイギリスに暮らしている人の大半は英語が堪能だった。

3-2 居住形態

グラストンベリーでは独身女性の1人暮らしは珍しくなく、単身者用アパートやシェアハウス¹⁸で暮らしているが、適当な物件を見つけることは容易ではない。筆者の場合、予備調査のときに偶然、適当な家を見つけることができた。冒頭で取り上げた祭典、グラストンベリー女神カンファレンスのボランティアを申し込むため、担当者の家を訪れた際、彼女から下宿人を募集していた隣家のヘイゼルを紹介してもらったのである。

ヘイゼルは50代半ばのイギリス国籍の白人の独身女性で、両親もイギリスで生まれ育ったイギリス人である。かつてはメディア関係の仕事に就くキャリアウーマンだったが、二度の離婚を経て、2002年にグラストンベリーに移住し、筆者が補足調査を終えた2011年10月に去った。オルタナティヴ・スピリチュアリティへの関心が高く、筆者と連れ立って、グラストンベリーの催し物や講演に出かけることもあった。いつも明るく元気で、良くも悪くも楽観的な彼女は、遊びに仕事に勉強に、忙しい毎日を過ごしていた。なお、彼女には家賃を支払っていた。

この家には一時期、ヨーロッパ系の移民の両親をもつ20代前半の女性が下宿していた。彼女は、友人や恋人の影響から、ときどきイングランド国教会の勉強会に参加していたが、オルタナティヴ・スピリチュアリティにはほとんど関心をもっていなかった。そのため彼女の意見は、インフォーマントの話の相対化するうえで、参考になった。

筆者にヘイゼルを紹介してくれた隣家のホリーは、朝食付きの宿泊施設であるベッド・アンド・ブレックファスト（以下、B&B）を運営していた。彼女は女神運動に深く関わっていたので、滞在者には女神運動関係者が多く、2009年にオーナーが代わってからも、その傾向は引き継がれたため、調査に役立った。

¹⁸ シェアハウスとは一軒家で、家族以外の人々が共同生活を送る居住形態。イギリスでは、古い家を壊して新築するより、内部を改装して暮らし続けることが多く、単身世帯の増加に伴い、よく見られるようになった。一般的には各居住者が個室をもち、台所や居間、バスルームを共有する。友人どうしで一軒家を借りることもあるが、大家が資産としてシェアハウス用の家を持ち、各個室をばらばらに貸し出すこともある。筆者の大家のように、自宅の空き室を貸し出し、下宿人と同居する人もいる。

2009年1月～8月はヘイゼルの家に空き室がなかったため、60代の女性ルビーの家に居候していた。知り合ったきっかけは、ある仏教の催し物で彼女の娘と親しくなったことである。ルビーは元看護師ということもあり、清潔好きで、気遣いがとても細やかな反面、心配性で気分にムラがある女性だった。筆者と出会う数年前に大学の看護系学部の講師を早期退職し、居候時は貯金と年金で生活していた。一緒に暮らしていないときでも、何度も夕食をともにし、深夜過ぎまで町の噂やスピリチュアリティについてのおしゃべりをしてきた。音や振動で癒すサウンド・セラピーに関心が高く、娘や別居中の夫の影響でオルタナティブ・スピリチュアリティにも興味をもっていた。なお、彼女は家賃を受け取らなかったため、光熱費を心づけとして渡していた。

3-3 調査対象者、調査方法

グラストンベリー滞在時には、女神運動の関係者に限らず、町で出会ったすべての人々を調査対象者としていた。なぜなら、筆者の関心は女神運動そのものというより、聖地としてのグラストンベリーにあったからだ。また、調査中の一時期、女神運動の活動が停滞し、女神運動だけを博士論文のテーマにするかどうか迷っていたからでもある。調査中に関わった人の総数は約1000人、そのうち比較的まとまった形で話を伺った人は151人（女性98人、男性53人）である。

女神運動の調査としては、女神運動関係の催し物、実践者たちのプライベートな集まりにはできるだけ参加するようにした。なお、第3章第2節と第4章1-1で触れるが、この女神運動には女神について学ぶ講座がある。筆者も再三受講を勧められたがしなかった。その一番の理由は、この講座は費用の高さ等から、町の人々の一部からの評判が悪く、受講すると筆者と彼らとの関係性が壊れる可能性が高かったからである。受講修了者が、「受講して自分はすごく変わった！」と恍惚とした表情で話すのを見て、空恐ろしくなったことも、個人的な理由として挙げておく。

女神運動以外の調査は、1) 個別の実践、2) グラストンベリー全体のオルタナティブ・スピリチュアリティに関わること、3) グラストンベリーの基本情報の収集の3種類に分けられる。

1) については、あるスーフィズムの集まりに月に2～3回、その他のスーフィズムの2グループの集まりに合計1～数回参加し、実践者にインタビューをした。その他に、仏教系の5グループ、インド系の3グループ、キリスト教7宗派の集まりやミサに数回ずつ参加した。キリスト教徒に関しては、教会の牧師たちと信者にインタビューも行った。2006年はネオペイガニズムの1つ、ドルイド教の人々が主催する毎月のお話会や季節の祝祭に参加していた。2009年末までにはどちらも不活発になったが、その後もドルイドの人々と交流を続けた。また、有機農法の農場とインド風のB&Bにボランティアとして1週間ず

つ滞在した。

2) については、町の掲示板や無料情報誌『ジ・オラクル』¹⁹、口コミを中心に集めた情報をもとに、催し物や儀式の様子を参与観察した。また、オルタナティブ・スピリチュアリティに関わる移住者や訪問者、何世代も昔から地元で暮らす人々からも話をきいた。時間があるときには、町の中や郊外をふらりと歩きながら、見知らぬ人と話をしたり、その不思議な行動を観察したりしていた。

3) については、町の店の変遷を聞き取りと文献から調査した。サマーセット田園生活博物館に保存されている 1990 年代に行われた地域の高齢者へのインタビューの書き起こし記録や、町の図書館やアヴァロン図書館に保存されているオルタナティブ・スピリチュアリティ関係の冊子を閲覧した。また、州立図書館で地元の週間新聞『セントラル・サマーセット・ガゼット』のフィルム版を閲覧し、オルタナティブ・スピリチュアリティの興隆の歴史を調べた。図書館には 1890 年代からの新聞が保管されていたが、近年の興隆の直接の起源である、ヒッピーがやってきた 1960 年代後半以降の記事を中心に調べた。

なお、インターネットや電子メールは調査開始時から欠かせなかったが、2008 年以降は携帯電話やソーシャル・ネットワーク・サービスのフェイスブックも活用した。また、インタビュー対象者に謝礼金を支払ったり、贈り物をしたりはしなかった。インタビューは通常、インフォーマントの自宅かカフェで実施した。自宅に招かれた場合、食事をいただくこともときどきあったし、カフェでの場合、相手がお茶代を払ってくれることがふつうだった。この「おごる」という行為については、第 7 章第 2 節で考察している。

3-4 調査上の問題点

グラストンベリーと女神運動を調査するうえでの問題点も挙げておく。

1 つ目はインフォーマントとの距離のとり方である。このような調査では「完全に関わることを求められる」[Salomonsen 2002 : 17]、つまり、観察者という存在が認められにくい。それはイベントのとき、参加せずに周りでみている人たちに対し、主催者がメモ帳やカメラを置いて加わるように「要求」するなどの形で現れた。無視する人もいたが、町の人々に顔を覚えられていた筆者は無視して観察を続けるわけにもいかず、渋々その輪に加わったこともあった（この点については第 7 章第 1 節で考察を加えている）。さらに大きな問題は、そのようなことがしばしば起こるうちに、調査対象者との距離のとり方がわからなくなってきたことだった。ニュージーランドの女神運動を調査した Rountree [2004 : 77] は、調査者と調査対象者を分けることを否定するフェミニストの方法論を実践することは、

¹⁹ 1992 年に創刊された、グラストンベリーにおけるオルタナティブ・スピリチュアリティ関係の催し物の月刊誌。町の店で手に入る。A4 サイズで 12 ページないしは 16 ページある。筆者の調査時、編集長はグラストンベリー女神運動を始めた女性の夫が務めていた。

彼女の調査ではとても容易だったと述べているが、筆者にとっても同様だった。しかしそのことは逆に「客観的な分析」を難しくさせた。結局のところ、それを解決してくれたのは、帰国して、時間的、空間的にグラストンベリーから身を引き離すことだったように思える。

2つ目は、データの取り方である。筆者は調査中、「文化人類学の博士論文執筆の資料を集めるため、グラストンベリーに滞在している」ということは明言していた。「大学院の博士論文」について知らない人はほとんどいなかったが、日常の会話や行動が調査の対象になっているとは考えていない人が多いようだった。そのため、筆者を調査者と認識していても、自分との会話は筆者の調査とは関係がないと誤解している人も少なくなかった。さらに、自己紹介が難しい状況もあったし、何度説明しても忘れてしまう人もいた。グラストンベリーには、オルタナティブ・スピリチュアリティに関心をもってやってくる単身女性は珍しくないため、筆者もそのような1人だと思われがちだった。つまり本稿のデータには、相手が分析に使われると考えずに提供してしまったものまで含まれている。

3つ目は、筆者が調査地に与える影響である。文化人類学者をジャーナリストと同様に捉え、自分たちの実践を日本に広めてくれると期待している人も少なからずいた。実際、筆者は彼らの求めに応じて、撮影した写真や動画をネット上に投稿していた。その結果、筆者が投稿した写真や動画を見て、グラストンベリーに関心をもち、やってきたという人もいて、筆者の行動がこのような形で、調査地に影響を与えていたことは否定できない。

4つ目は、調査地に居続けることの不都合である。独身女性の1人暮らし自体は珍しくなくても、20代の欧米人でない者が1人で住み着くことは珍しかったようだ。特に日本でも実年齢相応にみられたことがなかった筆者は、当初は町の人々の目には高校生ぐらいに映っていたらしく、親はどこにいるのか、学校はどうしているのかなどと、不審がられることもあった。また、町の人々は家族や友人に会うため、仕事や買い物のため、頻繁に町の外に出かける。そのため、何ヶ月もの間、町から一步も出ようとしない筆者は訝しがられた。その他にも、「グラストンベリーのエネルギーはとても強いから、ずっといると頭がおかしくなるよ。たまには外に出なさい」とアドバイスされることも何度もあった。そこで、不審に思われないよう、ときどきは町を出るようにしていた。

5つ目は、収入源を語ることでタブー視されている点である。調査を始めた頃、筆者は平日の昼間でも気さくにインタビューに応じてくれる人、「セラピスト」とか「アーティスト」と名乗る人がやたら多いことに気づき、彼らは一体いつ働いているのか、十分な収入を得ているのかと不思議に思っていた。しばらくして、そのような人の大半は、政府から支給される社会的給付金（以下、給付金。詳細は第2章3-3）に頼って生活しているらしいということがわかってきた。それだけでなく、勤務先からの給料以外の収入を税務署に申告していない人も少なくないこと、オルタナティブ・スピリチュアリティに携わる人た

ちの間では「金を稼ぐ」という行為が低く価値づけられていることから、収入源や職業には触れないことが暗黙の了解とされていた。そのため、それらを特定するには、会話の輪の中に加わりながら、こぼれ落ちる情報を掬い出すしか方法が見つからなかった。

6つ目として、収入源と同様、出身地の特定も難しかったことを挙げておく。成人してから移住してきたにもかかわらず、「前世で住んでいた」などの理由から、「グラストンベリー出身」と名乗る人が少なからずいた。「人類の起源はアフリカにあるから、人類は皆アフリカ出身だ」とか、「出身地を問うことはくだらない。みんな同じ地球の仲間じゃないか」と言われることもしばしばあった。そのため、直接問う以外にも、収入と同様、情報の断片を拾い出したり、フェイスブックの個人情報欄を参考にしたりしていた。

最後の7つ目は、人を批判すること、ネガティブなことを口にするのは精神的に良くないと考えている人が多かったことだ。また、意見が異なりそうな話題が出ると口をつぐんだり、話を逸らしたりしてしまう場面もあり、意図的に対立を避ける様子も見られた。そのため、他者への批判的意見を耳にすることは少なく、あからさまに対立している場面に遭遇する機会はほとんどなかった。

4、本稿の構成

本稿は、序章（第1章）、オルタナティヴ・スピリチュアリティとグラストンベリー女神運動の概要を示し、全体の流れの中に位置づける第1部（第2章、第3章）、グラストンベリー女神運動をミクロな視点からみていく第2部（第4章、第5章、第6章）、調査者と被調査者の関係を考える第3部（第7章）、終章（第8章）から構成されている。

第2章では、本稿の舞台であり、筆者がフィールドワークを行った、イギリス南西部の町グラストンベリーが対象である。町を含む地域一帯を概観した後に、「オルタナティヴ・スピリチュアリティ」とは一体どのようなものなのかを、町でみられる諸実践と人々のライフスタイルを紹介することで示す。それから、オルタナティヴ・スピリチュアリティの町として知られるようになった経緯を、イギリスの歴史や政治経済の側面と絡めながら明らかにする。その後、オルタナティヴ・スピリチュアリティとは関わりなく暮らしている地元民との関係を考える。そして、グラストンベリーにおけるオルタナティヴ・スピリチュアリティの発展について、イギリスの古い文化への関心の高まりとイギリスの産業構造の転換、さらには移民の増加と関連づけて考える。

第3章では、オルタナティヴ・スピリチュアリティの1つとして、グラストンベリーで始まったある女神運動がどのような文脈から生まれたのか明らかにする。初めに欧米の女神運動の流れをイギリスとアメリカを中心に概観し、対象とする女神運動を始めた女性の来歴を辿る。それから、「アヴァロン」という伝説の中の世界を流用しながら創り出された女神体系が古いイギリスの文化の再創出と再提示の試みだったことと、この女神運動が

攻撃的ではなく穏やかな実践であることを示す。そしてこの女神運動を、グラストンベリーでオルタナティヴ・スピリチュアリティが盛んになった流れと、社会運動から宗教実践に変容した女神運動が重なり合った地点に生じた、イギリスにローカル化された実践だと指摘する。

第4章から第6章を通して試みるのは、グラストンベリーで始まった女神運動に積極的に参加する人々の互いの関係のあり方を明らかにしていくことである。第4章では、初めにこの女神運動に関わる人々の属性を提示する。それから儀式の日の観察を通して、一見外に開かれているようでありながら、排他的な様相を明らかにし、その理由として儀式が一部の参加者の間に共同性を生み出す場であったゆえに隔たりが生じていた可能性を指摘する。観察からの考察に終始する第4章に対して、第5章ではインタビューと参与観察から得たデータも用いながら、当事者8人のライフストーリーを分析する。特にグラストンベリーへの移住に寄せられた期待と、親しい人を失った喪失感と移住の関係に着目する。そのうえで、特にグラストンベリーに移住することで、他の参加者と時間や空間を共有する機会が増えること、そういったともにいることから生まれるつながりが求められていることを指摘する。続く第6章では、日常における行動や会話の観察に基づき、当事者どうしの微妙な距離感を明らかにする。ここでの主な分析対象は、話の共有（sharing）の場のトピックの内容と話の共有をメインとした集まりの継続性である。そして、特定の宗教的実践を通して知り合った人々が集まる場であるにもかかわらず、そういった実践がつねに望まれているわけではないこと、その場を共有することで育まれるつながりが望まれる一方で避けられてもいることから、彼らのつながりのあり方を検討する。

第7章では、第3章から第6章で提示する事例を中心に、調査者と被調査者の関係について改めて分析し直す。特にインフォーマントたちが筆者に対してとった行為や求めた行為、それらに対する筆者の対応に着目する。そして、調査者と被調査者という区分けが必ずしも明示化されていない様子を示す。そのうえで、ヨーロッパを文化人類学の研究対象とする意義を考える。

最後の第8章では、第2章から第6章までの話の流れをまとめ、そこから共同性のあり方の特徴と、現代のイギリスのオルタナティヴ・スピリチュアリティに携わることの意義を検討する。それから、第7章の議論を踏まえつつ、民族誌の記述の1つの可能性を提起し、今後の課題を述べる。

第1部 オルタナティヴ・スピリチュアリティの発祥と発展

第2章 オルタナティヴな町

「グラストンベリー？ そんな名前、聞いたことないわ。それ、どこの国の地名ですか？」

2005年秋、ロンドンでグラストンベリー行きを決めたとき、観光案内所で町までの行き方を尋ねると、対応してくれた女性から逆に聞き返されてしまった。思わぬ反応に戸惑いながらも、「イギリス、だと思っんですが・・・」と伝える。しかし、彼女はパソコンをいじりながら、「検索システムで探してみたけど見つかりませんね。あなたの間違いではありませんか？」と言う。現実の世界「グラストンベリー」は、神秘の世界「アヴァロン」と重なり合っていると、どこかで聞いたことが思い出され、グラストンベリーも実はこの世に存在しない場所なのかなど、狐に包まれたような気持ちになった。

結局、インターネットで行き方がわかり、ロンドンから長距離バスで2時間かけて港町ブリストルへ。そこから路線バスに乗り換えて、なだらかな起伏のある野原や木立の中を上ったり下ったりしながら1時間ほど経った頃、頂上に塔を抱いた丘がちらりと見えた。町のシンボル、グラストンベリー・トールのようなようだ。そろそろかと思い、運転手に尋ねるも、まだとのこと。すると、そこにいた乗客たちが、「グラストンベリーに行くの？」「自分が教えてあげるから、心配しなくていいよ」「僕もそこで降りるから、まだ座っていなさい」とロク々に話しかけてくれた。調査地になるようなところだろうか、町の人々とは仲良くなれるだろうか、そんなことを考えていた私は、彼らの親切に対しても上の空で、後から申し訳なく思ったものだ。まもなくバスはグラストンベリーの中心部に到着した。私のスーツケースをもって、一緒にバスを降りた初老の男性は、私の宿の方角を指差してから、「幸運を！」と手を挙げて去っていった。

それから2週間をこの町で過ごした。バスの乗客たちのように、町の人々は親切で優しく、町の中心部を占めているオルタナティヴ・スピリチュアリティの店には、物語の小道具のような面白い物が沢山並んでいて、いくら見ても見飽きなかった。町の掲示板には「チベット手相」とか「天使のレイキ」など、何をするのかさっぱりわからないワークショップの宣伝がされていて、心魅かれた。しかし、11月のグラストンベリーは、毎日どんよりとぶ厚い雲が垂れ込めて、4時半には日も暮れてしまう。暗いだけでなく、30分も外にいたら凍えてしまうほど寒かったし、町のハイ・ストリートも閑散としていた。調査地には決めたものの、寂れた町だという印象を受けた。

それが一転、年が明けて4月末に再訪したときには、町は人でごった返し、花は咲き誇り、「ハッピー・ベルテン！」「ハッピー・ベルテン！」という朗らかな声が町中に響き渡っていた。空は青く、風がそよぐ。まぶしい春の光の中で、花も町も人も、すべてのものが鮮やかに輝いていた。人々は陽気に浮かれていて、足取りも軽く、見ているこちらまで、楽しい気分させてくれた。グラストンベリーでの第1回本調査は、こんな明るい1日から始まった。

本章では、伝統宗教や主流社会と対立させた形で、オルタナティヴ・スピリチュアリティという宗教実践を捉えるのではなく、グラストンベリーという1つの場において、それが盛んになっていった過程から、イギリス全体の文脈の中での位置づけを考える。

そのために、まずこの一帯と町の概略を紹介する。それから、オルタナティヴ・スピリチュアリティの概要をつかんでもらうため、現在の町のオルタナティヴ・スピリチュアリティの様子を記述する。続いて、イギリスやグラストンベリーの近年の政治や経済の状況とともに、オルタナティヴ・スピリチュアリティが盛んになっていった歴史的背景を明らかにしていく。そして、そのような町の変化を経験した地元民との関係をみていく。

1、グラストンベリー一帯の概略

本節では、グラストンベリーという町とその一帯の地理や産業と日常生活の様子を、この地方全体とグラストンベリーに分けてみていく。なお、最新のイギリスの国勢調査（Census）は2011年に実施されたが、本稿を執筆している段階では、市町村レベルでのデータが公表されていない。そのため、2001年のデータを用いている。

1-1 南西部地方、サマーセット州の特色

グラストンベリーはイングランド南西部地方サマーセット州メンディップ郡の中にある町である（図2-1）。

イギリスは4つの国からなるが、グレート・ブリテン島の南部に位置するイングランドは、その中心的な国で、ロンドンと8つの地方に分けられる（図2-2）。

南西部地方とは、イングランド南西部の8州と7つの大都市圏、シリー諸島を指す（図2-3）。風は強いが、平均気温は、夏は18～22度、冬でも1～4度と、イギリスの中では過ごしやすい地方である。ヨーロッパ大陸に近い南東部地方がローマ帝国やキリスト教など大陸からの影響を受けやすかったのに比べ、南西部地方は先住のケルト文化が保持されやすかったといわれる。この地方では起伏に富んだ地形を生かした牛や羊の放牧が盛んで、基幹産業となっていた。第二次世界大戦後には農場の大型化も進んだ [Panton & Cowland 2001: 22]。しかし、1973年にイギリスがEEC²⁰に加盟したことで関税が撤廃され、フランスやスペインから安価な農作物が輸入されるようになったうえ、狂牛病や口蹄疫の発生により、農業は大打撃を受けた。一方、賃金の高騰から工場を海外に移すなど、イギリス全体で製造業の空洞化が進んでいて、農業が不振に陥ったからといって、工業化を目指すことも難しかった。南西部地方の中でもロンドンに近い地域では、そのベッドタウンとして発展する道も残されていたが、西に行けば行くほどそれは難しい。そのような地域では、

²⁰ 欧州経済共同体。後、ECに発展し、EUに至る。

「のどかな田舎」というイメージを生かして、観光業に活路を見出すことになった。

南西部地方の中央に位置するサマーセット州からは、50 万年前の人類の居住跡が見つかっていて、当時から断続的ながら人が暮らしていたと考えられている [Ellis 2010]。衰退しているとはいえ、現在でも酪農とりんごの栽培は盛んで、チーズとりんご酒が名産品として知られている。野原や丘を散歩していると、放牧された牛や羊がのんびりと草を食んでいる様子をよくみかける。秋になると鈴なりのりんごや洋梨の木をあちこちで目にするし、ブラックベリー摘みも楽しめる。

サマーセット州は、移民も含め白人が 98.8%を占めている²¹ [Census 2001]。イギリスの白人移民といえば、かつては旧植民地のアイルランド系の人々が中心だったが、最近では EU に加盟した東欧諸国、特にポーランドからの出稼ぎ者が増えている。それに加えて、同州には第二次世界大戦中、イタリア人の捕虜収容施設があったため、イタリア系の移民が多い²²。

州内は 5 つの行政郡に分かれる。その北東に位置するメンディップ郡には、90 近くの小規模な村がぼつぼつと点在し、人口 1 万人程度の比較的大きな市町村は 5 つしかない²³。その 1 つが、本稿の舞台となるグラストンベリーである (図 2-4)。

1-2 グラストンベリーの日常

グラストンベリーの町は、南側、東側が高く、南東側から北西側にかけて、急な斜面になっている (図 2-5)。158 メートルのグラストンベリー・トールは、この辺りでもっとも高い丘の 1 つで、頂上からは緑のサマーセット平原が見渡せる。一方、平原部は海拔より低いいため、かつては冬になるとブリストル海峡からの水が浸入し、あちらこちらに小さな湖ができていた。

町の人口 8784 人²⁴で、そのうち女性 4594 人 (52.3%)、男性 4190 人 (47.7%) である [Census 2001]。白人の割合は 98.5%と住人の大半を占めている²⁵。17 歳以下の人口率は 25.2%、60

²¹ サマーセット州の統計に「白人」の出身地別の割合は載っていないため、ヨーロッパ各地や英連邦および英語圏の国々からやってきた白人移民の割合は不明である。白人以外が少ない理由としては、工業化されていないので、仕事を得る機会が少ないことが挙げられるが、白人主体の地域という状況自体、それ以外の人種の人々には住みにくさと捉えられている。

²² イギリスにおける戦時中の捕虜の取り扱いが良く、イタリアにいたときより良い暮らしをしていた者もいたこと、当時のイタリアは貧しく帰国しても良い生活が望めなかったことから、戦後イギリスに留まり、家族を呼び寄せた元捕虜が少なくなかったらしい。

²³ イギリスでは、行政上は人口や面積に関係なく、大聖堂があれば市 (city)、そうでなければ町 (town)、行政機能もなければ村 (village) とされる。ただし、2000 年以降は大聖堂をもたない市も誕生している。ここでいう 5 つの市町村の規模や様子に大きな差異はないが、行政上はグラストンベリーを含む 3 つが町、村と市が 1 つずつである。

²⁴ ただし、州の統計を管理しているセンターの方の話によると、2010 年の時点で、町内の人口は 1 万人を超えているだろうとのことである。

²⁵ イギリスには、EU の協定により、無条件で滞在できる EU 加盟国 (およびスイス、ノルウ

歳以上の人口率は 21.6%であり[Census 2001]、過疎化が進んでいるわけではない。むしろ、大都市ブリストルやバースまで、それぞれ車で約 40 分ほどという地の利を生かして、宅地開発を進めたため、ブリストルやバースへの通勤圏としても発展し、退職者の移住も増えている。また後述するようにオルタナティブ・スピリチュアリティ関係の移住者も増加している。そのため、表 2-1 のように全体として人口は増えている。

しかし、かつて盛んだった農業や羊皮加工業が衰退し²⁶、町周辺で仕事を見つける機会は減っている。1999 年時点での町の三大雇用先は、プラスチック工場、スーパーマーケット、材木会社という、いずれも低賃金で、高度な職能を必要としない仕事であり、雇用人数はそれぞれ 100 人程度である[GCDT 2004]。このように、町内での雇用先の 37.1%は低賃金の単純労働で占められているため[Census 2001]、大学に進学した若者が町に戻ってくることは少ない²⁷。その一方で、町には教育水準の低い若者が残り、給付金に頼って生活をするという状況が生じている[GCDT 2004, 2005]。なお、オルタナティブ・スピリチュアリティに関わる人々の仕事と給付金の問題は、本章 3-3 で述べる。統計データはないが、地元民の流出と新住人の流入の結果、地元民、オールドカマー²⁸、ニューカマーの通勤者と退職者、オルタナティブ・スピリチュアリティ関係の移住者（以下、オルタナティブ）の割合は、それぞれ約 4 分の 1 ほどであり、地元民が町に占める割合は下がり続けているといわれている²⁹。

町の 1 年の行事と気候の変化を記したのが表 2-2 である。日が長い夏時間の季節は観光シーズンと重なり、特に催し物が目白押しになる 6 月から 8 月には、沢山の人が訪れる。人々の気分も高揚し、町も活気にあふれている。その一方で、雨や雪が降り続き、日が短い冬時間の間は、インドなど生活費が安い海外に滞在する人も少なくなく、イベントがある日を除いて、町は静かである。季節性の鬱や喘息に悩まされる人もいて、気乗りしない季節である。

ュー、アイスランド)の国籍保持者や、イギリス人と結婚した北米、オーストラリア、ニュージーランドなどの英語圏の人も多く暮らしていて、グラストンベリーでも同様の傾向はみられた。そのため、白人といってもその出身地は様々である。

²⁶ 筆者が確認したかぎり、現在町に専業農家はおらず、兼業農家ばかりだった。両親が農業を営む 30 代の地元民(本章 5-3 のジム)の話によると、農家には政府からの補助金も出るが、大手のスーパーは仕入れ値を下げようと巨大農場と取引をするため、小規模な農場では太刀打ちできない。また、羊皮製造業の工場も、海外に移転するか、廃業した。

²⁷ 前述の 30 代のジムは、級友のうち自分の親しい友人はみな町を出て行き、町に残っているのはクラス全体でも 2~3 人だろうと話し、町には都会的な娯楽がないうえ、高収入の仕事も望めないことを理由に挙げていた。

²⁸ 成人後、仕事の関係で移住してきて、長年暮らしている人々。在住年数の明確な定義はないが、現地では一般に 20~30 年以上とされており、10 年以下の人はニューカマーとみなされることが多かった。なお、幼いときに、親に連れられて移住し、町で育った人は、ふつう「オールドカマー」ではなく、「地元民」とみなされていた。

²⁹ 町のオルタナティブの中心人物の 1 人、バリー・テイラー氏より [2010 年 3 月 26 日]。

町の中央には中世に栄華を誇ったグラストンベリー修道院の廃墟があり、その東側と南側が町の中心部である。中心部の1日の様子を記述してみよう³⁰。朝7時に通りのスーパーが開店すると、通勤中の車や人々で人通りは少しずつ増えてくる。町役場兼公民館、郵便局、銀行³¹、薬局、文房具屋、ニューズエージェントなどはすべて中心部に並んでいるため、大抵の用事はこの辺りを一通り歩けば済ませられ、便利だ。8時台には、不機嫌そうな子供たちが次々と登校していく³²。10時ぐらいからは乳母車を押した若い母親がけだるそうに買い物をしている姿が目につくようになる。火曜日には中心部に定期市が立つ。一年中品物を並べているのは、八百屋、魚屋、パン屋、オリーブとトルコ菓子の店、園芸の店、そして特産品のチーズの店。洋服、鞆、カードの店が並ぶこともあり、観光シーズンには、スカーフやアクセサリ、彫刻、せっけんやろうそくなどの観光客向けの品を扱う店が立ち並ぶ。10時頃からは宿泊客が宿での朝食を終え、元気いっぱい、町に繰り出し始める。11時になるとカフェや観光客向けの店も開店するので、中心部はにぎわいを増していく。正午を過ぎても観光客は減らず、バスツアーで修道院見学にやってきた高齢者の姿が目立つようになる。2時から3時半の間は通りのにぎやかさのピークで、カフェでおしゃべりを楽しむ人の姿も目立つ。ハイ・ストリート沿いの町で一番大きい聖ジョン教会の前のベンチには、誰彼ともなく幸せそうに話しかける麻薬中毒の男性や、酒瓶が手放せない目がうつろな男性が日がな一日座っていて、顔をしかめて足早に通りすぎる人もみられる。田舎町には珍しいストリート・ミュージシャンやストリート・パフォーマーも、この辺りでよく活動しているが、大半の人は気に留めず、素通りしていく。普段なら親に連れられて、子供たちが帰宅する時間帯なのだが、観察した日は学期最後の日だったので、そういうことはなかった。4時を過ぎると、団体の観光客が帰る一方で、買い物や帰宅途中の地元民の姿が目につくようになり、立ち話を楽しむ姿も見られた。つまり観光客の主な活動時間は、午前10時から午後4時の間だった。5時になるとレストランとパブを除いて、ほとんどの店は閉店してしまうからだ。7時過ぎからは立ち話をする人は減り、足早に帰宅する人の姿が目立った。代わってカップルがのんびりと散歩をしている。夏なので9時半頃まで明るいのだ。それでも午後9時に通りのスーパーが閉店すると、人通りはほとんどなくなる。午後11時頃、閉店したパブ³³から帰宅する人の姿がちらほらみられたが、

³⁰ 居候していたルビーの家の屋根裏部屋から観察した日と時間帯は次の通りである。2009年7月20日：午前4時から9時、7月21日：午後10時50分から午前4時、午後7時15分から午後10時50分、7月22日：午前9時から午後7時15分。なお、学校の夏季休暇は7月23日からだったので、観察日はまだ学校の期間中だった。また、1年で観光客がもっとも多い時期だった。

³¹ イギリスの四大大手銀行の支店があるが、営業時間は都市部より短い。

³² 幼年学校（4～6歳）、小学校（7～10歳）、中学校（11～15歳）。中学校には近くの小さな村の子供も通っている。

³³ 町に10軒あるパブは、特に男性の社交の場としてにぎわっている。飲酒によるコミュニケ

それ以降、朝まで人通りはめっきり途絶えてしまい、車が通ることもほとんどなく、町は静まり返っていた。

さて、町にはスーパーが2店舗あるし、診療所も2軒、そして入院設備と救急外来を兼ね備えた小さな公立病院があり、町の中だけでも一応生活できる。しかし、ふつうの服や靴、本を買える店も、映画館やプール、カレッジ³⁴もなく、住人は隣町に行かざるをえない。近隣の市町村との間にはバスが運行されているが、州からの補助によって赤字を補填している状態なので、本数がそれほど多くなく、料金も高い³⁵。そのため、住人は気軽に自家用車に乗って別の町まで用事を済ませに行く。

町の名物ともいえるオルタナティブ・スピリチュアリティの様相については、第2節で述べるとして、ここではキリスト教について確認しておく。

町の中には現在7つのキリスト教の宗派が活動している。高齢者を中心に教会に行く人もいるが少ない。イングランド国教会は大小2つの教会をもつが、近くのみア村の教会と合わせ、牧師と牧師補の2人で担当している。カトリック教会は1人の神父が担当しているが、メソジスト教会と合同改革教会³⁶は、それぞれ1人の牧師が周辺5町村にある教会を掛けもちで担当している。その他、エホバの証人とゴスペル・ホール³⁷が町の中に集会所をもち、ペンテコステ系のグループ³⁸が毎週、中学校の体育館で集会を開いている。2009年夏頃まではケルト正教会³⁹のミサも行われていた。

イングランド国教会やメソジスト教会はイングランドの多くの市町村でみかける宗派だが、それ以外の宗派はそうではない。メンディップ郡の比較的大きな5つの市町村別の人口とキリスト教各宗派の教会数を調べると、表2-3のように、もっとも人口の少ないグラストンベリーにおける、教会や活動拠点の合計数が最多であることがわかる。それは、第4節でみていくような、「キリスト教のゆりかご」としての近年グラストンベリーの歴史に関係していると思われる。歴史を辿る前に、本稿の中心的トピックであり、グラストンベ

ーションだけでなく、年間を通したスキトルズなどパブゲームの対抗試合も、地元民の娯楽として欠かせない。

³⁴ 義務教育を終えた後、大学（university）に行く前に、16～17歳の子供が通う教育機関。

³⁵ たとえば、ブリストル行きのバスは1時間に1本で、片道5.75ポンド、往復6.85ポンド（2011年9月現在）。

³⁶ 1972年にイングランドとウェールズの長老派と会衆派が合併して成立したプロテスタント教会。通称URC。

³⁷ 叙階された聖職者を擁したり、既存の儀式を行ったりせず、新約聖書をもとに神を崇拝するプリマス同胞団（Brethren）の集会所のこと。

³⁸ モダンな実践が特徴的で、若者の信者が多く、欧米諸国や第三世界で急速に拡大しているカリスマ刷新運動の1つ。

³⁹ もともとはシリア正教会の流れを汲むイギリス独自の正教会。1866年に、シリア正教会の聖職者がイギリスにやってきて、独自の正教会を設立した。当初はその存続も危ぶまれたが、徐々に信者を増やし、1994年にはエジプトのコプト正教会の一員となり、ブリテン正教会という称号を賜った。

リーの名前を欧米に知らしめたオルタナティヴ・スピリチュアリティがどのようなものなのか、具体的にみていこう。

2、多彩なオルタナティヴ・スピリチュアリティ

本節では、現在町でみられるオルタナティヴ・スピリチュアリティ関係の実践を、宗教的实践、セラピー、スピリチュアリティ産業、ワークショップと講演会の4つに分けてみていくことで、その多様性を示したい。

2-1 宗教的实践

グラストンベリーで既存の宗教以外の宗教を実践している人が多いことを示す根拠として、この地方では「その他の信条」を信じる人の割合が、イングランドとウェールズの中でもっとも高いというデータがある⁴⁰。ただし、関わっているのはほとんどすべて白人である。閉鎖的でなく、参加資格に制限がないものだけでも、第3章以降で取り上げる女神運動の他にもいくつも存在している。活動団体の一覧表というものはないため、以下では筆者が確認できたグラストンベリーで定期的に行われていた活動のうち、キリスト教以外の宗教的实践についてみていこう（表2-4参考）。

まず、スーフィズムのグループが複数活動している⁴¹。もっとも活発なグループのシャイフはナクシャバンディ派に属する、キプロス人のシャイフ・ナジーム（1922～）で、毎週コーランの詠唱と昼食会を兼ねた集まりを開き、ときどき旋舞のワークショップやコンサートを企画している。ロシア人のアイリーナ・ツイディー（1907～99）がインドからイギリスに広めたスーフィズムの実践者も定期的に瞑想会を開いている⁴²。不定期だが、ダンス・オヴ・ユニヴァーサル・ピースとして知られる、スーフィズムも含めた様々な宗教伝統の詠唱に合わせて踊る集まりも行われていた。その他に、西洋仏教僧団友の会⁴³、チベット仏教のグループ⁴⁴、禅仏教のグループ⁴⁵が小規模ながらも定期的に集まって、勉強

⁴⁰ グラストンベリーを含むイングランド南西部は、キリスト教、ユダヤ教、イスラーム教、ヒンドゥー教、シク教、仏教というイギリスの六大宗教以外の信仰をもつ人の割合が、イングランドとウェールズの中でもっとも高い [Census 2001]。

⁴¹ スーフィズムではないが、男性ムスリムのみの金曜礼拝も行われている。参加者の大半は、グラストンベリー一帯に暮らす南アジアやトルコといった、イスラーム諸国出身の男性だが、リーダーは20代の白人のイギリス人男性である。スーフィズム以外のイスラームはふつう、オルタナティヴ・スピリチュアリティとはみなされないが、参考のため記した。

⁴² 自分たちのことをスーフィだが、ムスリムではないと考えている。よって、コーランを唱えたり、イスラームの諸規律を守ったりすることはしない。

⁴³ 1967年にイギリス人の僧侶サンガラクシタ（1925～）が創設した仏教の団体。伝統的な仏教の価値観に忠実に、欧米人に合った形の仏教の創造を目指していて、欧米社会を中心に世界23ヶ国に支部がある。この団体の運営に携わる人がグラストンベリーに移住してきて、集まりが始まった。

⁴⁴ チベット出身のソジャール・リンパシェ（1947～）を師と仰ぐ女性が主催しているグループ。

会を開いたり、瞑想をしたりしていること、マイトレヤ・モナステリー⁴⁶のセンターにて、瞑想やヒーリングの体験ができることを確認している。ネオペイガニズムについていうと、魔女術の実践者は少ないが、2009年頃まではドルイド⁴⁷たちが、季節ごとに儀式をしたり、パブでネオペイガニズムに関する事柄を語り合う集まりを定期的に行っていた。しかしドルイドの活動は、2010年以降、全英規模のドルイド団体バード・オヴェイト・ドルイド団(OBOD)が年2回行う儀式を除いて、グラストンベリーでは休止している。クリシュナ意識国際教会(ISKCON)⁴⁸の定期的な集まりも2006年までの数年間、および2009年から2010年の1年間ぐらい行われていた。ただし年1回開かれる、全英からの信者を集めての大きな集まりは継続している。2005年頃まではサイババ⁴⁹の集まりが、2006～2008年などオショー・ラジニーシ運動⁵⁰の瞑想が開かれていた。2009年12月と2011年9月には、別々の独立系カトリックの集まりをそれぞれ確認した⁵¹。その他、特定の信仰とは関係ない、定期的な瞑想の集まりを、2005年以降、3つ確認している。これらの実践は、その信仰に共感をおぼえた人が、個人的に集まりを始めることが多い。そのため、その人の状況が変わったら休止してしまうので、新しく始まるものが多い一方で、長期に継続することが難しい。

なお、正統とされるキリスト教の教義から外れるような霊的なもの、非合理的なものへの関心が一般的に高いことは、イギリス社会の特徴としてしばしば挙げられる。たとえば、19世紀に始まった心霊主義教会は、最近ではやや低調な兆しをみせはするものの、もはや「オルタナティブ」とはみなされておらず、確固たる地位を築いている。幽霊に対する関心も高く、バースなどの大都市で観光客向けに幽霊ツアーが催されているし、幽霊が住み

彼は西洋に長く暮らし、西洋人の弟子が多くいる。

⁴⁵ ベトナム出身の禅僧、ティク・ナット・ハン(1926～)を師と仰ぐ数人が主催するグループと、西洋禅組合(Western Chan Fellowship)の男性が主催するグループの2つがある。

⁴⁶ アメリカ人ヒズ・ホリネスが1994年頃から始めた、チベット仏教とキリスト教の混合した宗教。彼はイエス・キリストと仏陀の生まれ変わりだとみなされている。

⁴⁷ 宗教としてのドルイド教はケルト人の信仰のことであり、その神官はドルイドと呼ばれ、歴史的には3つの区分がある[原2007]。1) 前5世紀のガリアのギリシャ文化の影響を受けた知的階層集団、2) 紀元前後から近世までのヨーロッパのキリスト教以外の信仰者、3) 18世紀以降、アイルランドやグレート・ブリテン島でケルト文化の復興を目指し、キリスト教到来以前の信仰としてのドルイド教を理想視しているネオドルイド、である。現在みられる「ドルイド」は3)にあたるが、3区分のドルイドの歴史的な連続性は学術的には否定されている。

⁴⁸ インド人プラブパーダが始めたヒンドゥー教の一派でハレ・クリシュナ運動としても知られる。1966年にアメリカで協会を設立したため、欧米に信者が多い。

⁴⁹ インド人の宗教家。1960年代からはインド国外にも信奉者が増加。

⁵⁰ インド人ラジニーシが1970年前後から始めた宗教的運動。性に対する革新的な思想や意識変容体験をもたらす瞑想法が、対抗文化運動に関心をもっていた西洋人を魅きつけた。

⁵¹ どちらも一般のカトリックと同様にミサを行うが、ローマ・カトリック教会には属しておらず、カトリック教徒でなくても聖餐を受けられた。ともにカバラとのつながりがあるグループのようだった。

ついているとされる住宅は、そうでない住宅より高値で販売されている。それ以外にも、小説の登場人物である名探偵シャーロック・ホームズを実在の人物とみなす団体も存在している。

さらには、宗教的な事柄を茶化してしまう傾向もみられる。その代表がジェダイの騎士騒動である。これは、2001年の国勢調査の信仰に関する項目の中で、イギリスの六大宗教以外の「その他の信条」の下位項目に、SF映画「スター・ウォーズ」に登場する「ジェダイの騎士」と記入した人がもっとも多かったため、この架空の集団が六大宗教に次いで信徒数の多い「信仰」になってしまった出来事である。もちろん「ジェダイの騎士」を信仰している人が急増したわけではない。架空の集団が「信仰」として公式記録に載ったら面白いと考えた人々が、国勢調査の信仰の欄に「ジェダイの騎士」と記入しようというキャンペーンを始め、大成功を収めた結果なのである。

グラストンベリーでキリスト教以外の多様な宗教的实践が存在している背景には、上述のようなイギリスという国に暮らす人々の宗教というものに対する大らかな姿勢が影響していると考えられる。

2-2 セラピー

グラストンベリーではマッサージや代替療法も含め、各種セラピーが盛んで、町の中ではおよそ142種類のセラピーが実施されている [Wheeler 2004 : 15]。たとえば、町でもっとも知られたヒーリングセンターのブリジット・ヒーリングセンターでは、タロット、占星術、ルーン文字占い、夢占い、鍼、指圧、レイキ、全身マッサージ、インド式頭部マッサージ、リフレクソロジー、脊椎ワーク、カウンセリング、心理療法、サウンド・ヒーリング、アロマセラピー、スマッジング、ホピ式耳ろうそく療法、シャーマンのヒーリング、チャクラ、中心エネルギー統御、天使療法、感情解放術、高度知覚読み、前世療法の24種類が提供されている。

主収入であれ、副業であれ、趣味であれ、何らかの形でセラピーを行っている従事者はおよそ150人いるとされており [Wheeler 2004 : 18]、町民約60人に対し、1人の従事者がいる計算になる。また、公共の診療所で、ホメオパシーや薬草学、鍼やマッサージ、整骨療法を保険の適用範囲内で受診できる⁵²。診療所の看護師の話では、このようなサービスを公共の診療所で提供している町は珍しい。町民の中でセラピーを受けたことのある人の割合を示す資料はないものの、Wheeler [2002-2003] はグラストンベリーの住人が信条にかかわらず、セラピーを受け入れていると指摘している。

⁵² この所長である医師はホメオパシー医の資格をもっている。その他の療法については、専門資格をもつ代替療法の従事者と提携していて、決まった曜日に受診できる。2006年、鍼と整骨療法は無料、それ以外は10ポンドだった。保険適用外の私費で受けると、1回につき、15～30ポンド程度のものが多い。

2-3 スピリチュアリティ産業

グラストンベリーがオルタナティヴ・スピリチュアリティの町とみなされている最大の理由は、オルタナティヴ・スピリチュアリティ関係の商品を扱ったり、サービスを提供したりする「スピリチュアリティ産業」が盛んで、そのような店や施設が中心部に立ち並んでいるからである。2011年9月時点での、町の中心部の店や施設の種類を示したのが表 2-5 である。ここからもわかるように、ネオペイガンのグッズ（7軒）、アジア諸国のグッズ（4軒）、パワーストーン（5軒）、ヒッピー風の衣料品等を売る店（10軒）、スピリチュアリティ系書店（4軒）、ベジタリアンカフェ（6軒）、セラピーセンター（4軒）などオルタナティヴ・スピリチュアリティ関係の店や施設は73軒あり、中心部の店や施設全体の約37.1%を占めている⁵³。メンディップ郡の他の4つの規模の大きな市町村の中心部には、筆者が確認できたかぎり、同様の店や施設は1軒もないことを考えると、グラストンベリーの割合の高さが窺える。これらの店や施設は、図 2-6 で示すように、マーケット・プレイスを中心に、ハイ・ストリートの特に中央から西側、マグダレン・ストリートの北側、ノースロード・ストリートの南側、ベネディクト・ストリートの東側に集中している。

そのうちの1つ、あるネオペイガンのグッズの店で売られている商品の一覧が表 2-6 である⁵⁴（写真 2-1、2-2、2-3⁵⁵）。他のオルタナティヴ・スピリチュアリティの店でも扱っているタロットカードやロウソク、乾燥ハーブやそれを調合したインセンスはもちろん、短剣や杯、杖や置物など、祭壇のディスプレイや儀式で使用するための小道具の数と種類が多いことがわかる。他にも、アクセサリやキーホルダー、カバンや車のステッカーなど日常的に使用するものを、ネオペイガンが好むデザインで仕立てた品も少なくない。つまり、ネオペイガンのグッズの市場は、ネオペイガニズムを宗教的に実践するために使う物だけを供給しているのではなく、ファッションとして楽しめるような方向にも触手を伸ばしていることがわかる。像や書籍など、大半の商品は卸売業者から仕入れているが、客の要望に応じて、特定の取引先に特注するタイプの商品もある。この店の場合、自社ブランドの確立を目指しているため、女性オーナーが調合したハーブや作ったロウソクを販売し

⁵³ 空き店舗、公共施設や教会、医療関係も「店や施設」の母数に含めたが、住宅は除いた。その全体数は196軒。

⁵⁴ この店のホームページの掲載商品を一覧にまとめた。筆者はオーナー夫妻とは親しかったため、店内の商品リストを作成したいと頼んだが、店舗で長時間にわたってメモを取る姿を客に曝すことは商売上好ましくないとやんわりと断られた。そのうえで、商品はすべてネット販売しているからと、それに基づいたリスト作りを勧められた。そのため、この店のネット販売の商品リストを翻訳する形で、表 2-6 を作成した（2013年6月27日～29日調べ）。なお、プライバシー保護のため、この店のホームページの URL は引用文献一覧に記載していない。

⁵⁵ 資料にその写真を載せた町の魔女グッズ店は、表 2-6 の店とは異なる。

ている⁵⁶。彼女の夫である男性オーナーも木工細工の腕を生かし、木製の祭壇用盤などを製作している。また彼の友人で、同じく木工細工をたしなむ男性が、特注で注文された製品を作ることもある。

オーナー夫妻はともにネオペイガンであり、従業員もそうである。なぜなら接客の際、商品の説明などネオペイガニズムの知識が必要になることがあるからである。ある従業員は、「恋人との関係を魔法で修復してほしいなんていう、無茶なことを頼んでくる客もいるんだ」と笑う。彼らは、テレビや映画に出てくる奇跡を起こすような「魔法」は、エンターテイメントにすぎないと言い切り、現実的である。そのため、このような不適切な望みを口にする客には、抱えている悩みに耳を傾け、解決に手を貸していると話す。

販売方法だが、この店も含めて、最近ではインターネットによる販売に力を入れたり、イギリス各地で開かれるオルタナティヴ・スピリチュアリティのイベントにブースを出したりするオーナーも少なくない。グラストンベリーにはオルタナティヴ・スピリチュアリティへの関心が高い観光客が集まってくるが、その数には限りがあるため、彼らに特化せずに販売路を開拓し、売り上げを確保しようとするのである。

なお、この店はヨーロッパに土着の信仰の復興運動であるネオペイガニズムの店なので当てはまらないが、アジアやアフリカの雑貨や衣服、パワーストーンを専門的に取り扱っている店では、海外に直接買いつけに行くオーナーも少なくない(写真 2-4、2-5、2-6、2-7)。その際、彼らは現地で外国人向けに開講されているオルタナティヴ・スピリチュアリティ関係のワークショップを受講したり、現地の「パワースポット」を巡礼したりすることもあり、自らの精神性の修養を兼ねた買いつけの旅だといえる。

先ほどのネオペイガニズムの店と同じく、オルタナティヴ・スピリチュアリティ関係の店や施設のオーナーや従業員は、確認したかぎり、すべてグラストンベリー以外の出身のオルタナティヴだった。接客の際、オルタナティヴ・スピリチュアリティの知識が必要なので、地元民より移住者のオルタナティヴが雇われるのである。また、一般の店が、肉屋ステファン、クーパー・アンド・ターナー（不動産屋）、ザプス・ニュース（ニュースエージェント）というように、店主の名前を店名に用いる傾向がみられるのに対し、オルタナティヴ・スピリチュアリティ関係の店は、心霊の子豚（オルタナティヴ・スピリチュアリティ一般のグッズ）、猫と大釜（ネオペイガンのグッズ）、迷宮（スピリチュアリティの書店）など、実践者が好むような、神秘的でオカルト的な単語を店名に用いる傾向がある。しかも、写真 2-8 から写真 2-14 のように、それぞれの店や施設は内装だけでなく、ショーウィンドーも個性豊かにディスプレイする。カラフルな看板を掲げ、道路に立看板まで出しているのです、その奇抜さはよく目立つ。逆にいうと、中心部以外では視覚的にオルタナティヴ・スピリチュアリティの町であることを意識させるものは特にない。

⁵⁶ 彼女は西洋ハーブの通信講座を終了している。

さらに店や施設の中には、各種イベントやセラピーのセッションを宣伝するちらしが置いてあったり、専用の掲示板に貼ってあったりする。店の2階や施設内の部屋がワークショップや講演会などの各種イベントに貸し出されることもある。このように、町の中のオルタナティブ・スピリチュアリティ関係の店や施設は、オルタナティブ・スピリチュアリティの町としてのグラストンベリーらしさを醸し出すだけでなく、情報や実践の場を提供することで、訪問者だけでなく、そのような事柄に関心がある住人も含めた人々が交流する場となっている。

2-4 ワークショップと講演会

それでは、どのようなワークショップや講演会が開かれているのだろうか。表 2-7 は『ジ・オラクル』の2010年6月号の週間イベント、表 2-8 は同号の月間イベントとして掲載されているもののうち、グラストンベリーで開かれているもののみの一覧表と、それを種類と開催場所に分けて整理した表である。『ジ・オラクル』はオルタナティブ・スピリチュアリティ関係の事柄にほぼ特化したフリーペーパーなので、ここに掲載されているイベントの大半はオルタナティブ・スピリチュアリティ色の強いもので、ミサをはじめ、キリスト教と関係したイベントは全く掲載されていない。6月にはイングランド国教会の巡礼という、町のキリスト教系のイベントとしては1年で最大のものが行われるにもかかわらず、全く触れられていないのである。

詳細をみていこう。ヨーガや太極拳などのエクササイズなど繰り返し行うことで効果が得られるようなものは、毎週開かれる傾向にある。平日に開かれていることからわかるように、このようなイベントに参加するのは、グラストンベリーの住人が多く、講師も住人が務める傾向があり、小規模なものが多い。このようなエクササイズ系のイベントは、グラストンベリー以外の町でも開催されていて、イギリスでより一般的に受け入れられているオルタナティブ・スピリチュアリティだといえる。一方、(ネオ)シャーマニズムや自己成長など、宗教的・思想的なものは、1回きりまたは年に数回の年間講座として、休日に開かれる傾向がある。こちらはそのような分野で有名な人を講師として招き、大がかりに開かれることも多く、外部からの参加者も多い傾向がある。ただし、中には住人が自宅で小規模に開くようなものもあり、開催形態は多様である。ヒーリングやセラピーは、毎週開かれるものも、月間のイベントに分類されるものもあるが、前者はヒーラーやセラピストからヒーリングやセラピーを実際に受ける施術、後者はヒーリングやセラピーの知識を講師から習得する講座となっている傾向がある。

このようなイベントは、オルタナティブ・スピリチュアリティ系の店や施設だけではなく、町の公民館や教会の会館でも開催されている。ただし、これらの会館が利用されるのはヨーガやコンサートが中心であることを考えると、エクササイズや音楽など、宗教色が

薄いもののほうが、オルタナティブ以外の人々にも受け入れられていると推測される。実際、ヨーガやセラピーに携わるキリスト教徒は少なくないし、仏教やドルイドのイベントに参加するキリスト教徒も少数ながらいる。日常の実践のレベルでは、キリスト教徒もオルタナティブも対立はしておらず、むしろ交ざり合っている。

本節でみてきたように、グラストンベリーはオルタナティブ・スピリチュアリティ関係の事柄の見本市のような町であり、店やイベント、セラピーや講座を通して、それらに手軽に出会え、気軽に体験できる場所なのである。

3、オルタナティブなライフスタイル

それでは、オルタナティブ・スピリチュアリティに関心があり、移住してきた「オルタナティブ」と呼ばれる人々の日常生活には、どのような特色があるのだろうか。イメージをつかんでもらうため、本節では特徴的な事柄を記述していくが、オルタナティブ・スピリチュアリティへの関わり方は、人によって多種多様であるため、代表的なライフスタイルというものはない。本節に記す事柄に関わっていれば、必ず「オルタナティブ」というわけでもないし、ここで挙げる特徴のすべてがあらゆるオルタナティブに当てはまるわけでもないことを強調しておく。なお、筆者の大家で同居人のヘイゼルは、筆者がもっとも身近で観察したオルタナティブなので、しばしば事例として取り上げている。

3-1 衣食住

まず、身に着けるものからみていこう。オルタナティブの中には、それほど多いわけではないが、虹色の上着やインド風のゆったりとした衣装といった、一風変わった服装を日常的に好んで着用する人もいる。他にも「妖精の耳」を象ったものを耳に付けたり、「妖精の羽」という飾りを背中に付けたりしている人もいる。タトゥーを入れている人もいるし、いくつものパワーストーンのペンダントを首にぶら下げたり、指輪をはめたりしている人もいる。これらのアイテムを身に着けている理由を尋ねると、ファッションというより、「スピリットと接触しやすくするため」（60代男性、元教師の退職者のシャーマン、タトゥー）、「自分を悪いスピリットやエネルギーから守るため」（60代男性、元工場勤務の退職者のドルイド、鳥の羽をつけた帽子）などと神的存在と関係づけて説明された。

次に食事である。彼らは一般的に食べ物の安全性や倫理的かどうかといったことに対する関心が高い [Prince & Riches 2000 : 94]。有機栽培やフェアトレードの食材を好むだけでなく、家畜が倫理的な方法で飼育され、屠殺されているかどうかにも気にしている。ある30代の女性（ショップ店員）は次のように話す。

私は体に悪いから、肉は食べない。肉は他の動物の体でしょう。今は動物をととてもよ

くない方法で殺したり育てたりしているから、動物の中には怒りがたまっている。なので、そういう動物の肉を食べるのはよくない。

このような考え方の影響に基づき、菜食主義が好まれる傾向にある。

グラストンベリーにおける菜食主義への関心は、イギリスの他の地域より高く、人口の約30%が菜食主義者、約10%が絶対菜食主義者だという調査もある[Wheeler 2003-2004]。そのため、食事を持ち寄る集まりでは、菜食主義者が来ることを想定して、肉を使わない料理を持つていくことが多い。たとえば、ヘイゼルは菜食主義者ではないが、友人宅の持ち寄りパーティに、野菜と豆のカレーを持参した。彼女の友人は菜食主義者ではないが、そういう招待客がいるかもしれないと配慮したのである。また、2009年6月6日に開かれた、昼食つきのあるイベントでは、主食としてモロッコ豆と水菜のサンドイッチかチーズとドライトマトのサンドイッチを、デザートとしてイチゴかフルーツケーキを選べるようになっていた。参加者の多くはオルタナティブだったので、菜食主義と絶対菜食主義の食事を準備していたと考えられる。その他に、紅茶やコーヒーのカフェインは体に悪いと考え、ノンカフェインのハーブティーを好む人も多い。また、牛乳は消化が悪いと考え、羊乳や豆乳を好む傾向があった。小麦粉は消化が悪いので、米やその他の穀物のほうが体によいと好んで食べている人もいた。

それから、住居と室内の様子である。かつてのヒッピーやトラベラーはテントやキャンピングカーで野宿をしていたが、現代のオルタナティブは屋根の下で暮らす。彼らの集住地区はないが、ヘイゼルのように、郊外の新しい家より、伝統的で丈夫であることを理由に中心部や周縁部の古い家を好む人が多い⁵⁷。一般的にイギリスの戸建て住宅には複数戸建てが多く、表か裏に敷居で区切られた細長い庭がある。ハイ・ストリートから3分ほど歩いたところにあるヘイゼルの持ち家もそうで、3つに区切られた3階建ての建物の右側部分である(図2-7)。1階には居間、ダイニング、トイレ、台所と貯蔵室があり、階段下に収納があった。2階にはシャワーつき浴槽と洗面台とトイレからなるバスルーム、寝室と小部屋、3階に2つの寝室があった。寝室はいずれも10畳ほどあった(図2-8)。

オルタナティブ・スピリチュアリティに関係する物を豊富にもっているオルタナティブ

⁵⁷ イギリスのコッツウォルズ地方で調査を行った塩路[2003:171-177]は、有権者リストを用いて、新旧住民の分布を調べた。その結果、労働者階級の地元民は周縁の安価な現代住宅、低所得者用住宅、老朽化が進んだ住宅に暮らす一方で、中流階級のインカマーは中心部の歴史的建築物や新興住宅に暮らしていることを明らかにした。筆者も同様の調査を試みたが、オルタナティブには、個人情報公開を快く思わず、有権者リストに情報を載せていない人がかなりいる。また、住居を借りている人も多く、その中にはこの地域で選挙権をもたない人も少なくない。そのため、同様の統計学的な調査は断念したが、聞き取りと観察からは、移住者のオルタナティブのほうが古い家を、地元民のほうが新しい家を好むという類似の傾向があるように思われた。

もいる。ヘイゼルの場合、マッサージに使う折り畳み式の台を所有し、アロマセラピー用の精油やオイルの瓶をダイニングに飾っていた。各種セラピーやマッサージの資格認定証や人体の経絡図が壁に貼られ、頭部の経絡模型が本棚におかれていた。他にも占いのカードや、グラストンベリーやケルト伝説の英雄アーサー王に関する書籍、ヒーリング・ミュージックの CD が並んでいた。部屋の一角にはろうそくとハーブによるささやかな祭壇をしつらえていた。定期的に祭壇に手を入れる人もいるが、ヘイゼルの場合、飾りの意味合いが強かった。寝室の窓はドリームキャッチャーやグラストンベリー・トールのステッカーで飾られていた。書斎として使われていた小部屋にはチベット仏教のセンターで購入した女神、緑のタラの絵が貼られ、友達から贈られたインドの象の飾り物と中国語の額が飾られていた。ネイティブ・アメリカン文化由来とされるドラムももっていて、シャーマンのワークショップに行くときに使用していた。トイレの水タンクには「下がれ、私は女神だ」というステッカーとヒンドゥーのクリシュナ神のステッカー⁵⁸が貼られていた。庭には仏陀の像が無造作に置かれ、日に焼けたチベット仏教の 5 色の旗も飾られていた。このようにヘイゼル宅のオルタナティブ・スピリチュアリティ関係のグッズの中には、実際には使われず、飾りの役割を果たしているものも少なくなかったといえる。

オルタナティブでなくても、このようなグッズを持っている人もいる。しかしヘイゼルのように沢山飾っているのは、オルタナティブの特徴の 1 つであり、家の前の置物や窓の飾り物の様子から、その家の住人がオルタナティブかどうかを推測できるときもある。

3-2 健康の維持

続いて、健康を維持するため、健康でなくなったときそれを取り戻すため、どのようなことをするのか、好むのか、みていく。イギリスでは西洋医学に基づく診療が無料であるにもかかわらず、オルタナティブは、身体の不調を感じたとき、より身体に優しく、自然に近いと考えている代替療法で治癒することを好む⁵⁹。また、マッサージを受けるにしても、筋肉の凝りをほぐすという理解より、エネルギーのつまりを取り除く、エネルギーを神的存在から受け取る、身体のエネルギーの循環をよくするというような説明を好む。たとえば、ヘイゼルは頭痛がするとき、初めから痛み止めの薬を飲むのではなく、血液の流れがよくなるようにと水を大量に飲んでいたり、むち打ち症の後遺症の痛みも体操や電子レンジで発熱するクッションを使って治そうとしていた。またアロマセラピストの資格を

⁵⁸ 国際クリシュナ意識教会の人々が、ときどき歌って踊りながら、町で無料配布している。

⁵⁹ 西洋医学への不信感からイギリスで代替療法が盛んになり始めたのは、ニューエイジへの関心が高まっていた 1960 年代後半以降だといわれる [Chryssides 2000 : 63, Rose 2000 : 70]。一部の代替療法については、政府の認可により信頼性が増し、また保険適用により安価に利用できるようになったため、一般にも代替療法を利用する動きは広まった。なお、日本では効果がないとして非難を浴びているホメオパシー薬も、イギリスでは OTC 薬として販売されている。

もっていることもあり、筆者の皮膚がアトピーのため紫色に腫れ上がったときも、ステロイドよりも、ラベンダーとカモミールのエッセンシャルオイルを入れたお湯にタオルを浸し、患部に巻きつけることを勧めた。しかし、ヘイゼルは高熱で苦しんでいたときは、医者でもらった抗生物質を服用していたし、筆者にもアロマセラピーで症状が改善しなければ医者に行くように強く言った。このように代替療法を好むものの、絶対視はせず、一般の医学も利用している。

オルタナティブの中には、電子レンジや Wifi を体に有害だとみなしている人もいた。たとえば、筆者が一時期居候していた元看護師のルビーは、電磁波で食べ物を温めることは、細胞レベルで食品を変性させるので、科学的に危険だと考えていた。また、無料で利用できる Wifi の電波を飛ばし始めた町の当局に対し、重篤な健康被害を招く恐れがあるとして、取りやめを求めるキャンペーンが、2009 年から 2011 年にかけての筆者の滞在中、ずっと続いていた。

それから、軽い運動はイギリスでも一般的に健康増進に役立つと推奨されているが、オルタナティブはヨガや太極拳などを好む傾向がある。国民的競技とされるサッカーは、「好戦的」「愛国心を煽り、外国人への敵対心を助長する」などを理由に、毛嫌いする人が少なくない。その背景には、イギリスで活発に活動しているフーリガン、つまり熱狂的でときに暴力的なサッカーファンと同一視されたくないという思いがあるようだった。そのため、サッカー愛好家は人前ではその事実を隠し、筆者と 2 人きりのときにこっそり打ち明け、その後に必ずフーリガンを非難する言葉を付け加えるのだった。

3-3 収入と仕事

最後に仕事に対する考え方と給付金の受給状況についてみておく。オルタナティブは長時間働いて、高い給与を得るよりも、自分の私生活の充実を望む傾向がある。GCDT の調査によると、グラストンベリーには、高学歴の資格保持者が低賃金労働に従事していることが少なくない [GCDT 2005 : 4]。彼らは小売業、接客業、建設業は好まず、自然や環境に関わる仕事、芸術関係、教師、カウンセリング、子供の世話を希望する [GCDT 2005 : 21-22]。この調査では、オルタナティブとそうでない人は分けられていないが、この傾向は筆者が接していたオルタナティブによく当てはまる。たとえばヘイゼルは、資格ではないものの広告会社の一線で活躍していた経歴をもつが、移住後は保険会社で事務のパートをしていた。その後、アヴァロン島協会の職員にはなったが、彼女しか職員はいなかったため、部屋やトイレの掃除などの雑用もこなしていた。彼女はカウンセリング同様、代替療法とされるマッサージの仕事をもっと増やしたがっていたが、セラピストの多いグラストンベリーではそれは難しかった。それでもここに住んでいたのは、たとえ昔のような高収入が望めなくても、グラストンベリーに暮らしたかったからだった。

ヘイゼルの場合、主な収入源は 2008 年 8 月までは保険会社のパートの事務、それ以降はアヴァロン島協会の職員としての給与だった。副収入として下宿人である筆者から得ていた家賃は、光熱費込みで 1 ヶ月あたり 250 ポンド (2006 年)、または 285 ポンド (2008～2011 年) だった。それから、マッサージの顧客 1 人が 2～3 ヶ月に 1 回訪れていて、1 回 1 時間で 30 ポンドの収入になっていた (2010 年)。彼女は週末ごとに友達と遊び、年に 2～3 回旅行に出かけ、オルタナティヴ・スピリチュアリティのワークショップ等を年に 4～5 回受講していた。「このあたりは賃金が低いから、20 代の頃と同じだけのお給料しかもらえない。でも、私の場合、家のローンはないし、40 歳になるまで (高給取りの) メディア関係で働いていたから、貯蓄も十分にある。だから、ぎりぎりやっていた」と話していた。しかし、自分の望むライフスタイルを遂行しようとする生活費が十分に得られないとの理由から、ヘイゼルのように自活せず、給付金を受け取っている人も少なくない⁶⁰。

ここでイギリスの社会保障制度について、簡単に説明しておく。イギリスの社会保障は 1601 年に制定されたエリザベス救貧法をもって始まったとされる。それ以前にも救貧法は存在していたが、貧民の救済というより、土地を離れた浮浪者への処罰の側面が強かった。それに対して、エリザベス救貧法は教区ごとに貧民監督官を任命し、より積極的な救済を目指した。その後、ヨーロッパにおける福祉国家思想の広がりを反映して、1911 年に国民保険法が制定され、対象は一部の国民だったものの、健康保険制度と失業保険制度が創設された。

現行の社会保障制度の直接の起源は、第二次世界大戦中に策定されたベヴァリッジ報告に基づく国民扶助法である。ただし「国民扶助 (National Assistance)」という名称は、受給の権利がある人々に受給を恥と思わせているとして、受給率の向上を図るため、1966 年に「補足給付 (Supplementary Benefit)」に名称が変更された。ここから、所得が十分でない人は給付金を受け取ってもらわなくてはならないという、イギリス国家の権利に対する強い意志がみてとれる。

イギリス政府から支給される給付金は手厚さに定評があるが、次の 6 種類に大別される⁶¹。

- 1) 求職中や起業準備中の者。仕事はしているが低賃金なので、補助が必要な者。
- 2) 労災認定を受けた者。病気療養中の者。
- 3) 障害者、家族を介護している者。
- 4) 育児休暇中や子育て中の者。子供向けの給付金。
- 5) 年金。
- 6) 住居用。このうち、5) が非難の対象になることはほとんどないし、6) は 1) ～5) の受給者が追加でもらうことが多い。以下では

⁶⁰ 政府はバスの中などに、むしろ給付金の受給を奨励するような広告を出している。このような「ばらまき」やそれに依存している人々を快く思わない者もいるが、給付金の受給には決まった住所が必要なので、住所不定でうろつく人を、金を与えることで管理し、治安の悪化を防いでいるとか、このような政策が芸術家の育成に役立っているなどのように、評価する声も聞かれる。

⁶¹ 以下の給付金の記述は、Citizens Advice Bureau Advice Guide と Directgov のホームページを参考にした。

問題視されがちな、1)～4) について説明を加える。

1) については、受給期間は決まっているが、期間終了後、少し働いて退職すれば再び受給できるため、実際にはほとんど働いていない人も少なくない。また、給付金の減額を恐れ、就職したくないという人もいる [GCDT 2005]。2) と 3) については、認定の判断基準が甘いらしく、筆者も調査中、なぜ受給できたのか疑問に思うほど元気になっている受給者に出会ったことがある。4) は、子供を産めば働かなくて済むほど十分な額が与えられるため、それに頼って生きていく若者がイギリス全体で増加し、社会問題となっている。

受給者の家族構成や年齢などにより、支給額は大きく異なるが、たとえば筆者の知り合いで、仕事をやめて移住してきた 50 代独身女性の場合、子供たちは成人して自立していたため、毎週求職者手当が 65 ポンド支給された。家賃は別に全額支払われ、初めの 13 週間はさらに 15 ポンド追加されていた。また、給付金受給者は医薬品代も含め、医療費は全額無料だし、様々なイベントの参加費用や施設の入館料に割引が適用される。筆者の町での生活費は、光熱費込みの家賃を除くと、1 週間当たり約 60 ポンド（食費、交通費、雑費）だったので、この給付金の額で生活していくことは十分可能である。

さて、グラストンベリーでは失業率と給付金の受給率が高い。失業率は 3.3% と、全国平均の 2.6%、州平均の 1.7% より高い [Central Somerset Gazette 2006/6/29]。就労可能年齢全体での給付金の受給率⁶²は、2008 年の場合 9.8% で、メンディップ郡の平均 7.0% より高い。その理由を考えてみる。

本章 1-2 で指摘したように、町では給付金に頼っている地元出身の若者も少なくないが、就業機会の少なさはサマーセット州の他の町でも大差ない。つまり、グラストンベリーの給付金受給率や失業率を平均より押し上げている理由の 1 つとして、他の町には少ない、外部から移住してきたオルタナティブの存在が考えられるのである。実際、ボランティア団体の代表が、生活費を給付金で賄うことを前提として、基準の低い低所得者用給付金を受給しやすいようにと、専属スタッフを少額の給料で「雇う」ケースもみられた。給付金を当てにして、芸術活動をしたり、暮らし方の自由度が高い庭師や農場での日雇い労働などの不規則の仕事を続けたりしている者もいた。つまり、オルタナティブには、給付金をもらってでも自分の目指すライフスタイルを守ろうとする傾向がある。

ふつうのところではね、カフェで隣に座った知らない人から話しかけられても、その人が前世とかスピリットとか、そういうことは信じてないって前提で話をするでしょ。でも、ここは違う。初めて会った人でも、とりあえずは相手がそういうことを信じているってことで話を聞かないとならないの。

⁶² Department for Work and Pensions のホームページから得られた受給者数を、国勢調査のデータから得られた人口で割った値。

グラストンベリーで本格的な調査を始めて2週間ほど経った5月のある日、何度かここを訪れているという女性（50代、ソーシャルワーカー）と知り合い、カフェに入った。2人分の紅茶のカップをおきながら、席についた彼女は、辺りを見渡ししながら、こんなことを口にしたのだった。そのときは町に来たばかりで、よくわからなかったが、町のオルタナティブたちの言葉を交わしていくうちに、彼女の言葉が納得できるようになっていった。

彼女が言うように、第2節と第3節でみてきたオルタナティブ・スピリチュアリティとは、少し風変わりだと思われるような諸実践や考え方なのである。

4、町の長い歴史と豊かな伝説

前節では、現在のグラストンベリーでオルタナティブ・スピリチュアリティが百花繚乱たる様子を眺めてきた。このような事柄が発展しやすい都市部でもないのに、一体どのような経緯を辿ってオルタナティブ・スピリチュアリティの花が開いたのだろうか。現在ではのどかな田舎町にすぎないグラストンベリーだが、歴史を紐解けば、中世に権勢を誇った修道院の存在を背景に、イギリスの宗教史にその名を残してきた古い町である。オルタナティブ・スピリチュアリティが花盛りである現況を理解するために、この町の歴史とその当時の社会状況、それを彩る伝説を辿り直してみよう。なお、本章の記述は本文中で示した文献の他に、地元紙『セントラル・サマーセット・ガゼット』の記事や関係者へのインタビューに基づいて、構成されている。

4-1 キリスト教の中心地から周縁へ

初めに、紀元前から宗教改革までの歴史を、イギリスの宗教の変遷と関係づけながら明らかにしていく。特に、16世紀の宗教改革の前後で、イギリスの宗教世界における位置づけの変化を経験したことに注目したい。

グラストンベリー一帯の低地は12000年から10000年前には海面下にあったが、8000年ほど前には入り江になり、水が引いた後の沼地や湿地には泥炭が堆積していた。新石器時代には、高地の原生林の大部分は切り開かれ、農耕地や湿原に作り替えられていく。遅くとも紀元前4000年頃の新石器時代からは断続的ながら人類の居住が確認されており、紀元前3～2世紀には沼地沿いに、現在レイク・ヴィレッジとして知られる集落があったが、水面の上昇により紀元前50年には廃墟となった [Rahtz & Watts 2009 : 22, 26-27]。このようにグラストンベリー一帯からは、イギリスの中では比較的古い時期から人が暮らしていた考古学的証拠が見つかっている。

紀元後43年にイングランド南部がローマ帝国に併合された際には、グラストンベリーもその一部となったが、ローマは407年にはイングランドから撤退する。その後、この一帯

はケルト系ブリトン人の部族王国の乱立を経て、7世紀末には大陸からやってきたアングロ＝サクソン人の支配下に入った。青山 [1992: 12] は、グラスティング (Glasing) という豚飼いがアングロ＝サクソン人の国を経て、グラストンベリーに至ったという伝説から、グラストンベリーの町が成立したのは、アングロ＝サクソン人がイングランドにやってきってからグラストンベリー一帯を支配するまでの間の6～7世紀だろうとしている。このアングロ＝サクソン人は、現在のイギリス人の直接の先祖と考えられている民族である。一方、先住のケルト系の人々はアイルランド、スコットランド、ウェールズ、コーンウォール、フランスのブリトニーに至る、いわゆるケルティック・フリンジに逃れていったといわれている。

ところが、アングロ＝サクソン人の支配地域になっても、ケルティック・フリンジと接する地域に位置していたグラストンベリーはケルト系の人々と交流を保っていた。たとえば、7世紀末にローマからイングランドに伝来したカトリックがグラストンベリーまで伝わったとき、町にはすでにアイルランドやウェールズからケルト化されたキリスト教が伝来していたといわれ、現在でも町には聖パトリックや聖ブリジッドなど、ケルト系聖人にまつわる伝説が多く残っている [Carley 1996]。そのため、後にカトリックの修道院が建設されても、グラストンベリーはケルト文化の残るウェールズやアイルランドと交流を続けていた [青山 1992: 222-223]。

さて、ケルト伝説では、西のほうに死者が復活のときを待つアヴァロンという世界があるといわれてきた。そのアヴァロンがグラストンベリーと同一視されるようになったのは、1190年 (もしくは1191年) にグラストンベリー修道院の敷地内の一画から、ケルト伝説の英雄アーサー王とその王妃のものとされる遺骨が掘り出されたためである。ただし、アヴァロン島伝説の信憑性に拍車をかけたのは、遺骨だけではなく、この町の景観と気候も関係していたようである。冬期、この一帯の低地には海水が浸水し、湖のようになっていたため、町の郊外の丘トールが湖に浮かぶ島のように見えるという神秘的な風景が作りだされていたのだ。また、13世紀半ばまでには、アリマテアのヨセフ⁶³がグラストンベリーに、キリストが最後の晩餐で用いた聖杯をもたらし、イングランドで初めての教会をつくったという伝説も広まった。

アーサー王とアリマテアのヨセフという2つの伝説は、歴史的事実ではなく、1184年の大火事で経済的苦境に陥った修道院による創出だとされている [青山 1992: 100]。しかし、そのおかげで、グラストンベリー修道院の威信が高まったのは事実である。特にアリマテアのヨセフは、キリスト教世界において、それほど重要な聖人ではなかったため、彼との

⁶³ イエス・キリストの大おじで、キリストの遺体を引き取り、墓に納めたとされる。ローマ帝国がイングランドを侵略する前から、イングランドは地中海に錫や鉛を輸出していたという説があり [Carley 1996: xvi]、アリマテアのヨセフはその交易のためにイングランドに来る際、グラストンベリーにも立ち寄ったのだといわれている。

結びつきを主張する大修道院は、グラストンベリー修道院以外、ヨーロッパにはなかった。そこで、キリスト教世界におけるイングランドの地位を高めるために、ヨセフはグラストンベリーのみならず、イングランド全体を象徴する聖人に仕立てられていった [青山 1992 : 230-232]。その結果、14 世紀までにはロンドンのウェストミンスターに次ぐ、イングランドで 2 番目に裕福な修道院として繁栄を極め、町も巡礼地として多くの巡礼者を迎え入れ、栄えていた。しかし、16 世紀前半のイングランド王ヘンリー 8 世による宗教改革の際、1539 年に修道院が閉鎖されると、町は急速に衰退していった。それでも、その後も町の伝説はオカルトや神秘主義や秘教思想に関心をもつ人たちを細々と魅きつけていた。

修道院の閉鎖前までのグラストンベリーに関する伝説は、先ほど触れたキリストの大おじであるアリマテアのヨセフが聖杯を持ってやってきて、イングランドで最初の教会をつくったという伝説と、アーサー王が復活のときを待つアヴァロン島であるという伝説の 2 つだけだったが、修道院の消滅後、伝説は一人歩きを始め、増殖していく [青山 1992 : 133-135]。隣町との境界に架かる橋がアーサー王が愛剣を返したポンパルナス橋とされたり、鉄分、またはカルシウム分を多く含んだ水が湧き出る泉は、それぞれアリマテアのヨセフがもってきたキリストの血液と体液を埋めたところから湧き出たとされたりした (チャリス・ウェルとホワイト・スプリング)。ウェアリーオールの丘のクリスマスと復活祭の頃に花を咲かせる山査子の木もヨセフがもたらした木の子孫とされ、ヨセフとともに青年時代のイエス・キリストもグラストンベリーを訪れていたという伝説まで生まれた。

ここまでの展開をまとめると、アーサー王やアリマテアのヨセフの伝説を利用しつつ、イングランドにおける正統派キリスト教世界の中心地として注目されていたグラストンベリーは、宗教改革を機にイングランドの宗教世界の中で周縁的な領域に移ったといえる。伝説についても、それまでは修道院関係者に限られていた伝説の創出が、一般の人々にも開放され、多様な伝説が生み出されていったとみることもできる。

4-2 ロマン主義からの再評価

初期キリスト教やケルト文化との関係の深さこそが、18 世紀末から 19 世紀初頭にかけての、産業革命への反動から自然への賛美とケルト文化への関心が高まったロマン主義の時代⁶⁴、歴史の表舞台から影を潜めていたグラストンベリーへの注目を再び集めさせた。たとえば、神秘思想家の詩人ウィリアム・ブレイク (William Blake) が発表した「エルサレム」という詩により、グラストンベリーは「ニュー・エルサレム」と同一視されるようになった [Michell 1997 : 80-81, 167]。「ニューエイジ運動は本質的にはロマン主義なので、

⁶⁴ ロマン主義運動では、「感動とか感覚とかの激しさ」、「知的な明晰さより詩的な神秘性に、さらに個性的な享樂的表現」に力点が置かれるという、価値観の変容が起こった [アーリ 1995(1990) : 36]。

ほとんどのニューエイジ文献ではロマン主義詩人に対する偏愛がみられる」[ストーム 2002 : 195-196] という解釈を踏まえれば、「エルサレム」を介してブレイクと結びつけられたことは、後にグラストンベリーがニューエイジの中心地とみなされた要因の 1 つになったと思われる。

世界で最初に産業革命を成し遂げたイギリスは、その後多くの探検家や宣教師を世界各地に送り出した。そのため、19 世紀末から 20 世紀初めにかけて、大英帝国各地の「奇妙」な風俗の話が伝わり、異文化に対する関心が高まっていた。ヨーロッパ以外の地域の文化を野蛮と蔑む人もいたが、物質主義に毒されたヨーロッパが失った高貴な精神性を未だ保持しているとして、仏教やヒンドゥーなどの東洋思想に魅かれていった者もいた。その中には、海外ではなく、自国の古い文化に精神的な支柱を求めるようになった者もいた [Howard-Gordon 2010 : 148-149]。そんな時代、アーサー王やアリマテアのヨセフ、聖杯の伝説と結びつくグラストンベリーは、神秘的なキリスト教に関心をもつ人々の注目の的になる [Benham 1993]。フレデリック・ブライ・ボンドは修道僧の霊との交信により情報を集め、修道院の発掘を進めていた [Bond 1978(1918)]。キリストの最後の晩餐を再現した人や、キリスト教やアーサー王伝説を題材にした劇を上演した人もいた。20 世紀のイギリスでもっとも有名なオカルト主義者のダイオン・フォーチュンもグラストンベリーに滞在しながらオカルト活動を行い、エッセイを出版した [Fortune 2000(1930)]。聖杯伝説に魅かれてやってきたキャサリン・モルトウッドはこの一帯の特徴的な地形が黄道十二星座の形をしていると発表し⁶⁵、ジョン・ポーウィーは聖杯を題材とした小説を書き [Powys 1975(1933)]、それぞれグラストンベリーの名声を高めた。また、「キリスト教の聖地」とされてきた地にキリスト教以前の宗教とのつながりを見出そうとする全国的な傾向を受けて、レイク・ヴィレッジは鉄器時代のペイガンの遺跡だと考えられたりもした [Hutton 2003 : 64]。さらに修道院の跡地が個人の所有からイングランド国教会の所有となり、1924 年からはイングランド国教会主催の巡礼も始まり、グラストンベリーは再びイギリス国家に支援されたキリスト教から目を向けられるようになった。このように、20 世紀初めのグラストンベリーには、芸術家や知識人を中心に小規模な文化サロンが花を咲かせていた。メンバーが徐々にグラストンベリーを離れたことで、文化サロン自体は不活発になっていたが、第二次世界大戦中にはフォーチュンらを中心として、ナチスの活動を妨害するためのエネルギーを送る活動が行われていた [Jenkins 2005]。

18 世紀末から 20 世紀初めにかけての展開をまとめると、国全体での過去への懐旧や神秘的な事柄への希求という風潮を受けて、イギリス国内では古くから人が暮らし、初期の

⁶⁵ トールー帯の地形を、羽根を広げチャリス・ウェルの水を飲もうとしている不死鳥に見立てた。そして、アーサー王伝説の中で、聖杯探索に成功する騎士パーシヴァルが不死鳥の性質を有していたといわれることから、聖杯と結びつけ、水の容器物ということで、水瓶座と結びついた ([Maltwood 1982(1929) : 53] 参照)。

キリスト教やケルト文化と結びつく伝説をもつグラストンベリーが脚光を浴びるようになっていった。当時のグラストンベリーは、イギリスの宗教世界の中では周縁的領域のままだったが、実際に町まで赴き、伝説をもとに芸術活動を行ったり、伝説を裏づける証拠を見つけ出そうとしたりした者もいた。そこから、伝説と結びつけたグラストンベリーへの新しい視点が見出され、それらの視点が同様の関心をもつ人々が集まるサロンのような場で共有され、広がっていったと考えられる。しかし、この流れは上流階級の人々を中心としたもので、大衆に広がっていたとはいえない。

第二次世界大戦後の流れを確認する前に、この地域の大衆の生活の変容について、簡単に触れておく。18世紀後半から灌漑が進んだことで、この地域では農業が発達し、19世紀後半から20世紀前半にかけては酪農と柳細工が盛んになっていた。また、19世紀の初頭から羊皮を加工して、靴やコートなどを製造する産業が始まり、20世紀半ばに最盛期を迎え、多くの雇用を産み出していた [Taylor 2010 : 50-51]。つまり、グラストンベリーは一部の都会出身の知識人には神秘的に捉えられていた一方で、一般の人々にとっては、定期市の日に周辺の町や村の人が集まる農業と羊皮加工業を中心とした市場町であった。

4-3 ヒッピー、トラベラー、オルタナティブ

続いて、20世紀後半のグラストンベリーがオルタナティブ・スピリチュアリティの町として有名になっていくプロセスを、サッチャー改革とイギリス製造業の不振という、イギリスという国を取り巻く社会の変容とともに考えていく。戦後のグラストンベリーは、1960年代後半から1970年代前半にかけてのヒッピーの到来期、1980年代前半の「ニューエイジ・トラベラー」(以下トラベラー⁶⁶)の到来期、1980年代以降のオルタナティブの移住期の3期に分けられる。

1957年に出版されたアーサー王に関するアッシュの書籍 [Ashe 1986(1957)] が、グラストンベリーをペイガンやケルト、および中世のキリスト教の中心地だったことをイギリス人に思い出させた。しかし、イギリス現代史の舞台の中央に登場するきっかけとなったのは、グラストンベリーのキリスト来訪に関する新聞記事に影響され [Hexham 1971 : 11]、1967年の夏に、アメリカで始まった対抗文化運動から生まれたヒッピーが5人やってきたことだった [Central Somerset Gazette 1968/9/22]。その中には貴族の娘も含まれていて、彼らの中に麻薬を使って逮捕された者がいた。その事件が広く報道されたことでグラストンベリーの存在や伝説が知られ、その後数年間にわたって、イギリスだけでなく、北米からもヒッピーが押し寄せることになった。なお、ヒッピーの来訪には、1970年と1971年に

⁶⁶ 定住しない人々のこと。もともとはジプシーを指していたが、現在ではキャンピングカーやバスなどの乗り物で生活する人の意味でも使われる。

近郊の村ピルトンで開かれた、野外ロック・フェスティバル⁶⁷も影響していたようである。

ヒッピーが、禅やヨーガ、インドや各地の先住民の文化に魅かれたのは、それらが「自己変容」と結びつく「意識変容」を可能にすると考えられていたからである（[島菌 1996 : 170 ; 吉永 2002 : 176-177 ; Wuthnow 1986 : 5] 参照）。その彼らがグラストンベリーにも魅かれたのは、20 世紀初頭に集まってきた人々と同様、アリマテアのヨセフやアーサー王、聖杯といった初期のキリスト教やケルトの伝説に魅力を感じたからだった⁶⁸。そして、20 世紀初頭に集まっていた人々による、町の地形や伝説に基づく、グラストンベリーの特別性の「再発見」に便乗する形で、新たな特別性の「再発見」を行っていく。たとえば、モルトウッドの黄道十二星座とこの地域一帯の地形の結びつきの主張の中で、グラストンベリーは水瓶座に相当するとされていたため、第 1 章 1-1 で述べた水瓶座の時代の到来というニューエイジと強く結びつけてイメージされるようになった。フォーチュンは先史時代にトールを行進する道があったと述べたが、トールの斜面の段丘が三次元の迷宮の形をしていると指摘する者も現れた。当時イギリスで広がっていた「レイライン」⁶⁹の考え方もグラストンベリーに応用された。最初期にやってきた 5 人のヒッピーの 1 人ジョン・ミシエルは、レイラインのうち、もっとも強力な聖マイケルラインと聖メアリーラインはグラストンベリーで交差しているため、グラストンベリーには目に見えない強力な「エネルギー」があると考えた [Michell 1969, 1972]。そのために、キリストやアリマテアのヨセフのような人物がやってきたり、修道院が繁栄したりしたなどと説明されるようになった。これらのグラストンベリーに対する新しい言説をまとめた本も出版された。

1952 年に町に移住してきた元獣医師の 80 代の男性は、筆者とのインタビューの中で第二次世界大戦直後の 1950 年代にも、秘教思想に関心をもつ人は暮らしていたし、夏にはそのような人が放浪者としてふらりと訪れるのを毎年 2~3 人は見かけていたと話す。そのため、地元民は非合理で非科学的な考え方をする人には慣れていて、風変わりな考え方自体は気にしなかったようだが、住宅街に無許可で野宿をし、働かずに夜中まで騒ぎ続けるという迷惑な行動には腹を立てた。

⁶⁷ 現在では、ヨーロッパ最大の野外ロック・フェスティバル、「グラストンベリー・フェスティバル」として知られる。公式ホームページによると、ピルトン村の農場主が 1970 年の夏に近隣で開催された類似の催し物に感化されて、同年に実施したのが始まり。ただし、アメリカのウッドストックで開かれたフェスティバルの影響も受けていたと推測される。ピルトンでの催し物は翌年も開催されるが、それ以降は準備の大変さもあり、1978 年に再開されるまで中止されていた。

⁶⁸ 当初は、初期キリスト教の関係で訪れる人も少なくなく、キリスト教を信条とするコミュニティも存在していた（[Frost 1989 ; Lockley 1976] 参照）。

⁶⁹ 古代の遺跡は、目に見えないエネルギーの直線上に作られたため、一直線で結ばれるという説の直線のこと。1921 年にアルフレッド・ワトキンス (Alfred Watkins) が提唱した。

さて、最盛期には数百人いたとされる、グラストンベリーのヒッピーだが、1977年頃には十数人しか滞在していなかった [Garrard 1989 : 5]。そもそも若者が中心だったヒッピーは、大学の夏休みを利用して訪れていた者も少なくなかった。そのうえ、多くのヒッピーは上流・中流階級出身で、帰る家も出迎えてくれる家族もあったので、気ままな生活に飽きて帰宅してしまったといわれている。筆者が 1960 年代後半以降の地元紙『セントラル・サマーセット・ガゼット』の記事を調べたかぎりでも、ヒッピーに関する記事がよく登場しているのは 1970 年代前半の夏期だけであり、ヒッピー問題は 1970 年代後半には収束していったと考えられる。

ところで当初のヒッピーは上流階級の子女が中心だったが、次第に中流階級の出身者も増えていったことが指摘されている [Clare 2009 : 21]。そう考えると、20 世紀初頭からヒッピー到来までの流れは、それまで上流階級の専売特許であったオカルトや秘教思想 (esotericism) が、ヒッピー運動と結びつきながら広がっていき、上流階級だけではなく、中流階級にまで広まった、つまり大衆化したと捉えることもできる。

話を戻そう。ヒッピー問題が収束した一方で、1980 年頃から町は別の問題に悩まされるようになる。トラベラー、つまりバスなどの乗り物で生活するホームレスが続々とやってきたのだ。その背景には、1979 年に政権を担ったマーガレット・サッチャーによる、強引な福祉予算削減などの経済改革の推進があった。改革の恩恵を受けて成功した人もいたが、職を失い、路頭に迷った人も沢山いた。特に若者にとって事態は深刻で、不景気のため就職できなかつたり、家賃の急激な高騰によりホームレスになったりしていた。そんな人々が、古いワゴンやキャンピングカーに乗って、都市を飛び出しさすらいの旅に出たのだ。1968 年に制定されたキャラバン・サイト法により、地方自治体が定住しない人々に対して一時的なキャンプ地を提供する義務を負ったことも、この傾向に拍車をかけた。

トラベラーがグラストンベリーに集まってきたのは、この町の外れのグリーンランズ農場が彼らのような行き場を失った人々を受け入れているという噂が口伝えで広がっていったからだった。ここは、スコットランドの貴族階級出身の女性が、1979 年に地元の農場主から買い取って始めた農場である。この人の娘から聞いた話によると、彼女は、キリスト教の博愛精神のもと、農作業に従事しながら無料で滞在できるコミュニンのような場所をつくらうとしたが、資金や衛生の面で運営はたちまち行き詰まった。そのうえ、1985 年 6 月にストーンヘンジでトラベラーと警察の対立が起こり、数百人ものトラベラーがこの農場に押し寄せてからは、とりわけ衛生状態が極度に悪化した。社会的弱者であるトラベラーに同情する住人がいないわけではなかった。しかし、滞在者の不衛生さと騒々しさに業を煮やし、直接追い出し行為に出る地元民も出てきて、最後には法的手段によって閉鎖された。その後、政府が若者向けの社会保障を削減し、増税したため、イギリス全土でトラベラーの数は減少した。

グリーンランズ農場に滞在していたトラベラーの大半は労働者階級の貧しい人々が主体で、グラストンベリーにやってきた理由も、伝説に魅了されたというより、受け入れてくれる場所があったからで、ヒッピーとは異なる。しかし、彼らの中にはオルタナティブ・スピリチュアリティ関係の事柄を実践していた人もいて、後に農場から町中に移り、スピリチュアリティ産業で成功した者もいる。そのため、グリーンランズ農場とトラベラーの事件も、今日のグラストンベリーでオルタナティブ・スピリチュアリティが盛んになった流れをつくった一因だといえる。

しかし、よりオルタナティブ・スピリチュアリティの隆盛に貢献したのは、オルタナティブと呼ばれる人々である。1980年代以降、トラベラーとしてではなく、中流階級出身で学歴も高い人々の移住が目立ち始める⁷⁰。後にオルタナティブと呼ばれるようになる彼らも、ヒッピーと同様、異文化や古い時代の神秘的な事柄に関心をもっていた。彼らは1960年代にヒッピーとしてやってきた人々によって「再発見」された姿にも触発されつつ、グラストンベリーを特別な場所だとみなし、スピリチュアルに生きようと、都会や故郷を離れてグラストンベリーにやってきたのである。

オルタナティブがやってきたこの時期、町では本章 1-2 で触れたように、地元産業である羊皮加工業の衰退が深刻になりつつあった。その理由としては不景気もあったが、合成繊維の普及や暖房設備の発達により防寒具としての羊皮製品自体の需要が全国的に減少していたこと、安価な労働力を求めて事業者が工場を海外に移転したことというイギリス全体の産業構造の転換を挙げることができる。1980年代の町は、失業者が増えて町の経済が悪化し、中心部には空き店舗が目立ち始めていた。そんなときにやってきた移住者たちは、個人での起業を促進する国の政策の後押しも受けながら、町の中心部でオルタナティブ・スピリチュアリティ関係のビジネスを始めた。図 2-9 からは、1980年代後半から急速に店舗の数が増え、それ以来、一貫して増加し続けていることがみてとれる。

最後に、この時期に活躍したオルタナティブの事例として、現在町のオルタナティブ・スピリチュアリティの発展に寄与したことでよく知られている、ロンドン出身の実業家バリー・テイラーと、そのビジネス・パートナーだったヘリーン・コッペヤンの活動をみてみよう。オランダ人のコッペヤンと医師の夫は、初期のキリスト教伝説に魅かれて、1977年グラストンベリーに移住してくる。夫妻は放置され、荒れ放題となっていた、町の中心部にあった建物を購入し、オルタナティブ・スピリチュアリティ関係の店をテナントとして入れた複合施設「グラストンベリー・エクスペリエンス」を開いた。しかしほどなくして、コッペヤンの夫は亡くなってしまい、コッペヤンの経営手腕の拙さから、グラストンベリー・エクスペリエンスの事業は破産の危機に陥った。この時期、ロンドンでビジネス

⁷⁰ 1977年に移住してきたオルタナティブの1人でもある、第3章で取り上げるキャシー・ジョーンズは、移住した当時は100人ほどしかオルタナティブはいなかったと話す。

を手がけていたテイラーは事業をやめて、スピリチュアルな生き方をすべきかどうか悩み、度々グラストンベリーを訪れていた。そんなとき偶然、苦境に陥っていたコッペヤンを紹介される。自分のビジネスの経験をスピリチュアリティと関係したことに生かせれば本望と思ったテイラーは、コッペヤンをビジネス・パートナーとして助けようと決意し、協力してグラストンベリー・エクスピリエンスを再生させた。

まもなくコッペヤンは亡くなるが、その後もテイラーは1988年に秘教思想関連書籍を集めたアヴァロン図書館、1991年にヒーリングセンターと、ワークショップを運営するアヴァロン大学⁷¹、2009年にオルタナティヴ・スピリチュアリティを求めて訪れる人を対象にした巡礼者受付センター⁷²などの組織をつくり、軌道に乗せていった。第3章以降で取り上げていく女神運動を始めたキャシー・ジョーンズは、これらの活動をテイラーと一時期ともにしていた人物である。

5、地元民からの視線

第4節では、グラストンベリーが現在のようなオルタナティヴ・スピリチュアリティの町として知られるまでの歴史的過程を確認してきた。ここからは、オルタナティヴ以外のグラストンベリー住人、とりわけ地元民の、移住者であるオルタナティヴに対する視線に目を向け、両者の関係性のあり方に目を向けたい（〔河西2013〕参照）。スピリチュアリティ産業への視線を中心に取り上げるのは、オルタナティヴと個人的な接点に乏しい地元民であっても、通りを歩いていて目につくスピリチュアリティ産業に対しては、何らかの印象を持っていたからである。

なお、現地の一般的な使用法に従い、「地元民（local）」とは、グラストンベリーで生まれ育った人々と幼少時に親に連れられてグラストンベリーにやってきた人々、およびこのような人々の配偶者を指している。現在、「地元民」とされる人の中には、両親や祖父母の世代に移住してきた人も多い。この100年で人口が倍増したこともあり、辿れないほど昔から先祖代々町に住み続けている人はほとんどいない。

5-1 買い物が不便

オルタナティヴと関わりなく暮らしている地元民にオルタナティヴについての意見を尋ねたとき、よく挙げられたのが、町中での買い物の不便さだった。ウィル（30代）とリサ（20代）は、2人の幼い子供とウィルの父親とともに、筆者の下宿先の隣家に暮らしていた夫妻である。エンジニアのウィルは、父親の仕事の関係で、生後すぐロンドンからグラ

⁷¹ 後、アヴァロン島協会に改名される。筆者の大家のヘイゼルが理事を務めていた団体。

⁷² 町には一般の観光案内所もある。これは、イギリス各地にあるが、行政によるものではなく、民間が経営している。

ストーンベリーに移ってきた。その後、両親は離婚し、彼は母親と周辺の村を転々としていたため、非常に厳密にいうと地元民ではないが、週末はいつも父親の住むグラストンベリーで過ごしていたので、地元民とみなされている。リサはイングランド南西部にある都市で生まれ育ち、9年前、結婚を機にグラストンベリーにやってきた。

ウィル：ここの店は観光客にはいいと思う。でも、住んでいる人には多分よくないよ。

リサ：そういうことに関わっていないかぎり。パワーストーンとか、魔女術の店とか。

(中略) でも観光客は好きなんだろうね。そのためにグラストンベリーに来るのだから。[2011年9月18日]

特にこの10年の増加が著しいと、苦々しく語るその表情からも、オルタナティブが営む非実用的な店が地元民の生活を不便にしたという不満が伝わってきた。現在、町の中にふつうの衣料品や本を扱う店は存在しないため、別の町に行く必要があり、子育て世代だけではなく、高齢者にも煩わしい。ウィルは次のようにも話す。

37年間ここに住んでいるのに、「君はオルタナティブではないから、グラストンベリーの出身ではないんだね」と言ってくる人がいる。中心部の人たちの半分よりは、僕のほうが長いこと住んでいるのにさ。なのに、ここ5~6年で来たあいつらがグラストンベリーとされるんだ。 [2011年9月18日]

この話からは、地元民の自分ではなく、外部の人が抱くグラストンベリーのイメージに合うスピリチュアリティ産業の従事者が、グラストンベリーらしいとみられていることを不愉快に感じていることがわかる。

スピリチュアリティ産業から恩恵を受けない地元民にとってスピリチュアリティ産業は、オルタナティブに対するマイナスのイメージを抱かせる結果を招いているといえる。しかし、オルタナティブが町の中心部で積極的に訪問者相手の商売をしていることで、オルタナティブの実践に何の関心もない地元民との緩衝役になっているとみることもしもできる。かつてヒッピーやトラベラーが問題視されたのは、住人が生活する住宅地の中で騒いでいた点によるところが大きい。スピリチュアリティ産業が中心部に常駐することで、中心部に訪問者を引き留めることができ、彼らが住宅地に拡散して騒ぐことを防いでいるとも考えられるのである。

5-2 経済的効果を歓迎

一方で、自らの経済的利点からオルタナティブを歓迎する声があることは確かである。

その代表的なのが、2-3 で触れたオルタナティブに会館を貸し出す教会の人々である。イングランド国教会、メソジスト、合同改革教会、カトリック教会は、椅子や机、トイレの他に、台所と調理器具を備えた会館を所有している。小さな十字架やキリスト像が置いてあることはあっても、礼拝空間とは異なり、宗教色が強い印象はそれほど受けない。これらの会館は、しばしばオルタナティブ・スピリチュアリティのイベントにも貸し出されている。このことについて、合同改革教会の女性牧師⁷³は、「私たちのことを憎まないでいて、きれいに使ってくれれば、誰にでも喜んで貸すわ」と話す。彼女は、貸し出しの手続きを通じて、普段話す機会の少ないオルタナティブと話をすることができ、オルタナティブの考え方への理解が深まってよいと考えていた。なお、オルタナティブに対して、教会が施設を貸してしまう1つの背景として、信徒数の減少により、施設を維持管理する費用が不足しがちで、何とかして捻出する必要があることを挙げておく。

経済的利益を得ているのは教会だけではなく、町に不動産を持つ人々も然りである。その1人、町議員を何期も務め、2004年には町長も務めたルイス氏（50代）の先祖は、かつてグラストンベリー修道院に食料を卸していた。1539年の修道院の閉鎖後、一族は町を離れたが、100年ほど前に彼の先祖にあたる人物は戻ってきた。ルイス氏は町の中心部でカフェを経営するなど、複数の収入源をもっている。町の変化については次のように捉えていた。

ここに来た人々がいわゆるニューエイジをもってきてくれたことは、町にとってとても良いことだった。一部の地元民は中心部でふつうの買い物ができないことを懸念しているけど、町の規模や〔隣町〕ストリートに大きなショッピング・センターがあることを考えると、そういう店はグラストンベリーでは経営が成り立たないんだ。

[2006年6月3日]

彼は「ニューエイジ産業」をもたらしたオルタナティブをまさに町の救世主と捉え、「ニューエイジ産業」は町が生き残る唯一の道だと考えている⁷⁴。

両親から受け継いだレストランを営んでいるロイド氏（70代）も町議員で、2011年には町長を務めていた。彼の一族は少なくとも200年以上はこの町に暮らしている。

⁷³ 彼女はこの教会の有給の牧師ではなく、聖職者の資格はもつが、無給で働いている60代の地元民の主婦で、他の教会の面倒も見なくてはならない有給の牧師に代わって、建物の維持管理など、雑務をこなしている。

⁷⁴ ルイス氏によると、1990年代、議員の一部はグラストンベリーを自然豊かな田舎町として売り出そうとしたが、他の田舎町との差異化戦略に失敗し、結局オルタナティブを誘致はしないが、容認するという姿勢に変わった。実際、今では議会が管理する町の公民館をオルタナティブ・スピリチュアリティのイベントに貸し出すようにもなっていて、議会の姿勢も軟化している。

グラストンベリーはサマーセット州で中心部の空き店舗の割合が一番低いんだ。そのことを誇りに思っている。中心部に活気があるのは、どのコミュニティにもいいことだ。外から人が来たとき、〔不動産の〕売買とか、一般的な町の環境にプラスになるからね。 [2011年9月8日]

彼もルイス氏と同様、オルタナティブが町に活気をもたらしていると考えていることがわかる。同時に見かけの活気だけに注意を払っていて、実際に経済的利益が出ているかどうかは気にしていない様子も窺える。

スミス氏（60代）の一族は6世代前から町に暮らしている。彼も22歳のときから町議員を務め、町長も何度か経験している。両親から受け継いだ農場だけでなく、ミネラルウォーターの会社など複数の会社を営んでいる。そんな彼の、オルタナティブへの好意の理由はもう少し利己的である。

〔こういう店は〕自分には何の意味もない。でも観光客がとても気に入っていることは理解している。それが他の町との違いを際立たせている。今では町の他の店も活性化している。（中略）観光客からの収入があれば、僕らも売り上げが伸ばせるんだ。

[2011年9月26日]

彼は、オルタナティブが営む店のおかげで、ペットボトルの水を販売している自分も含め、町の商売人が全体的に利益を得られる点を評価する。

このように、つねにビジネス・チャンスを探している自営業者や不動産の所有者の中にはオルタナティブを町の経済に有用な存在とみなしている人も確かに存在する。スミス氏だけではなく、カフェやレストランを営んでいるルイス氏やロイド氏もオルタナティブ・スピリチュアリティ目当ての訪問者から利益を得ている。ロイド氏の場合、中心部に所有する不動産をパワーストーンの店に貸し出しており、家賃収入も得ている。

グラストンベリーはユニークな観光のおかげで町のハイ・ストリートの空き店舗率が3%と全国平均の20%よりずっと低く、活気を保っているといわれる一方で [Central Somerset Gazette 2010/2/18]、観光業による収入に頼っている店は20%に満たないという報告もある [GCDT 2005]。つまり、中心部はにぎやかでも、それが経済的な利益にはつながっていないということである。とりわけ2008年秋に始まった経済危機以降、訪問者相手の商売が振るわず、店の売り上げは落ちているという噂を筆者も何度か耳にした。オルタナティブ・スピリチュアリティの店を営むある店主は、収入が減少したため税金を免除してもらったと話し、低所得者用の給付金を受給している同業者もいると教えてくれた。つまり、

町に経済的恩恵をもたらすオルタナティブという言説は、少なくとも 2008 年以降は事実とは乖離している可能性も高い。

それでも、オルタナティブ・スピリチュアリティをターゲットにやってくる訪問者から何らかの形で利益を得られる地元民は、訪問者を呼び込む産業をもたらした、オルタナティブ移住者を好意的に捉えているといえる。3 氏の歓迎の理由が、町議員や町長⁷⁵という町の経済を考えなくてはならない指導的立場にあるからだけではないことは、ケリー氏（60 代）の姿勢から裏づけられる。彼はこの 3 氏と同様に、1999 年以来、町議員を務め、町長経験者である。ケリー氏の父親はサマーセット州のある町の小作農の家に生まれ、成人後も別の町を経て、グラストンベリーの隣町のストリートで小作農として働き始める。しかしすぐにグラストンベリーを拠点とするトラック会社に転職したため、一家でグラストンベリーに移った。ケリー氏自身はグラストンベリーで育ち、定年退職まで地元の材木会社や靴会社に勤務していた。つまり、先の 3 氏とは異なり、ケリー氏はオルタナティブから経済効果を期待できるような資産を何も持っていない。筆者がインタビューの中で中心部の店について尋ねたとき、3 氏のように町に与える経済効果を熱く語ることはなく、「こういう店にはじきに慣れていったよ」[2011 年 9 月 9 日]と述べるに留まった。

ただし、歓迎している 3 氏でも、オルタナティブ・スピリチュアリティ関係のビジネスに直接関わったり、積極的に支援したりはしていない。

5-3 所与のものとして受容

グラストンベリーの町でスピリチュアリティ産業が盛んになってから、すでに 30 年近く経とうとしている。そのため、その繁栄をみながら育った世代からは、自分の故郷の特色として、積極的に受け入れている人も出てきている。

ジム（30 代）の祖父や父親は、かつては専業農家で、父方の家系はグラストンベリー周辺に暮らして少なくとも 300 年になる。彼はロンドンの大学を卒業したが、今は町の図書館に勤務する傍ら、地元情報誌の編集もしている。1980 年代に義務教育を受けた彼は、クラスにトラベラーやオルタナティブの家庭から来ている生徒がいたのは覚えているが、子供だったので気にしたことはなかった。両親がオープンな考え方の持ち主だったため、トラベラーやオルタナティブに対して、特に反感や違和感を持ったこともなかった。

筆者が町の店の変化についての感想を尋ねたところ、次のように答えた。

〔店は〕全然気にならないね。むしろ考え方とか、人々が世界を経験する方法とかにとっても興味がある。こういう店は、そういう事柄に洞察を与えてくれる。実用品を買

⁷⁵ イギリスの町長は、選挙で選ばれた議員の中から、議員歴などを考慮して決められる。つまり、町長は必ず町議員なのである。

うためには、〔隣町の〕ストリートに行かなくてはならないけどあまり気にならない。

[2011年9月22日]

筆者が「基本的には店とか、オルタナティブな観光客とかは気にしないということですか？」と尋ねると、「そういうこと、いいと思うよ！」と明るく答えた。彼は買い物の不便さや経済的利益というより、スピリチュアリティ関係の店や施設や、それを営む人々が提示してくれる考え方に興味がある様子だった。それは、「どこかに行ったとき、『グラストンベリーの出身です』って言うと、人々は何らかの印象をもっているから、会話のとっかかりになって嬉しいよ。(中略) 他の人にとって何の意味もないところから来るなんて、ねえ・・・」と言うように、自分の故郷が変わった町として有名であることを誇らしく思っているところにも現れているといえよう。子供の頃から、特に偏見もなく、オルタナティブ・スピリチュアリティを身近に感じながら成長してきたジムの世代の若者にとって、オルタナティブ・スピリチュアリティは町の特色そのものであり、所与のものとして受け取っていると考えられる。

5-4 オルタナティブからみた地元民

それではオルタナティブは、地元民との付き合いをどのように考えているのだろうか。ネオペイガニズムのグッズの店を経営する男性(50代)は、自らの商売について、次のように語る。

「魔女術」〔店名〕って看板を出していても、大きな問題は起こっていない。グラストンベリー以外の場所では起こっているかもしれないけど。(中略) 町のほうだって、僕たちみたいな商売を必要としている。僕たちは町のためになることをしているんだ。

[2006年8月18日]

彼はルイス氏やロイド氏と同様の見解をもっている。そして、自分たちのおかげで町の経済が成り立っているという自負が見え隠れする。ただし、地元民が客として店にやってくることはないと言う。

そこで、オルタナティブと地元民の近所付き合いの様子をみてみよう。ヘイゼルと先ほど取り上げた、隣人のウィルとリサの一家との関係は良好で、彼女はイースターやクリスマスの時期には2人の息子にお菓子をプレゼントしていた。しかし、自分の誕生日パーティなど、プライベートな集まりに呼ぶことはなかった。その理由をヘイゼルは次のように語った。

2人は、こういう人たちではないから。他に来る人たち、私のグラストンベリーの友達は、その・・・、ちょっと変わっているから、[ウィルとリサには]居心地が悪いと思うの。 [2010年5月29日]

第3節で触れたように、地元民とオルタナティブの価値観やライフスタイルは異なる。ヘイゼルはオルタナティブと地元民を接触させないことで、その違いが表面化することを意図的に避けている。

町のあるセンターでマッサージ師もしている、B&Bの経営者である40代の女性の言葉は、良好だが深くない、地元民とオルタナティブの関係を端的に表していると思う。

うちの隣の夫妻は8時から6時まで仕事に出かけているから、滅多に会わない。会ったとしても挨拶するだけ。(中略) お茶に招いてもいいんだけど、平日働いているから、週末は彼ら自身の時間でしょう。私と話すような時間はないのよ。(中略) [自宅と隣家との境目の壁を指しながら、] こんな風に制限を設けて過ごしている。

[2011年9月19日]

この女性やヘイズルの発言からは、隣人であっても友達付き合いにまで発展するような親しい交流はしていないし、するつもりもないと考えている様子が窺えた。

5-5 地元民との共存関係

本節の事例からは、地元民もオルタナティブも、積極的に関係を結ぼうとはせず、距離をおいて接している様子がみえてくる。ここでは、このように地元民とオルタナティブが一線を画して暮らしている背景について分析する。その後、スピリチュアリティ産業に親近感をもつ地元民の出現について考える。

まず、地元民とオルタナティブの関係である。スピリチュアリティ産業を快く思わない地元民でも、事業者であるオルタナティブが地元民に必要な店を出すなど、自分たちに歩み寄ってくれることを期待してはいないが、かつてのトラベラーのように追い出そうともしない。筆者はインタビューの中で、ウィルに故郷の町がオルタナティブに占拠されていることをどう思うか尋ねた。すると彼は、「そんなに気にはならないよ」と答えた。その言葉を引き継ぐように妻のリサは、「その理由は、あなたに押しつけられないからじゃない？」と尋ね、ウィルは、「そうだね、僕は自分の人生を生きている。僕の人生は変わっていない。何の関心もないんだ、それだけ」と補足した。そして夫妻は用事がないので、町の中心部に行くことは滅多にないと言う。さらに、隣人のオルタナティブであるヘイゼルに好感をもっている、近所付き合い以上の付き合いはしない。彼らは、スピリチュアリティ産業、

ひいてはそこに携わるオルタナティヴとは、精神的、物理的に距離をおいて暮らしている。これは、オルタナティヴとの共存のための1つの戦略だともいえる。

また、オルタナティヴを歓迎している地元民でも、町に暮らすオルタナティヴと協力して、スピリチュアリティ産業の町として売り出そうとする気配はみられない。そこには、オルタナティヴの特性が関係していると思われる。1960年代の対抗文化運動の価値観を引き継ぐオルタナティヴたちは、政府や行政といった権威主義的な香りがするものを好まない。そのため、もし町の行政側がスピリチュアリティ産業を積極的に支援すれば、権力に取り込まれたとみなされ、「オルタナティヴ・スピリチュアリティの町」としてのグラストンベリーへの価値は下がり、おそらく訪れる訪問者は減るだろう。そのため、積極的な支援を控えることも、スピリチュアリティ産業を歓迎する地元民の戦略だといえる。

最後に、スピリチュアリティ産業に親近感をもち、実践する地元民の存在に触れておく。対立することもなく、積極的に協力することもしない。オルタナティヴと地元民のそんな奇妙な共存関係を揺るがす可能性をもつのが、スピリチュアリティ産業を町の特色として内面化しているジムのような世代である。また、数はとても少ないが、スピリチュアリティ産業に直接関わる地元民も出てきている。このような地元民が増えていけば、グラストンベリーにおける地元民とオルタナティヴの共存関係は新たな局面を迎えると思われる。

6、オルタナティヴ・スピリチュアリティの「聖地」

最後に、イングランドの片田舎のグラストンベリーで、オルタナティヴ・スピリチュアリティが根づいた理由を、第4節と第5節の記述を中心に振り返りつつ、イギリス回帰の中でのグラストンベリーの「再発見」とイギリスの産業構造の転換という視点から、もう一度考える。そして、最後にオルタナティヴ・スピリチュアリティの興隆と移民の増加と関連づけて、理解することを試みる。

ロマン主義の時代や、ヒッピーやオルタナティヴの時代という、イギリスで異文化への関心が高まっていた時期には、自国の古い文化が再評価されてきたと述べた。これは自国の古い文化が海外の文化と同様に「異文化」とみなされたといえるが、自国文化への回帰とみることもできよう。ケルト文化や初期キリスト教との結びつきが深いグラストンベリーという場所で、近年オルタナティヴ・スピリチュアリティが盛んになったことは、「イギリス文化」再評価の1つの現れとして捉えられる。逆に、伝説や地形に基づき、過去に繰り返し繰り返し特別な場所とされて、繁栄してきたグラストンベリーにとっては、現在のオルタナティヴ・スピリチュアリティの隆盛もその反復の波の1つだといえる。

その一方で、オルタナティヴ・スピリチュアリティが町の風物になることを下支えしたのは、サッチャーの急進的な改革や製造業の衰退といった、社会全体の政治経済の変動だった。この時期にオルタナティヴ・スピリチュアリティに関する事柄が町で盛んになった

のは、オルタナティブがグラストンベリーの産業構造の転換に対応し、政府の支援策を上手に活用しながら、町に農業や羊皮加工業に代わる、新しいビジネスを提供できたからだといえる。つまり、経済的な基盤を構築しやすかったこと、町の有力者から新たな産業の担い手として歓迎されたことから、この時期、オルタナティブ・スピリチュアリティの担い手の定住が促進された。さらに、給付金の受給のしやすさという、イギリス特有の事情もこの傾向に拍車をかけた。こうして、今日のような姿になっていったと考えられる。

続いて、第二次世界大戦後のイギリスでオルタナティブ・スピリチュアリティが盛んになっていった背景を、グラストンベリーに留まらず、より広くイギリス社会という見地から捉えてみよう。ここでは戦後のイギリス社会を襲った大変動の1つ、海外からの移民の増加と関連させて分析する。

島国といえども、イギリスへの移住者は戦前からいた。しかし、その多くはヨーロッパ域内や英語圏の北米およびオーストラリアやニュージーランドの出身者、つまりキリスト教を信じるヨーロッパ系の人々であった。それに対して、第二次世界大戦後の移民の特徴は、南アジアやカリブ海諸国など、かつてのイギリスの植民地からの移住者が激増した点にある。これは、肌の色や外見だけでなく、宗教や生活習慣が大きく異なる人々の流入を意味していた。

イギリスでは今、文化の多様性の大切さと素晴らしさが、国家レベルでも日常会話のレベルでも熱心に説かれている。学校教育の中で様々な宗教について丁寧に教えるなど、表向きには移民の「襲来」に真摯に対応し、イギリス社会に受け入れようとしている。その一方で、移民がもたらした異文化の存在が、イギリスにおけるイギリス文化の優位性を脅かしていると危機感をあらわにする声もちらほら聞こえてくる。この歓待と危惧という異文化への相異なる2つの対応の仕方は、オルタナティブ・スピリチュアリティの中にも異なる2つの姿勢として表れている。

1つ目の受け入れの姿勢は、異文化の「家畜化」として表れている。オルタナティブ・スピリチュアリティの文脈で実践される仏教やスーフィといった異文化をイギリスの人々が主体的に実践していくことは、他者に属していたはずの文化を自文化の中に取り込み、自分たちに適した形に変容させることであり、そのようにして異文化をコントロールしていく「飼いならし」の過程なのである。さらに、現地の聖職者を招いたり、原語で祈りの文句を唱えたりしているが、これはオリジナルの文化との連続性を主張することで、アレンジしたことを隠蔽し、正統性を確立しているといえる。つまり、接点が少なかった移民の文化を、自分たちにわかりやすい形で理解し、提示することで、異文化をイギリスの文脈に埋め込もうと試みているのである。

2つ目の対決的な姿勢は、イギリスの「土着」文化の再確認である。宗教や衣装、言語や食事など、五感に訴えかける異者性を全身で喚起させる移民に、イギリス人は圧倒され

ている。彼らに対抗し、自分たちの文化を主張していくには、全世界に広がってしまった英語やエール、背広や聖公会⁷⁶ではもはや不可能である。オルタナティブ・スピリチュアリティの中でも、グラストンベリーでとりわけ盛んなネオペイガニズムは、このような移民文化に対するイギリスのオリジナルの文化を提示する役割を期待されているのだ。

これら2つの姿勢は、押し寄せる移民に対して、自分たちイギリス人の優位性を再確認する、ある種の防衛的な動きだと理解することもできる。しかし、オルタナティブ・スピリチュアリティに関心を寄せる移民が少ないという事実は、これらの実践が移民への「威嚇」にはならず、イギリス人内部での自己満足に終わっていることを意味しているといえよう。

第2章では、オルタナティブ・スピリチュアリティを、ある1つの地域社会の中で理解することを試みた。そのために、グラストンベリーという町がオルタナティブ・スピリチュアリティの「聖地」とみなされるようになった背景を探った。そして、イギリスの古い文化への関心の高まりの中でのグラストンベリーの「再発見」と、イギリス国内における政治や経済の変化との連動が背景にあったことを指摘した。そして、本節において、イギリス国内の移民の増加と関連づけて理解しようとした。第3章以降では、グラストンベリーでみられるオルタナティブ・スピリチュアリティの1つで、キャシー・ジョーンズという女性が始めた女神運動に焦点を当てていこう。

⁷⁶ イングランド以外でのイングランド国教会の呼称。原語は the Anglican Church、または Episcopal Church。

第3章 アヴァロンの女神たち

2008年の夏のある日、イギリスには珍しいほどの汗ばむ陽気の中、私はある家を目指し、急な坂道を上っていた。やっとのことでインタビューを取りつけた、ジョーンズに会うためである。すでに顔見知りではあったが、多忙な彼女に本格的なインタビューをする機会にはなかなか恵まれずにいた。ところがこの1ヶ月ほど前、ハンガリーの女神フェスティバルで再会したときに英語を話す人が少なかったせいもあり、親しく話すことができ、インタビューをお願いすることができたのだった。

自宅に着き、靴を脱いで上がる。ジョーンズは、彼女の右腕ともいえるホリーと1週間後に迫るグラストンベリー女神カンファレンスの準備をしていた。私はといえば、意外にも彼女の自宅が「女神っぽく」も「スピリチュアルっぽく」もないことに拍子抜けしていた。グラストンベリーでオルタナティヴ・スピリチュアリティに携わる人の家は、第2章3-1で紹介した私の下宿先のように、スピリチュアル・グッズで溢れかえっていることも少なくない。そのため、女神運動を始めたような人だから、ジョーンズの家もそうだとばかり想像していたのだ。しかし、そこにあったのはインド風の女神を中心に飾ったシンプルな祭壇が台所に1つと、女神の絵がいくつか飾られ、自分の創った女神体系に沿って配置された祭壇が居間に1つだけだった。

準備が一段落すると、ホリーは帰っていった。「伝えておいたように、私は忙しいから、1時間しか時間は取れないわよ」と念を押され、居間に通される。ジョーンズはカンファレンスで使うというリボンを切りながらだが、インタビューを受けてくれた。メモは取ったが、レコーダーは使用しなかった。

祝祭やカンファレンスで人前に立つ彼女は、いつも自信に満ち溢れ、ユーモラスで、世間に挑戦しているように見えていた。けれど面と向かって話してみると、恐ろしくなるほど静かな佇まいで、どこか遠い別の世界から話しかけられているような雰囲気漂わせていた。インタビューの終わりがけ、ジョーンズは研究のことなどをいくつか質問してきたのだが、不意に「グラストンベリーのどこが一番好き？ 昔ここにいたと感ずることある？」と尋ねた。私は深く考えず、「一番好きなのはトール！ ここにいたかどうかは、よくわかんないな」と言うと、ジョーンズはふふっと笑って、「人？ エネルギー？ 風景？」と尋ね直す。質問の意図はよくわからなかったが、「人！」と無邪気に答えると、彼女はまだまだだねとでも言いたげに、またふふっと笑って、話題を変えてしまった。帰宅してフィールドノートを書きながら、この不思議な笑いを思い返したとき、私はなぜか少し怖くなった。

第3章から第6章では、ジョーンズが始めた「グラストンベリー女神運動」を、オルタナティブ・スピリチュアリティの1つである女神運動の一事例として取り上げる。第3章では、この女神運動がどのような文脈から生成したのかを、女神運動全体の流れとグラストンベリーという地域社会に位置づけて明らかにしていく。この作業を通して、伝統宗教や主流社会への「抵抗」とは異なる側面からの理解を目指す。以下では、初めに女神運動全体の概要を説明する。続いて、グラストンベリーで女神運動を始めたジョーンズのライフストーリーを辿る。その後に、女神の体系および男性やキリスト教徒との関係を探り、この女神運動の方向性を明らかにする。最後に、女神運動全体とグラストンベリーの文脈で捉えることを試みる。

なお、ジョーンズが始めた女神運動に特別な名称はない。現在「グラストンベリー女神神殿 (Glastonbury Goddess Temple、以下女神神殿 (NPO))」として NPO 団体に登録されているのだが、筆者がこの運動を「グラストンベリー女神運動」と呼ぶ理由は3つある。1つ目は、施設である「女神神殿」と区別がつきにくくなるからである。2つ目は、この運動を「女神神殿」と呼ぶ人がいないためである。一部の外部の人からは、彼女の名前を冠して「キャシーの女神」と呼ばれているが、一般的には「女神 (Goddess)」と呼ばれる。グラストンベリーを長年調査している Bowman も、論文の中では「グラストンベリーの女神のスピリチュアリティ」などと記していて、「女神神殿」とは呼ばない。3つ目は、実際の運営者はほとんど同じ人々なのに、対外的には、NPO 団体の「女神神殿」と、本稿の冒頭で取り上げたイベントとしての「グラストンベリー女神カンファレンス (Glastonbury Goddess Conference、以下女神カンファレンス)」が別物と扱われていて、この運動を「女神神殿 (NPO)」としてしまうと、女神カンファレンスを含められなくなる。そのため、「グラストンベリー女神運動」と呼ぶ。

また、“Goddess Temple”を「女神寺院」ではなく、「女神神殿」という訳を用いている理由だが、ここを訪れた複数の日本人から「寺院」より「神殿」と訳すほうが雰囲気合っているという意見、日本語の「寺院」という言葉には仏教のイメージも強く「神殿」のほうがヨーロッパの信仰の空間というイメージに合っているという意見をいただき、筆者もこれらの意見に賛成する立場であるため、あえて「女神神殿」と訳した。

1、魔女から女神へ

ここまで、何度か触れてきた「女神運動」について、その発展の経緯について、ネオペイガニズム運動、フェミニスト神学と女神学、そしてフェミニスト魔女術という3点からみていき、その捉え方についての筆者の立場を示す。その後に、アメリカとは少し異なる展開をみせたイギリスの展開について触れる。

1-1 ネオペイガニズムとフェミニズムの出会いと別れ

女神運動の実践者は、アメリカに 50 万人、イギリスにも 11～12 万人ほどいると推定されている [Griffin 2000 : 14]。しかし、オルタナティブ・スピリチュアリティの実践によくあるように、実践者の人数は定かではない。

女神運動を生んだ流れの 1 つは、1950 年代にイギリスで興ったネオペイガニズムである。ラテン語の「パガヌス（田舎者）」に由来する「ペイガン」はもともと、キリスト教、ユダヤ教、イスラーム教以外の、土着の信仰を捨てないヨーロッパの「異教徒」を指す言葉だった。1951 年、イングランドで魔女術令が廃止されたことをきっかけに⁷⁷、ヨーロッパ土着の信仰としてのペイガニズムの復興運動、すなわちネオペイガニズムが盛んになっていく。ケルト文化とのつながりから、すでに始まっていたドルイド教の復興運動⁷⁸が活性化したのに加え [Harvey 1997 : 19]、魔女術の復興運動も始まった。魔女術では、ジェラルド・ガードナー（1884～1964）が、魔女とされる老女から集めた民俗学的な知識と自らのオカルト趣味を融合させて創り出したウィッカが、今日でも主流になっている。

ネオペイガニズムは復興運動を謳っているが、純粋な復興運動ではなく、オカルト主義や世界各地の先住民の文化を取り入れた折衷的なものである。自然崇拝と多神教を特徴とするヨーロッパ土着の信仰は、キリスト教の迫害を受けて失われたが、世界各地の先住民文化と特徴が共通しているので、それらを参考にしながら復興できると考えたのだ。なお、ネオペイガンを自称していても下位区分のアイデンティティをもたず、単にネオペイガンと名乗る人もいる。ただし、実践者の多くは過去からのつながりを主張するため、「ネオペイガン」ではなく、「ペイガン」と名乗ることが多い。また、(ネオ) ペイガニズムとは一神教以外のすべての宗教的实践を指すと考える人もいる。しかし本稿では、ヨーロッパ土着の信仰、もしくはその復興運動を指している。

ネオペイガニズムの基本的な特徴は、ヨーロッパにおける自然界の四要素（地水火風）の崇拝と、ユダヤ教やキリスト教のように（男）神（God）のみではなく、（男）神と女神（Goddess）の両方を崇拝することである。また、魔術は意識の変容として捉えられている [Luhrmann 1989 ; Greenwood 2000a]。

1960～70 年代、オカルトブームに乗って、ネオペイガニズム、とりわけ魔女術は、書物やガードナーの弟子たちを通じて、アメリカにもたらされた。ヨーロッパ土着の信仰という点を、ヨーロッパ系アメリカ人が自らのルーツ探しとして捉えたことも、アメリカでの実践者増加の背景にあった [アドラー 2003(1979) : 282]。

⁷⁷ 魔女術令は長い間施行されていなかったが、1944 年にある女性の霊能的な預言行為に適用され、彼女が投獄されたことで、この法律の存在が明るみに出て、廃止されるに至った。

⁷⁸ 文化的な文脈でのドルイドは、特にアイルランドやウェールズでケルト文化復興の担い手として認識されていて、ドルイドを名乗るキリスト教徒もいた [中央大学人文学研究所 2001 ; 原 2007]。

ネオペイガニズムが到来した頃、北米では第二波フェミニズムが盛り上がりを見せていた。ユダヤ教やキリスト教が男性中心的で女性を軽視していると抵抗していたフェミニストにとって、魔女は「女性の力の称賛」[Gordon 1995 : 9] とか「ヨーロッパ文化の遺産における、自立した女性のパワーの数少ないイメージ」[Hutton 1999 : 341] というような、力強い女性の象徴に映った。1968年、ニューヨークで WITCH と名乗る女性の集団が結成された。彼女たちの実践は、一般のネオペイガニズムのように宗教的な実践ではなく、父権的な社会に抵抗する政治運動だった。お伽話に出てくるような良い魔女ではなく、「女性のパワー、知識、独立性、殉教者のシンボル」[Eller 2000a : 35] として、魔女を用いたのである。

WITCH は翌年には解散するが、とりわけ魔女狩りの「殉教者」としての象徴が「父権社会の犠牲者としての女性」と結びつけられて、1970年代になって、再びフェミニズムの文脈で再び登場する。WITCH の活動から生まれた流れは、フェミニストの手にかかることで、思想的な深化を遂げていくことになる。

その代表格は、カトリック神学者で、後に教会から離脱したメアリー・ディレイである ([Daly 1978] 参照)。彼女は、魔女裁判はヨーロッパの古い宗教と女性の抑圧だったとして、キリスト教の女性嫌悪の体質を真正面から批判した。ディレイに始まるユダヤ教やキリスト教に対する神学者たちの挑戦は、やがて改革派と革命派という二手に分かれていく [Weaver 1989]。改革派は、聖書を解釈し直し、ユダヤ教やキリスト教の内部からフェミニズムを推進しようとし、フェミニスト神学と呼ばれる流れを創っていく。

一方、WITCH の流れを継承したともいえる革命派とは、教会内部からのフェミニズムの展開に限界を感じて、ネオペイガニズムに接近し、女神学と呼ばれる流れを創っていく。女神学における女神は、崇拝の対象というより、「実践なきシンボル」[Eller 2000a : 35] としての「自立した女性」というロールモデルと理解したほうがイメージに近い。女神の象徴の意義について、たとえばクライスト [1982(1979)] は次の4点を挙げている。

- 1、 女性の力を、恩恵を与える自立した力として認める
- 2、 女のからだ、その中に表現されるライフ・サイクルを肯定する
- 3、 女神を中心とした儀式の中で、意志が積極的に評価されている
- 4、 女性の連帯と遺産を再評価する

この4点をクライストの説明に基づいて補足する。1については、ユダヤ教やキリスト教では、救い主が神やイエス・キリストのように男性のイメージで表されているため、女性は男性に頼らないと力がない、救われないと感じてしまう。それに対して、女神は女性の力を肯定してくれると思わせる。2は、月経、出産、閉経といった女性の身体に関わる

ことは、ユダヤ・キリスト教文化圏ではタブー視され、女性の老いを否定するような文化的風潮がある。それに対し、出産している女神、老いた女神のイメージを打ち出すことで、出産や老いの祝福を目指すのである。3は1とも重なるが、女性は積極的に自分の意志をもつことを奨励されてこなかった。しかし、女神をエネルギーと捉え、儀式の中で歌や踊りを通じてこのエネルギーを高めることで、女性は自分の意志を達成できるとされる。4に関しては、欧米のような父権的な文化や宗教の中では、たとえば、父と息子、母と息子の関係は祝福されるが、女性どうしである母と娘の関係はほとんど描かれてこなかった。そのため、女性どうしの結びつきを肯定することが、父権制への抵抗につながるとクライストは考えたのである。

このように、キリスト教を離れた形で女神を求める試みは、ユング心理学、エコロジー運動、反核運動など様々な領域と絡まりあいながら、複雑に発展していくことになる。これまで陽が当たることのなかった、女性の精神面を評価する流れは、アカデミズムに留まらず、より広い社会一般の中で、草の根的に共感を呼んでいった。

ネオペイガニズムから借用した女神を力強い女性のロールモデルとして捉える人がいる一方で、思想に留まらず、宗教的实践として魔女術の儀礼⁷⁹を取り入れたのが「フェミニスト魔女」と呼ばれる人々である。彼女たちは「「ふつう」の女性の異常なモデルとしての魔女や女神という名称から、女性パワーのイメージを構成した」[Rountree 2004 : 3]。1980年代、このようなフェミニズムと魔女術を合わせた新しい宗教的实践は、フェミニスト魔女術と呼ばれるようになり、共感をもつ人が増えていく。女神運動に関わる人のすべてがフェミニスト魔女だったわけではないし、フェミニズムと関わりのない魔女もいたものの、女神運動と魔女術は融合している部分も少なくなく、「女神・魔女運動」と総称されるようになる。現在でも女神運動と魔女術が混同されることがあるが、それはアメリカでは両者の関係が近く、積極的に区別されてこなかったからだと思われる。

しかしながら、フェミニスト魔女術は1970年代後半から、その起源であるフェミニズムからもネオペイガニズムからも批判されるようになる[Neitz 1993 : 366]。また、ここまで述べてきたような、女性に特有の精神面を評価していこうとする一連の流れそのものも、フェミニズムやネオペイガニズム以外との結びつきをより深めていく。そのため、1980年代後半からは、フェミニスト魔女術も含めた一連の流れは、単に「女神」や「女神のスピリチュアリティ」と総称されるようになる[Hutton 1999 : 355]。本稿では女神学以降の一連の流れを女神運動と総称し、社会運動であるフェミニズムと宗教的实践である魔女術、もしくはネオペイガニズムのせめぎあい、ユング心理学、環境運動、考古学などが作用

⁷⁹ ケルト暦に基づく8つの季節の祝祭、新月と満月の夜の祝祭、結婚式、命名式など。儀式の内容は、4つの方角と要素の呼び出し、ヴィジュアライゼーション、パワーの集積と放出、詠唱、歌、踊りなど。ネオペイガニズムとほとんど同じだが、一部のネオペイガンのように裸で執り行うことは稀である。

して、生み出された1つの流れとみている。

つまり女神運動は、当初社会改革を目指すフェミニズムの側面が大きく、スティグマのある「魔女」をあえて名乗って社会に衝撃を与えることを目指していた。しかし、次第にそのような社会運動の側面より、儀式を通しての意識変容といった宗教的な側面に魅かれる人が増えていき、思想を担ってきた「女神」が前面に出てくるようになる。1990年代にニュージーランドのフェミニスト魔女を調査した Rountree [2004 : 117-119] は、彼女たちが社会の改革に興味がないため、魔女と名乗りたがらなくなっていることを指摘している。女神運動が始まった1960年代と現在を比べると、女性の社会的地位は向上し、性差別も改善されたことが背景にはあると考えられる。フェミニズムという社会運動の象徴である魔女は、オルタナティブ・スピリチュアリティという宗教現象の象徴である女神にセンターのポジションを譲ったのである。

1-2 イギリスでの展開

さて、ここまでアメリカでの女神運動の動向を中心にみてきたが、ネオペイガニズム復興の発祥地であるイギリスでは異なる展開をみせた。フェミニストもネオペイガンも、1970年代に入ってきた女神運動を快く思わず、受け入れなかったのである。

先述した魔女術令の廃止後、イギリスではネオペイガニズムが盛んになった。しかし、対抗文化運動の流れから左翼的だったアメリカとは異なり、1960年代のイングランドのネオペイガンの大半は大学教育を受けておらず、右翼傾向が強かった[Hutton 1999:360-364]。彼らにとって、左翼的で、高等教育を受けたラディカルなエリートたちが始めた女神運動は、魔女を名乗り女神を崇拝するという共通項があっても、全くの別物で受け入れられるものではなかった。つまり、アメリカとは異なり、フェミニストを名乗るネオペイガンが出てくることはなかった [Long 1994 : 23]。

イギリスでも第二波フェミニズムは1970年頃から始まるが、アメリカほどは盛り上がりなかった。そのうえ、大半のフェミニストは、アメリカから入ってきた女神運動のことを、「馬鹿げた流行」とみなしたり、悪魔崇拝と同一視したりしていた[Gallagher 2000:43, 45]。イギリスのフェミニストが女神運動に魅力を感じなかったのは、ネオペイガニズムと女神運動が、同じ時期に発展していったアメリカとは異なり、イギリスではすでにネオペイガニズムが一定の勢力となっていたことに関係していたと思われる。しかもイギリスのネオペイガンは、どちらかというと保守的で、学歴の低い人々だったため、フェミニズムという社会改革を目指す活動に身を投じる人々にとって、ネオペイガニズムは古臭く映り、ネオペイガニズムを取り入れた女神運動にも近づけなかったのだと思われる。

ただし、女神への関心が全くなかったわけではない。ロンドンではロンドン女性解放運動の分派として、1975年から母権制研究グループが活動していた [Komatsu 1985]。また、

古代の女神や母権の歴史と考古学などに関する講座が、大学で一般向け講座として、開講されていた [Harvey 1997 : 78]。つまり、イギリスでは「魔女」という象徴を抜きにして、女神への関心が少しずつ広がりをみせてはいたのである。

とはいうものの、イギリスのフェミニストの多くが女神運動に関心をもつきっかけになったのは、通称「グレナム」として知られる、1981年からイギリス南部のグレナム・コモン基地で始まった、米軍に対する反核運動だった⁸⁰。フェミニストたちは、核ミサイルを男性の女性に対する暴力的な支配の象徴と捉え、それに抵抗したのである。このとき、有名なアメリカ人フェミニスト魔女で反核運動家でもあるスターホークの書籍が参加者の間でよく読まれ、本人もこの基地にやってきて儀式を行うなどの形で活動を支援していた [Welch 2010 : 238]。その様子を目の当たりにしたことで、イギリスのフェミニストの間で女神運動への関心が高まり、実践に取り入れるようになっていったと考えられる。

ただし、筆者が調査したかぎり、イギリスの女神運動において、ネオペイガニズムをイメージさせる「魔女」などの用語を積極的に用いることは今でもない。つまり、アメリカの女神運動が魔女と女神、両方の象徴を取り入れたのに対し、イギリスの女神運動は女神しか取り入れずに運動が展開されていったといえる。続いて、その1つを始めた女性の来歴をみていこう。

2、生みの母の来歴

本節では、グラストンベリー女神運動を始めたキャシー・ジョーンズが、フェミニストとして女神運動に携わるようになったものの、劇の執筆など様々な文化的な活動を経て、宗教的实践としてのグラストンベリー女神運動を生み出すようになったプロセスをみていく。インタビューでは時間が限られていたため、著書に掲載されていないことを中心に伺った。そのため、本節の記述の事実関係については Jones [1990, 1996, 1998, 2000, 2001a, 2001b, 2006] や、地元での講演会における講演、彼女を知る他の人々からの話を参考にしている。

ジョーンズは、1947年イングランド北東部のニューカッスル近郊の町で生まれた。インタビューの中で「13歳の頃からスピリチュアルな事柄に関心を持ち始めた」と語っていたように、子供の頃から少し変わったところがあったようだ。高校卒業後はノッティンガム大学で心理学と生理学を専攻し、卒業するとロンドンに向かう。「1960年代後半、1968年だったのよ。ロンドン以外、どこに行くっていうのよ」と語るように、当時はアメリカで始まった対抗文化運動がイギリスでも盛り上がっていた時期で、彼女も時代の流れに乗り、刺激を求めて大都会に赴いた。出版社やデザイン会社で働いた後、英国放送協会 (BBC)

⁸⁰ 米軍による核燃料搭載ミサイルの配備に反対する女性たちの運動で、1981年に始まり、2000年まで続いたが、活発に活動が行われていたのは1980年代である [リディントン 1996]。

の科学系ドキュメンタリーの制作に携わる。このロンドン滞在の時期に、スピリチュアルな事柄への興味を徐々に深めていったと話す。

この方面への関心が高じて、ついに 1971 年、簡素な暮らしを始めようとウェールズの田舎に移住し、ロンドン時代の貯金を切り崩しながら、単身で自給自足生活を始めた。ウェールズには 1977 年まで滞在していたのだが、ジョーンズは当時を振り返って、「スピリチュアルな事柄を探求していた時期だった」と語る。毎日、数時間瞑想をし、スピリチュアルな書物を手当たり次第に読んで暮らしていた。このような内的な実践が、後のグラストンベリー女神運動の創出に影響を与えたと思われる。

ジョーンズがグラストンベリーとの関わりを深めていったのもこの時期だった。グラストンベリー近郊に暮らす大学時代の友人夫妻が始めたグラストンベリーでの瞑想会に参加するようになったためである。その 1 年半後、友人夫妻を含む数人とともに、グラストンベリーに移住する。当時の瞑想仲間には、後に「ニューエイジのグル」として知られるようになる男性や、グラストンベリーで最初期のオルタナティブ・スピリチュアリティの店のオーナーとなる夫妻がいた。当初はこのグループで、共同生活を営むことを目指したが、1 年で頓挫した [Jones 2006 : 270]。なおグラストンベリー史の中でいうと、彼らはもっとも初期のオルタナティブ移住者にあたり、グラストンベリーのオルタナティブ・スピリチュアリティの礎を築いた人々といえる。

その後ジョーンズは、「女性の意識覚醒グループ」を結成し、女性問題について勉強するような活動を 2 年ほど続け、グラストンベリーのフェミニズム活動の中心的な人物となっていく [Jones 2001a : 195]。この当時、彼女は給付金ではなく、ヒーラーやツアーガイドの収入で自活していたようである ([Jones 1998 : 38] 参照)。また、移住後にある男性と結婚して、2 人の子供をもうけたが、やがて離婚している。この経験から彼女は（男）神のみを崇めるキリスト教は自分には合わないと感じるようになっていった。このような個人的な経験も女神運動に関心を抱かせる背景にはあった。

しかし、「女神と初めて出会ったのは、グレナム・コモンだった」と筆者に語ったように、当時のイギリスの多くのフェミニストと同様、第 1 節で触れた反核運動こそが、ジョーンズを女神運動に導いた直接のきっかけであった。当時グラストンベリーからも多くの人々が同基地での抗議活動に駆けつけていて、彼女も 1983 年と 1984 年の数日間、仲間とともにキャンプに滞在している。

多くの母親と同様、自分の子供たちが育っていくことになる世界の状況を心配していた。(中略) 世界の変化について話してから、私たち [=グラストンベリーの女性グループ] は、男性の軍事的狂気について、自分たちがどう感じたかを示したくなった [Jones 1996 : 12]。

現地で目にしたのは、歌を歌ったり、色とりどりのリボンや風船で柵を飾りつけたりといった、今までになかったような、とても創造的でカラフルな抗議活動で、その新鮮さに感銘を受ける。その後、友人が2人、抗議活動のため、泥だらけのグレナム・コモンのキャンプで暮らすことを決意し、移り住む。

その頃、私は〔ギリシャ神話の〕デメテルとペルセポネの話を読んでいた。グレナム・コモンで活動する2人を応援するため、この活動を世間に知らせようと思って。それで、この神話をもとにしたグレナムの劇の脚本を書いたの。

インタビューの中でそう語ったように、急ごしらえで書いた脚本だったが、その年のうちに、地元のオルタナティブを中心にグラストンベリーで上演され、好評を博した。子育てと家事だけで毎日を過ごしたくないという思いもあり、ジョーンズはこれ以降も、1996年まで断続的に脚本を執筆し、自ら監督となり、地元のオルタナティブを巻き込んで、劇を上演していく。

当初、彼女にとって、女神の神話は反核運動を支援する劇を書くための下地にすぎなかったが、次第にその意味合いが変化していく。

女神が誰だか思い出させるため、過去の要素を現代に持ちこんで、父権的な神話を書き直したの。色んな文化からの神話を融合させたのよ。

インタビューでのこの語りのように、世界各地の神話を女神の視点から書き直すことで、「忘れられた女神文化の復興」を試みるようになったのである。脚本の執筆という創造的な行為がフェミニストとして関わった反核運動の支援から、女神文化の復興という文化活動に変化したといえよう。

やがて彼女の関心は、イギリスの古代の女神へと移っていく。そのきっかけは1989年、ミュージシャンのマイクと再婚したことを機に訪れた。彼の勧めで、ウェールズの伝承物語マビノギオンを読んだジョーンズは、自国の女神に興味を抱くようになり、イギリスの神話や遺跡の調査を始めている。これ以後に執筆された脚本では、外国の神話とイギリスの神話の融合により、新しい女神の神話を生み出すことで、イギリスの女神文化の「復興」を試みようとしている様子が窺える（〔Jones 1996〕参照）。

1980年代の彼女はグラストンベリーで、モニカ・シュー（Monica Sjöö）などの画家や詩人と「女神の展覧会」を開いたり、アスフォデル・ロング（Asphodel Long）などの作家や活動家を招いて「女神の日」を開いたりしていた〔Jones 2006 : 34〕。シューも自著の中で、

1980年代のジョーンズとの交流について触れている [Sjö 1999 : 242-244]。ジョーンズはこの頃、イギリスの女神運動に関わる人々とも親しく交流し、人脈を広げていたようである。

しかし当時の彼女は、女神の活動だけを行っていたわけではなかった。アセンブリー・ルーム⁸¹を共同所有する仕組みを整えたり、第2章4-3で述べたように、バリー・テイラーとともに、町の中でオルタナティブ・スピリチュアリティを促進していく様々な活動をしたりしていた。テイラーとは気が合い、1988年に秘教思想関係の書籍を扱うアヴァロン図書館を設立したり、1991年にオルタナティブ・スピリチュアリティや秘教思想を学ぶための機関、アヴァロン大学（現アヴァロン島協会）をつくり自らも講師を務めたりした。それから、アヴァロン島協会の定期刊行物として、1995年に『アヴァロン』という雑誌を夫と刊行する。これはグラストンベリーに暮らすオルタナティブからの寄稿により成り立っている雑誌で、寄稿者の実践に関する記事の他に、町の歴史やイベント、個人のスピリチュアル体験などについても掲載されている。アヴァロン図書館に収集されているバックナンバーを調べたところ、寄稿者の中には、著書やワークショップにより、町でもよく知られた人が名を連ねていた。このような活動を通して、ジョーンズは町に暮らすオルタナティブ・スピリチュアリティに関わる多くの人々との間に人脈をつくっていったと考えられる。ジョーンズの乳がん闘病記 [Jones 1998] の謝辞には、グラストンベリーを拠点に活動する作家、ミュージシャン、ヒーラー、秘教思想研究家の名前が多数挙げられていて、彼女の交友関係の広さを感じさせる。

女神の日や女神の展覧会を開いて、グラストンベリーで女神運動を推進していたジョーンズだったが、1990年代半ば以降、子供に手がかからなくなり始めたこともあり、女神を広める活動に、より精力的に取り組んでいくことになる。

私自身の女神との旅は、グラストンベリーで女神の聖劇を執筆し、上演する過程で加速された [Jones 2006 : 135]。

「女神の旅」とは、女神を劇中のキャラクターとして使用するに留まらず、女神の概念を深めていくこと、自分の内的な成長といったスピリチュアルな領域をともにすることだと考えられる。第3節でみていくが、実際、一連の脚本の執筆と劇の上演という活動こそが、独自の女神体系の創出につながっている。

⁸¹ 町の集会所。第二次世界大戦前は住宅として使われていたようだが、戦時中は米軍の社交クラブとして使われ、その後は隣町の靴会社の倉庫となるが、しだいに使われなくなっていった。1960年代後半からヒッピーに不法占拠されたため、町が購入し、1977年には移住してきたオルタナティブを中心に信託団体が設立され、1987年には町から買い取った。今でもオルタナティブ・スピリチュアリティ関係のイベントが多く開かれている場所である。

1996年に初めて開かれた女神カンファレンスは、4日間というオルタナティブ・スピリチュアリティのイベントにしては長い期間に、外国人も含めた100人以上が参加するという比較的規模の大きなイベントだった点、その後も現在に至るまで拡大を続けつつ、継続して開催されているという点で、グラストンベリー女神運動が広がっていく1つの分岐点だったといえる⁸²。当初のコンセプトは、「女神を愛する女性たちが、自分たちの作品を展示する会場」[Jones 2006: 293]だったが、2002年以降は「アヴァロン島の神秘を探求する5日間の巡礼」[Jones 2006: 294]とされている。つまり、自らの思いを込めた作品を外に向かって示すという文化的なイベントから、自己内省的なスピリチュアリティのイベントへと変容したことがわかる。1998年には女神を用いた講座、プリーステス・トレーニングを教え始める。これはジョーンズの女神体系に基づいた儀式のやり方や女神の捉え方を学ぶとともに、瞑想やヴィジュアライゼーションをして、自己変容を目指すサイコセラピーのようなものである。さらに2000年からは季節の祝祭という儀式を主催するようになり⁸³、2002年には女神神殿を開いている⁸⁴。自ら創出した女神体系をもとに、儀式や祭典を催したり、信仰の場所を設けたり、その体系を教えたりという実践を始めたことで、ジョーンズの女神運動は文化的な活動の枠を超えて、宗教性を帯びていったといえる。

またグラストンベリーに関する一連の研究をみた場合、1989～90年の長期調査に基づいたPrince & Riches [2000]では、ジョーンズの始めた女神体系も示唆されているが、ガイア仮説などより一般的なオルタナティブ・スピリチュアリティの文脈での女神への言及のほうが目立つ。Bowman [1993]では、グラストンベリーの地形に対する数ある視点のうちの1つとして、ジョーンズの視点が示されている。それが1990年代半ばに調査したIvakhivになると、グラストンベリーと女神を結びつける視点の代表として、ジョーンズに詳しく言及している[2001: 116-118]。さらに、2000年代半ばからは、Bowman [2004]やSage [2005/2006]など、ジョーンズの女神運動に焦点を当てた論文が発表されている。これらのことから、1990年代半ば頃までのジョーンズは、グラストンベリーのオルタナティブとしては頭角を現していたものの、女神運動の活動家としてはそれほど知られておらず、その活動の範囲も個人的かつ小規模なものに留まっていた。それが、1990年代半ば頃からは女神に関する活動を活発化させていき、それに伴い彼女の女神運動に賛同する人々が集まってきてまとまりが生まれ、2000年代には町の中でも目立つ活動になっていった、と推測される。

⁸² 2002年以降は5日間、2013年からは6日間と期間は徐々に延びている。また、筆者が調査した2006年と2008年～2010年の4年間の参加人数はいずれも200人前後だった。

⁸³ 第4章第2節参照。

⁸⁴ 本章3-3参照。

3、「アヴァロン」の創出

グラストンベリー女神運動誕生を確認した第2節に引き続き、本節ではこの女神運動のコンセプトの1つを理解するために、ジョーンズの創り出した女神の体系の内容を具体的かつ詳細にみていく。そして、イギリスの独自性が強く意識されていることを指摘したい。なお、ジョーンズはすでに8冊の女神に関する書籍を出版していて、彼女の女神の考え方は執筆の段階で整理されていたようで、直接話をしたときにも著書の記述以上の見解を窺うことはできなかった。本節で著書を主な資料としているのは、そのような事情による。ただし、著書を資料とする場合、そこで提示されている主張は再構築されている可能性が高いし、語りの内容以外にしぐさや語り方など、多面的に情報を得られるインタビューよりもその信憑性が問われる。そのため、主観的な経験談より客観的な事実の記述を中心に取り扱い、彼女の見解が町の中で実際どのように実体化されているのかも同時に提示する。

3-1 「女神」とは

まず初めに、女神運動の流れの中で女神がどのように理解されているのか、先行研究に基づき整理したうえで、ジョーンズの女神の捉え方を示したい。

女神の理解のされ方は、実践者によっても大きく異なるが、以下のように理解されることが多い。まず、崇拜の対象としての超越的存在とも、自分自身を女神とみなす内在的存在ともみなされるが、超越的存在かつ内在的存在と捉えることに矛盾を感じない人もいる [Rountree 2004 : 191]。また、ギリシャ、ローマ、エジプト、メソポタミア、インド、東アジアなど、様々な文化由来の女神が言及され、女神にはいくつもの側面や名前があると考えられる一方で、それらは全く別々の女神ではなく、1人の女神だと多一神教的に考えられている [Eller 1995 : 132-135]。さらに、ガイア仮説とも結びつきながら、地球そのものが女神なのだとか、女神は自然界のどこにでもいると汎神論的に捉えられたりもする [Eller 1995 : 136-139]。

このような捉え方を念頭においたうえで、ジョーンズの主張をみていく。彼女は、女神とは「超越的で遍在的であるとともに、自分の意識や身体の内面で経験されうる内在的な神的存在」 [Jones 2006 : 109] であり、「1人の女神が千も万もの異なる名前と姿をもつ」 [Jones 2006 : 27] と述べているが、ここからは先ほど指摘した、超越的、内在的、汎神論的、そして多一神教的な捉え方が確認できる。イギリスの女神を志向しつつも、冒頭で記したように、インドの女神を自宅に飾っていたことも、女神は1人だが、いくつもの異なる形で表されるという考え方から理解できよう。ただし、人間の中に女神が内在しているとみなすことはあっても、現在生きている人間と女神を同一視して崇めることはない。あくまで女神と人間は別の次元の存在なのである。

以上のような女神の捉え方は、女神運動に携わる人々の間では珍しいものではない。続

いて、グラストンベリー女神運動の女神体系について、具体的にみていく。

3-2 女神の輪

ここでは、ジョーンズ独自の女神のコンセプトを、主女神と女神体系の創出に分けて示していく。初めに現在のグラストンベリー女神運動で主女神とされている「アヴァロンの女神 (Lady of Avalon)」についてみていく。

ジョーンズは、Lady of Avalon が、アーサー王伝説を女性の視点から書き直した、ブラッドリーの小説『アヴァロンの霧』[1988-1989(1982)]の中で大女神に仕える女司祭の称号とされていることに触れたうえで、後世、女性が女神や女神の生まれ変わりだとされる文化があることを引き合いに出しながら⁸⁵、Lady of Avalon も女神だと主張する⁸⁶ [Jones 2006 : 4]。かつてアヴァロン島に暮らしていた Lady of Avalon と呼ばれた女性が、後にアヴァロン島の女神になったため、アヴァロンと重なり合うとされてきたグラストンベリーは女神の聖地だというのがジョーンズの主張である。現在では、アヴァロンの女神は当然のごとく主女神とされているが、どのような経緯を辿ってそうなるに至ったのかを、彼女の著書における主女神の取り扱いの変遷から確認していく。

ジョーンズの処女作 *The Goddess in Glastonbury* には、アヴァロン島が女神の故郷であると漠然と記されているだけで、アヴァロンの女神は登場せず、焦点はむしろギリシャ、中東、ヨーロッパ大陸の女神にある [Jones 1990]。第2節で述べたように、彼女は長年、女神の神話を題材にした劇の脚本を書き、グラストンベリーで上演していたのだが、本書はその過程で収集した神話や考古学の資料をもとに書かれている。

彼女がイギリスの女神に目覚めたきっかけは、「マビノギオン」というケルト文化が残るウェールズ地方の古い伝承物語だった。それ以来、地中海地域などには残っている女神の神話がイギリスにないのは忘れられてしまったからだと考え、「復興」を試み始める。1992年、彼女はケルト神話に題材をとった劇を上演しているが、この劇と同年に出版された著書の中で初めて、イギリス独自の女神であり、新石器時代のグレート・ブリテン島の大きいなる母女神と位置づけた「アナ (Ana)」を登場させている [Jones 2006 : 33]。

グラストンベリーの土地の女神として初めて登場するのは、「9人のモーガン (Nine Morgens)」⁸⁷である。9人のモーガンは、12世紀に編纂された「マーリン物語」というイ

⁸⁵ 例として、女神タラの化身とされる、チベットに嫁いだ唐の皇女、文成公主や、泉の水・妊娠・血統の蜥蜴女神とされる17世紀のハワイ王女キア・ワヒニが挙げられている [Jones 2006 : 4]。

⁸⁶ 本稿で Lady of Avalon をグラストンベリー女神運動の文脈で使われるときは「アヴァロンの女神」と訳しているのはそのためである。

⁸⁷ ジョーンズによると、9人は Thisis, Cliton, Thetis, Gliten, Glitones, Moronoe, Mazoe, Tyronoe, Morgen la Fay [Jones 2006 : 30]。しかし、9人のモーガンの名称は、これ以外にもあるし、人数も必ずしも9人ではない。

ギリスの伝承集に登場する。マーリン物語では、アヴァロンに住む 9 人姉妹、9 人の女司祭、妖精女王とされていた 9 人を、ジョーンズは女神と読み替えたのである [Jones 2006 : 32]。女神である 9 人のモーガンが暮らす島ということで、アヴァロン島と女神のつながりが具体的にイメージされるようになったといえる。ジョーンズは 1990 年代前半から、モーガンたちに「呼ばれ」始め、彼女たちの実在を徐々に信じるようになったと述べているが、実際にそれぞれを個々の女神として捉えるようになっていったのは、1994 年に 9 人のモーガンを題材とする劇の脚本を執筆する過程においてだった [Jones 2006 : 32]。このとき、個人的な経験も影響していたが、「アナ」の場合と同様、脚本の執筆と女神観の深化が共鳴し合っていたことがわかる。

一方の「アヴァロンの女神」との出会いについて、彼女は次のように記述している。

約 7 年前、はっきりとはなく、輪郭だけだったが、アヴァロンの女神が見え始めるようになった。 [Jones 2006 : 27]

そして次のようにも述べている。

私たちのもとに初めてアヴァロンの女神がやってくる時、彼女は（中略）名前のない女神のビジョンにすぎない。〔彼女に仕える〕プリーステスになる旅とは、部分的には彼女を思い出す旅だ。 [Jones 2006 : 17]

これらの記述からわかることは、神話や伝説からヒントを得て生まれた「アナ」や「9 人のモーガン」と同様、「アヴァロンの女神」もジョーンズの想像力から生まれた女神だということである。本節の冒頭に記したように、小説『アヴァロンの霧』からの影響を受けているとは考えられるものの、小説の中のキャラクターを女神に読み替えた点は彼女のオリジナルである。しかし当初はアヴァロンの女神も、複数いる主女神の 1 人にすぎなかった。

この名前は、2000 年に出版された著書に初めて出てくるが、そこでは、9 人のモーガン全員、またはその 1 人のモーガン・ラ・フェイ (Morgen la Fay)⁸⁸、ギリシャ神話のアリアドネ、マビノギオンのアリアンロードとともに主女神とされている [Jones 2000 : 2, 164]。それが、2001 年の著書になると、アヴァロンの女神とモーガン・ラ・フェイを同格に扱う視点が決まり打ち出される一方で、アリアドネとアリアンロードは、後述する

⁸⁸ アヴァロン島に暮らすアーサー王の異父姉として、イギリスでは広く知られている。一般的にはモーガン・ル・フェイ (Morgen le Fay) と記すが、フランス語の定冠詞で le は男性形であるため、ジョーンズは女性形の la を使用している。

季節の女神に「降格」される [Jones 2001 : 37, 190]。そして、2006 年の著書では、9 人のモーガンも女神とはみなされず、眷属である茶吉尼天、半女神、妖精とされる [Jones 2006 : 17]。こうしてジョーンズの想像力から生まれたアヴァロンの女神が唯一の主女神として祀られるようになったのである。

続いて、次節で覗く女神神殿の季節ごとの飾りつけや、第 4 章で取り上げる儀式を行う際の基礎になっている女神、季節、方角、色、動物などを組み合わせた女神体系の創出についてみていく。

ジョーンズは、1989 年に劇の脚本を執筆していたとき、ネイティヴ・アメリカンの「まじないの輪」⁸⁹に関心をもち、イギリス独自のまじないの輪を創ることを試みたと述べている [Jones 1998 : 165]。1994 年の著書の中でその初めて輪が登場するのだが、これは図 3-1 のように「アナの輪」と呼ばれる。中央にイギリスの大女神とされたアナとモーガン・ラ・フェイが、8 つの方角に 8 人のイギリスの女神と残りの 8 人のモーガン、ケルト暦の 8 つの季節が配置され、東西南北に火、地、水、風が対応させられている⁹⁰。

「アナの輪」は 2001 年の著書では、アナの名の改名に伴い、「ブリジット・アナ／ブリタニアの聖なる輪」と改名され、図 3-2 のように、女神の 4 相⁹¹、色、象徴する動物や物が付け加えられ、対応する女神の数も増やされる。それがもう少し進化したのが、図 3-3 で示した「ノラヴァ、ブリタニア、9 人のモーガンの輪」である。それぞれの女神の出典と、そこでの位置づけを明らかにしたのが、表 3-1 である。ここからわかるように、ジョーンズの女神体系の「女神」には、サクソンの女神やギリシャ神話の女神、ジョーンズの造語も含まれているが、アイルランドやウェールズの伝説の女神や女性の登場人物が中心である。

この輪に基づく季節の祝祭の様子は、第 4 章で詳しく取り上げるとして、ジョーンズの

⁸⁹ ネイティヴ・アメリカンの「まじないの輪」は、オルタナティヴ・スピリチュアリティに関心がある欧米人にはよく知られている。

⁹⁰ 要素と方角の対応は、ヨーロッパの錬金術やオカルトに由来する。季節、色、道具、神々、時刻、動植物なども付け加えられていることがあり、円ではなく表で表されることもある。具体的な対応のさせ方は、神話や伝説の参照と再解釈と、そこからの象徴や音の類似を介しての「連想ゲーム」である [Jones 2001 : 30-35]。たとえば、図 3-3 で北東に配置されているインボルクという儀式にブリジットを女神として対応させたのは、インボルクが伝統的にブリジットを祝う日だからである。ブリジットには火と若い乙女に関連する伝承があり、ブリジットの語源は火の矢 (breo-saigit) で、これは空気を切って飛ぶということで、ブリジットの要素は火と風だとジョーンズは考えた。さらに、ベルテーンという儀式にまつわる伝説にでてくる「リアノン」が、女神として南東に配置され、伝説からリアノンは情熱的だということで、ジョーンズは火と結びつけ、ブリジットとリアノンの間の東の要素が火とされた。このようにして女神と要素を対応させていった。色や動物については、西は夕日が沈む方向なのでオレンジと茶色としたり、伝説の中でリアノンは馬術の名手とされているので、南東に馬を対応させたりしている。

⁹¹ 乙女 (maiden)、恋人 (lover)、母 (mother)、老婆 (crone)。一般的には乙女、母、老婆で女神の 3 相と呼ばれる。恋人を付け加えたのは、ジョーンズ独自の考え。

女神体系がどのように実体化されているかをみるため、グラストンベリー女神運動が町の中心部に開いている「女神神殿」と呼ばれる空間に、ひとまず立ち寄ってみよう。

3-3 女神神殿の空間構成

女神神殿は 2003 年にメンディップ郡から「信仰の場所 (place of worship)」として認可を受け、2007 年には NPO 団体として認定されている。筆者が 2005～11 年にかけて合計 22 回、ボランティアを意味する「メリッサ」をしながら、訪問者を観察したり、話をしたりしたところであり、以下の記述は、筆者自身の女神神殿での参与観察に基づいている。

町の中心部の、とあるスピリチュアリティ系書店とその隣のヒーリングセンターの間の細い通路をくぐり抜けると、そこが第 2 章 4-3 で触れた「グラストンベリー・エクスピリエンス」と呼ばれるエリアであり（第 2 章図 2-6 参照、写真 3-1）、女神神殿もこの一面にある。ここには、中庭を中心に、オルタナティヴ・スピリチュアリティ関係のグッズを扱っている店が 2 軒、ハーブの店が 1 軒、そしてベジタリアン・カフェのオープンテラスが取り囲み、中庭から奥に通じる通路の先には、パワーストーンの店と秘教思想書のアヴァロン図書館がある。いつもオルタナティヴ・スピリチュアリティに関心がある人々でにぎわっているエリアである。

みしみしと音を立てる、ハーブ店前の階段を上り、ベランダに上がると、女神神殿の扉がある（写真 3-2）。特別な事情がないかぎり、毎日、正午から午後 4 時まで開館している。ちなみに、隣の建物に入っているのが、アヴァロン島協会と『ジ・オラクル』の事務所だ。紫に塗られた壁際の植木鉢は、いつもきれいな花を咲かせている。扉の脇には、女神神殿関係の催し物を知らせる掲示板があり、次のような文章もみられる。

グラストンベリーの神殿は、信仰の場所として登録されていて、1500 年ぶりにブリテン⁹²でつくられた女神を崇める神殿だと思われます。

私たちの信仰は、地球やそれぞれの季節とも関係しています。

季節の輪には 8 つの祝祭があるので、この神殿はその季節に沿って 6 週間ごとに変化します。

私たちの信仰は、この聖なる島アヴァロンの地形や、私たちの周りに顕れているそのエネルギーと関係しています。

神殿はあらゆる人が楽しめる聖なる空間として開いています。（以下略）

⁹² グラストンベリー女神運動の文脈では、イングランド、スコットランド、ウェールズを含むグレート・ブリテン島のことを指す。

扉には靴を脱ぐようにとの掲示があるので、靴を脱いで、室内の壁際に置く。その理由として「神殿内は自分の家の寝室のようにくつろぐ場所なので、外を歩いてきた汚い靴は脱ぐことになっているのよ」と説明されたことがある。室内は30畳ほどの広さである。天井は低く、明かりも落としてあるので、薄暗い。どことなく落ち着くような音楽が流れ、乾燥ハーブを焚いたインセンスの香りもしてくる。紫色の壁際には羊皮のマットやカラフルなクッションが所狭しと並べられ、同じく紫色の絨毯の床に座って静かに瞑想をしている人々の姿がみられる。外の喧騒が嘘のような、静まり返った空間である。

扉から向かって右側の奥には3つの祭壇がある(写真3-3)。壁には白い角を生やした紫の衣装の女性がこちらに迫ってくるような絵が掛けられているが、彼女こそが主女神「アヴァロンの女神」である(写真3-4)。その下の主祭壇には、同じ姿をした「アヴァロンの女神」の人形が置いてある。イメージが同じなのは、ともに『アヴァロンの霧』の中の登場人物に由来しているからだ。人形の隣には太い紫のろうそくと砂盆が2つみえ、脇のかごには来館者が祭壇に捧げられるようにと小さなろうそくが用意されている。花も活けてあり、女神のカードや小さな女神像も何気なく置いてある。また、大変な状況にある関係者の無事を願ったり、亡くなった人を弔ったりするため、その人の写真が飾られることもある。たとえば、筆者の滞在時には、先天性疾患の手術を繰り返し受けていた関係者の子供の写真が飾られていた。また、2011年に東日本大震災が発生した際には筆者の写真が置いてあった。

主祭壇の右側にある祭壇にも、女神の人形や絵、ろうそくや花が飾られている(写真3-5)。主祭壇の左側の祭壇も右側の祭壇と似ているが、その季節の女神の絵が飾られている点が異なっている(写真3-6)。祭壇の脇には、感想ノートと寄付金の入れ物、女神神殿のパンフレットが無造作に置かれ、壁際には銅鑼が鎮座している。

さて足元に目をやると、室内の中央に直径60センチメートルほどの円形板の祭壇がある。中央にはメロンぐらいの大きさの女神の土像がどんとしつらえられ、その周りをりんごサイズの8体の女神像がかわいらしく取り囲んでいる(写真3-7)。ろうそく、水の入った杯、石と花、乾燥ハーブを調合したインセンスを焚いている砂盆が置いてあるが、これらはそれぞれ各方角と結びつく要素を象徴している。方角と要素の結びつきや季節ごとの祭壇の模様替えの基盤となっているのが、先ほど説明したジョーンズの女神体系である。

主祭壇とは反対側、扉を入れて左側には、手を広げた9体の等身大の人形が円形に並んでいる(写真3-8)。イギリス人サイズの「等身大」なので、筆者は思わず見上げてしまう。この柳でできた人形こそが「9人のモーガン」で、この中に入り、彼女たちに取り囲まれるの瞑想を好む人もいる。それ以外にも、室内には人々から寄贈された女神の絵や女神像が、ところどころ飾られている。

入ってきた扉の辺りに戻ろう。この脇の壁には、ここが宗教的信仰の場所として登録さ

れたという証明書（写真 3-9）と、表の掲示板と同じ女神神殿の説明が、ひっそりと飾られている。扉を挟んだ隣の棚には、カードや鞆、ハーブやろうそく、ジョーンズ等の著書が、空き間もなくぎっしりと陳列されている（写真 3-10）。これらはすべて売り物である。そこにある名刺は、結婚式や葬式などの人生儀礼を女神運動のやり方で行ってくれる人やアーティストのものである。扉のすぐ脇には、「寄付金」と書かれたどっしりとした鉄製の大きな大釜が置いてある。神殿の鍵の開け閉めと、音楽やインセンス、ろうそくの火の管理、物品の販売に対応するのが、ボランティアのメリッサの仕事である。

このように神殿内部では、アヴァロンの女神の色で高貴な色とされる紫の色調、薄暗い照明、静謐な中に流れるヒーリング・ミュージック、インセンス、触り心地のよいクッションなど感覚に訴える形で聖なる雰囲気醸し出していることがわかる。また、日常の世界に近い入口付近で物品の販売を行う一方で、奥のほうにアヴァロンの女神の祭壇や9人のモーガン人形を設置していること、メリッサは入口付近では訪問者と会話することもあ一方、奥のほうではリラックスと瞑想の空間ということで積極的には話しかけないことから、部屋の中央の入り口から奥に向かうにしたがって、日常から非日常、俗から聖へと向かうような空間構成になっていることがわかる。それを象徴するのが入り口で脱ぐことになっている靴だろう。外の汚さを神殿内に持ち込まないために脱ぐとされているのに、室外ではなく、物品販売コーナーの前に靴底を床につける形で置く。それは、入口付近が奥のほうとは異なり、聖なる空間というより、外から続く俗なる空間とみなされているからだといえる。

女神神殿の説明の仕方についても考えてみる。外の掲示板にあった5文のうち、1番目と3番目は、ジョーンズの考え方に基づく女神神殿についての端的な説明であり、5番目は女神神殿についての自分たちの姿勢の明示である。2番目と4番目は自分たちの信仰についての説明である。2番目の文はネオペイガニズムと女神運動一般に共通する見解だが、「この聖なる島アヴァロンの地形」という表現を含む4番目の文からは、グラストンベリーという土地自体を聖地とみなしている様子が窺える。次節でその背景をみていこう。

3-4 土地との結びつき

この女神運動では、グラストンベリーという大地そのものも、地形の特徴の再解釈と起源神話の創出から女神の聖地とみなされている。そのことが端的に表されているのが、女神カンファレンスのパンフレットである。女神カンファレンスとは、本稿の冒頭でその行進の様子を描いたグラストンベリー女神運動の年1回の祭典である。このイベントは、プログラムによると、「グラストンベリーの聖なる地形とアヴァロン島の中に顕現している女神、そしてお互いや私たちを取り巻く世界の中にいる女神に出会うために旅する、5日間の巡礼」とされている。このように、グラストンベリーの土地そのものに女神の身体が見

出されている。

それは図 3-4 のような形をしている、グラストンベリーの地形に由来する。この地形をジョーンズは、図 3-5 のように母なる女神に見立てたのである。つまり、円錐形に隆起しているトールなど 3 つの丘をそれぞれ女神の頭、胸、妊娠中の腹に、2 つの細長い丘を両足に見立て、グラストンベリーの町の中心部に当たる部分を足の間とする。その先にはブライドの塚と呼ばれる場所があり、それを赤ん坊の女神ブライド(ブリジッド)と見立て、赤ん坊が母女神から生まれているとみなした。また、図 3-6 のように、乙女の象徴とされる白鳥に、年老いた女神(Crone)が乗っているという見方も提示した。ここでは、それぞれの丘が年老いた女神の頭、胸、子宮、白鳥の首とされているのである。

女神カンファレンス最終日の行進とは、つまり女神の身体を歩くことだったのである。本稿の冒頭でみた行進の続きを、もう少しみてみよう(写真 3-11、3-12、3-13)。

ハイ・ストリートから、チャリス・ウェル庭園に入り、池の周りに集まる。ここでも再び、身体と楽器を用いながら、女神を称える歌を大きな声で歌う。ジョーンズは両手で水を掬い、その手を天に掲げながら、「私たちの女神からの赤い水。水に祝福を！」と言う。そして、再び水に手を浸し、隣の人の額にその水をつけて祝福をする。その様子を見た参加者も次々に池に手を浸し、互いに祝福し合う。池に足を浸したり、軽く水をかけあったりする人もいる。続いて、隣のホワイト・スプリングへ。ここでは、ジョーンズが外の給水口からちよろちよろと流れる水を柳の女神人形にかけていた。

鉄分を含んだチャリス・ウェルの赤みがかかった水は、グラストンベリーのオルタナティブの間では、キリストの血液や女性性、聖杯などと結びつけられているが、ここでは女神からの月経血とみなされ、その水に触れることで女神からの祝福を得られるとされている。一方のホワイト・スプリングの水は、カルシウム分が多いため白っぽく、ふつうキリストの体液、男性性、死の国の妖精王などと結びつけられている。行進中にこの水に対する解釈はなかったが、Jones [2000: 62]によれば、女神の母乳とされている。このような実践においても、グラストンベリーの土地と女神は結びつけられていく。

女神運動のリーダーはしばしば、女神の視点からの歴史の再解釈を行うが([アイスラー 1991(1987); スターホーク 1994(1979)] 参照)、ジョーンズも行っている。ただし彼女の場合、よくみられるように人類全体の歴史ではなく、イギリスとグラストンベリーに特化した起源神話を提示している。女神の視点からの歴史を再解釈する際に、一般的には考古学上の発見や神話・伝説を取り入れながら、女神からのインスピレーションなどと言いつつ、自らの想像力を交えて、提示していく。ジョーンズの場合も、イギリスの起源神話のほうでは、11 世紀のアイランドで編纂されたという『侵略の書』や、新石器時代の考古学の

遺物や巨石文化の遺跡を独自に解釈しながら、編み出している [Jones 2001]。しかし、グラストンベリーの起源神話として示されているものは、少し異なる。3-2 で説明した女神体系や、先述した町の地形と女神のつながりだけでなく、女神とは直接関係ないが、広く知られたグラストンベリーの場所や、伝説や歴史に登場するキャラクターが取り入れられているのである⁹³ [Jones 2006]。

3-5 女神の聖地「アヴァロン」

以上の記述を踏まえて、ジョーンズの女神体系の特徴を整理すると、劇の脚本を執筆する過程とも重なっていて創作に近い、伝説や小説の世界や登場人物を流用している、イギリス、特にグラストンベリーまたはアヴァロンと結びつけられているという3点を挙げることができる。

ジョーンズは、初めはギリシャ神話の女神など、他の女神運動の活動家も取り入れているような、より幅広い地域の女神に関心を示していたが、自国の古い伝承物語を読んだことをきっかけに、イギリスの女神の探求を始める。しかし、その手段は学術的な証拠に基づくというよりも想像力やインスピレーションに頼るもので、創作に近い。考古学者マリヤ・ギンブタス [1989(1981)] は、南東ヨーロッパで見つかった新石器時代と銅器時代の女性の像、いわゆる「ヴィーナス像」を古代に女神を崇拝していた社会があった証拠とみたのだが、女神運動ではしばしばこの説を引き合いに出して、新石器時代のヨーロッパに女神を中心とした母権社会があったと主張されている。しかし、イギリスではそのような女神像はローマ帝国時代のものを除き、見つかっていない。インドやチベットのように現

⁹³ 概要は以下の通り。遙か昔、地球 (Ertha) が月との卵を宿す。血が流れて、卵が出てくる。地球は卵を生み続け、血は流れ続ける。それが、現在グラストンベリーにある赤の泉 (チャリス・ウェル) である。氷河期に入り、白鳥のノラヴァがブリジットの島 (ブリテン島) と名づけた島にあるアヴァロンに着陸。氷をつついたら、赤の泉が噴き出し、氷が融け始める。ノラヴァは眠る。その様子を見て、太陽の女神グラニーニャが姿を現し、氷は融け続け、海になる。海の神ノーデンがノラヴァと出会い、2人はセックスをして、ノラヴァは妊娠する。ノーデンは海に還る。インボルクの頃、ノーデンの立ち会いの下、ノラヴァはブライドの塚の方向に娘を生む。かなりの難産だったが、9人のモーガンと名乗る、9羽の黒カラスに助けられた。ノラヴァの母乳は流れ、白の泉になる。2人は沢山の子供をつくる。年老いたノラヴァはソーウィンの頃にはトールの下洞窟にこもるようになる。入り口は息子のグウィナップナドが守っているが、1年に1回、魂を集めに出かけ、その魂はノラヴァの大釜に入れられて、変容する (トールの下に妖精王グウィナップナドがいて、魂を集めているという伝説、ソーウィンの女神とされるケリドウィンと大釜の伝説がある)。新石器時代になり、女神を愛する人々が巡礼にやってきた。その後、海水面が上がり、アヴァロンは島になった。ノラヴァはアヴァロンの女神、湖の女神として知られるようになる。レイク・ヴィレッジの人々、ドルイド、アリマテアのヨセフとキリスト教徒、アーサー王などもやってくる。父権的宗教の席卷により、ノラヴァは忘れられていく。しかし、人々は気づかなくても、彼女の恩恵を受けている。今、ノラヴァに会いに来る人も増えている。私たちが思い出したから、アヴァロンの女神は蘇った [Jones 2006 : 47-72]。

在でも女神への信仰が見られるわけではないし、ギリシャやローマのように女神の遺跡もほとんど残っていない。そこで想像力の助けを借りつつ、伝説や小説を流用されつつ、創出されていったのである [Jones 2006 : 1]。

とりわけ利用されたのが、第2章4-1で触れた「アヴァロン」という異界である。グラストンベリーが外的な世界、ふつうの人々の目に見える現実の世界を指すのに対し、それと重なるアヴァロンは個人の内的な世界、神秘的な世界を指していると一般的に理解されていて [Bowman 1993 : 59]、「アヴァロン」という言葉は、オルタナティブ・スピリチュアリティに関心がある欧米人には神秘的な響きをする。そのため、すでに伝説や小説を通して広く知られていた「アヴァロン」が人々に喚起する神秘的なイメージを利用したのだと思われる。しかし、ケルト伝説に出てくる魔法の島アヴァロンは、ケルト伝説の英雄アーサー王が復活のときを待つ場所とされているように、死者が赴く場所であり、「女神の聖地」ではない。そこで、アヴァロンに固有の「アヴァロンの女神」が創り出され、ネイティブ・アメリカン文化の「まじないの輪」の考え方を下敷きに、主にイギリスの伝説に登場する女神や女性がアヴァロンと結びつけられ、グラストンベリーの地形も女神とみなされることで、女神の聖地「アヴァロン」は生まれたと考えられる。

この女神の聖地「アヴァロン」は、女神カンファレンスや女神神殿の中でも現されている。3-4でみた女神カンファレンスのコンセプトの中では、他でもないグラストンベリー／アヴァロンという場所に女神がいるから、その女神を称えるためにこの地で女神カンファレンスを開くという関連性が示されている。3-3でみた女神神殿の揭示の中でも、アヴァロンはこの揭示を読んでいるあなたがいるグラストンベリーであると主張され、女神を崇める女神神殿はそのアヴァロンにある聖なる空間だとされている。宗教表象の恣意的動員による意味体系の構築をルックマンは「ブリコラージュ」[1976(1967) : 152-153]と呼ぶが、この女神体系もグラストンベリーの地形や土地の伝説という宗教資源を再構成したブリコラージュといえる。

しかし、なぜグラストンベリー女神運動は「アヴァロン」を利用する必要があったのだろうか。それは、ジョーンズの目的の1つが他国にはあるのに、イギリスでは「失われた」女神の文化の復興だったからだと思われる [Jones 2006 : 259]。アーサー王の伝説と結びつくアヴァロンは、かつてグレート・ブリテン島にあった文化を髣髴とさせる。アヴァロン＝グラストンベリーという既存の解釈に便乗しつつ、グラストンベリーが女神の聖地とされたのである。つまり、グラストンベリー女神運動の女神体系の創出とは、アヴァロン伝説を基軸として他の文化も取り入れつつ、古いイギリスの文化を再創出し、再提示しようとする試みだったといえる。

グラストンベリーの聖性の根拠の1つとして以前から定着していた視点を、自らの体系の中に取り込んでしまったグラストンベリー女神運動を、町に暮らす他のオルタナティブ

がどのように捉えているのかについて、最後に簡単に述べておく。オルタナティヴはふつう、ある場所を聖地とみなす視点を、いくつでも受け入れる。聖性の根拠が多ければ多いほど、その場所の聖地としての価値が高まると考えているからである。そのため、グラストンベリー女神運動が示した視点も、グラストンベリーの名声をまた1つ高めてくれるものとして好意的に捉えられることが多い。ただし、「女神の輪」や「季節の女神」といった、ジョーンズが創り上げた世界観の詳細に通じた人は少なく、女性の聖性を崇めているといった大雑把な理解に留まっている人が大半である。その一方で、最近グラストンベリー女神運動がグラストンベリーのオルタナティヴ・スピリチュアリティのグループの中でも目立つ存在になり、外部にも広く知られるようになってきたことを受けて、グラストンベリーを聖地とする視点が「女神の聖地」に固定化されるのではないかと危惧を抱く声も少数ながら聞かれた。

4、穏やかな姿勢

本節では、「穏やかさ」というグラストンベリー女神運動の1つの特徴を示すために、従来の女神運動では「敵」とみなされがちだった男性とキリスト教との関係のみをみてみよう。

まずジョーンズ自身の男性とキリスト教についての考えを著書を引用して確認しておく。彼女は、5000年前から断続的にイギリスにやってきた数々の父権的な文化によって変えられた「概して平和的でペイガンの女神を愛する社会だったと考えられているもの」[Jones 2006 : 5-6]を思い出そうと呼びかける。そして、女神と同じく、女性も邪悪とされ、虐待されてきたため、女神の歴史 (herstory) を思い出すには女性のほうが有利とし [Jones 2006 : 165]、神的存在のジェンダーと人間のジェンダーを関連づけている。ここでいう「父権的な文化」とは、女神運動においては男性中心的な傾向、ユダヤ教やキリスト教、理論的思考や合理主義といった現代の欧米社会で優勢だったり基盤となっていたりする事象であり、彼女はキリスト教や男性と結びつくものを敵視しているようにみえる。

しかし、「女神はジェンダーをもとに差別するようなことはしない」[Jones 2006 : 194]、「父権制により男性も苦しんでいる」[Jones 2006 : 165]と男性への理解を示す。そして、これまで男神のみが崇拝されてきた結果、女性性と男性性のエネルギーのバランスが崩れ、世界中に混沌をもたらしている、男性性に偏ったバランスの是正には女神のみの崇拝が必要だと考えており、バランスが戻れば彼女も両方の神を崇拝すると宣言する [Jones 2006 : 191-193]。そのため、女神運動の活動家によって見解が異なる男性の女神運動への参加について、彼女は概して肯定的である。

その一方でキリスト教については、Jones [2006]の中に直接的に批判するような記述はみられないが、祈りの言葉の項で「女神は古めかしい汝 (thee's and thou's) といった言葉は求めない」[Jones 2006 : 112]と記している。「汝」は聖書の中に頻繁に出てくる古英語

であることを考えると、ジョーンズはキリスト教を「おちよくって」⁹⁴距離をおいているといえる。

以下、男性やキリスト教徒との関係がどのように表れているかを、具体的な行為から示していく。

4-1 男性の受け入れ

グラストンベリー女神運動の一連の活動において、男性が参加を制限される機会はほとんどない [河西 2009]。むしろ男性参加者を歓迎し、この女神運動に男性がいることを強調している。たとえば本稿冒頭の女神カンファレンスの行進の場面で、女神を担いで行進していたのは男性だった。この現象は毎年のものであり、Jones [2001] には 1999 年の女神カンファレンスにおいて、女神を担いでいる男性の写真が掲載されているし、2009 年にトールの頂上に女神人形を運び終えた誇らしげな男性陣と女神の写真は、翌年のパンフレットに使用されていた (写真 3-14)。女神カンファレンスなので、女性が中心的な役割を果たすと考えていた 20 代の女性参加者 (大学院生) は、「象徴である女神を男性が担いでいて、びっくりした」と驚きつつも、「女性だけでなく、男性も女性原理を崇めていて、いいことよね」と肯定的な感想を述べていた。2006 年のカンファレンスで、ジョーンズの左腕であるサラが BBC ラジオから受けたインタビューをみてみよう。

これは父権的な宗教ではありませんし、ストライキでもありません。(中略) 男性に対するフェミニスト運動でもありません。女神を崇拝する男性を歓迎します。男性も沢山加わっています。今では、プリーステスだけではなく、プリーストも増えています。素晴らしいことですよね。女神崇拝の中には純粋に女性だけというグループもあります。(中略) けれど私たちのほうはそうではありません。私たちは男性にも女性にもオープンです [BBC homepage]。

彼女は自分たちの女神運動がフェミニズム運動ではないこと、男性を歓迎していることを強調している。

サラが繰り返し否定している、「ストライキ」の意味について考えてみる。このとき、筆者たちは夕方に行われる小規模の行進が始まるのを待っていた。英語の **strike** には、「殴り込み」とか「集中攻撃」という意味もあるので、サラはこれから行われる行進がフェミニ

⁹⁴ 「おちよくる」という表現は口語的で、論文にはふさわしくないかもしれない。しかし、ここで取り上げた著書中の文章表現だけでなく、講演やイベントの場での話し方やふるまい方をあわせて考えても、ジョーンズのキリスト教に対する態度として、この言葉以上にふさわしい日本語表現を筆者は思いつかない。そのため、「不適切」との批判を承知のうえで、あえて使用している。

ストの政治的な行進とは違うという意味で、「ストライキ」ではないと主張したと思われる。BBCは英国を代表するメディアであり、またサラは季節の祝祭の主催者の1人で、ボランティアの調整役もしているという、グラストンベリー女神運動に深く関わっている人物である。そのため、この取材の中でサラが話している内容は、グラストンベリー女神運動の推進者が、外部へ呈示したいこの運動の姿を示しているといえる。つまり、グラストンベリー女神運動は男性も歓迎している女神運動であると、外部へ広めようとしているといえよう。

女神カンファレンスではそれ以外にも、「女神を愛する男性」を称える儀式が行われたり⁹⁵、男性だけのパフォーマンスがあったりして、男性の参加は熱烈に歓迎されていた。筆者が観察した季節の祝祭21回中16回は女神の召喚を1人以上は男性が務めていた。また、筆者の観察によると、女神カンファレンスだと参加者の1割程度、季節の祝祭だと1～4割は男性がいて、男性をみかけないことはなかった。このようにグラストンベリー女神運動では、男性の参加は排除されるのではなく、むしろ参加者が多く集う場面で、その存在が前面に押し出されて、強調されるのである。

4-2 キリスト教徒との「交流」

ここでは、イングランド国教会の会館のグラストンベリー女神運動への売却という出来事をきっかけとして生まれた接触を取り上げて、キリスト教徒とグラストンベリー女神運動の人々の関係を示す。

2008年6月、町をあるニュースが駆け巡った。町に2つあるイングランド国教会の一方の聖ベネディクト教会⁹⁶が、所有する会館を、グラストンベリー女神運動の人々、正確にはNPO団体として登録された「女神神殿(NPO)」に売却することが決まったというのである。この教会は、イギリスの多くの教会と同様、信徒数の減少とそれに伴う収入の減少に歯止めがかからず、教会の建物自体の維持管理もままならない状況だった⁹⁷。教会の所有していた会館を売却すれば、その維持管理費が将来にわたって必要なくなることもあり、

⁹⁵ 正式名称は「女神を愛する男性を崇める儀式」。140人ほどの女性が会場の中に、2列になって蛇のような曲線を描いて並ぶ。男性は目を閉じて、女性たちの間を歩いていく。女性は男性の体に触れたり、「あなたはとても美しい」などと言葉を囁いたり、抱きしめたりする。最後に、女性たちが歩き終わった男性たちを取り囲み、「あなたは女神に対してとても美しい」と歌って終わる。

⁹⁶ グラストンベリーにはイングランド国教会の建物は2つある。ハイ・ストリートにある大きいほうは聖ジョン教会で、中心から少し奥まったところにあるのが小さいほうの聖ベネディクト教会である。以前はそれぞれの教会に牧師がいたが、1980年代半ば、信者の減少を理由に、後者が前者に吸収される形で、前者の牧師が後者も管轄するようになった。

⁹⁷ キリスト教離れが進むイギリスでは、会員数の減少により、教会や会館の維持管理が経済的に難しくなり、売却することは珍しくない。住居として改築される他、イスラームなど勢力を伸ばしつつある宗教団体が購入するケースも見られる。

会館を競売にかけ、教会の修繕と改築の費用に当てることになった。

それを落札したのが、グラストンベリー女神運動の人々だったのである⁹⁸。しかし、売却後、ある問題が発覚する。イングランド国教会では、教会だけでなく、教会の付属物である会館を、キリスト教以外の宗教の実践に利用することを制限する決まりがあり、売却したとしても基本的にはその決まりは適用されることになっていた。女神運動側はそのことを知らずに購入したため、会館内で女神運動の儀式や催し物を何も行えなくなるという事態に直面したのである。そこで、女神運動側と教会側は話し合いを重ねに重ね、どうか妥協点を見出すことに成功した。話し合いに参加した女神運動側の代表者の1人、サラによると、その過程で、女神運動側は教会の人々に自分たちの信仰が反キリスト教的でないこと、イギリスの伝統を尊重し、自然を崇拝していることを説明したそうである。話し合いの席に立ち会った、この教会の牧師（40代男性）は筆者に次のような話をした。

あの人たちは、僕たちとは全く違った方法で信仰をしている。けど、実際のところ有害ではない。だから、教会の人たちは、魔女とかドルイドとかそんなのじゃなくて⁹⁹、あの人たちに売って良かった、って言っていた。今では、両者の間にすばらしい寛容性と理解が生まれているよ。 [2010年3月9日]

この牧師の男性は、売却直後にグラストンベリーに赴任している。赴任前、グラストンベリーではオルタナティブとキリスト教徒が対立しているという噂を聞かされていたのだが、話し合いを機に、少なくともグラストンベリー女神運動の人々とは、そこまで激しく対立しているわけではないことを知ったといえる。

教会側の代表者の1人だった60代の元教師の女性も、同様のことを語った。

女神の人々とは、前は何の交流もなかったんだけど、教会の会館を売ったことがきっかけで話をするようになったのよ。どんな人たちなのか、前は訝しがっていたんだけど、話してみたら、変わってるけど、物腰は柔らかいし、穏やかだし、いい人たちだ

⁹⁸ この建物の購入額18万ポンドのうち、10万8500ポンドを銀行から借り、残りの7万1500ポンドは、ジョーンズ夫妻からの4万ポンドをはじめとする個人からの寄付金と、物品やワークショップから女神神殿が得ていた収入で賄った。

⁹⁹ この牧師は「教会のサービス中に呪いをかけられたことがある」と言い、黒魔術を行う邪悪な黒魔女の存在を信じており、女神運動もそのような類のものだと考えていたようである。ネオペイガンに言わせれば、彼の「魔女」や「ドルイド」のイメージは、キリスト教徒の偏見そのもののイメージである。筆者の知るかぎり、「魔女」や「ドルイド」と名乗っている現代のネオペイガンは、そのようなことはしない。黒魔術については、実際に出会ったことはないが、行っている人はいるかもしれない。ただし、彼がグラストンベリーで会ったという「黒魔女」は、グラストンベリーにときどきいる、精神的に問題を抱えた人なのではないかと筆者は個人的には思う。

った。 [2010年7月24日]

この女性は聖ベネディクト教会に生まれたときから通っている地元民である。女神運動の人々との接触の結果、グラストンベリー女神運動の人々の印象はよくわからない人たちから「いい人たち」に変化している。生じた印象の変化は、コミュニケーションの成立を契機とした地元民であるキリスト教徒が、オルタナティブの女神運動の人々に対する理解を深めていった過程ともいえる。

では、もう一方の当事者である女神運動の人々は、どうだったのだろうか。あるシンポジウム¹⁰⁰の席で、先述のサラは教会と話し合いを重ねた末に女神運動の実践に使えるようになった話を始めた。

私たちと話すことで、キリスト教の人たちは、私たちが何を崇拝しているのか学びました。それはまさに「なるほど」の瞬間でした。

このサラのキリスト教徒に対する姿勢は、自分たちはキリスト教についてもよく知っているからそれ以上学ぶ必要はない、一方のキリスト教徒はキリスト教のことしか知らないのだから女神のことを学ぶ必要があるという、いささか傲慢な態度である。このシンポジウムに集まっていたのはオルタナティブが大半だったので、聴衆にキリスト教徒がいないことを前提としての発言だったと思われるが、キリスト教徒への優越感が感じられる。

確かに女神運動を含め、オルタナティブ・スピリチュアリティに携わっている人の中には、サラをはじめ、キリスト教の私立学校で教育を受けたり、毎週教会に通っていたりしたような人もいる。そもそもイギリスでは公立学校が国教会の付属校という取り扱いなので、キリスト教のことを全く学ばずに成人する人はいない。そのため、オルタナティブはときたま、このように自分たちは相手の信仰をよく知っているが、相手は自分たちの信仰に無知であるというような優越的な態度をみせる。

キリスト教徒はグラストンベリー女神運動の人々を「いい人」と評し、グラストンベリー女神運動の人々はキリスト教徒に対し、小さな優越感を抱く。両者の思いはすれ違っているように見えるが、互いに必要以上に近づかない点は共通している。キリスト教徒側は、他のオルタナティブよりは女神運動の人々に親近感を抱くが、合同で何かをしようとはしない。女神運動側では、かつての女神運動のようにキリスト教に対してあからさまに敵視することはなく、むしろイベントのときに部屋や物品を借りたりすることもあり、良好な

¹⁰⁰ 2010年9月4日、グラストンベリーの色々な立場の人が集まって議論するというシンポジウムが開かれた。5つのパネルにつき、3人ずつが招かれ、そのうちの1つが、スピリチュアリティに関するパネルで、サラや第2章5-2で取り上げた合同改革教会の女性牧師が参加した。

関係を保っている。第2章第5節では、オルタナティブと地元民が積極的に関わらないことで共存している様子を示したが、本節でみた関係は、オルタナティブであるグラストンベリー女神運動の人々と、地元民とオールドカマーが主体のキリスト教徒の関係であり、第2章で示したのと同様の共存の傾向がみられたともいえる。

4-3 おとなしい人々

女性を抑圧してきたはずの男性を受け入れ、女性を劣位においてきたはずのキリスト教徒に対しては「いい人」と言われてしまうような態度で接する。それはなぜなのだろうか。

まず、男性の受け入れのほうから考えてみる。ジョーンズはそもそも、ジェンダーとしての男性と制度としての父権制を分けて考えたうえで、後者を批判する。つまり、女神を崇拝することは男性の排除を意味するのではなく、むしろ包括的な実践だとしている。グラストンベリー女神運動では、生物としての「男性」ではなく、「男性性」「父権性」といった抽象的なイメージを仮想敵とし、「男性」も取り込んでいたのである。また、キリスト教徒に対しては、心の中の思いとは裏腹に相手に好印象を与える態度をもって接することで、キリスト教の資産をトラブルなく利用している。ぶつかるのではなく、協調しようとする姿勢が現れているといえよう。

しかし、このような戦略的な意図の他に、ジョーンズの関心がかつてのような攻撃的な活動から離れてしまっていることも、より説得的な理由として挙げられる。第2節で述べたように、確かに彼女は以前、グレナム・コモンで座り込みをするような活動的なフェミニストだった。しかし、グラストンベリー女神活動がまとまりをみせていった1990年代には、プリーステス・トレーニングの開始からも窺えるように、その活動の中心は儀式や瞑想を通じたセラピーや自己変容に移行している。

このグラストンベリー女神運動の変化については、女神カンファレンスの変容からも窺い知ることができる。第2節で2002年にコンセプトが自己内省的なものへと大きく変わったと述べたが、展示会中心の以前の女神カンファレンスには、政治的なフェミニズムの片鱗もみられたようである。そのことを筆者に教えてくれたのは、共通の友人を介して知り合った、グラストンベリーを訪問中のアイルランド女性（40代、ヒーラー）だった。昔は女神カンファレンスに参加していたという彼女は、今は興味を失ってしまった理由を次のように語った。

私が初めて女神カンファレンスに参加したのは、14年前 [=1996年、第1回]。当時は、女性問題を扱うなど政治的でフェミニズムの傾向が強かった。（中略）でも、パンフレットを見るかぎり、今は軽くて明るい感じになっていて、アフガニスタンの女性〔のおかれた状況〕について考えたり、議論したりするような場ではなくなって

しまったみたい。変わったのは8年ほど前〔=2002年〕かな。その頃、政治性を求める女神運動家たちは、グラストンベリーの女神カンファレンスを去っていった。

[2010年8月3日]

女神カンファレンスの過去のパンフレットは見つからず、閲覧できなかったため、彼女の発言を裏づけることは難しい。しかし、先述したジョーンズ夫妻が編集していた雑誌『アヴァロン』の1998年秋号に、その年の女神カンファレンスに関する記事が掲載されていた。この記事は、ジョーンズと親しく女神カンファレンスの運営にも携わっていた女性が執筆しており、ジョーンズから頼まれて書いたと推測される。そのため、当時の運営側の意向が現れていると思われるので紹介すると、たとえば会場に飾られている芸術作品は「女性を崇める芸術、あなたを崇める芸術」[Carey 1998 : 18]と表現されているし、講演についても「女性が話し出す¹⁰¹」[Carey 1998 : 19]と記されている。つまり、女性のためのイベントであることを前面に押し出そうとするフェミニズムの傾向が窺える。その一方で、このアイルランド人女性が指摘する通り、筆者が関わり始めた2006年以降、女神カンファレンスの中で女性問題が取り上げられたことは一度もないし、女性の優位性を認めるような表現が使われたこともなかった。講演やワークショップの内容を見るかぎりでも、女性問題より自己成長などスピリチュアルな事柄を重視する傾向にある。ジョーンズは脚本の執筆の目的を女神文化の「復興」に変えた後も、フェミニズムの側面からの女神への関心を保持していたが、2002年以降、宗教的な側面へのウェイトが急速に高まっていったと考えられる。これは、結果的にフェミニズムより、スピリチュアリティの側面から女神に関心をもつ人を魅きつけることになった。

要約すれば、ジョーンズの関心の変容がこの女神運動をおとなしくさせている大きな要因として挙げられるのである。

5、グラストンベリー女神運動の誕生

最後にグラストンベリー女神運動をグラストンベリーという地域社会と女神運動に位置づけて、どのような性格をもつ女神運動なのか示したい。

初めにここまでの議論を振り返る。第1節では、女神運動がフェミニズムとネオペイガニズムのせめぎあいから生まれたこと、特にイギリスの女神運動ではネオペイガニズムとの歴史的な経緯から魔女という象徴を避けていたことを指摘した。第2節では、グラストンベリー女神運動の創始者は、社会運動の流れの中から生まれたが、文化的な活動を経て、宗教的な実践を生み出していったことを示した。第3節と第4節でその概要を示したグラ

¹⁰¹ これまで発言の機会を与えられてこなかった女性が話し出す、という意味で、フェミニズムでしばしば用いられる表現。

ストーンベリー女神運動とは、「アヴァロン」を中心に創出されたイギリス「固有」の文化を提示する、穏やかな実践だった。

第2章での議論を参考にしつつ、グラストンベリーという地域社会の文脈にグラストンベリー女神運動を位置づけてみよう。町にある伝説や地形と結びつけて、グラストンベリーを聖地とみなすことは、この町では繰り返し行われてきたことで、グラストンベリー女神運動もそうした試みの1つだったといえる。近年のオルタナティヴ・スピリチュアリティの隆盛に限って考えると、グラストンベリーは自国の文化への回帰の中での「再発見」だったと述べたが、グラストンベリー女神運動は、この「再発見」から生まれた実践の1つだったといえよう。またジョーンズのような高学歴のエリートが都会での収入が良く安定した生活を捨て、グラストンベリーに移住し、創作活動に励むこと、血縁ではなく同様に移住してきた人々の間で人脈をつくりだし自活する手立てを作り出すことは、オルタナティヴ移住者としては典型的である。つまり、グラストンベリー女神運動は、グラストンベリーという地域社会でオルタナティヴ・スピリチュアリティが盛んになっていく過程の中で生まれていったといえる。それとともに、男性やキリスト教徒を実際に攻撃するような激しさは持ち合わせておらず、瞑想やヴィジュアライゼーションを行う穏やかな性格を持っていたので、町の中でも受け入れられていったと推測される。

一方、女神運動という点からみると、イギリスの女神を中心としたグラストンベリー女神運動はイギリスにローカル化された女神運動であること、儀式や神殿を伴い、セラピー的なことを重視しているという意味で、個人の内面に向かう宗教的な実践の側面が強いことの2つの特徴を指摘できる。1つ目だが、女神運動は地中海を中心に、インドやネイティヴ・アメリカンなど全世界の女神を一様に取り入れるグローバルな側面が強かったが、グラストンベリー女神運動は女神体系をグラストンベリー、もしくはアヴァロンと結びつけたり、グラストンベリーの土地自体を女神とみなしたりして、イギリスにローカル化している。2つ目だが、グラストンベリー女神運動に「魔女」が取り入れられていないのは、女神運動の変容ではなく、そもそも「魔女」がいなかったというイギリスの女神運動に特有の事情のためだと思われるものの、第1節で指摘した、女神運動が社会運動から宗教的实践へとその性格を変容させている流れに沿っているとも理解でき、宗教的な側面の強い、新たな女神運動の一端だと考えることができる。つまりグラストンベリー女神運動は、女神運動全体の流れと呼応しつつ、ローカル化という独自性をもって生成したといえる。

以上のことから、グラストンベリー女神運動とは、グラストンベリーという地域社会の中でオルタナティヴ・スピリチュアリティが成長していく流れと、変容しつつある女神運動の流れが交差したところに創造された、イギリスという土地に根ざしている、内向きな女神運動として理解できる。

ところで、冒頭のシーンに戻るが、なぜ私は私の答えに対するジョーンズの含み笑いを
見て、恐ろしいと感じてしまったのだろうか。その日、フィールドノートを書きながら思
い当たった1つの理由は、私はそのとき、ジョーンズがその視線の先にアヴァロンにいる
女神たちの姿を見ているように感じてしまったからではないかということだ。家の中にス
ピリチュアル・グッズが見当たらなかったことも、グッズに頼らないという点で、かえっ
て彼女がスピリチュアルな人に思えてしまったのだろう。第6章第4節でも述べるが、私
はグラストンベリー女神運動に携わる人々と接していく中で、彼らが女神の存在を信じて
いると確信できたことがあまりなかった。それだからこそ、ジョーンズの姿はなおさら新
鮮だったのかもしれない。なお、この点については、第7章第2節でもう一度考える。

続く第4章から第6章では、ジョーンズの女神の世界にやってきたプリーステスたち、
つまり私が調査中、親しく付き合ってきた人たちを取り上げていく。

第4章 排他的な共同性

ある冬の晩、雪がすっかり融けてしまい、滑る心配がなくなった夜道を、私は女神会館に向かって走っていた。会館の前にハーブを燻した煙で浄めてもらう順番を待っている、2、3人の短い列が見える。ぎりぎり間に合いそうだ。

室内にはすでに60人ほどが集まっていて、中央の円い祭壇の周りにぐるりと座っていた。目を閉じて軽いトランス状態に入りながら、瞑想をしている。その周りをプリーステスたちが取り囲み、低い声で唸り、楽器を使って共鳴音を奏でている。祭壇には紫の太いろうそくが1本と小さなろうそくが8個。灯りはそれだけなので、室内は薄暗い。それでも、目を凝らしてみると、何人かの顔が見分けられた。

7時半頃、1人の女性が出てきて、「みなさん、ようこそ」と話を始める。彼女から、今夜はみんなと一緒にアヴァロン島へ旅をし、女神に出会うというような説明を受ける。「左手を隣の人の右肩に置きましょう。楽になって。リラックスして。肩の力を抜いて。目を閉じて」。彼女の語りに乗せられて、アヴァロン島への旅が始まる。

私たちは霧がかかった湖の岸辺にいた。そこには一艘の船が停泊している。バランスをとりながら乗り込むと、湖の上を滑るように動き始める。霧が深く、視界は悪い。辺りは真っ白で、どこまでも静かな湖。そんな濃い霧の中を、船は行き先を心得ているかのようにまっすぐに進んでいく。しばらくすると、霧が少しずつ晴れていき、その向こうに島が見えてきた。アヴァロン島だ。

島に到着したから、目を開けるようにとの声がある。すると、正面のステージから白い霧とともに紫色のゆったりとした衣を着けて、頭に白い角を生やした「女神」が姿を現した。このアヴァロンの女神は私たちを見据えながら、短い言葉で力強く語りかけてくる。「自分の人生は自分で選びなさい」、「自分自身になりなさい」、「自分を愛しなさい」、「あなたは美しい」・・・。

一段落すると、待機していたプリーステスたちが、おもむろに火が灯されたろうそくを人々に配り始める。1つもらう。これは「アヴァロンの火」だと説明される。女神の合図で一斉にその火をふっと吹き消す。気づいたら、女神は姿を消していた。「帰りましょうか」と、初めの女性に促され、私たちは再び目を閉じ、霧の深い湖を船で渡り始める。

岸に着いたと言われ、目を開くと、この世界に戻っていた。1時間ほど時間が過ぎていた。灯りが点き、部屋全体が明るくなる。「旅人」たちは、体をほぐしながら、近くの人たちと一言二言、言葉を交わす。帰りがけ、出口でお金を渡し、軽く挨拶をし、寒い中を家路についた。

【2010年2月27日 アヴァロンの女神に捧げる祝祭】

楽しかったけど、何だかよくわからない儀式だったなというのが、かつてグラストンベリー女神運動の儀式に、初めて参加したときの私の率直な感想である。冒頭で示したようなグラストンベリー女神運動の儀式は、予備知識なくただ参加しただけでは、アヴァロン島への行き帰りの際に行った瞑想の中でイメージを創り上げる、ヴィジュアライゼーションのやり方やジョーンズが扮していた「女神」の正体など、儀式の中での行為や象徴の意味がよくわからず、参加者を戸惑わせる。こうした戸惑いは、異文化の儀式に参加する人類学者にとっては当たり前のことであり、それを解きほぐしていくことが人類学者ではないかと怒られそうである。しかし、不特定多数の人が参加することが多いオルタナティブ・スピリチュアリティの集まりでは、行為や象徴の意味が説明されることが多いことを考えると、参加者全員がそれらの意味を知っていることを前提として進んでいく、グラストンベリー女神運動の儀式は不親切なような気がする。

第3章では、グラストンベリー女神運動がグラストンベリーのオルタナティブ・スピリチュアリティの発展と、変容していく女神運動がクロスしたところに誕生した、イギリスの女神を中心とする内向的な女神運動であることを示した。続く第4章から第6章では、当事者の織り成す実践に目を向けながら、グラストンベリー女神運動に携わる人々の関係性、つまりつながりのあり方を明らかにしていきたい。そのための作業として、まずグラストンベリー女神運動にやってくる人を眺め（第4章）、続いて参加者の話に耳を傾け（第5章）、最後に彼らの相互関係の間に分け入る（第6章）。

本章ではまずグラストンベリー女神運動への関わり方の程度が一様でないことを記述し、儀式の場において「積極的な参加者」と「一時的な参加者」の間に隔たりがつけられていることを指摘する。そのうえで、グラストンベリー女神運動が「積極的な参加者」にとって互いの間に共同性を獲得する場であることを示す。

1、女神運動に携わる人たちの履歴書

初めに、グラストンベリー女神運動への関わり方にみられる3種類のパターン、2010年時点で積極的に参加していた人たちの属性、および運営のされ方を検討していく。

1-1 関わり方の温度差

「グラストンベリー女神運動に関わる」とは、女神神殿を訪れたり、女神カンファレンスに参加したりすることの他に、儀式や講座などの催し物、そして女神神殿や女神会館の掃除や模様替えなどのボランティアに参加することだといえる。これらの催し物やボランティアには、一部を除いて誰でも参加できる。

講座の中で特に重要なのが、第3章第2節でも触れたジョーンズの女神についての考え方を体系的に学ぶことができる「プリーステス・トレーニング」である。講座は1年単位

だが、3年間で正式に修了する。ただし、3年続けて受講しなくてもいいし、3年目まで受講しない人もいる。受講料が1年に8回で800ポンドかかるうえ、年間を通して、日記をつけたり、女神に関係するものを作ったり、女神に関係する場所を訪れたり、課題をこなすのも大変である。1年目修了で「シスター／ブラザー・オヴ・アヴァロン」、2年目修了で「プリーステス／プリースト・オヴ・ゴッデス」、3年目修了で「プリーステス／プリースト・オヴ・アヴァロン」と呼ばれる。ただし実際には、プリーステス・トレーニング1年目を受講中から「プリーステス」と呼ばれることもあり、「プリーステス」という呼称は、プリーステス・トレーニングを受講したかどうかの指標だともいえる¹⁰²。

このような講座があることを踏まえたうえで、グラストンベリー女神運動への関わり方に注目しながら参加者を分類すると、次の3つに分けることができる。

- 1) オルタナティヴ・スピリチュアリティやネオペイガニズムには関心があり、女神神殿を訪れたり、グラストンベリー女神運動の催し物に参加したりする。しかし、グラストンベリー女神運動自体に特別な関心があるというわけではなく、プリーステス・トレーニングも受講していない。一度しか関わらない観光客から、ときどき、またはたまにやってくるような観光客および町の住人までいる。以下、「一時的な参加者」と呼ぶ。
- 2) プリーステス・トレーニングの受講者だが、この講座をグラストンベリー女神運動の講座というより、オルタナティヴ・スピリチュアリティのワークショップの1つと捉えている人。プリーステス・トレーニングのとき以外、グラストンベリー女神運動とほぼ関わりをもたない。
- 3) グラストンベリー女神運動の催し物やボランティアに積極的に参加したり、自分でワークショップを開いたりしていて、他の参加者からも名前をよく知られている人。プリーステス・トレーニングを受講したプリーステスが大半だが、あえて受講せずに定期的に関わり続けている人、プリーステスの家族として関わり続けている人もいる。以下、「積極的な参加者」と呼ぶ。

本稿の主眼は、グラストンベリーでみられるグラストンベリー女神運動にあるので、2)のプリーステス・トレーニングのみの参加者は稿を改めて考えることとし、ここでは1)の「一時的な参加者」と3)の「積極的な参加者」を考察の対象としていく。

¹⁰² ジョーンズは、「プリーステス」は女性も男性も含んでいて、男性を指したいときだけ「プリースト」を用いると述べている [Jones 2006: 12]。これは集合名詞として用いられる英単語の中には、“men”のように男性形の名詞が男性も女性も含むことがあるという、言葉における男性優位性をひっくり返した試みといえる。このような試みは、言語の中に潜む男性中心性を暴き出し、女性を肯定するような新しい言葉を構築していったディレイの影響を受けていると思われる ([Daly 1978] 参照)。本稿でも、プリーステスは男女をともに指す言葉として用い、男性のみを指す場合はプリーストと記している。

なお、「プリーステス」を単純に積極的な参加者としなかったのは、プリーステス・トレーニングの受講生でも、女神カンファレンスや季節の祝祭に参加する人もしない人もいるなど、トレーニング以外での関わり方は様々であるし、受講修了後も積極的に関わり続ける人もいれば、音信不通になる人もいるからである。その理由は、「プリーステス」とは受講者や講座修了者の呼称にすぎず、それを名乗ることに何の義務もタブーもないからだと考えられる。

さて、3) のような積極的な参加者は、グラストンベリー女神運動の特徴を示してくれる人々と考えられる。そこで筆者は「積極的な参加者」の特定を試みた。そこで彼らを、居住地と、「プリーステス」、「プリーステス以外の関係者」、「プリーステスの家族」、「その他」に分類し、イベントへの参加具合や他の人たちの間での認知度を考慮し、次のような選定の基準と方法に基づいて「積極的な参加者」を選定し、表 4-1 を作成した。なお、積極的な参加者の顔ぶれはかなり流動的なのだが、表 4-1 は筆者が滞在していた 2010 年の時点での顔ぶれに基づいている。

- 1、プリーステス・トレーニングを受講したか。そうでなくても、催し物によく参加したり、女神神殿で定期的にボランティアをしたり、グラストンベリー女神運動の女神体系をプリーステスと同程度、熟知していると考えられるか。
- 2、ワークショップを開いたり、女神カンファレンスなどのイベントの運営に携わったり、グラストンベリー以外の場所で活動したりして、人々の話題に頻繁にのぼるという形で、その存在がグラストンベリー女神運動の中で広く認識されているか。
- 3、季節の祝祭や女神カンファレンスなどの、大人数が集まる大規模な催し物によく参加しているか。そうでなくても、メーリングリストやフェイスブックを通じて、他の人々と積極的に交流を図っているか。

上記 1~3 の基準に従って、筆者が収集した女神カンファレンスや季節の祝祭をはじめとする、大小様々な催し物の参加者の記録から、繰り返し参加している人たちを選び出した。そのうち、調査中筆者が耳にした人々の会話の中で全く話題になっていないうえ、催し物の運営を担っていない人は除外したリストを作成した。

そのうえで、筆者の観察から漏れている人を追加するため、女神神殿のメリッサ用とグラストンベリー在住者用の 2 つのメーリングリストの登録者を調べた。リストにいない人の場合、まずメーリングリストに活発に投稿しているか確認した。次に、女神運動に関わっている人はフェイスブックの利用率が非常に高いことがわかっていたので、フェイスブックの該当者のページをみて、「友達」リストに女神の人々が多数登録されているか、書き込みの具合やアルバムにアップロードされた写真から他の人々との交流があるかどうかを

確認した。メーリングリストとフェイスブックの両方から、該当すると思われる人をリストに追加した。

最後に、プリーステス限定のフェイスブックのページに、筆者が誤って登録されたことを利用して、その時点での登録者のうち、リストに載っていない人について、先述と同様のフェイスブックでの活動を確認する作業を行い、リストを更新した。

なお、「積極的な参加者」を分析者の判断で選定することの妥当性については、筆者もだいぶ悩んだ。しかし、第6章で取り上げる、プリーステスを中心とした集まりである話の共有でさえも、参加者は一定していないなど、固定メンバーによる継続的な活動がみられない。彼らのグラストンベリー女神運動との関わり方は、まるで、目の前に用意された様々な催し物のカタログの中から、自分に興味があるものを選び、参加し、終われば解散ということを繰り返しているようである。このように個々人の運動への関わり方は流動的なので、「プリーステスの名簿」は存在せず、その人数はジョーンズすら把握していなかった。また、現在はメーリングリストとフェイスブックを主要な連絡や交流の手段として用いているが、女神神殿のメリッサ用、グラストンベリー在住のプリーステス用、プリーステス・トレーニング受講者用などいくつもあり、そのどれもがグラストンベリー女神運動を代表しているわけではない。そのうえ、積極的に関わらなくなった人でもメーリングリストからわざわざ削除しない場合もあるし、該当するのに登録されていない人もいる。その一方で、グラストンベリー女神運動を代表する「積極的な参加者」の属性を明らかにする必要性も感じていた。苦肉の策ともいえる独自の基準を設けたのは、以上のような理由による。

このような作業の結果、2010年の時点での積極的な参加者は、ジョーンズも含め、119人だった。なお、プリーステス以外の積極的な参加者には、女神神殿の定期的なメリッサ（ボランティア）、プリーステスの家族、ジョーンズの古くからの友人、グラストンベリーのプリーステス・トレーニング修了者のオランダ人がオランダで始めたプリーステス・トレーニングの受講者がいる。オランダのプリーステス・トレーニング受講者は、通常はグラストンベリーのプリーステス・トレーニング受講者と同等に扱われる。

1-2 参加者の属性

ここでは、性別、同性愛者、年齢、居住地、人種、学歴、収入源、ライフスタイルについてみていく。なお属性のうち、居住地と収入源については、第5章の分析に用いている。

グラストンベリー女神運動の1つの特徴は、第3章4-1で述べたように、女神運動のわりに男性が多いことである。実際、積極的に参加している119人中男性が19人と全体の16.0%を占めている。ただし、プリーストに限ると、92人中8人で8.7%まで下がる。それは、男性はパートナー（配偶者または恋人）とともに、家族として参加している人の割合が高いからだと考えられる。また、プリーストでも先に受講していたパートナーに影響され

て、プリーステス・トレーニングの受講を決める男性が少なくなく、自分から積極的に関わろうとする男性は少数派ということを考えても、女性中心の実践であることは否めない。

Rountree [2004] は、ニュージーランドの場合、レズビアンが少なくなかったと述べているが、グラストンベリーの場合、3人と少ない。ジョーンズが異性愛者であること、参加者に男性が目立つことから、レズビアンにはこの女神運動があまり魅力的に映らないのだと思われる。なお、男性から女性に転換したトランスジェンダーが1人いた。

表 4-2 は、表 4-1 で挙げた人々のうち、全体、全プリーステス、グラストンベリー在住全プリーステスの年齢の一覧表である。10代のプリーステスがいないのは、プリーステス・トレーニングの最低受講可能年齢が18歳だからである。また、10代が少ないのは、直接の会話や、集まりでの歌や踊りなどに参加している様子から、親に無理やり連れて来られているわけではなく、本人も女神に関心があることが観察できた子供たちのみをカウントしたからである。なお10歳未満の幼児や子供は、頻繁に参加していても、本人の意思かどうかを確認しづらいと考え、人数には含めていない。

40代の参加者が一番多く38人であり、次いで50代の27人、30代の22人と続く。これはオルタナティブ・スピリチュアリティ一般にみられる傾向である。第5章でみていくように、特に女神運動では伴侶との離婚や死別など、人生の危機に陥ったとき、女神運動に関わるようになる人が少なくない。そのため、ある程度人生経験を経た年齢の人が多いのだと思われる。その一方で60代以上の人は23人と少ない。2010年時点での60代の方は、対抗文化運動の中心的な担い手だったベビーブーマー世代である。一般的に60代の人々の場合、そのとき対抗文化運動に加わったかどうか、その後オルタナティブ・スピリチュアリティに関心を持つかどうかと関係しているようだった。また、グラストンベリーに暮らすプリーステスは年齢が高めだが、これも第5章でみていくように、子供の年齢と有無、伴侶の有無が、グラストンベリーへの移住と関係しているからだとと思われる。

居住地をみると、グラストンベリーとその周辺地域に暮らす人が43人ともっとも多く、次いで日帰り可能な近隣地域(25人)、そしてロンドンも含め日帰りは難しい地域になっている(表4-1)。グラストンベリーとその周辺地域、日帰りで来られる距離に住む人のほうが来やすいため、活発に活動するのは当然で、そのような人たちの家族の参加率が高いのも頷ける。

さて、プリーステス・トレーニングには通信講座も設けられているため、外国人の受講も増加していて、その中にはグラストンベリーと行き来しつつ、母国で積極的に活動している者もいる。海外在住者をみると、言語を同じくするアメリカからの参加者が7人ともっとも多いが、その国の全人口を母数とした割合で考えると、イギリスに比較的近いオランダからの6人が高い(表4-3)。

人種は4人以外全員白人である。白人でない4人はいずれもカリブ・アフリカ系女性で、

ロンドン在住者が2人、シカゴ在住のアメリカ人が1人、パリに暮らすフランス人が1人である。学歴は、判明した64人のうち、博士課程修了4人、修士課程修了7人、大学¹⁰³卒業34人、看護学校卒業5人、大学と看護学校卒業4人、大学未進学者10人である。また、学歴不明者のうち、5人は17歳未満である。つまり、看護学校も含めれば、18歳以上の114人中54人と、少なくとも半分程度が高学歴である。階級については、どちらかという中流階級が多い。白人、中流階級、高学歴という傾向は、オルタナティブ・スピリチュアリティの実践者の一般的傾向に一致する。

グラストンベリー女神運動の運営に携わることで給料がもらえることはない。そのため、参加者は現金収入を得るための手立てを探す必要がある。ジョーンズとプリーステスの家族を除く、グラストンベリー在住の関係者の主な収入源は表4-4の通りである¹⁰⁴。会社勤めが4人と少なく、自営が11人と多いが、これは雇用先が少ないグラストンベリーの特徴でもある。逆に考えれば会社勤めの方はグラストンベリーに引っ越しづらいともいえる。自営の一番の利点は、休日ではない季節の祝祭の日に休みを取りやすいことだ。自営の中でも、占星術や霊媒師など、オルタナティブ・スピリチュアリティ関係の事柄を収入源としている人が多いのも特徴である。このような事柄で生計を立てることは多くの人々の理想だが、かなりの仕事量をこなさなくてはならず現実的には難しい。そのため、それを補う手段として、給付金を活用している人が多い。給付金で生活している人が8人と少なくないのは、給付金を受給しやすいイギリスならではの特徴といえよう。

第1章3-4で述べたように、女神運動に携わる人々も収入源を明かしたがるが、特に給付金受給者は、全く、またはほとんど収入にならない、自分がしていることを職業とする傾向があった。先述の給付金受給者たちの場合、看護師(2人)、アーティスト(1人)、病氣療養中(1人)、セラピスト(2人)、主婦・母親(1人)、作家・詩人(1人)と名乗っていた。

主な収入源ではない事柄を職業として名乗るのは、給付金を受給していることを隠すためだともいえるが、一般的には良いとされている職業に就いていても、それを隠す人もいる。たとえばグラストンベリーに暮らすプリーステス(40代女性)は、筆者とのインタビューの中で、職業はヒーラーだと言った。しかし1年ほど経って、痴呆老人の施設で看護師として勤務していることを知った。筆者がそのことに触れると、彼女は「看護師はみんなヒーラーなのよ～」と微笑みながら説明した。また、ロンドンに暮らすプリーステス(40

¹⁰³ イギリスの場合、Collegeは日本の高校のような位置づけなので含めず、Universityのみを含めたが、アメリカの場合はCollegeも含めた。また、日本の放送大学に当たる通信制の開放大学も含めた。イギリスの公立学校教員免許取得過程(PGCE)は大学院に設けられているが、修士号を取得するわけではないので、大学に含めた。

¹⁰⁴ 第1章3-4で述べたように、収入源の特定は難しかったので、日常生活のやりとりから特定しやすかった、グラストンベリー在住者に限ったデータを示している。

代女性)に仕事を尋ねたとき、それまでとてもこやかだった表情が急に険しくなり、「何でそんなこと聞くの?」と聞かれた。重ねて尋ねた筆者は、「公務員。でも、そんなことあなたの調査には関係ないでしょう。こういうことには触れないでくれる?」と怒られた。彼女は内務省に務める国家公務員だったのだが、5年後、女神カンファレンスの講演の中で、その職を辞して、スピリチュアルに生きることを宣言し、会場から大喝采を浴びていた。そして、2012年の夏から彼女はカウンセラーとして働き始め、フェイスブックの中でその決断がまた称賛されていた。

彼女たちの言動からは、看護師や公務員など、安定していて良いとされる職業に就いていることを隠したがる様子が窺える。その理由として考えられるのは、グラストンベリー女神運動に携わる人には、オルタナティブ・スピリチュアリティ関係の職業やクリエイティブな職業に就くことを望む人が少なくない。そのため、それで収入が得られていない場合でも、それ以外に収入源となる安定した仕事に就いている場合でも、憧れている職業に就いているように装う傾向があるものと思われる。

グラストンベリー女神運動では、宗教的なものも含め、第2章第2節で示したような、この女神運動以外のオルタナティブ・スピリチュアリティに携わることについての規定はないので、個人の好みに応じて関わっている。なお、積極的な参加者であっても、グラストンベリー女神運動以外のオルタナティブ・スピリチュアリティに携わることはよくある。他の女神運動やネオペイガニズムのイベントに出かけるだけでなく、第2章第2節で挙げたような占いやセラピーはもちろん、インド系諸実践や仏教にも、女神という共通点から関心を寄せる人もいる。ただし、このように複数の異なる実践を同時に行うことは、オルタナティブ・スピリチュアリティではよくみられる。

ライフスタイルは、第2章第3節で示したオルタナティブの暮らしとほとんど変わらず、外見や家の様子からグラストンベリー女神運動に携わっているとわかるわけではない。ただし、プリーステスの場合、自宅にジョーンズの女神体系に基づいた祭壇が設けられ、ジョーンズの著書をはじめとした女神関係の書籍、CD、絵などを、女神に深く関わらない人より多く所有していた。服装は少し派手目な人が多く、きらきらしたアクセサリーを好む。アーサー王の伝説を題材にした小説『アヴァロンの霧』の登場人物を真似て、額に青い月のタトゥーを入れている人もいる。その他、ケーキなどのボリュームがある甘いお菓子を好む傾向があり、そのためかふくよかな体型の人が多かった。これは、女神運動の中で豊かな女性を象った古代のヴィーナス像を称賛する傾向があるため、ふくよかな体型が低く価値づけられていないことと関係していると思われる。

1-3 運営の形態

ここで、この女神運動の運営形態に触れておく。グラストンベリー女神運動は、第3章

で触れたように、女神カンファレンスというイベントや女神神殿という場所、プリーステス・トレーニングという講座やこれからみていく儀式の開催などを通して拡大していき、2010年時点では、表4-5のような定期的な催し物が開催されていた。この女神運動の形態は少しずつ変化してきたが、2009年にジョーンズのヒーリング講座の運営主体が女神神殿（NPO）へ移った時点で、一応落ち着いたようである。

グラストンベリー女神運動の中で運営の形態が意識化されていないので、当然組織図もないのだが、筆者の調査をもとに示すと図4-1のようになる。運営の形態としてはこのように大きく女神カンファレンスと女神神殿（NPO）に分かれていて、女神神殿（NPO）が、施設である女神神殿や女神会館の運営管理、季節の祝祭など女神カンファレンス以外のイベントの開催、プリーステス・トレーニング、ジョーンズの他のワークショップ、ニュースレターの発行を担っている。しかし実際には、第3章の冒頭部で記したように、女神カンファレンスの運営担当者と女神神殿（NPO）の理事を務める人は同じ人であることが多い。女神神殿の理事は8人または9人いるが、ジョーンズの夫以外は全員プリーステスである。女神カンファレンスについては、2008年からは儀式を創り上げるなど開催の中心的役割を担うセレモニアリストもプリーステスのみが、公募制のメリッサもプリーステスが優先的に選ばれるようになり、その他の運営役もすべてプリーステスである¹⁰⁵。

誰でもなれるボランティアのメリッサ、広く宣伝され誰でも気軽に訪れることができる女神神殿や参加できる季節の祝祭やワークショップを設けている点で、この女神運動は広く門戸を開いている。関心をもってやってくる人に「改宗」を迫らず参加を容認している点は、オルタナティヴ・スピリチュアリティの特徴の1つだといえる。しかし、催し物の運営を担う側になるためには、プリーステス・トレーニングを受講する必要がある点、女神神殿や女神カンファレンスの方針、運営担当者の任命など、重要事項の最終的な意志決定はジョーンズにあるという点を考えると、中心部分は非民主的で閉鎖的といえる。このような閉鎖性は、ときに外部に開示される。

女神カンファレンスの期間中、会場では女神に関連したグッズが販売されるのだが、販売できる人は女神カンファレンス側が選定した女神運動に関わっている人に限られる。そのため、グラストンベリーで店を運営するオルタナティヴの中には不満に思う者もいる。ある店の店主（60代女性）と話していたとき、筆者が2月にもかかわらず、8月に開かれる女神カンファレンスの出店枠はすべて売ってしまったらしいと話すと、彼女は失笑した。

あの人たちはいつもそう言うのよ。私も販売したいのに、毎年そう言われる。出せた

¹⁰⁵ プリーステス・トレーニング受講者を優遇したり、第3章3-2で示したようなアヴァロンの女神を中心に据えたりする傾向は、2007年に女神神殿をNPO団体に登録した頃から顕著になった。女神神殿で長年、メリッサをしている70代男性は、この当時、携わっていた人々のうち、半数ほどは新しい方針に納得できず、この女神運動を去っていったと話す。

試しがない。あれはね、とても閉鎖的なコミュニティなの。淑女クラブってとこかな。
仲間内しか、許さないみたい。 [2010年2月4日]

グラストンベリー女神運動の内部優先の姿勢を不愉快に思うオルタナティブもいて、隔たりが生じていることがわかる。

2、季節の祝祭

本節では、季節の祝祭という儀式の1日の様子の記述を通して、グラストンベリー女神運動への積極的な参加者が、周囲、特に一時的な参加者との間に溝をつくっていることを指摘する。

初めに「季節の祝祭」について説明をする。ケルト暦に基づくとされる、季節の祝祭はイギリス各地のネオペイガンはもちろんのこと、一部のオルタナティブ・スピリチュアリティに関心をもつ人の中でも祝われていて、季節ごとの自然の変化に敏感になり、自然の移ろいを思い出すことが一般的には目的とされる。

祝祭はケルト暦の大晦日とされるソーウィン（10月31日）に始まり、ユール／冬至（12月21日/22日）、インボルク（2月1日）、オスターラ／春分（3月20日/21日）、ベルターン（4月30日）、リーサ／夏至（6月21日/22日）、ラマス／ルナサ（8月1日）と続き、マボン／秋分（9月22日/23日）に終わる。ベルターンはその年の豊穡を祈る「五月祭」として、夏至はもっとも日が長い日として、ヨーロッパ各地で昔から祝われているし、ソーウィンは、近年アメリカの影響により、イギリスでも「ハローウィン」として親しまれている。ベルターンやラマスは祝日の時期と重なるし、ラマス、ソーウィン、冬至は学校の休暇と重なるため、参加者も多く、イベントの数も増える傾向がある。逆にインボルク、春分、秋分は、参加者も少なく、地味な傾向がある。人々が参加しやすいよう、週末や祝日などに日程をずらして祝われることもある。

グラストンベリーでも、当日には異なる団体によって、複数の季節の祝祭が開催されるが、その日が平日でも他の地域のように日程をずらすことはない。オルタナティブ・スピリチュアリティ専門のフリーペーパー、『ジ・オラクル』でも紹介されている、日中に開かれるチャリス・ウェル庭園の祝祭と、夜に行われる女神神殿の祝祭の人气が高く、両方に参加する人も少なくない。

グラストンベリー女神運動の季節の祝祭に、筆者は表4-6のように合計21回、参与観察を行った。そのうち、ボランティアのメリッサとしては8回参加し、儀式の手伝いをした。さらにその8回のうち、祝祭前の打ち合わせには4回、打ち合わせ後の昼食会と散歩には、それぞれ3回、2回参加した。

2-1 祝祭の準備

続いて、グラストンベリー女神運動の祝祭の準備の様子をみていく。

「季節の祝祭」という儀式に、世界共通の形式はなく、用いる道具、使用する言葉、進行方法などは、基本的には個人や主催者の自由である。しかし、実際には友達やインターネット、ハウツー本から情報を仕入れ、参考にしていることが多かった。

グラストンベリー女神運動の季節の祝祭は、女神の呼び出し、詩・歌・踊りなどの創作アート、女神と出会う体験に分かれていて、その詳細はジョーンズの女神体系に基づいて、毎回新しく創られている。ジョーンズが作成した大まかなアイディアに沿って、企画担当のプリステスのサラが原案を作り、祝祭の進行に携わる人々に電子メールで数日前に送信される。それを資料に当日の朝 11 時から、女神神殿で 1 時間半か 2 時間ほど打ち合わせをする。集まるのは、企画担当者の他、女神役と女神の呼び出し役、雑用をこなすメリッサの計 10 人前後である。歌や踊りの担当者が来ることもあるが、彼らが呼び出し役を兼ねるのはふつうのことである。

この呼び出し役とメリッサは、サラが事前にメーリングリストで募集する。呼び出し役を担うのは、一般的には祝祭のやり方を学ぶプリステス・トレーニング 2 年目受講中以降の人で、8~9 人必要である。人数が流動的なのは、第 3 章 3-2 で示したように、ジョーンズの女神体系では、8 つの方角と中央を合わせて 9 人の女神がいて、希望者が少ないときは、その季節の女神と中央の女神（アヴァロンの女神）を同じ人が呼び出すので 8 人、希望者が多いときは別の人が呼び出すので 9 人なのである。

グラストンベリーと周辺に暮らすプリステスは、必要な人数が集まらないときにサラから直接頼まれたり、当日予定されていた呼び出し役の都合が悪くなったときには代役を務めたり、急遽、遠方に暮らすプリステスが祝祭に来ることになり、呼び出し役を希望した場合、その役を譲ったりする。つまり、呼び出し役は遠方のプリステスに優先的に割り当てられるとはいえ、グラストンベリーと周辺在住者が務めることが多く、彼らは柔軟に対応することが期待されている。

打ち合わせは、近況報告を兼ねた話の共有から始まり、これが 2 時間以上続くこともある。その際に、女神の呼び出しに慣れていないプリステスがその不安を口にし、先輩のプリステスがアドバイスをする場面も見られたが、大半は季節の祝祭とは無関係の話が続く。その詳細は第 6 章で取り上げる。その後、30 分から 1 時間、実際の打ち合わせが行われる。そこでは小道具の置き場所や祝祭後の片づけ、配布物をいつ、どこで、誰が配るかなど、祝祭をスムーズに進めていくための確認が行われる。たとえば 2010 年の春分の祝祭では、春分の象徴としてのたまごを象った紙を配り、参加者に願い事を書いてもらい、中央に置いたまご型の大きな箱（写真 4-1）に入れることになったのだが、その大きな「たまご」を祝祭の後どうするかが議論された。会館の裏庭に埋める案が出されたが、「たまご」

が大きすぎるうえ、「たまご」の埋葬のようだということで、却下された。トールに持っていく案も出たが、結局は、中身の紙「たまご」を燃やし、灰だけを裏庭に埋めることになった。

また、参加者をいかに効果的に祝祭に巻き込むかという演出効果も盛んに話し合われる。たとえば、祝祭の開始後にやってくる人たちの扱いについて、女神を呼び出した後だと、雰囲気は壊されるので断ろうという提案がされたり、祝祭の中で静粛な部分と盛り上げる部分について確認しながら、歌や詩を入れるところを考え直したりしていた。他にも、女神を呼び出す際に、呼び出し役は、参加者の中心で小さくまとまるのと参加者の周りに大きく広がるのでは、どちらが参加者を集中させられるか、女神の体現をするときに、女神の役を担う人は、どこの位置からどのように登場するのが効果的か話し合った。

打ち合わせの後、町のカフェで1時からともに昼食をとり、その後2時か2時半頃から「散歩」をする。これは、ジョーンズの女神体系の中で、その季節と結びつけられた方角に行き、大地を歩きながら、その方角や季節と心的な結びつきを強め、祝祭の成功を祈ることが目的と説明される。しかし、昼食までしか参加しないプリーステスも少なくないし、天候が悪くて参加希望者がおらずキャンセルされることもあった。

ここでは2010年の春分の日の事例から、その様子を見ていこう（写真4-2）。なお、参加人数は12人（女性11人、男性1人）で、筆者以外は全員プリーステスだった。

春分の方角は東であるが、その日は厳密には南東にあたるトールに向かった。筆者はその理由を尋ねたが、他の参加者は自分が東に向かっていないことにすら気づいていなかった。サラの代理で、その日の主催を任されていたジョーによると、「大体東だから構わない」とのことだった。友達の噂話をしたりしながら、みんなで歩調を合わせて、トールに向かった。しかし、麓に着いてからはおしゃべりをやめ、それぞれのペースで頂上に向かった。

ときどき立ち止まって遠くのほうを見たり、大地を踏みしめる足元を見たりしながら、黙々と登っていく。その集中した表情をみていると、声をかけるのも憚られるほどだった。筆者は一番に頂上に着き、みんなの到着を待っていた。到着してからも、ここまで来るときのようにはぺちゃくちゃとおしゃべりをするのではなく、深呼吸をしながら眼下の平原を見晴らしたり、目を閉じて風を受けながら瞑想したりしていた。

最後の1人が到着し、全員の息が落ち着いてきた頃、集まる。輪になって、手をつなぎ、目を閉じて、それぞれが女神に今夜の祝祭の成功を祈る。そして、女神の呼び出しの練習をしようということになり、本番よりも軽い感じである。それから、今夜踊るダンスとそのときに歌う替え歌を練習した。しばらくして、小雨がぱらついてきたため、町に戻った。

この散歩は儀式前の儀礼的行為とみることもできるが、そのわりには参加しない人が少

なくない、簡単にキャンセルされる、方角が不正確である、初めはおしゃべりをしていて緊張感がない、小雨がぱらついたら中止するなど、規範が緩やかである。しかし、トールの上では、簡単な形式ではあるが、全員で儀礼的な行為を行っている。トールは、ジョーンズの視点ではグラストンベリーに横たわる女神の左の乳房とされているし、一般的にもアヴァロンへの入り口とか、本当の自分に出会える迷宮など、非常に特別視されている場所である。筆者は当初、正確でない方角のところで、その方角の女神と結びつきを強められるのか気になっていた。しかしトールという場所がいつもアヴァロンや女神とのつながりを連想させるなど、プリーステスたちを特別な気持ちにさせてくれること、第3章3-4で述べたように、そもそもグラストンベリーの町自体、女神の身体であり聖地とみなされていることを考えると、散歩には物理的な正確さは求められておらず、心的な経験や浮かび上がるイメージから、連帯感を高め、祝祭への気分を盛り上げていく効果があると考えられる。

4時過ぎに解散してからは、一度自宅や宿に戻り、衣装の準備をしたり、夕食を食べたりする。そして、6時半頃、会場の女神会館に向かい設営を行う。ここで、メリッサは音響や照明のタイミングなど、最終確認を行う。女神の呼び出し役たちは7時頃から円形になって、立ったまま瞑想を始める（写真4-3）。

彼らが儀式への集中力を高めていく間、会場となる女神会館の室内をめぐってみよう。

2-2 女神会館の空間構成

第3章4-2で手に入れるまでの一部始終を記した、会場である女神会館は、中心部を少し入った通りにある、アヴァロンの女神の色、堇色の建物である（写真4-4）。図4-2のように、日常を思わせるトイレや台所は扉で区切られた別空間になっている。ホール自体は、ジョーンズの女神体系に合わせた女神の絵と祭壇でぐるりと囲まれている。正面のステージには等身大より大きい籐製の女神の座像が置かれ、こちらが南の方向なので、水をテーマにした祭壇がしつらえてある（写真4-5）。ステージから向かって右手の東の方角には火を、左手の西の方角には地を、入り口横の北側には風をテーマにした祭壇がそれぞれしつらえてある（写真4-6、4-7、4-8）。天井からはプリーステスのクレアがプリーステス・トレーニング中にインスピレーションを得て描いたという、季節の女神の絵がぶら下がっている。これは、女神神殿の正面左の祭壇に飾られていた、季節ごとに架け替えられる季節の女神の絵のコピーである。

祝祭の日には、中央の床に円い布や円い台を用意して、祭壇が創られる。壁際にはソファに加えて、いすも並べられ、床には羊皮の敷物やクッションが敷き詰められる。入館時には、靴を脱ぐのが原則である。しかし、絨毯が敷いてある女神神殿とは異なり、女神会館の床は板張りで、冬には冷える。そのため、寒い季節など、靴を履いたまま入館してよ

いときもある。原則の適用が女神神殿より曖昧なのは、女神会館は女神神殿とは異なり、催し物などに使う実用的な場所として位置づけられ、崇拜の場所とはみなされていないからだと考えられる。

2-3 インボルクの祝祭

さて、いよいよ季節の祝祭の始まりである。本節では、2010年のインボルクを事例に、季節の祝祭の様子を詳しくみていき、女神を通して、「アヴァロン」という世界が立ち現されていくことを指摘する。

7時半、「ようこそ、ようこそ女神神殿の祝祭へ！」というサラの声が会場に響き渡り、会場は静まり返る。中央では、9人のプリーステスが瞑想を続けている。ジョーンズの女神体系にあるインボルクの色を意識して、全員、白い花輪をかぶり、白を基調とした衣装に、緑のシヨールを羽織ったり、腰に巻いたりしている。

サラからいつものように携帯電話の電源を切ること、写真撮影は禁止であることが伝えられていく。そして、この夜7時半から、先天性の障害を持って生まれてきた、あるプリーステスの子供の手術が行われることが告げられる。女神神殿の祭壇にあった写真の子供だ。この子の手術の成功を祈って、赤ん坊とその家族、外科医たちに対してしばらく黙祷した。「女神を呼び出しますので、皆さん起立してください」。サラの力強い声に背中を押されるように、参加者はそろそろと立ち上がる。

ジョーンズの女神体系に位置づけられたアヴァロンにいる9人の女神たちの召喚は、その季節の女神から時計回りで1人ずつ順番に呼び出され、最後にアヴァロンの女神が呼ばれる¹⁰⁶。召喚では、その季節と方角の女神の名前を呼び、その特徴を褒め称え、来てほしいと頼む。

早速、インボルクの女神ブライディが呼び出される場面をみてみよう。

プリーステスのマリカは数歩後ろに下がると、「皆さん、私と一緒に北東を向いてください」と両手を挙げて、力強く告げる。参加者も両手の平を軽く上向きに挙げて、時計回りにくると回って北東の方角を向く。マリカの呼び出しが始まる。

万歳、そしてようこそ、ブライディ。

¹⁰⁶ これは、「サークルを開く」という風に表現される。ふつうのネオペイガニズムでは、どの祝祭でも、東、南、西、北の順に方角のスピリットを呼び出すし、「サークルを掃く (cast)」と表現する。グラストンベリー女神運動とネオペイガニズムの大きな違いの1つである。

素晴らしい乙女。

私たちは、あなたを呼び出します。ようこそ。

ここに来て、あなたの聖なる空間の中で私たちに加わってください。

(中略)

北東のノラヴァよ、来てください。来て、私たちに加わってください。呼吸することあなたを感じ、取り入れます(ここで参加者も大きく息を吸い込む)。今、ここに私たちと一緒にいてください。

万歳、そしてようこそ、ブライディ。

全員で復唱する。「万歳、そしてようこそブライディ」「彼女を連れて、中央に向き直ってください」とマリカが言い、参加者は時計回りにぐるりと中央に向き直る。

呼び出しの言葉の詳細は、その場で湧き上がってくる言葉を使うことが望ましいとされているので、スクリプトは存在しない。この後に残りの7人の女神とアヴァロンの女神も、他のプリーステスたちから同様に呼び出される。その度に参加者はそちらの方角を向き、プリーステスと一緒に女神を歓迎し、中央に向き直る。筆者はグラストンベリー女神運動に関わり始めた頃、周りの人たちはスムーズにできているのに、自分だけこの動作の意味もやり方もよくわかっていないような気がして気後れし、まごつきながら、見よう見まねでこなしていた。

それから、参加者が「女神」に出会えるような時間が設けられる。その方法は毎回異なるのだが、このときは以下のような感じでブライディと「出会った」。

呼び出しの後、メリッサをしていた筆者は予め指示されていたように、灯りを消す。薄暗くなる室内。そこにサラの抑えた声が聞こえてくる、「光をもってくるようにブライディの赤ちゃんたちを呼ぼう」。誰彼ともなく、「ブライディ、ブライディ」と囁き始める。そこに入場してきたのは、ろうそくをもった子供たち。先頭はプリーステスのソフィーの孫娘で、四方の祭壇のろうそくに火を点けていく。その後からはマリカの娘や息子など10人ほどの子供たちが続く。子供たちは、中央のプリーステスの輪の中に座り、この晩、手術を受けている赤ん坊のために、ブライディを称える歌を歌う。もう一度、その場にいる全員で歌う。

それから再び、「ブライディ」「ブライディ」と口々に囁く。すると、部屋の中心にあった謎めいた黒い布のかたまりがもぞもぞと動き出す。ゆっくりと立ち上がり、姿を現したのは、布をかぶって小さく丸まっていた「ブライディ」。「私の子供たちが沢山いて、嬉しい」と言い、次々と短い言葉を発していく。扮しているのはアマチュア歌手のプリーステス、ソフィーのようだ。

「暗闇の中でずっと待っていた。だから出て来られて嬉しい」（「暗闇」とは黒い布で待っていたこと）

「まだ若いのだから、あまり多くのことを知らない」（60代の彼女がそう言ったため、笑い声が起こり、ブライディはもう一度「若いのよ！！」とやけ気味に強調。再び笑い声）

「冬は暗い。でも明るいよ。雪は白く明るかったでしょう、本当に暗い時期でも」（数週間前に降った大雪のことを思い出してか、また笑い声が起こる）

「共有しましょう」

「内部で私を感じられますか？ そうよ、そうよ、何か言わないとだめよ」と言われ、みんな「そうです、そうです」と声を上げる。

「もう一度笑いなさい」

「新年を始めましょう」

「お互いの愛し方を知っていたら、物事は易しいのよ」

「みんなで愛しましょう。私たちはみな1人の人間、一緒になればすごい大きな存在」

「愛があれば、すべてを変えられる」

「私のためにそうしてくれました、だって私はあなただから」

「違うことができる」

「あなたたちはみんな私の人々」

「私の白鳥を見たかしら？ 私は白鳥ではないけれど」と言って、衣装の下についている白いひらひらをひらひらと振る。（このパーツは白鳥の羽を表わしているらしい）

「今日皆さんを呼んだのは、とても特別な日だから」

「私たちはあなたの中に場所が必要です。私を呼んでくれる？ 私に何か新しいことをしてくれる？」

「大好きよ、大好きよ、大好きよ」

「一緒にできるわ」

「美しい女性を見て御覧なさい」（誰を指すのかは不明）

そして「歌を歌いましょう」と言うと、1人の女性（60代）が立ち上がって、ブリジットの歌を歌い始める。

炎立つ矢から生まれたブリジット、私たちの女神
神性の炎、暗闇から導いておくれ

ブライディは「千の天使の声だわ」と褒め称え、続いて、この歌を全員で歌う。

ブライディは詩を聞きたいと言い出す。サラが「マリカの詩がございます」と言い、マリカ

は立ち上がって、インボルクをテーマにした自作の詩を朗読する。この間、ブライディは部屋の中央で衣装の羽を手でひらひらさせながら、くる〜りくる〜りと回っている。朗読が終わると、それを褒めたうえで、「もっと欲しい！」と駄々っ子のようにねだる。サラの紹介で、プリーステスのエマ、ソフィーの孫娘、プリーステスのリズが次々とインボルクやブリジットをテーマにした詩を朗読し、その度にブライディは幼児のような声で褒める。

別のプリーステスのホリーが立ち上がり、遠慮がちに、「ブライディ、ブライディ・クロスを作ろうと思うんだけど」と提案し、そうすることになる。ホリーが作り方を説明し、フロアにカヤツリグサと輪ゴムが回される。

ブライディ・クロスは、一般的にはブリジット・クロスと呼ばれる、草で編んだイギリスの藁細工である（写真 4-9、4-10）。このように、その季節にちなんだものを作る以外に、歌や踊りといった、参加者が実際に何かをして、楽しむ時間は必ず設けられている。

この間に合唱隊が、ソフィーが作詞作曲したブライディの歌を歌う。このような女神を称える歌は、必ず何曲かは歌われる。

ブライディ、火の乙女、源の女神

私の心を満たしておくれ、私の魂を満たしておくれ

見るのを助けて、知るのを助けて、あなたの真実を愛することを助けて

見るのを助けて、知るのを助けて、あなたはやってくる

白鳥、蛇、狼、牛のスピリット、ブライディは自分のパワーのすべてを私たちのもたらせてきてくれる

ケルト十字と紡ぎ車を通して、変化のパワーと癒しのパワー

インスピレーションの女神、癒しの手を持った女神、称賛の女神

聖なる土地の君主たる女王

歌にあわせて、プリーステスのメルを中心とした女性たちが踊りを披露する。ブライディ・クロスを作り終わった人々は、立ち上がって歌に合わせながら、楽しそうに体でリズムを取る。

ブライディからの贈り物として、ブライディのシンボルの1つとされる大麦で作ったカップケーキを、子供たちが一掴みずつ配っていく。その間にブライディ役のソフィーは元の布の中に戻ってしまった。祝祭は最終段階に入る。

プリーステスたちが初めのように中央に集まり始める。「皆さん、私と一緒に北東を向いてください」。マリカが両手を挙げて、力強く告げると、参加者も両手の平を軽く上向きに挙げ

て、時計回りにくるりと回って、北東の方角を向く。マリカは初めと同様にブライディを称える言葉や今夜の祝祭の成功を感謝する言葉を唱えていく。「ありがとう、そしてあなたの神殿からさようなら、ブライディ」という最後の言葉に続いて、参加者も復唱し、時計回りに中央に向き直る。これでブライディはアヴァロンに帰ってしまった。他のプリーステスたちも、初めと同じ順番で女神たちにお礼を言って、帰ってもらう。

その後、サラから女神神殿のヒーリングなどの各イベント、プリーステスから自分が主催するワークショップやツアーのお知らせが続く。最後にサラが子供の手術の成功を知らせる連絡が母親からあったと告げ、その場に安堵のため息がいくつも聞こえた。

終わったのは9時半頃。「女神神殿は皆さんからの寄付だけで成り立っています」とサラが言う。筆者も小さなかごをもって寄付金を集める。

祝祭後、大抵の人々は久しぶりに会った友人たちとおしゃべりに夢中になっている。自分や家族の近況について話したり、友人や新しい恋人を紹介したり、頼みだった用事をお願いしたり。めくるめくおしゃべりは、会館がすっかりきれいになり、閉館の準備が整うまで続いた。

以上の記述を整理すると、季節の祝祭ではアヴァロンにいるとされる女神が、次の3つの行為を通して「演出」されている。1つ目はアヴァロン島からの女神たちの召喚である。呼び出し役の言葉だけでなく、参加者が全員でくるりと回ること、会場に女神がもたらされるとされる。女神に近くで見守られながら祝祭を行うことになっているのである。2つ目は普段はアヴァロンにいる女神の体現である。参加者は女神と「出会った」という体験をすることになっている。女神からの言葉は、一般的な格言めいていて女神とは関係のないものもあるが、若さの強調や白鳥への言及は、白鳥と乙女をシンボルとするブライディ、つまり女神と関係しているといえる。3つ目は女神を称える詩の朗読、歌や踊りである。女神の名前を繰り返したり、呼びかけたりすることで、女神がその場にいるかのような臨場感がもたらされる。

これらの3点のように、アヴァロンにいるとされる女神を「演出」することで、その女神が暮らすとされる「アヴァロン」の存在がリアルなものとして、その場に現出されていく。しかし、このような「演出効果」は、必ずしもすべての参加者に理解されているわけではない。

2-4 祝祭に集まる人々

ここでは、季節の祝祭にみられた、グラストンベリー女神運動の積極的な参加者とその他の一時的な参加者との関係について考えてみる。

そのために、まず参加者の概要を説明する。その日が休日かどうかや当日の天候の良し

悪しにも左右されるが、筆者が参加した 21 回では、祝祭の運営に携わる者も含め、80～150 人がやってきて、そのうち男性は 1～4 割だった。小学生や乳幼児を連れてくる人も少なくなかった。積極的な参加者は全参加者のうち、2～3 割である。プリーステスを中心とする前者はこのイベントを「グラストンベリー女神運動の季節の祝祭」と認識し、どのようなことが行われるか理解しており、定期的に参加する傾向がある。互いに知り合いであるケースも少なくなく、季節の祝祭への参加が友達との定期的な交流の場になっている。一時的な参加者の大半は、本章 1-1 の繰り返しになるが、『ジ・オラクル』等で知ってやってきた、普段は女神運動と関わりのない観光客であり、その他に季節の祝祭のみときどき加わるグラストンベリーの住人がいる。一時的な参加者はふつう、女神神殿が主催しているとか、どのようなスタイルで行われるかということは重視しておらず、単に「グラストンベリーで開かれている季節の祝祭」の 1 つとみてやってきている。

グラストンベリー女神運動になじみが薄い後者のような人々がいるのに、儀式の前や最中に、祝祭の中でみられるシンボリズムや、2-3 で指摘した 3 点の行為の意味、呼び出される女神などは全く説明されない。冒頭で挙げた儀式でも、イメージを想像しながら瞑想するヴィジュアライゼーションのやり方も説明されていなかった。そのため、ときに後者のような人々は筆者が当初感じたような戸惑いをおぼえる。「部外者」に対して儀式の意味が説明されないというのは、ふつうのことかもしれないが、グラストンベリーでみられる他のオルタナティブ・スピリチュアリティの催し物や儀式では、なじみのない人が参加していることを前提として説明があることが多いので、余計に戸惑いは大きい。

また、祝祭の前後に、積極的な参加者は談笑をして旧交を温めているのだが、その様子は話しかけることをためらってしまうほどに親しげであり、コミュニケーションが生まれにくい。グラストンベリーの他の催し物のように、見知らぬ人から声をかけられることは稀で、筆者は当初、場違いなところに来たのではないかという気になり、少々居心地が悪かった。

加えて、積極的な参加者と一時的な参加者が受ける待遇には微妙な違いがみられる。それは次のような形で表れている。まず、壁際に用意された椅子には、高齢者や超肥満体の人など床に座るのが難しい人が優先して座れるのだが、該当する積極的な参加者は、予め「予約席」と書かれた紙を椅子に貼り、良い席を確保している。一方、一時的な参加者からすれば、会場に入ったときにはすでに椅子の多くが予約済みで、ふつうは床に座ることになる。また、積極的な参加者は台所やステージの裏に入り、私物を置くことが暗黙の了解となっている。その利点はたとえば靴の見つけやすさである。入館の際、建物の入り口で靴を脱ぐこともあるのだが、靴箱等はないため、山のように靴が積み重なっていき、帰る際、自分の靴を見つけるのは一苦勞である。しかし、台所やステージの裏に確保しておけば、難なく見つけられるし汚れない。それから、祝祭の後、軽食を伴ったの誕生会など

が開かれることもある。そのようなときには一時的な参加者が帰るのを急かさずに、何事もないように装って待ち、彼らがいなくなってから入り口を閉め切り、パーティを始める。一時的な参加者が知らないところで、こんなふうには、こっそりと秘密が存在しているのである。

つまり、グラストンベリー女神運動は、季節の祝祭を『ジ・オラクル』で宣伝し、公に参加を募るなど、一見オープンだが、儀式の説明をしない、仲間内だけで親しげな様子を見せる、待遇が異なるといった形で、儀式の前後、最中を通して、積極的な参加者と一時的な参加者の間に見えにくい形で隔たりが生じている。

このような周囲との溝は儀式の場だけではなく、準備段階からみられたともいえる。祝祭の運営に関わる人々、つまり積極的な参加者の中でも、特に積極的に関わっている人々は、本章 2-1 でみてきたように、季節の祝祭の日、その準備のため、ほぼ 1 日拘束される。そのため、チャリス・ウェルをはじめ、町で他に開かれているイベントに参加することは難しい。実際、筆者はグラストンベリー女神運動の季節の祝祭の打ち合わせに行かなかったときには、他のイベントに参加していたのだが、そのような場では色々な場面で知り合った友人を沢山見かけるのに、女神の友人を見かけたことがほとんどなかった。つまり、グラストンベリー女神運動に積極的に関わろうとするほど、それ以外の町の活動から隔てられていく。

3、隔たりを伴う共同性

ここまで季節の祝祭の日に、グラストンベリー女神運動の積極的な参加者とそれ以外の人々の間に溝が生じている様子を見てきた。ここでは、このような隔たりがなぜ生じているのか考察する。

祝祭の日、積極的な参加者との間に溝が生じた相手は 2 種類ある。1 つは町の住人や来ている観光客である。彼らとは、当日グラストンベリーで行われていた他の季節の祝祭に参加せず、自分たちだけで過ごしたことで、空間的に隔てられていた。運営を担った積極的な参加者は、彼らと接する代わりに朝から打ち合わせをし、昼食をともにし、散歩に出かけた。その結果、得られたものは何か。それはともに過ごす時間である。筆者自身の経験を振り返ると、たとえばチャリス・ウェルの祝祭は、ふつう 10 分～30 分程度で終わるうえ、100 人以上も来ているので、顔見知りの人に会釈したり、立ち話を少ししたりするのがせいぜいだった。一方、グラストンベリー女神運動の打ち合わせ、および昼食会と散歩に行けば、雑談の時間が豊富にあったので、積極的な参加者とより長い時間を一緒に過ごすことができたし、色々と話をすることができた。

しかし、この場合の溝が生じた相手の範囲は特定できないほど広く、打ち合わせに参加する積極的な参加者の数も限られている。その一方で、同じ空間と時間を共有していた、1

回だけ、またはときどき季節の祝祭にやってくる一時的な参加者との隔たりは、よりはっきりと現れている。本章 2-4 で指摘したように、積極的な参加者と一時的な参加者は、同じ儀式に参加しているにもかかわらず、儀式の説明がない、秘密裏に待遇が異なる、コミュニケーションが生じにくいなどの行為によって、祝祭中にもその前後にも分け隔てられている。このことは何を意味しているのだろうか。

1 つ考えられるのは、積極的な参加者が、自分たちと「部外者」である一時的な参加者との間に意識的に溝をつくって、主体性を維持しようとしていたということである。女神の召喚の場面でみたように、儀式中はその場に参加しているすべての人々に同じようなパフォーマンスをすることを暗黙のうちに求める。そして、パフォーマンスに協力しない人、つまり儀式に積極的に加わらず、遠巻きに眺めているような人には、気づいたプリーストスがそっと近づき、短い言葉をかけて、参加を促す。このようなパフォーマンスの「強制」は、一時的な参加者から主体性を奪われて、積極的な参加者が「見世物」になることを防ごうとしているからだともみることできる。パフォーマンスをせずにその場にいるという行為は、パフォーマンスをしている人たちを「観察する」ことにつながる。「観察する」一時的な参加者は、観察対象を分析し、様々な考察をめぐらす可能性がある。そのとき、「観察される」積極的な参加者は、自分たちの行動の理解に関する主体性を、「観察している」人々に奪われてしまう。その一方で、一時的な参加者にパフォーマンスを強制することは、積極的な参加者の主体性の発揮につながる。そうして積極的な参加者が儀式において、主体性を保持することを可能にする。

しかし、隔たりの存在はこれだけでは説明できない。なぜなら、それならば見られないように自分たち以外の人々を締め出して、儀式をすればよいからである。積極的な参加者の一時的な参加者に対する主体性の維持は、副次的に生じているにすぎない。

それよりも季節の祝祭が、積極的な参加者にとって、互いの連帯感を高め、共同性を生み出す場だから、結果的に一時的な参加者との間に隔たりが生じているとは考えられないだろうか。

本章の冒頭のアヴァロンの女神に捧げる祝祭や第 2 節の季節の祝祭では、女神会館という室内に非日常の世界としての「アヴァロン」を創り出した。これは Greenwood [2000a] の調査した魔女たちが信じているファンタジーとしての異界 (Otherworld) に似ている。Greenwood は、魔女たちは想像力の中で異界に行くが、異界の存在を真剣に信じているという。しかし、筆者は季節の祝祭のとき、積極的な参加者がアヴァロンや女神の存在を真剣に信じて、その場にいたかどうかは疑わしいと思った。

なぜなら、季節の祝祭の準備のときに盛んに話し合われていたのは、劇の準備でもするかのような演出効果であった。また、女神を召喚した後、実際にその場にいるかどうかを確認する行為は行われず、召喚という行為が、女神がその場にいるという事態自体を成就

させていた。さらに、祝祭中も真剣な面持ちではあるものの、女神からの言葉を聞いて、エクスタシーや興奮のあまり倒れるような人、そのような状態に陥っているような人は皆無であり、皆ただ淡々とその様子を静かに観ているのである。つまり、プリーステス・トレーニングなどを通して、儀式を養成している世界観を理解している積極的な参加者は、異界「アヴァロン」を信じるというよりも創り出しているという意識を共有していたと考えられる。そのため、その場の一体感をぶち壊すような、パフォーマンスに参加しないという行為は咎められていたと理解できる。

疑わしく思った理由はもう1つある。祝祭の後、よく「どうだった？」ではなく、「楽しかった？」と声をかけられたことである。また、祝祭の感想を尋ねても、「出会った」はずの女神に触れる人はおらず、祝祭の雰囲気やわいわいしながらアクティビティを楽しんだこと、久しぶりに友達と会えたことばかりが返事として返ってきた。ケルト暦の季節ごとに実施される催し物は“ceremony”と呼ばれる。本稿では、この催し物の雰囲気に合わせて、基本的には「祝祭」と訳しているが、“ceremony”はラテン語の *caerimonia*（宗教的崇拜）に由来し、「儀式」「式典」とも訳される。そのため、筆者は当初、人々がもっと荘厳な心持ちで、女神からの力を感じる神秘的な体験といったものを得ようと、季節の祝祭に臨んでいると考えていたので、楽しむことを前提とするような質問の仕方や女神とはあまり関係のない点への評価に、私の目も点になったものだ¹⁰⁷。

つまり、季節の祝祭とは、積極的な参加者が「アヴァロン」の創出を共有したり、おしゃべりをしたり、秘密をもったりして、内部での連帯感を高め、共同性が現出していく場だと考えられる。そのため、それ以外の一時的な参加者は必然的に排除されてしまい、その結果として、溝が生じているのである。このことは、本節の初めに検討した祝祭の準備に関しても、長い時間を一緒に過ごしたという点において当てはまる。そもそも、積極的な参加者であるプリーステスが優先的に扱われるという運営形態も同様の理由から、閉鎖的になっているといえる。グラストンベリー女神運動にみられる排他性は、意識的につくられたというより、積極的な参加者が共同性を求めた結果、生じたのである。

ところで積極的な参加者は、毎日をグラストンベリー女神運動の関係者とともに過ごしているわけではないが、フェイスブックやメーリングリストを通じて、頻繁に交流している。しかし、それでもなお、このような共同性を必要としているのはなぜなのだろうか。それを明らかにするため、次章ではプリーステスたちの声に耳を傾けたい。

¹⁰⁷ 「おちょくる」同様、「目が点になる」という表現も、論文にはふさわしくないかもしれない。しかし、儀礼後の会話の中での、問いかけに対する相手からの返答に対して、筆者の目が大きく開かれ、丸くなった。自分のこの身体的な反応を表す表現としては、この慣用語がもっとも近いので、ここでも「不適切」と批判されることを承知のうえで、使用している。

第5章 移住という選択肢

女神、女神って言うけど、何でグラストンベリーが女神の聖地なわけ？ キャシー・ジョーンズの本、読んだことあるけど、モーガン・ル・フェイって、あれ、ただの妖精だろ？ 妖精は女神じゃないよ。『アヴァロンの霧』とかいう小説に出てくるだけだろ？ 聖書やコーランとは違って、創作された物語の中の登場人物を信仰するなんて理解できない。馬鹿げてると思えないんだけど。

2009年の女神カンファレンスが終わった、夏のある日、私は偶然知り合った、地元出身のコンサルタントの男性（40代）とカフェで話をしていた。女神カンファレンスがどういふものなのか尋ねられ、ジョーンズの始めた女神運動の説明を一通りしたところ、冒頭のような返事が返ってきたのだった。

このときは、友達をけなされた気がして、思わずむきになって反論してしまった。が、確かに彼の言う通りかもしれない。ここまでみてきたように、アヴァロン島伝説に基礎をおいたグラストンベリー女神運動はファンタジーに満ち溢れている。といっても、プリーステスといえども、ファンタジーの中でただのんきに楽しく過ごしているわけではない。第4章では、周囲と隔たりをつくってしまう排他的ともいえる共同性がみられることを指摘した。本章では、個々のプリーステスのライフストーリーに立ち入り、彼らがそういった場を必要としている背景を探りたい。

第4章1-1で示したグラストンベリー女神運動の参加者の分類の中で、1)の一時的な参加者から3)の積極的な参加者に移動する、つまりこの女神運動により深く関わるようになるとは、グラストンベリー女神運動の催し物に頻繁に参加するようになることであり、自身が催し物の運営側に回ることだといえる。それを容易にする1つの要因は、グラストンベリーやその周辺に居住することである。

表5-1は、2010年の時点でのグラストンベリー女神運動の催し物等の運営を担当した人とその人たちの居住地の一覧である。グラストンベリーと周辺在住者はのべ25人、それ以外はのべ14人で、前者の割合が高いことがわかる。また表5-2は、筆者が参加した季節の祝祭で、女神の呼び出し役を務めた人のうち筆者が個人を特定できた人と、女神カンファレンスで運営を担った人の、のべ人数である¹⁰⁸。季節の祝祭のほうは6割以上をグラストンベリーと周辺在住者が占めている。女神カンファレンスのほうは半分以下だが、1年に一度の大祭典である女神カンファレンスのほうが、より広い範囲から、より多くの人数が来ることを考えると、この割合は高いといえる。

¹⁰⁸ 儀式ごとの積極的な参加者の参加の有無についても調べたが、全参加人数が毎回100人程度であり、見落とししている可能性もあるので、参加者一覧のデータは割愛している。

表 5-1 と表 5-2 でカウントされている人は、少なくともその時点では、積極的な参加者であった人々である。これらのデータから、積極的な参加者はグラストンベリーとその周辺に暮らしている傾向が窺える。近くに住んでいるから積極的に活動しやすいともいえるが、積極的に関わりたいから移住してきたとも考えられる。

引っ越しとは、それまでの人間関係や仕事など、生活のすべてを変えてしまう可能性をもつ人生の一大事である。2010 年の時点でのグラストンベリー在住の積極的な参加者は、表 5-3 のように、1980 年代前半に祖母と母親がトラベラーとしてやってきた 17 歳の少女を除き、全員が移住者であり、ほぼ全員がその一大事を経験しているといえる。これらのことを考慮すれば、移住とグラストンベリー女神運動への積極的な参加には、何らかの因果関係があると予想される。

そこで本章では、グラストンベリーに移住してきた積極的な参加者のうち、プリーステスたちから聞き取ったライフストーリーに基づいて、彼らがグラストンベリー女神運動と出会い、グラストンベリーに移住してきたプロセス、および移住後の生活の様子を探っていく。特に彼らがグラストンベリーへの移住に何を期待していたのか、なぜそのように考えるに至ったのかという移住を決めた背景と、移住後の暮らしの捉え方に焦点を当て、先に移住していた人々の存在が果たす役割について検討する。そのうえで、第 4 章で明らかにした共同性を生み出した背景を考える。

分析に入る前に、被調査者の語りを資料とするときに、生じるであろう問題と本稿での対処方法を述べておく。その危険性とは、語りの信頼性である。オルタナティブ・スピリチュアリティの実践者を研究対象とする場合、第 4 章 1-2 でも少し触れたが、自分を「神秘化」して呈示する傾向があるので、注意する必要がある。たとえば、本章で取り上げるリズは、グラストンベリーへの引っ越しの理由について、積極的な参加者の集まりの場では女神からの声を聞いて、その声に従ったからだと説明したが、後日、筆者が確認したところ、「うん、まあ…、でも、それより庭のためよ！」と断言し、庭仕事への熱い思いを語った。つまり、語りをすべて真剣なものとして捉え、語りのみを分析することは、被調査者が呈示したがっている世界へと誘導され、客観的な分析を難しくする恐れがある。そのため、本章では、筆者自身のインフォーマントとの日常生活での接触を通じた観察も合わせて分析していく。

なお、プリーステスのうち、かなり詳しい話を聞いたのは 16 人である。2009 年以降に引っ越してきた 5 人を選んだのは、筆者の調査時期と重なり、引っ越してからの変化の様子を観察しやすかったからである。比較のため、引っ越さない人、引っ越せない人、出て行った人も 1 人ずつ取り上げている。

1、グラストンベリー住宅事情

グラストンベリーへの移住を考えるにあたって、移住を比較的容易にしている、イギリスとグラストンベリーの住宅事情について説明しておく。

まず、イギリスでは一般的に不動産の価格が年数を経たからといって下がらない。イギリスの住宅は石づくりであるうえ、地震もほとんどない国なので、住宅の耐用年数が長く、資産価値が失われにくい。そのため、地域や立地条件、そして景気にも左右はされるが、持ち家を売れば、新たな資金なしで、同じようなグレードの住宅を手に入れることが可能である。

そのうえ、第2章で述べたように、大規模な商業施設など不動産業者の売り出しの目玉となる魅力に乏しいグラストンベリーでは、住宅の値段がそれほど高くない。筆者の大家ヘイゼルが、2011年4月に3LDKの自宅を売却した際の売値は、約23万ポンドだった（間取りは第2章図2-8参照）。そのため、都会やその郊外の持ち家を売却して移ってくる場合、グラストンベリーは新たに家を購入しやすいところである。

それから、イギリスではシェアハウスという居住形態が普及している。シェアハウスでは、複雑な賃貸契約を結んだり、公共料金を契約したりする必要はなく、家主に家賃を渡すだけで済む。家具つきの部屋に住むことも可能で、住宅を購入するだけの資金力がなくても、その日のうちから生活を始められる。特にグラストンベリーの場合、観光客の少ない冬場には、B&Bが客室をシェアハウスと同等の料金設定で貸し出すため、比較的部屋を見つけやすい。

つまり、収入面さえクリアできれば、グラストンベリーという町は移住しやすいところといえる。しかし、第2章1-2と3-3でも説明したように、失業率が全国平均より高いグラストンベリーにあって、地元で良い条件の雇用先を見つけることは容易ではない。

2、プリーステスたちと移住

グラストンベリーへの移住によって、移住前より良い仕事を得られる可能性はまずない。それなのに、なぜ移住は誘発されるのだろうか。本節では、プリーステスたちに移住を決断させた、またはさせない、できない背景に留意しつつ、8人の事例をみていく。なお、引っ越したプリーステスの事例としてあげている初めの5人については、グラストンベリー女神運動にやってくるのがどのような人物であるかを提示するという意味でも、やや詳しくみていく。その中でも初めのエマのような背景をもっている人はよく耳にしたため、彼女のことはかなり詳しく取り上げている。後の3人はグラストンベリーに移住しない選択肢を中心にみていく。8人中、6人が女性である点、全員中高年である点は、事例に偏りがあるように見えるが、第4章1-2で指摘したように、そもそもプリーステスには女性と中高年が多い。また、[]内にはインタビューをした日づけを示したが、その日以外に交

わした会話から得たデータも用いている。

2-1 夫の死後、引っ越したエマ（50代、元事務員、西ミッドランド地方出身）

[2010年6月8日]

「あら、うちの隣に住んでいたの？」互いに顔見知りではあったが、初めてエマと話をしたのは、2009年12月になってからだった。彼女は、その年の秋から筆者の隣家のB&Bに暮らしていたのだった。

○ネオペイガニズムへの違和感

エマは宗教に関心がない両親のもとに育ったため、キリスト教には親しみがなかった。その一方で、夫ともども、ストーンサークルなどの巨石文化に関心があり、遺跡をよく2人で訪れていた。また、ともにネオペイガニズムにも関わりをもっていた。

魔女術に関わってみたこともあるけど、私には合わないと思ってやめた。[イングランド南西部の]エイブベリーのオープンなドルイドの儀式に参加したこともあって、ドルイドのほうが魔女よりは親近感を持てたかな。夫は積極的に参加したがったんだけど、私は遠慮したかった。

彼女は魔女術やドルイド教といった主流のネオペイガニズムに関心を寄せてはいたものの、集団での実践にはしっくりこないものを感じ、大人数での集まりや儀式とは深くは関わりあってこなかった。どちらかと言えば、関心がある夫に付き合っていたにすぎなかった。

○グラストンベリーとの出会い

ネオペイガニズムの実践より、イギリス各地の巨石文化の遺跡めぐりを楽しんでいたエマが、グラストンベリーを訪れることになったきっかけは、アーサー王伝説愛好家の兄だった。夫妻が度々、イングランド南西部を訪れていることを知った兄は、アーサー王とアヴァロン島の伝説の地であるグラストンベリーを訪れることを勧めたのである。そこまでアーサー王の伝説に興味がなかったエマだったが、夫と近くの遺跡を訪れた帰り道、グラストンベリーに立ち寄った。1999年のことだった。

夫と2人でトールにのぼって、頂上からの景色を見たとき、2人で「故郷にやって来た」と思った。

エマ夫妻をグラストンベリーに誘ったのは伝説だったが、強くひきつけたのは景観だった。真っ平らのサマーセット平原の中に立つトールからは、イギリスの原風景としてイギリス人が親しみを感じる、緑の草原を 360 度のパノラマで見晴らせる。こうして、グラストンベリーに魅了された夫婦は、その後も度々足を運ぶようになる。

○グラストンベリー女神運動との出会い

3 回目か 4 回目の訪問のとき、夫妻はふと女神神殿を覗いてみた。

女神神殿があることは知ってたよ。でも、それまでは、女神はどこにでもいるんだから、私たちには女神神殿なんていないと思っていた。けれど、初めて行ったときに、「うわあ、素敵なお場所だなあ」って思った。それから、2 人で季節の祝祭にできるだけ参加するようになったんだ。でも、それ以外では、ろうそくを買って、自宅で使ったりするぐらいだった。

初めは訝しがっていたものの、女神神殿への訪問をきっかけとして、夫妻はグラストンベリー女神運動に関わるようになっていったのである。地理的にオルタナティブ・スピリチュアリティに関心をもつ観光客が行きやすいところにある女神神殿との出会いと訪問は、グラストンベリーへのリピーターとなっていた 2 人にとって、ある意味必然だったともいえる。しかし、この段階ではまだ「一時的な参加者」にすぎなかった。故郷の町に暮らしつつ、ときどきグラストンベリーにやってくる、季節の祝祭に参加するという生活に満足していたエマには、その生活を変える理由がなかったのである。

○夫の急死とグラストンベリー女神運動への急傾倒

そんな彼女の人生が一変したのは 2006 年 7 月のことだった。夫が急死したのである。

世界がひっくり返るほどのショックだったわよ。(中略) それまでに何度か女神の季節の祝祭に参加していたから、夫が亡くなったとき、アヴァロンの女神が彼をアヴァロン島に連れて行ったんだと思った。アヴァロン島は死者の島でもあるわけだから、あの人はあそこに行ったんだって。

彼女は夫を火葬した。かつてはキリスト教の考え方にに基づき、土葬が主流だったイギリスだが、現在では火葬を選ぶ人が増えてきている。火葬にすれば、土葬に必要な墓地の取得費用がいらないだけでなく、遺灰の取り扱いに決まりがないため、故人との思い出の場所などに自由に撒けるからである。そのときに、何らかの形で宗教的な儀式をすることを

希望する遺族は多い。エマの場合、キリスト教風の葬儀には気が進まなかったため、知り合いになっていたジョーンズを通して、そのような儀式を執り行う仕事をしているプリーステスのサラを紹介され、儀式を終えた¹⁰⁹。

夫の死をアヴァロン島やアヴァロンの女神と結びつけ、葬儀という人生儀礼をグラストンベリー女神運動のプリーステスに託したエマは、この頃には季節の祝祭に繰り返し参加することにより、「一時的な参加者」でありながら、グラストンベリー女神運動の考え方を部分的に内面化しつつあったことがわかる。夫の葬儀をきっかけに、ジョーンズ以外のプリーステスとも知り合ったエマは、より一層グラストンベリー女神運動の世界に足を踏み入れていくことになる。

夫の葬儀の翌年、女神カンファレンスに初めて参加する。その年のカンファレンスのテーマは老いと死だったため¹¹⁰、夫を急に失った悲しみにくれていた彼女には、自分の心境にじっくりくるものがあり、参加を決めたのだった。その年の10月からプリーステス・トレーニングを始めたのだが、その理由については、「女神に呼ばれたから」としか語らなかった。しかし、それまで6年あまり、グラストンベリー女神運動と関わり続けていたのに、一時的な参加者の状態を脱しなかったエマが、夫を亡くしてから女神カンファレンスに参加するだけでなく、プリーステス・トレーニングまで始めたことを考えれば、夫の死がその引き金になったことは容易に推測できよう。

彼女は部分的に内面化していたグラストンベリー女神運動の世界観の中で夫の死を理解したと先ほど述べた。しかし逆に言えば、夫の死が納得いく形で説明されたので、これ以後、この女神運動に傾倒していったとも考えられる。

○グラストンベリーへの移住

プリーステス・トレーニングはエマに新しい人間関係をもたらした。年に8回、「いつも同じメンバーで集中的に顔を合わせるから、深く親しい関係を築けている」と感じるようになったのである。次第にグラストンベリーへの移住まで考え始めるようになり、2009年9月にととうとうグラストンベリーにやってくる。

¹⁰⁹ 2006年に調査をしていたとき、筆者はサラからある葬儀の手伝いをしてほしいという電話を、その当日の朝に受けた。しかし、そのとき筆者は他の調査で出かけていて、留守番電話のメッセージに気づいたのは夕方、手伝うことはできなかった。その4年後、エマにインタビューをしている中で、そのときの葬儀がエマの夫のものだったことを知り、驚きを隠せなかった。

¹¹⁰ この当時、女神カンファレンスは処女、恋人、母、老婆という女性の4相を1年毎にテーマとしていて、2007年はその最後の年だった。

4人の子育てに忙しかったし、夫ととても仲が良かったから、故郷には友達も少なかった。だから、夫が亡くなってから、女神の姉妹兄弟（sister and brother）が沢山いるグラストンベリーに引っ越してきたかったの。

ここでは、親しい人の少ない故郷と対比させて、グラストンベリーが気心の知れた仲間がいる場所として語られている。

なお、彼女がグラストンベリーに引っ越すことができた現実的な要因として、夫を亡くし、子供も独立していたため、家族に対する義務感がなかったこと、仕事をしなくても、失業者用給付金というイギリスの制度を利用できたことを指摘しておきたい。ある程度の貯金もあったエマは、給付金と合わせれば困らないだけの収入を得られるボランティアを見つけたとき、事務員の職を辞し、グラストンベリーに引っ越してきているからだ。

○グラストンベリーでの暮らし

しかし、期待を込めてやってきたグラストンベリー生活は順風満帆ではなかった。第6章でも触れるが、筆者が観察したかぎり、彼女はいつも居住スタイルに悩み続けていた。家族以外の人と暮らしたことがなかった彼女にとって、50代になって初めて経験したシェアハウスでの暮らしは気疲れするものだった。その一方で、夫が死ぬまでやはり経験したことのなかった1人暮らしも物寂しく感じていた。子供たちの訪問を期待するものの、交通費がかかるので、思っていたほど来てくれなかった。しかし、故郷に戻って子供たちと同居することにも気は進まなかった。

グラストンベリーに戻ってきて、[大手スーパーの] モリソンズでの買い物中に [ブリーステスの] ローズに会ったとき、すごく嬉しかった。今ではこっちのほうが戻るべき場所という気がする。

とある集まりの場で話したように、自分が故郷に帰っても、家族以外に親しい人がいないため、疎外感を覚え、早くグラストンベリーに帰りたくなってしまったのだ。

エマは、新たな人生を歩みだした母親の変化に戸惑う娘たちと不和になったり、新しくできた恋人に振られたり、移住後も新たに苦しみを抱えていった。それでもインタビューのときには、町での暮らしを「挑戦的」と語り、後悔している素振りもなく、「前は孤独だったけど、今は女神の仲間たちが助けてくれる」というふうに強い口調で語った。

○イメージの変遷

エマのグラストンベリーのイメージは、グラストンベリーと出会って以来、どのように

変化していったのだろうか。当初は、グラストンベリー女神運動という親しみをもてる活動が繰り広げられている、時折非日常性を楽しむ場所にすぎなかった。しかし、夫の死をきっかけとして、プリーステス・トレーニングを受講し、グラストンベリー女神運動の人々と親しくなっていくにつれ、自分にとってかけがえのない人々が沢山暮らしている場所となっていく。そのような人々との出会いは、夫の死という苦しみから解放されていく過程でもあったと考えられる。その人たちの存在こそ、やがてエマに移住を決意させた。移住後、新たな苦しみが降りかかってくる、それを「挑戦」と捉え、逃げるのではなく、挑もうとする。グラストンベリーを自分を支えてくれる仲間がいる自分の居場所とみる、移住前からのイメージは揺るがないのである。

2-2 離婚後に引っ越したカリン (40代、法律事務所勤務、オランダ出身)

[2010年7月18日]

2008年にオランダの女神カンファレンスに参加したとき、主催者の1人でお世話になったのが、背が高く優しいカリンだった。その彼女がグラストンベリーに引っ越してきて、隣人になるとは、そのときには夢にも思わなかった。

○カトリックからネオペイガン、そしてプリーステスへ

カリンはオランダで生まれ育ち、弁護士をしていた。カトリックとして育てられ、ずっとカトリック教会で積極的に活動していた。しかし2001年頃、ネオペイガニズムと出会い、ヨーロッパ的であるところに、親しみを感じた。プリーステス・トレーニングのことも聞いたことがあったが、まずはネオペイガニズム一般の知識を得ようと、2002年からネオペイガニズムの通信講座を受講した。

2002年に参加したグラストンベリー・フェスティバル¹¹¹の場で、グラストンベリー女神カンファレンスのちらしを見つけ、翌年の2003年夏に1人で参加した。そのときのことを彼女はインタビューの中でとても嬉しそうに語った。

女神カンファレンスでは、〔開会式の場で〕キャシー〔・ジョーンズ〕がみんなにどの国から来ているかを尋ねるでしょう。そのときに私がオランダ人であることを知って、他のオランダ人女性たちが自己紹介をしに来てくれて、その人たち全員と今でも交流が続いている。

その後、「受講のときが来た」と思い、秋からオランダのプリーステス・トレーニング¹¹²を始めた。それまでも存在は知っていたが、受講に踏み出せなかったプリーステス・トレ

¹¹¹ 第2章4-3でも述べた、ヨーロッパ最大の野外ロック・フェスティバル。

ーニングを始めたのは、グラストンベリー女神運動に携わっているプリーステスたちと、実際に出会ったからだといえる。プリーステス・トレーニング受講中も、ライフワークとしてきた教会での活動を続けてきたが、2006年春に受講を修了したとき、教会での活動をやめ、オランダの女神神殿や女神カンファレンスの運営に専念するようになった。

カリンは宗教的な実践としてはネオペイガニズムに魅かれつつも、社会的な活動としてカトリックとの関係も続けていた。しかしプリーステス・トレーニングを修了したことをきっかけに、キリスト教を離れ、女神運動一筋でやっていくことにしたといえる。

○離婚とグラストンベリーへの移住

オランダで精力的に活動していたカリンが、グラストンベリーに移住し、プリーステスがよく滞在することから、「プリーステス・ハウス」の愛称で知られていた、筆者の隣家のB&Bに住むようになったのは、2009年3月のことだった。その直接の引き金になったのは、夫との離婚である。2007年、突然夫から好きな女性ができたら、別れてほしいと告げられ、熟慮の末、その年のうちに離婚した。「離婚したとき、プリーステスの視点から、グラストンベリーに来たかった。引っ張られたの」と言うので、筆者は、「誰に？ アヴァロンの女神に？」と尋ねると、カリンは曖昧に笑って頷くだけで、それ以上は話そうとせず、話題を変えてしまった。

カリンがグラストンベリーへの移住を決めたのは、突発的なことではなかった。オランダにはない青々とした野原などの自然を求めて、毎年のように家族でイギリスを訪れていて、一家でイギリスへの移住を考えたこともあった。また、彼女は女神カンファレンスやワークショップを通じて、グラストンベリーのプリーステス・トレーニング受講者とも親しい関係を築いていた。そのうえ、離婚の数ヵ月後にグラストンベリーを訪れたときに、知り合った男性と遠距離恋愛を続けていた。移住を決断させたのは彼かと尋ねると、「女神が先、彼はその次」と笑って答えた。そして、仕事をやめて、学生になっていた子供たちも置いて、引っ越してきた。

景観、アヴァロンという土地、私はただここにいたかった。ここは故郷だって感じる。私はいつも、オランダは父の土地、イギリスは母の土地だって考えていた。オランダは合理的な土地だけど、イギリスはもっと歴史やストーンヘンジなどの古代文化に触れ合っている。2006年2月にグラストンベリーに来たとき、グラストンベリーが私の魂にとっても近づいて、とても強い感情が湧き出てきた。

¹¹² 第4章 1-1でも述べたが、オランダではジョーンズのプリーステス・トレーニングの修了者が同様のプリーステス・トレーニングを開いている。カリンはそれを受講した。

この言葉からは、カリンがイギリス、特にグラストンベリーの土地と精神的な結びつきを感じているのは明らかである。イギリスのどこでもよいのなら、職探しに苦労する、グラストンベリーのような田舎に住む必要はないからだ。

イギリスへの移住という選択肢は、つねにカリンの頭の中にあった。しかし、それが現実味を帯びたのは、夫から離婚を切り出されたことだった。彼女の場合、子供は十分に成長していたし、貯金もあったし、弁護士という資格もあったことからイギリスでの就職も難しくないとされた。そこで、プリーステスの友達が多く暮らしていて、自らの恋人もいるグラストンベリーへの移住が促されたといえる。

○グラストンベリーでの暮らし

しかし、筆者が「色々期待していたと思うけれど、グラストンベリーに引っ越してきたからはどう？」と尋ねると、「まさに、グラストンベリー・エキスピリエンスよ！」と言う。「グラストンベリー・エキスピリエンス」とは、物質的な豊かさではなく、精神的な幸せを優先して生きようと胸を弾ませてグラストンベリーに引っ越してきたものの、現実の厳しさに直面し、強い精神的ダメージを受ける体験を指すグラストンベリー特有の言い回しである。筆者がインタビューをした頃、カリンはようやく仕事を見つけ、B&Bを出て友達と家を借りて暮らし始めるなど、やっと生活が落ち着いてきた時期だった。しかし、半年以上仕事が見つからず、経済的な不安を感じていたし、家族、特に子供たちと離れて暮らすことも辛かった。また、引っ越してきた当初はしばらくしたら恋人と同棲すると思っていたのに、それも実現しなかった。そんな状況を「ここにいるのは挑戦だった」と語った。

○イメージの変遷

カリンのグラストンベリーに対するイメージはどのように変化していったのだろうか。オランダ人の彼女にとって、イギリスはオランダにはない豊かな自然のある国としてイメージされていた。グラストンベリーも、当初は憧れのイギリスにある田舎町の1つとしてみなされていたと考えられる。その後、グラストンベリー女神運動と出会い、関わっていく中で、グラストンベリーはイギリスの1つの田舎町から、グラストンベリー女神運動の町として認識されていくようになる。離婚したとき、グラストンベリーへの移住が決断されたのも、恋人とグラストンベリー女神運動を通じて知り合った人々が暮らすところとして、親しみがあったからである。つまりエマと同様、理想郷のようにイメージされていた。しかし、引っ越してからは、求人少なさや恋人との関係に悩み、落ち込む。グラストンベリーの別の側面をみたともいえる。だからと言って、町そのものに失望したりするわけではなく、「グラストンベリー・エキスピリエンス」という表現を用いて、移住後には必然

的にそのようなことが試される場所として理解しようとしたといえる。

2-3 再婚して、引っ越してきたスーとトム

[2010年9月20日]

スー：30代、西ミッドランド地方出身、トム：40代、北西部地方出身
ともに元看護師だがインタビュー時はともに給付金受給者

「もし構わなければ、一緒にメリッサをしてもいいかな」とトムに尋ねられたのは、2009年2月に筆者が女神神殿でメリッサをしていたときだった。この日は折角、車でグラストンベリーにやってきたので、したいと言うのだ。そんな彼の申し出を、筆者は奇妙に思ったものだ。というのも、メリッサの仕事とは基本的にはその場にいるだけなので、2人も必要ないし、女神神殿にただいたければ、妙に目立つ行動をしないかぎり、誰も咎めないからだ。しかし、トムのあまりの真剣な表情に押されて了承すると、「ありがとう、僕にとって、ここでメリッサをすることは、とても大切なことなんだ」と恍惚味を帯びた声で感謝された。

その後、筆者はトムやその妻のスーと子供たちと町でよく出くわしていたが、一家は2010年7月に引っ越してきた。筆者は生活が少し落ち着いたと思われた9月に、夫婦一緒にインタビューを行った。

○ネオペイガニズムへの関心とグラストンベリー女神運動との出会い（スーの場合）

妻のスーはキリスト教徒として育てられたが、いつも何かが足りないと感じていた。20代になった頃、ネオペイガニズムに出会い、キリスト教にはなかった自然崇拝を基盤としているところに心魅かれ、15年ほどグループで実践していた。グラストンベリー女神運動を知ったのは2003年頃。グラストンベリーで何かすることはないとネットサーフィンをしていて、プリーステス・トレーニングを見つけ、「なぜか引き寄せられた。プリーステス・トレーニングをする必要があると思った」。運命を感じたのである。そこでグラストンベリーに行き、女神神殿の様子を覗いたり、ジョーンズにメールを送ったりしていた。しかし、当時の夫は子供の面倒を見てくれるような人ではなかったため、受講は難しかった。

○キリスト教徒からネオペイガンへ（トムの場合）

一方のトムもキリスト教徒の家庭で育ったが、自分の意志で福音主義的なキリスト教を熱心実践し、教会にもまめに通っていた。

けれど、審判、罪の概念、排他的な信仰、罰、何かをしでかした人への地獄落ちの宣言なんかが好きになれなかったんだ。ペイガニズムに魅かれたのは、自然と調和し、

季節の変化を尊ぶから。より良い人間としてではなく、ありのままの自分を受け入れてくれるからなんだ。

こうしてトムもキリスト教を離れ、2007年から、1人でネオペイガンとしての道を歩み始めていた。

○再婚とプリーステス・トレーニングの開始

その後、トムは死別、スーは離婚の形で、それぞれ配偶者を失い、2人は2008年に再婚する。互いにティーンエイジャーの娘を連れて、家族4人での出発だった。トムからの支援を受け、スーはその年、ついにプリーステス・トレーニングを始めた。

トムはそれまでグラストンベリー女神運動のことは全く知らなかったが、スーに付き添って、季節の祝祭に参加したり、女神神殿でボランティアをしたりして、関わりを深めていくうちに、自分も受講することを決め、翌年から受講を始めた。

2人はプリーステス・トレーニングの開始と、以前の配偶者との別れを結びつけて語りはしなかった。ただし、夫妻へのインタビューは2人一緒に実施したため、関係していたとしても、語りづらかったと考えられる。なお、トムのほうはプリーステス・トレーニングの最中に亡くなった前妻との関係を辿り直したという経験を女神神殿のニューズレターに綴っていたことがあり、少なからず関係していたと思われる。

○グラストンベリーへの頻繁な訪問

2人はグラストンベリーから車で2時間ほど離れた都市に住んでいたにもかかわらず、季節の祝祭はもちろん、それ以外のときにも頻繁にグラストンベリーを訪れ、女神神殿でメリッサをしたり、催し物に参加したりしていた。たとえば、2009年のクリスマスの日、女神神殿で2人は仲睦まじそうにメリッサをしていたので、筆者はクリスマスなのに、と思わず絶句してしまった。

子供たちとは、夜に一緒にごちそうを食べるからいいのよ。私たちには、クリスマスよりこっちのほうが大事なの。この日にメリッサをできて、名誉に思ってる。

イギリス人の家庭では、キリスト教徒でなくてもクリスマスの時期は家族と一緒に過ごすのが一般的である。特にクリスマスの日には、昼下がりからご馳走を食べるのが習慣となっているので、子供をおいて昼間に外出するという2人の行動は、イギリス人のクリスマスの常識からはかなり外れている。そのためスーのこの穏やかな語りからは、家族よりグラストンベリー女神運動を優先させる夫妻の姿勢が窺える。

○グラストンベリーへの移住と新しい生活

インタビューの中で引っ越しの理由を尋ねたとき、2人は口をそろえて、「こっちのほうが、友達が多いから」と即答した。スーとその娘は結婚を機にトムの家に移ったので、スーは知り合いも少なく寂しい思いをしていたし、スーの娘もその街にまだ友達も少なく、未練はなかった。トムの娘¹¹³が中学を卒業する年だったことも、移住を容易にした。夫妻の移住は、トムが亡妻とともに暮らしていた街というスーにとっては人間関係を築くうえでいささか不利な場所での暮らしをやめ、2人に共通の友達がいる場所で、心機一転、新しい生活を始めようとしたのだと理解できる。そのうえ、2人はもともと看護師だったが、再婚の前後からともに疾患を抱えるようになり、一家は障害者用給付金で生活していたため¹¹⁴、職探しの心配はなかったのである。

移住後、スーは女神神殿の理事に就任し、友人と共同でワークショップを始めた。夫婦そろって女神神殿のヒーリングの運営担当者となり、清掃などコートヤードを管理する職を得た¹¹⁵。その一方で移住前には、メーリングリストの中で、グラストンベリーに住んでいたなら、もっと頻繁に集まりに参加できるのにと嘆いていたにもかかわらず、インタビューのときに「思っていたより忙しい。選択肢を考えて、あらゆることにボランティアをしないように気をつけている」とスーが話したように、本節の冒頭でみた姿勢とは異なり、女神神殿のメリッサは決まった日時にするだけで、急なキャンセルの代理に入ることはなかったし、その年のクリスマスは1日中家族水入らずで過ごしていた。

○イメージの変遷

夫妻のグラストンベリーに対するイメージはどのように変化したのだろうか。スーの場合、グラストンベリーでできる何かを探していたところから、グラストンベリー女神運動と関わる前から、ここがオルタナティブ・スピリチュアリティで有名な町だという一般的なイメージはもっていたといえる。しかし、プリーステス・トレーニングを見つけたときから、グラストンベリー女神運動のある町として、より具体的に意識されるようになったと思われる。トムの場合、そんなスーを通して、グラストンベリーについて詳しく知ったため、グラストンベリーは初めからグラストンベリー女神運動と結びついていた。夫婦

¹¹³ トムの娘は、トムの亡くなった妻ではなく、その前に結婚していた女性の娘。筆者は彼女とも親しかったが、親がいなくても1人で季節の祝祭に参加するぐらい、女神の人々になじんでいたし、実際グラストンベリーでの生活は楽しそうだった。

¹¹⁴ ただし、筆者の私見だが、夫妻は仕事ができないとは思えないほど元気である。おそらく働こうと思えば、働ける状態だが、給付金制度をうまく利用していると思われる。

¹¹⁵ コートヤードを管理している信託団体は、一時期ジョーンズと活発に活動していたテイラーが立ち上げたもの。この団体にはジョーンズも関わっていたし、長年彼女の夫マイクが代表を務めていたため、この職には女神運動の関係者が就くことが多い。

そろって関わるようになったため、町は次第に再婚した2人にとっての共通の友人がいる場所となり、移住先として選択されるに至る。しかし、クリスマスのメリッサの例からもわかるように、移住後は、移住前のように家族を犠牲にしてまで関わっているわけではないことから、仲間たちのいる場所ではありつつも、現実的な生活の場として捉えられるようになったと考えられる。

2-4 周辺の町から引っ越したリズ（40代、自宅での個別指導教師、南東部地方出身）

[2010年12月15日]

2008年の夏に初めて女神神殿で話をしたとき、リズはグラストンベリーから車で20分ほど離れたグラストンベリー周辺の町に暮らしていた。グラストンベリーには引っ越してこないのかと尋ねた筆者に対し、「うーん、今のところは満足かな。グラストンベリーには色々なエネルギーがあるし、少し離れているぐらいがちょうどいいのよ」と答えた。ここでいう「色々なエネルギー」とは、グラストンベリーにいる酔っ払いや浮浪者など、好ましくない人々が醸し出している雰囲気を目指すときの比喻である。にもかかわらず、2010年1月に引っ越してきた。

○キリスト教への違和感とグラストンベリー女神運動との出会い

リズはイングランド国教徒として育てられ、教会にも通い、長い間「女神運動のような事柄に関わったら地獄に落ちると思っていた」。その反面、唯一の神という概念やキリスト教徒以外は救われないとか、自分の行いで裁かれるという考え方になじめず、違和感も抱いていた。そこでドルイド教や魔女術といった、ネオペイガニズムの本を読んでみたが、どちらも好きになれなかった。

そんな彼女がグラストンベリー女神運動を初めて知ったのは1998年。当時暮らしていたロンドン郊外の町で偶然女神カンファレンスのちらしを見つけたのだが、そのときにはわざわざ出かけていくには遠すぎる距離に思えた。それほど興味をかきたてられなかったのである。実はグラストンベリーを初めて訪れたのは学生時代のことで、近くまで来たとき、ついでに立ち寄ったのだが、特別に興味を魅かれることはなかった。

○親族の死とグラストンベリー女神運動への関心の再燃

その後、サマーセット州に夫とともに移る。本当は自然がより豊かなウェールズに住みたかったのだが、仕事が見つからなかった。そんなとき、サマーセット州で夫の仕事が見つかり、ロンドン郊外よりはウェールズに近いからと引っ越したのだった。つまり、このときはグラストンベリー女神運動を理由に引っ越したわけではなかった。しかし、この引っ越しは結果的にグラストンベリー女神運動への積極的な参加につながっていく。

リズのグラストンベリー女神運動への興味が再燃したのは、母親と大おばを相次いで亡くした 2006 年のことだった。それを機に、近所ということもあり、以前から気になっていた女神神殿に足繁く通うようになっていったのである。女神カンファレンスにメリッサとして、初めて参加したのは 2008 年。当時はもう教会からは足が遠のいていて、無宗教だったのだが、反キリスト教的なことをしているのではないかと女神運動のような事柄を恐れる気持ちは残っていて、関わっているだけで泣きそうだった。

しかし、同時にプリーステス・トレーニングに無性に魅かれ、翌年から受講を開始する。それでも、こんなことをしていたら地獄へ落ちるのではないかという恐怖との苦闘は続いた。「でも結局、女神運動は私に合っていた。沢山の素敵女性に出会うことで、罪悪感も和らいでいった」と語ったように、女神運動を実践することへの恐怖心を取り除いてくれたのは、実践そのものによる何らかの効果というより、そこで出会ったプリーステスたちという人々だった。

○グラストンベリーへの移住

リズとその夫がごく近所の町に暮らしていたにもかかわらず、わざわざグラストンベリーに引っ越してきたのは、エマやカリンとは異なる理由だった。夫婦は野菜作りや樹木の剪定など園芸や農作業が趣味だったのだが、当時暮らしていた家の庭は狭く、広い庭のある家に引っ越すことを考え始めていた。そんなとき、グラストンベリーに適当な物件が見つかったので、引っ越してきたのである。しかし、庭のためだけならここでなくても良いはずだがと筆者が尋ねると、リズは女神神殿に通うのに便利だから引っ越すならここが良かったと答え、グラストンベリーにこだわる様子もみせた。

○家を喪失したことによる悲嘆と喪失からの立ち直り

ところが、彼女はすぐに引っ越しを後悔し始める。

前の家はものすごく素敵な家で、本当は手放したくなかった。すべて夫と 2 人で内装を手がけたんだ。私たちには子供がいないから、家が子供のようなものなの。けれどこの話をしても、ヘレンもキャシー [・ジョーンズ] もたかが家じゃないって、理解してくれなかった。(中略) 私は間違っていたんじゃないかって何度思ったことか。

グラストンベリーの家が自宅だと思えるようになったのは、筆者がインタビューをしていた、引っ越してから 1 年が経とうとする 12 月に入ってからだった。そのときには、プリーステス・トレーニングや女神カンファレンスに来る人を相手に **B&B** もできるし、庭をイベントにも貸し出せるし、野菜も果物も作れるしと、グラストンベリーに暮らすこと

を前向きに捉える発言も聞かれた。

秋にね、キャシーから来年のカンファレンスでセレモニアリストをやらなかった誘われた。女神運動で重要な役割を果たすために、私はここにいるのかもしれない。

彼女はごく近距離での移動だったので、転職の必要がなく収入面での心配もなかった。しかし、家を手放した悲しみから引っ越しを悔やみ、結果的に他のプリーステスとの間にしこりを感じたりもしていた。しかし、セレモニアリストに選ばれたのである。セレモニアリストとは、女神カンファレンスの中で儀式を担当するもっとも重要な役割で、ジョーンズを含め9人しかいない。彼らは半年以上にわたって、外部に情報が漏れないよう、内密に会合を重ね、本番に向けた準備をしていく。町に暮らすことと重要な役職に選出されたことを関連づけた、この発言からは、結局はグラストンベリー女神運動の人々の中に自分を位置づけることで、自分がグラストンベリーにいる存在意義を見出したといえよう。

○イメージの変遷

リズのグラストンベリーに対するイメージの変化を辿ってみよう。グラストンベリーのことは長い間知ってはいたが、意識の外に置かれたままであった。意識されるようになったのは、親族の死をきっかけとして、グラストンベリー女神運動に関わるようになってからであった。引っ越しの際にも女神神殿があることを考慮していることも考えると、グラストンベリー女神運動の活動が行われている場所としてみなされていったことがわかる。だからといって、好ましくないところもあると、住む場所としてはイメージされるには至らなかった。周辺の町に暮らしていたため必要性を特に感じず、「通う場所」とみていたのである。グラストンベリーは、新たな住環境が必要になったとき、その候補地の1つとして選択されたにすぎず、この町からずっと離れたところに住んでいたら、引っ越してこなかったかもしれない。移住直前のリズはグラストンベリーを、グラストンベリー女神運動の町であると同時に、自分と夫の趣味を実現させてくれる場所として捉えていた。しかし、比較的短期間で決めた移住だったので、移住後に拙速な決断を激しく後悔している。グラストンベリーに購入した新居から気持ちが遠のき、それがグラストンベリーそのもののイメージの悪化につながっている。しかし、結局はグラストンベリー女神運動での使命を果たす場所としてみなす形で、気持ちを落ち着いたといえる。

2-5 ロンドン暮らしに満足しているパメラ

(40代、元弁護士の専業主婦、アメリカ出身、ロンドン在住) [2011年1月20日]

2011年1月、帰国のためロンドンに赴いた筆者は、イギリス最後の一日を、2010年の女

神カンファレンスで親しくなったパメラと過ごし、話を聞かせてもらった。

○渡英とグラストンベリー女神運動との関わり方

2002年、イギリス人男性との再婚を機に、2人の娘と渡英した彼女は、ロンドンに暮らすプリーステスが開いている集まりに加わるようになり、2006年からプリーステス・トレーニングの受講を始める。受講修了後も、女神カンファレンスや季節の祝祭への参加、メーリングリストを通して、グラストンベリー女神運動の人々と関わりを続けている。

○引っ越さないという選択とグラストンベリーのイメージ

しかし、グラストンベリーに引っ越すつもりはないと言う。

グラストンベリーは私にとって、家から遠くの故郷（Home away home）なの。あそこでのポリティクスには関わりたくない。それに、下の子は引っ越してもいいと言うけれど、上の子は引っ越したくないのよ。私としても、グラストンベリーには、日中、堂々と麻薬を吸っている人も多し、娘たちには良い環境ではないと思う。私はロンドンが好きだし、住むのはここがいいの。

パメラはグラストンベリーを自分の還るべき「故郷」というイメージで捉えている。しかし、そのような理想郷としての姿だけをグラストンベリーに投影しているわけではない。町には麻薬中毒に代表されるような、よくない問題があることをはっきりと認識している。またロンドンで働く夫はパメラの女神の実践を理解してくれるが、参加することはない。そのため、引っ越そうとすれば、夫との間に問題が生じることは容易に想像がつき、家族や収入といった面からも移住は難しい。そのため「故郷」であるグラストンベリーに住むという選択には至らないと考えられる。さらにいうと、住まないことで、グラストンベリーが抱える現実的な問題に目をつむり、自分が抱えている理想的なグラストンベリーの姿を保っているともいえる。ときどき、女神の友人に会いに行く非日常の場所で十分なのである。

2-6 引っ越せないマーラ

[2010年12月22日]

(60代、給付金受給者、西ミッドランド出身、西ミッドランド在住)

ふんわりとした真っ白な髪の毛の下に、いつも穏やかな微笑みを絶やさないマーラからある季節の祝祭の後に、「お金がないから、今夜は車の中で寝るわ」と言われたとき、筆者は衝撃を受けた。大柄とはいえ、高齢の女性が1人きりで車中で一晩を過ごすことに不安をおぼえたのだ。それに、こんな人にはいつも、町に暮らすプリーステスの誰かが、「うち

に泊まったら？」と声をかけるのに、このときは会話を聞いていたはずの周囲にいた人の誰も聞かなかったふりをしていたのにも驚いた。

その数ヶ月後の冬至の頃、再びグラストンベリーを訪れていたマーラと筆者は話をしていた、クリスマスの過ごし方についての話題になった。

性転換してから家族とうまくいかなくなってしまったから、今年も1人かな。本当は友達が沢山いるグラストンベリーで過ごしたいんだけど、今泊まっている B&B もクリスマスには閉まってしまうし。また大雪が降って、道路が封鎖されてしまえばいいのって本気で思う¹¹⁶。

そして、「私がトランスジェンダーだって知っているでしょ？」ときかれ、反射的に頷きはしたものの、本当は知らなかった筆者は内心仰天していた。そして、あの日誰も彼女に一晚のベッドを提供しなかった意味、人々が何となく彼女を避けている理由をぼんやりと理解できた気がした。そして彼女はぽつりぽつりと自分の半生について語り始めた。

○トランスジェンダーとしての苦しみとグラストンベリー女神運動との出会い

マーラは3歳の頃から自分の性に違和感をもっていた。結婚すれば、自分の性への違和感はなくなるかと思い、結婚して5人の子供を儲けたが、女性になりたいという思いは消えず、結局は離婚した。2002年に性転換手術をしたのだが、その年に結婚した長男から式への参加を断られ、大きなショックを受けた。さらにその他の子供たちからも避けられるようになり、近くに住む実兄とは連絡は取っているものの、会う機会はめっきり少なくなった。ただし、マーラと家族の関係が良好ではなかったのは、性転換したからだけではなかったようだ。彼女は物質的な豊かさへの執着が低く、稼ぐことへの関心が薄かったため、金銭面において父親らしいことをしていなかったのである。

1997年頃、グラストンベリーにやってきて、偶然女神のイベントを見つけ、それ以来ときどき参加するようになっていた。性転換手術を受けた年、それをきっかけに初めて女神カンファレンスに参加し、2010年からプリーステス・トレーニングも始めた。

○叶わないグラストンベリーへの引っ越しとグラストンベリーのイメージ

マーラは「本当はグラストンベリーに住みたい、プリーステスたちと一緒にいたい。でも、低所得者用住宅に暮らしているから、簡単に引っ越せないの」と寂しそうに言う。2-3

¹¹⁶ この数日前、イギリスでは記録的な大雪が降った。空港が閉鎖されただけでなく、電車も路線バスも運行を取りやめ、道路も一部封鎖された。そのため、政府から緊急の用事がある人以外は出かけないようとの勧告が出された。

で取り上げた、若く子供もいるスーヤトムとは異なり、60代で無職のトランスジェンダーであるマーラは、大家から信用を得づらく、家を借りにくい。そのため公営の低所得者用住宅以外に暮らせる可能性が低く、引っ越しは難しい¹¹⁷。それでも、家族から疎外されていると感じる彼女はエマやカリンのように、グラストンベリーに暮らすことを望んでいたが、筆者が観察していたかぎり、他のプリーステスたちは冒頭のように、マーラとは微妙に距離をおいて接していた。そのため、実際に移住したところで、苦しみが解消されるのかはわからない。それでも、マーラのグラストンベリーへの期待は高く、ここにいられさえすれば、1人ではないと考えている。グラストンベリーは彼女にとって、周縁化された自分を受け入れてくれる人々がいる場所だとイメージされているのである。

2-7 町に戻りたくないハリー

(60代、アルバイト、西ミッドランド出身、ブリストル在住)

[2006年7月4日(グラストンベリー)、2008年6月23日(ブダペスト)]

「退職したから、女神神殿でしょっちゅうボランティアできるんだ」。そう言って、2005年、筆者に女神神殿のメリッサの仕事について教えてくれたのがハリーである。彼はその頃、頻繁にメリッサをし、季節の祝祭でも何らかの役割をこなす、もっとも活躍しているプリーストとして知られていた。プリーステス・トレーニングの講師でもあったので、数多くのプリーステスから慕われていた。

○グラストンベリー女神運動との出会い

ハリーは1990年代後半に妻とグラストンベリーに移住してきた。その理由は、この女性と別れたこともあり、はっきりとは語らなかった。

2000年頃、ジョーンズと知り合いになっていた妻が、次いでハリーもプリーステス・トレーニングを受講する。修了した頃、受講生の増加に従い、自分とともにトレーニングを手伝ってくれる講師を探していたジョーンズから頼まれ、講師を務めることになった。

○イギリスを去り、ハンガリーへ

2005年、あるハンガリー人女性がプリーステス・トレーニングを受講する。この年、彼女は母国で女神カンファレンスを開催し、ハリーも講演を頼まれて、ブダペストを訪れた。

その後、2006年末に彼はグラストンベリーを離れ、このハンガリー人女性が始めたプ

¹¹⁷ 給付金受給者の多くが暮らす公営住宅。異なる地域の低所得者住宅に暮らす人どうしが、互いの住宅を交換するという形でしか、引っ越すことができない。ただし、この交換制度でグラストンベリー周辺に引っ越してきたオルタナティブもいて、不可能ではない。

リーステス・トレーニングの手伝いを名目にハンガリーの首都ブダペストに移住した。筆者が2008年にブダペストで再会したときには、移住の理由を「イナンナ¹¹⁸に呼ばれたからだ」と説明し、そのままイナンナについて熱く語るという形で話を逸らされてしまった。しかし、ブダペストでの会話の端々やその後筆者がグラストンベリーで再会した他のプリーステスの噂話では、ハリーは妻との関係がうまくいっておらず、またジョーンズとも女神神殿の運営方法やリーステス・トレーニングのやり方をめぐって確執が生じていたらしい。このような人間関係のこじれがグラストンベリーを離れた背景にあったようだった。

筆者が2008年6月にブダペストで再会したときは、ハンガリーの女神運動の活動を手伝ったり、英語が母語ということだけで英語講師のアルバイトの仕事を得られたりして、ブダペスト生活は順調そうだった。その後、ハンガリー人女性と同棲を始め、2008年秋頃の筆者とのメッセージの中でイギリスに帰国するつもりはないと言い切っていた。

○イギリスへの帰国と現在のグラストンベリーのイメージ

そのため、2009年の冬至の日、グラストンベリーで彼に出くわしたときには驚いた。ブダペストで失業し、経済的に立ち行かなくなったため、帰国してグラストンベリーから車で40分ほどの都市、ブリストルに暮らし始めたのだった。子供たちとは、長年音信不通で、近くに住むという選択肢はなかった。その年の夏、筆者はハリーと共通の友達2人で世間話をしていて、そのときグラストンベリーには戻らないのかと尋ねた。

もうポリティクスは沢山なんだ。今はブリストルに住んで働き、ときどきグラストンベリーに遊びに来る。そうやって、距離をおいてる。(中略) 時間があるときにふらりとやってきて、友達に会えれば話すし、会えなければ早く帰る。昔みたいに、プリースト・オヴ・ア〜ヴァロン〔大袈裟に手を上げて、広げる仕草〕とかはしない。

ハリーの場合、ジョーンズや妻といった女神の人々との関係悪化に伴い、町を去った。グラストンベリーでも実は妻の収入に頼りつつ暮らしていたのだが、ブダペストでは言葉も通じず、見つけた仕事も不安定なもので、帰国を余儀なくされた。しかし、グラストンベリーを再び居住地として選ぶことはなかった。

「プリースト・オヴ・ア〜ヴァロン」と言ったときの、どこかの大神官を思わせるよう

¹¹⁸ シュメール神話に登場する豊饒の女神。姉エレシュキガルが治める冥界に下るのだが、その途中に通過する7つの門で、身に着けているものを1つずつ剥ぎ取られていき、最後には全裸になる、イナンナの来訪を忌々しく思っていた姉に捕らえられるという話で知られる。ハリーはブダペストでイナンナに呼ばれる経験をしたことを移住の理由の1つとして語ったが、古代メソポタミアの女神とハンガリーをつなぐ根拠の明確な説明はなかったし、筆者も関連書を調べたり、友人に尋ねたりしたが、見つからなかった。そのため、ブダペストに移住先に選んだ理由は、イナンナより、知り合いがいたことのほうが大きかったと思う。

な仰々しい仕草からは、かつての自分のように季節の祝祭などの場で中心的に活動している人々のやり方を権威主義的と皮肉ることで、暗に彼らを批判したいという思いが汲み取れる。町を去って以来、ハリーにとってグラストンベリーは、いざこざに屈した苦い思い出の場所なのである。その一方で、友達との再会を期待する発言からは、グラストンベリー女神運動に関わるすべての人々を避けているわけではないことがわかる。

3、在住プリーステスの求心力

引っ越してきた5人は拒否しがたい理由によって、引っ越しを余儀なくされたわけではなく、自分自身の意志で能動的に引っ越しを選択している。

イギリス人にとって、家族の増減など、人生の節目に引っ越すことは珍しいことではない。なぜなら、家が石造りなので、家そのものを建て替えるという発想がなく、代わりに自分のライフスタイルにあったサイズの家に移動するからである。2-4 でみてきたリズムはまさしくこれに当てはまる。また、第1節で指摘したように、住宅の資産価値が目減りしないので、住み替えが容易で、移住しやすいという事情もある。だから、ライフスタイルの変化に応じて移住すること自体はイギリス的だといえる。

とはいえ、女神運動の人々は、仲間がいるという理由で、グラストンベリーにこだわって移住している。この女神運動では、グラストンベリーを女神の聖地とみなしているため、そこに神殿が設けられ、そこでイベントが開かれ、関心がある人が集まってくる。そのため、グラストンベリー女神運動により深く携わりたい人々が、次々と引き寄せられていく。しかし、彼らがグラストンベリーに住むことに魅力を感じるのは、神殿やワークショップといったハード面だけではない。本節では、このようなプリーステスたちのグラストンベリーに引っ越すという選択を促した要因と町での暮らしの捉え方について検討する。

初めに、引っ越してきたエマとカリン、引っ越すつもりのないパメラ、引っ越すことができないマーラの事例を検討する。

死別と離婚という違いはあるが、配偶者を失ったことに起因する孤独感が移住の決断につながったという点で、エマとカリンの事例はよく似ている。

失った夫に代わって親しく付き合える人々を求めて、引っ越してきたエマの事例は、グラストンベリーに移住してくるプリーステスのもっとも典型的な事例である。彼女はかつて、生まれ育った町で、夫とのつつましやかだが、小さな幸せに満足しながら生活していたが、夫の死によって、この生活は破綻してしまった。グラストンベリーへの移住は、悲しみを契機とした人生の転換だったといえる。あるとき、エマは現在の自分を「仮面を外して、新しい自分と向き合っている」と評したが、夫を亡くし、グラストンベリー女神運動に携わるようになっていった月日は、まさに今までの人間関係から自分を引き剥がし、「姉妹兄弟」という言葉に象徴される、擬似家族的な新しい人間関係に埋め込む作業の中

で自己変容を経ていくプロセスだったと考えられる。

カリンの場合、エマのようにグラストンベリー女神運動で出会った人々だけが理由ではなく、グラストンベリー在住の恋人も引き金にはなっていた。その背景には、グラストンベリーでプリーステス・トレーニングを受講しなかったことがあると思われる。しかし、グラストンベリーと特別な結びつきを感じていたこと、グラストンベリー女神運動を通して培った人脈から住居を見つけていることを考えると、この女神運動の人々の存在も移住に関係していたといえる。

この2人が移住してきた背景と、家族との不和から孤独を感じているマーラが移住を望む背景もよく似ている。マーラもまた、自分を受け入れてくれると感じている人々の近くで暮らしたいのである。しかし、エマやカリンとは異なり、高齢でトランスジェンダーであるうえ、十分な貯金も仕事のスキルもなく、低所得者用住宅以外に暮らすことが難しいという状況が、マーラの移住を難しくさせている。

エマ、カリン、マーラの3人は、喪失した家族に代わるものを、個人的な誰かというより、グラストンベリーに暮らすプリーステスやメリッサをはじめとする積極的な参加者たちの集合体に求めているといえる。スープの冷めない距離に住んで、彼らと家族のように親しく付き合える日々を送りたい、そんなつながりへの思いが移住を望む背景にあった。

パメラはどうか。彼女はグラストンベリーに暮らす友人たちとよく連絡を取り、しばしば出かけて催し物にも参加している。しかし、インタビューの時点では移住するつもりは全くなかった。この状況は、配偶者を失う前のエマやカリンと似ている。エマやカリンは季節の祝祭やワークショップに参加するだけの一時的な参加者だった一方で、パメラはプリーステス・トレーニングを終えている積極的な参加者という違いはあるが、いずれもときどきのグラストンベリー訪問に満足していて、移住は選択肢に入っていない／いなかったという点で類似している。パメラは主婦だが、実はカリン同様、弁護士資格をもっているうえ、イギリス人の夫とも正式に結婚しているので、経済的に自立することは可能で、実際少し前まで法律事務所に勤めていた。途中までは似たような生き方を辿っていたエマやカリンとパメラの現在が異なるのは、家庭生活だと考えられる。パメラは夫との仲が良好であるうえ、子供たちがまだ中高生と幼く、家族との別居は選択肢にないのである。かといって、家族全員での移住も、夫の仕事や子供の学校のことを考えると難しい。家庭生活が円満だから、グラストンベリーに引っ越す必要がないのである。と同時に、家族が原因で引っ越せないのである。

以上の4つの事例からは、グラストンベリーに引っ越すという選択の背景には、家族関係、特にパートナーとの関係における孤独感や満足感が影響していることがわかる。家族との関係を良好と感じていれば、引っ越しが選択肢とならない。しかし関係が危うくなると、プリーステスらとの関係を望むようになる。グラストンベリーの近くに暮らしていれば

ば、集まりに参加しやすく、町に在住の積極的な参加者と一緒にいる機会も増えるし、グラストンベリーを訪れる積極的な参加者とも会いやすくなる。そのために、引っ越しが選択肢の中に入ってくる。

しかし、マーラの事例からは、家族という足枷からの「解放」という条件がクリアされても、収入面の問題がクリアされなければ、実際の移住に至ることは難しいことがわかる。貯金がある、年金をもらえる、障害者認定を受けている、仕事を見つけるだけのスキルを備えている、など収入のめどがなくては、生活できないからである。このように経済の状況も引っ越しの足枷となっている。

次に、エマとカリンとは逆のケース、つまり再婚を機に引っ越してきたスーとトム夫妻の事例を検討する。スーとトムも、エマとカリンと同様に積極的な参加者と近くにいることを求めて移住してきたが、1人になって寂しいからという理由ではなかった。新しい生活を始めるにあたって2人のうち一方の人間関係が出来上がっている場所ではなく、2人ともが人間関係のうえで寂しさを感じずに済むところとして選ばれたのである。そのため、喪失感という点では異なるが、両方が孤独を感じずに済む、居心地の良いつながりを求めてという点で、エマやカリンのケースと同じだといえる。

また、同じく夫と子供がいるパメラとスーを比較すると、パメラとは異なり、スーは夫からも子供からも理解を得られたから、グラストンベリーに引っ越してくることができたといえる。それから、同じく給付金で生活しているが引っ越せないマーラと夫妻のケースと比較してみると、2組の移住の可否に差が出たのは、子供の有無と給付金の種類が影響していたと思われる。イギリスでは未成年の子供がいると、それだけ受給金額は加算される。また子供がいて、「病気で働けない」スーとトムと、高齢で仕事がなくトランスジェンダーのマーラでは、社会的な信用度も異なり、家の賃貸契約を結ぶ際に差が出てしまう。スーとトムのケースでも、家族からの理解と収入の条件がクリアされた点が移住に影響していたといえる。

しかし、グラストンベリーへの移住は町に暮らす積極的な参加者の存在のみによって促されるわけではない。続いて、引っ越し先の1つの候補地として、周辺の町からグラストンベリーに移住してきたリズの事例を検討する。

リズもパメラと同様、夫との仲は良かった。そのうえ、グラストンベリーへのイメージは必ずしも良くなく、近くの町に暮らしていたこともあり、パメラと同じく引っ越すつもりはなかった。家を住み替える必要が生じたとき、グラストンベリーが移住先として浮上したにすぎない。それは、グラストンベリー女神運動に関わっていたので、他の町に住むならグラストンベリーのほうが好ましいという程度の理由だった。リズの場合、そもそも近くの町に住んでいたため、エマやマーラのようにプリステスたちと近くにいたくて引っ越したわけではなかった。実際、エマやカリン、スーやトムのように、移住前後で催し

物への参加の度合いや人間関係が変わることはなかった。移住前後で仕事を変える必要もなく、いってみれば「お手軽な」引っ越しだった。

しかし、それこそが移住後にリズが引っ越しを後悔した理由だったと考えられる。エマやカリンは移住後に大きな困難にぶちあたっても、それを「挑戦」と捉え、落ち込みはしても、その困難に立ち向かい、引っ越してきたことを後悔していなかった。エマに至っては、降りかかってきた困難を乗り越えるために、町に暮らす積極的な参加者を必要だと感じ、彼らの存在意義を一層かみしめていた。それに対し、リズは引っ越しそのものを激しく後悔した。エマとカリンは子供とも離れて、故郷から遠く離れた町に1人で移住するという大きな決意をもって臨んだのに対し、リズは近所ということもあって、気軽に引っ越してきてしまったからだろう。その一方で、この後悔はグラストンベリー女神運動の人々の間に居場所を見つけることで、解消されている。リズは、グラストンベリー女神運動の人々の存在によって、引っ越してきたわけではないが、彼らの存在がグラストンベリーを去らなかつた要因の1つだといえる。

最後にグラストンベリーを去り、戻ってこなかったハリーの事例を検討する。彼が町を去ったのは、プリーステスである妻やジョーンズと不仲になったことが理由だった。夫婦そろってプリーステスとして町に暮らすことは、グラストンベリー女神運動の中で共通の友人関係を結ぶことができるという利点があるが、夫婦関係が破綻したとき、より深く関わっていたほうは残る一方で、そうでないほうは居心地が悪くなり、町を去るケースが少なくない。ハリーの場合も、妻はジョーンズの古くからの友人であったうえ、ジョーンズと彼自身の関係も悪化したので、町を出て行ってしまった。ハリーの場合、失った人々がグラストンベリー在住のプリーステスであったため、エマやカリンのように、その代わりに町に暮らす積極的な参加者に求めることは難しかったのである。イギリスへの帰国後、グラストンベリーに戻らないのは、都市のほうが仕事を見つけやすいという経済的な事情だけではない。「ポリティクスはもう沢山だ」と述べているように、そこは人間関係のごたごたを思い起こさせる場所であり、人間関係の煩わしさから逃れようとしているといえる。この理由はグラストンベリーのネガティブな側面をあえて避けようとしているパメラの事例に似ている。マーラ同様、家族と疎遠なハリーだが、友達もいるのに戻ろうとしないのは、過去の体験がハリーを町から遠ざけていると考えられる。

エマやカリン、スーとトム、マーラの事例からは、町とその周辺に暮らすグラストンベリー女神運動の積極的な参加者たちは、個々人というよりその集合体そのものが、町に暮らすことを夢みさせる要因になり、それ以外の場所に暮らす積極的な参加者を町に引き寄せる求心力になりうるということがわかる（具体的な個人より集合体がイメージされている背景は、第8章第1節で考察を加えている）。また、リズやエマの事例からは、移住してきた在住者にとっても、他の在住者の存在が日々の生活の中で生じてくる葛藤を解消する手助け

になっていて、町に引き留める要因になっているといえる。しかし、ハリーの事例からは、関係が破綻すれば町を出ていく要因にもなるという意味で、放出させる力ももっていることがわかる。女神神殿に通い始める、プリーステス・トレーニングを始めるなど、グラストンベリー女神運動に関わり始めるときには、1人で始めるかもしれないが、移住に関してはプリーステスをはじめとする在住の積極的な参加者の存在が大きく影響しているのである。

ところでなぜ彼らは、新たに親しく付き合う相手として、グラストンベリー在住のグラストンベリー女神運動の人々を選んだのだろうか。そのヒントは、プリーステス・トレーニングについてのエマのコメント、「いつも同じメンバーで集中的に顔を合わせるから、深く親しい関係を築けている」にあると思われる。プリーステス・トレーニングをはじめとした、この女神運動の講座では、1~4日間を5~15人ぐらいの少数の同じ人々と、集中的に過ごす。その中では、瞑想やヴィジュアルイゼーション、自分の人生の出来事の意味づけなどを講師や他の参加者たちと共同で行い、その体験や理解を共有していく。女神カンファレンスのワークショップも、時間が3~4時間と短いことを除けば、内容や雰囲気は同様である。このような閉鎖的で濃密な場で自分を曝け出していくことにより、特定の誰かというより、そこにいる全員との間に認識や感覚の共有を基盤とした共同性が誘発されやすく、他では得られないようなつながりの感覚が強まっていくと思われる。そのために、グラストンベリー女神運動の人々の存在が、旧友や近所、親戚よりも大きくなっていて、選択されたと考えられる。この観点からいうと、第4章でみた儀式とは、不特定多数の人がいるため濃密ではないものの、プリーステス・トレーニングやワークショップと同様、同じ場で共通の行為をしているという意識から生じた共同性に由来する、つながりの感覚を積極的な参加者たちが互いに確認していたといえる。

グラストンベリー女神運動の積極的な参加者たちにとってグラストンベリーに住むとは、そこにいることで他の積極的な参加者たちとの精神的なつながりを感じられる身体的な近接性を与える場、人と人との「共在」[Urry 2002]の場に加わる機会を増やすことなのである。そのような場が求められる背景には、親しい人を失ったという喪失感、孤独感からの脱却、断続的に降りかかる困難の解消といった、当事者にとって人生を変えてしまうような葛藤や日常的な悩み、苦しみがある。

しかし、移住者の日常生活を観察してみると、人と人との親しい関係を理想的に語る言葉に矛盾するような行動もみられる。そこで次章では、移住者たちが集まる話の共有の場に焦点を当て、彼らの「つながり」の特徴を分析してみたい。

第6章 つながりへの希求と忌避

修士課程の頃、プリーステスたちは、はぐらかしてばかりで、ほとんど自分の話をしてくれなかった。困っていた私を、大家のヘイゼルは「女神運動にやってくる人たちは、離婚などの辛い経験をしている人が多いから、若いあなたには話したくないのかも」と言って慰めてくれた。博士課程のときには、少し年を重ねたせいも、今しがたみてきたように聞くことに成功した人もいた。それでも時折、煙を巻くような言葉で誤魔化されてしまうこともあった。けれど彼らもまた、お互いのプライベートをそれほど知らない、または無関心を装っているようだということも少しずつわかってきた。第5章で述べたように、孤独感から逃れたりするために、体験や意識を共有できる人々を求める一方で、あえて個人主義的でもあろうとするこの矛盾は何なのだろうと思った。もう1つ不思議だったのが、私がよくおしゃべりをしていたスーフィやキリスト教の人たちがアッラーやキリストなどの話をよくしていたのに比べて、女神の話をあまりしないこと、そればかりか女神の存在を軽く捉えているような様子がしばしば見受けられたことだった。

第5章では、グラストンベリー女神運動の積極的な参加者の集合体における対面的な関係への期待が、プリーステスたちに移住を促したり、定住を継続させたりしていると指摘した。本章では、筆者の調査時にグラストンベリーに暮らしていたプリーステスを主な対象として、彼らがそこまでして求めていた「つながり」がどのような特徴をもっているのかを日常生活の参与観察をもとに検討する。初めに、この人たちが自分たちの集合体を表すときによく用いる「コミュニティ」という言葉を民俗用語として注目し、日常的にも第4章で確認した排他的な共同性が見られることを示す。続いて、日常的な実践の事例として彼らの集まりの中で頻繁に行われる「話の共有」¹¹⁹における話の内容と、話の共有とパーティという、2つの異なる集まりの継続性の違いを分析する。その後、「女神」という存在が果たす役割について検討する。これらをもとに、彼らのつながりのあり方を考察する。

1、「コミュニティ」の使われ方

プリーステスたちは「コミュニティ」という言葉にポジティブな意味を込めて、頻繁に使用する。その指す対象は文脈によって少しずつ異なるが、大きく分けて自分たち以外の人々を含む包摂的な意味と自分たちだけの集合体という閉鎖的な意味で使われていた。なお、傍点は筆者が挿入したもので、以下の「コミュニティ」はすべて単数形 (community)

¹¹⁹ 本稿では、“sharing”を「話の共有」と訳している。この単語は、直訳すれば「共有」または「共有すること」であるにもかかわらず「話の共有」と意識したのは、「共有」や「共有すること」では、普通名詞として用いている単語と紛らわしくなるからである。そこで、個々人の語りが集まりでは重視されている側面に注目し、「話の共有」とした。

で使われていた。

女神会館が開館した頃に、メーリングリストで回ってきた次のような連絡の中の「コミュニティ」は、「隣人」と同義であり、自分たち以外の町の人々のことを指していると考えられる。

事例 1) サラからの女神会館でのイベントのお知らせ

11月29日の10時半から12時半、女神会館にてコーヒー・モーニング¹²⁰を開きます。会館周辺のコミュニティの隣人を招待する予定です。

[2008年11月9日 メーリングリスト]

形容詞的に使われている次の2つの「コミュニティ」はどうだろうか。

事例 2) 季節の祝祭の場所変更に関するジョーンズからの連絡

女神神殿が手狭になったので、アセンブリー・ルームで3回祝祭を行いました（秋分、ソーウィン、冬至）。アセンブリー・ルームを使うと、コミュニティの季節の祝祭を創り出せますが、神殿を使うと、女神神殿の季節の祝祭を創り出せ、それが私たちのしたいことです。ですから、再び女神神殿で行うことにします。

[2007年2月3日 女神神殿のメリッサ連絡帳より抜粋]

事例 3) 暗月の集い¹²¹のクレアの発言

エマが「季節の祝祭はいつも公開でやっているけれど、プライベートでもやりたいわよね」と提案する。クレアはそれに賛同した後で、スーとトムが開いた「地球への祈禱の日（Earth Vigil Day）」について、「全く逆だけど、とてもコミュニティな感じですよ良かったです」と言った。 [2010年11月6日 メル宅にて]

事例 2) は、女神神殿というグラストンベリー女神運動が借りているプライベートな空間での季節の祝祭と対比させて、アセンブリー・ルームという公共の空間での季節の祝祭を、「コミュニティ」と形容しているため、公に開かれたという意味に近い。事例 3) も、プライベートでやりたいというエマの発言を受けて、クレアは「全く逆」と形容しているので、一般に広く門戸を開いているという意味で使われているといえる。

しかし、プリーステス・トレーニングの説明会のとて、ヘレンが発した「コミュニティ」

¹²⁰ コーヒーとビスケットを販売して、くつろいでもらうという資金稼ぎの方法。イギリスでは、教会がよく催している。

¹²¹ 本章 3-1 参照。

の範囲はこの3つの事例とは異なる。

事例4) プリーステス・トレーニング講師のヘレンの発言

一生の友人ができた、コミュニティを見つけたという生徒さんが沢山います。

[2010年9月5日 女神会館にて]

プリーステス・トレーニングの受講によって得られる「コミュニティ」とは、すなわちプリーステスをはじめとするグラストンベリー女神運動に携わる人々のことだと考えられる。

第2節と第3節で取り上げるポトラック・サパーが始まるきっかけとなった集まりで、ジョーンズはこの集まりの趣旨を次のように説明した。

事例5) ジョーンズからのある提案

今日は、グラストンベリーに女神コミュニティをつくるためにはどうすればいいかを話し合うために集まってもらったの。(中略) プリーステスとメリッサとそのパートナーでコミュニティをつくっていこう。 [2010年11月11日 ジョーンズ宅にて]

「女神コミュニティ」とは、これからつくっていくもので、まだ存在しないのだから、事例1)～3)の「コミュニティ」とは明らかに異なる。そして、後の発言からは、ここで想定されている「コミュニティ」に含まれる対象がプリーステスとメリッサとそのパートナーとして具体的に示されている。

この約1年後の「マドロンの日」という集まりの日、集まったグラストンベリー女神運動の積極的な参加者の和気あいあいとした雰囲気を見て、傍らにいたあるプリーステスに、ジョーンズは満足した表情で次のように言った。

事例6) 人々の雰囲気に対するジョーンズの感想

今までは装置みたいだったけれど、去年からのコミュニティの感じはすごくいいよね。(中略) コミュニティとは、一緒にいること。 [2010年10月10日 女神会館にて]

初めの「コミュニティ」は、非人間的で無機的な「装置」の逆で、人間らしい、温かみがあるという意味が込められていると思われる。また次の「コミュニティ」は「一緒にいること」と定義づけているが、プリーステスやメリッサの楽しそうな様子を見てこのように発言しているわけだから、一緒にいる相手は誰でも良いわけではない。この日は、定期的な寄付者、プリーステスやメリッサ、およびその家族といった積極的な参加者が親睦を深める、限定された人々で集まった。つまりこの内輪の集まりに来る資格のあるグラストン

ベリー女神運動の人々を意味していると考えられる。

こちらの、限定的な意味での「コミュニティ」という言葉がもっとも象徴的に使われていたのが次の事例である。

事例 7) 季節の祝祭の打ち合わせ前の話の共有¹²²におけるサラの発言

話し終えた参加者の数人が困難を抱えた状況にあることを受けて、サラは女神神殿の外のハイ・ストリートの方向をちらっと見やりながら、「ハイ・ストリートを歩いている人たちはこのようなすばらしいコミュニティをもっていないが、自分たちにはあることを感謝しよう」と言い、両隣の 2 人に片手ずつを差し出す。そうして、全員で輪になって互いの手をつなぎ、しばらくの間瞑想していた。 [2010 年 9 月 22 日 女神神殿にて]

ここでは、第 4 章の儀式の分析を通してみてきたように、ただグラストンベリーに来ていだけで、胸襟を開いて深い話ができるような仲間をもたない人々と自分たちとの間に境界線を引きながら、自分たちのつながりを再確認しているといえる。

以上の事例から、グラストンベリー女神運動において「コミュニティ」という言葉は、ときに外集団を含む人々全体を指し、ときに内集団を指す言葉として使われていることがわかる。イギリスにおいて「コミュニティ」は一般的にいい感じがする言葉であることを踏まえれば [Bulmer 1987 : 26-27]、後者の意味で用いているとき、この単語を発することで、自分たちの育んできた親密な関係性を外に向かってアピールしている、または参加者の間で再確認しているといえる。その一方で、前者の意味でも使用することで、自分たちの集合体が外に向かって開かれていることを呈示し、確認しているといえる。第 4 章では、儀式の場が一般に開かれているようで、そうではないことを指摘したが、この「コミュニティ」という言葉の使い方からは、それ以外の日常の場面でも同様の傾向がみられると思われる。これ以降、検討の対象とするのは、後者の意味で用いられている「コミュニティ」と呼ばれる人々の集まりである。

2、雑談の場

グラストンベリー女神運動の集まりに行くと、よく「話の共有から始めましょう」と言われる。本節では、まず分析の主眼となるこの話の共有について説明する。続いて具体的な事例を検討し、話の共有が必要とされている理由を考える。

2-1 話の共有とは

「話の共有」とは、複数の人々が順番に自分が現在、おかれた状況やそのときの気持ち、

¹²² 本章 2-2 参照。

それに対する自分の解釈を語ることである。参加者は互いの顔が見えるように円形になって座り、1人ずつ話していく。制限時間はなく、沈黙が少し続いたら、終了と受け取られる。1人の人が話す間、他の参加者が口を挟むことは基本的にはないが、話し終わってから、自らの類似の経験を語ったり、優しくアドバイスをしたりすることもある。ただし、「あなたのせいじゃない」「焦らないで」など、話者を全面的に肯定し、気持ちを軽くするようなコメントが多く、話者を咎めないことが暗黙の了解になっていた。

女神運動以外のオルタナティブ・スピリチュアリティの実践の場でも行われるが、グラストンベリー女神運動では、プリーステス・トレーニング中、季節の祝祭の打ち合わせの前など、頻繁に行われている。誰とも目を合わせずに、辺りをぼんやり見ながら話す人もいるし、さばさばと話す人もいる。聞き手は話し手を集中して見つめていて、上の空とか退屈そうな様子の人はいなかった。話の間、大げさなジェスチャーをする人は見られなかったし、身体接触もほぼ見られなかった。静かな空気の中、中座する人も身動きする人もほとんどおらず、淡々と話が進んでいった。

このような「話の共有」は1970年代に一部のフェミニストが取り入れた意識覚醒グループの実践に由来している。Ellerは、その基本的なやり方を次のように記している。

その晩の議論のトピックを選び、5～15人の女性が車座に座って、順番にトピックについて話す。話している間、他の女性から遮られたり、非難されたり、称賛されたりすることはなく、全員が思い浮かんだことを自由に発言できるようにした [Eller 2000a : 27]。

第3章第2節で述べたように、ジョーンズは1980年代に意識覚醒グループを主催しているので、その手法を話の共有に取り入れたのだと思われる。

2-2 プリーステスたちの話の共有

筆者が参与観察をした話の共有の場は、季節の祝祭の打ち合わせの前、ジョーンズが発案したプリーステス限定のポトラック・サパー、あるプリーステスが始めた女性限定の暗月の集いの3種類で、合わせて13回参加した。各集まりがグラストンベリー女神運動の中でどのように位置づけられていたかは次節で検討するが、それぞれの共有の場における雰囲気は、個々に分析する必要が感じられるほどには変わらなかった。表6-1は筆者が参加した話の共有の場への積極的な参加者の参加の様子一覧であり、表6-2は表6-1をもとに各集まりの参加人数とグラストンベリーおよび周辺在住者と非在住者の人数をまとめたものである(3-1で触れる活動共有サークルのデータも示してある)。ここからわかるように、参加の割合はグラストンベリー在住者のほうが非在住者より高い。ただし、その後打ち

合わせがある季節の祝祭前のほうが、より広範囲から人が集まっていた。また、夜に開催されるポトラック・サパーと暗月の集いのほうが、午前中に開かれる季節の祝祭の打ち合わせの前より、感情的な話がされやすかった。話の共有全体の長さは平均で、季節の祝祭の打ち合わせの前は1～1.5時間、ポトラック・サパーと暗月の集いは2～3時間だった。参加人数は3～12人で、平均で7.8人が参加していた。

なお、このような場では自分の思いや体験を赤裸々に語るのも、調査にはとても有意義だった。しかし、話した内容は他言しないことが暗黙の了解になっており、レコーダーの使用はもちろん、メモを取ることも憚られた。そのため、その場でのやりとりをできるだけ記憶し、帰宅後ノートに再現した。

それでは、どのようなことが話されているのか、具体的にみていこう。なお、本節で名前が登場する人物は、全員がプリーステス・トレーニングを受講したプリーステスである。

(a) 女神

冒頭で記したように、女神と直接関わった経験に関する話を筆者はほぼ耳にすることはなかった。その一方で、ときどき聞かれたのが、ジョーンズの女神体系の中にそれぞれ性格をもって位置づけられた女神になぞらえて、おかれた状況を説明する場面である。

事例 i) 比喩的な女神の利用

シーラはグラストンベリー近くの農場の離れを借りて住んでいるが、大家一家との関係が最近ぎくしゃくしている。それがストレスになっていて、引っ越しを考えていると話す。「そのうえ、以前付き合っていた男が、ストーカーみたいな行為を繰り返してきて。本当にストレス」。(中略) しかも、12月に元夫が亡くなったため、遺言書の処理のため、ロンドンとの往復を繰り返していて、忙しいと話す。「[前回集まったときから、]色々なことが起こって、感情的にも色々あった時期だった」と疲れた顔で話すシーラに対し、サラが「これはすごくリアノンの時期だわ、ケリドゥインとは全く逆」と言う。すると、シーラは強く頷き、その後繰り返し、「今はリアノンの時期だから、こういうことが起こるんだ」というように、この表現を用いていた。 [2010年5月17日 ポトラック・サパー]

ここで登場するリアノンは、グラストンベリー女神運動の中では、女性の人生でいうと、少女から母親になる間の、恋愛を楽しむ時期を表す女神とされている。逆にケリドゥインは老年期の女性を象徴し、静かで動きが少ないとされる。静かなケリドゥインとは真逆の情熱的なリアノンを、激しい感情的な起伏を経験したシーラの状態を喩えるのに、サラは用いたのである。

ただし、ここでの話題の主役は女神ではなく、あくまで話し手本人であり、女神はその

話の中で比喩として利用されているにすぎない。

他に祝祭での女神の召喚の相談がなされることもある。

事例 ii) 活動の打ち合わせ

プリーステス・トレーニング 3 年目のソニアが話を始めた。彼女は「祝祭で女神を呼び出すのは初めてだから緊張しています。どういう風に呼んだらいいのですか？」と不安そうに尋ねた。それに対してジョーが「基本的には初めに、『私と一緒に、その方向を向いてください』と言って、女神に関連する言葉を言って、最後に『吸い込んで、万歳、そしてようこそ、彼女を連れて、中央に向き直ってください』と言えればいいんだよ」とアドバイスをする。ソニアはメモを取りながら、練習を始める。呼び出しに慣れている他の人たちは、温かい目で見守っている。最後に、女神カンファレンスのセレモニアリストを何年も務めるマリカが「呼び出しの言葉は覚えるものじゃないの。その場で湧き上がってきた言葉を言えればいいんだよ」と母親のように温かく、しかしきっぱりと言う。ソニアは顔を上げてマリカの顔を見るが、うつむいて考え込んでしまった。

[2010 年 3 月 20 日 春分の祝祭の打ち合わせ前]

その他の女神の言葉が出てくる場面でも、プリーステス・トレーニングや女神カンファレンスなどの具体的な活動の打ち合わせに関する話題であり、話題の中心は女神ではなかった。

なお、女神との直接関わった経験についての考察は、第 4 節で行う。

(b) 確認・連絡事項

しばしばあったのが、グラストンベリー女神運動の活動の中で気になっていたことを確認したり、連絡事項を伝達したりする場面である。

事例 iii) サラへの報告事項

ローズは、「今日の女神神殿でのメリッサのとき、明かりのスイッチが見つからず、点けっ放しにしてきてしまった」と言う。(中略) サラはやや顔をしかめつつ、その場所を伝える。ローズは頷き、「次回からは気をつけるね」と言い、別の話を始める。

[2010 年 1 月 12 日 ポトラック・サパー]

事例 iv) サラへの伝達事項

ヘレンが「教会の〔クリスマスツリー展示会の〕ツリーの飾りつけに使った飾り、どうすればいいかなあ」と尋ね、サラは「来年の女神神殿の冬至の時期の飾りつけに使えるよ

うに女神神殿の屋根裏にしまっておこう」と提案する。

[2010年1月12日 ポトラック・サパー]

こういった些細なことは、話の共有の中ではなく、その前後に個人的に確認されることもある。また、電話や電子メール等で個人的に確認することもあり、おそらくローズもヘレンも、この日サラに会わなければ、そうしていただろう。これらは、普段は電話や電子メールといった1対1のコミュニケーションの中での話題が、複数の人々が集う場にたまたま持ち込まれた事例だといえる。

(c) 近況報告

話の共有の場の話題の大半は近況報告である。クリスマスを家族と過ごした、ダイエットを始めたなど、自分が最近したことやそれに対する自分の意見など、軽いものが多い。しかし、もう少し深刻な話を聞かされることもある。なお次に登場するクレアは、女神神殿に飾られていた女神の絵を描いたアマチュア画家のプリステスである。

事例 v) クレアの苦境

クレアは夫からいきなり離婚したいと言われたと言う。そして、17歳の娘が変な男と付き合いだして、困っていると話し出す。

この男は喧嘩したからって、真夜中に、携帯電話の電波も通じないような何もなかったところに娘を置き去りにするような人なのよ。〔娘のことが心配で〕すごく怖かった。しかも、この人の影響で、うちの子、カレッジに行かなくなっちゃって、そのせいで給付金の額が大幅に減らされた。週60ポンドで一家3人食べさせていけなくちゃならないのよ。そんなの、無理に決まってる。今、冷蔵庫には食べ物が何もないような状態で、どうしたらいいのかわからなくて、ただ途方に暮れている。

そう言うなりクレアは泣き出してしまう。(中略) 彼女は20年近く介護士の仕事をしてきたが、絵を描くことに専念するため、今は職には就いていないと話す。

敏感さは失われ、創造する力もない。人からは、ファンタジー・ワールドであるグラストンベリーに行くのはやめるように言われたけど、そんなことはできるわけないでしょう。

その言葉に、その場にいた何人もが真剣な表情で頷く。エマはクレアの側に移動し、彼女をずっと抱きしめていた。打ち合わせの後にはいつもみんなでカフェで昼食をとるのだが、クレアはサラに「今日はランチのお金もないの」と伝える。すると、サラは「心配しなくていいから」と慰め、実際クレアの分まで払っていた。

[2010年9月22日 秋分の祝祭の打ち合わせ前]

このときのクレアは、娘の非行と生活費の枯渇という危機的状況に瀕し、そのことで頭がいっぱいになっていた。しかし、彼女の発言からは、自分の状況への同情を期待する思惑も汲み取れる。たとえば、グラストンベリーに行くことをやめるのは無理、という言葉からは、やめるように言った相手に賛成しない自分を肯定してほしい、相手への反発の気持ちも共有してほしいという思いが込められていると考えられる。実際、彼女は一同から同情を得ることに成功している。また、経済状況を話すことで、懸案事項だったその日の昼食代に対する解決策を誰かが提示してくれることを期待する意図も読み取れる。話の共有の場で、身体接触が見られるのは珍しいのだが、このときにはクレアの話にエマが身体的に反応する様子が観察された。

これほど深刻な話でなく、いわゆる愚痴も聞かされる。

事例 vi) リズの愚痴

第5章2-4でみたように、夫とグラストンベリーに引っ越してきたリズは、夫婦2人で引っ越してきた家の内装工事に取り組んでいた。

あの人ったら、毎日毎日、家の改装のことで色々と言ってくるのよ。今日だって、朝起きた途端、「君のことは大好きだよ。それで、バスルームの配管のことなんだけど、〜〜にしたほうがいいと思うんだけど」なんて言ってきて。退屈な先生が家にいるみたい。[2010年3月20日 春分の祝祭の打ち合わせ前]

このように、リズが夫のことをまくしたてるのは、いつものことである。そのため、このときもみんな苦笑しながら聞いていた。

また第5章でも述べたが、筆者の記憶にあるかぎり、エマはいつも居住スタイルのことで悩んでいた。引っ越してきた当初、彼女は筆者の隣のB&Bに部屋を長期契約していた。

事例 vii) エマのぼやき

自分の空間がほしい、私だけの空間が。今のところは、みんなとてもいい人たちだけど、台所も共同、冷蔵庫も共同。私だけのものでない。プライバシーが必要な。こ

れでは、子供たちも呼べない。 [2010年2月9日 ポトラック・サパー]

彼女は観光シーズンを迎える前に、B&Bを出なくてはならず、単身用アパートを探していた。しかし、適当な物件が見つからず、後述するプリーステスのメルと別の女性と3人で、シェアハウスをすることになった。ところが引っ越した数日後、希望通りのアパートが見つかり、1週間後にはそのアパートに移り、念願の1人暮らしを始めた。久しぶりの1人暮らしは、プライバシーも確保でき、楽しいはずだったが、彼女はまもなく孤独感に悩まされるようになる。特に子供や友達がよくやってきた、夏の休暇シーズンを過ぎると、その思いはますます強くなっていった。

1人であるのがすごく嫌で、とても寂しい。外を1人で歩くのはいいんだけど、室内に1人であるのが耐えられない。(中略) こないだ、[プリーストの友人である] コリンが泊まりに来てくれたとき、家にいるのが自分1人でないということが、すごく嬉しかった。だから、私は1人が嫌なんだなって改めて気づいたの。

ため息をつきながら、このように語るエマに対して、サラはメルたちとのシェアハウスをすぐに解消したことをあげて、「けれどシェアハウスも嫌だったんでしょう？ あのときはプライバシーが必要なんだって言ってたわよ」と優しく尋ねた。エマは、「そうだけど…、今の家は眺めがあまりよくないのも嫌。だからとにかく引っ越したいのよ」と繰り返す。

[2010年10月11日 ポトラック・サパー]

エマは、他人と暮らすのはプライバシーが確保できないので嫌なのだが、1人暮らしも寂しくて嫌だと言うのだ。それに対してサラのようにコメントする人もいるが、エマが聞く耳をもつ様子はない。おそらくエマはクレアのように同情を求めているわけではない。心の中のもやもやをただ、吐き出してしまいたかった、より端的に言えば、リズのように愚痴りたかったのだろう。

このような場では、1つの話がきっかけになって、他の人もそれに自分の類似の体験を重ね合わせることで、相手の体験に近づこうとする様子もみられた。

事例 viii) 孤独な1人暮らし

暗月の集まりの初回、1人のプリーステスが、自分の空間がほしくて1人暮らしを選んだが、長く暗い冬を1人で過ごすのは辛いので、冬になる前に誰かとシェアハウスするつもりと語った。それに、いつも住居のことで悩んでいるエマも同意した。

私も自分の空間がほしくて、1人暮らしを選んだけれど、今は誰かと一緒に暮らしたい。グラストンベリーには沢山の独り身の女性がいて、みんな1人ぼっちは嫌だって言っているのに、1人で暮らしているのよね。

[2010年10月7日 暗月の集まり]

これは自分の同じ悩みを抱えている人の話を聞いて、その意見に重ね合わせる形で、相手を肯定し、自分の悩みを吐き出しているといえる。

またあるとき、音楽活動をしているローズが自分の番が回ってきたとき、次のような話をした。

事例 ix) パートナーとの距離感の必要性

同居している彼氏がここ数日、家にいないから、自分の時間が取れて嬉しい。彼も私と同じで、家で音楽を書いている時間が長いから、一緒に家にいることが多くて。彼のことは愛しているけど、ずっと一緒だと自分のことができない。自分の空間が必要なのよね。

これを受けて、いつも夫の愚痴をこぼすリズが「私も〇〇〔夫〕は好きだけど、ずっと一緒にいるなんて、絶対無理無理！」と強く同意する。さらにロンドン在住のコリンが、かつて妻と一緒にあるプロジェクトに参加したことがあったが、仕事も生活も一緒というのは大変すぎて、それ以来一緒に働くのはやめようと決めたと話す。

[2010年9月22日 秋分の祝祭の打ち合わせ前]

ここでは、恋人と一緒にいることが辛かったが、別居しているのも辛いと悩むローズに対し、配偶者との間に同様の問題が生じたことのあるリズとコリンが自分の体験を明かしつつ、恋人と別居している現在のローズの状況を肯定するような方向に話を持って行って、「同情」している。

特にのろけ話などの明るい話題より、ここで取り上げた話のような辛い体験に対して、より多くのコメントが寄せられたり、相槌を打たれたりする様子が確認された。たとえば筆者は、話の共有の場では、いつも季節の変わり目に家具を動かすといった些細な話をしていたのだが、その場でコメントをもらえたことは一度もなかった。あるとき翌週に搭乗予定の飛行機のキャンセルをその朝に知り大慌てだったこと、日本に送った船便が予定日を大幅に過ぎても着かなくて不安だったことを話したら、サラから「あなたがそういうことを話してくれたの、初めてだね。嬉しいよ」と言われた。コメントらしいコメントをもらえたのは、このときが初めてだった。

話の共有の場で話されることの大半は、(c) の近況報告であり、事例 v) のクレアのように助けを必要とする深刻な話もたまにはあるものの、その多くは事例 vi) のリズや事例 vii) のエマのように、わざわざ集まって話す必要があるとは思えない雑談である。しかし当人たちにとっては悩みであり、聞いてもらいたいのである。これは他者の苦しみの語りを共有するという形でのつながりの構築を目指しているともいえる。

しかし、実はグラストンベリー女神運動では、グラストンベリーに住んでいたとしても、こういったことを話せる場があまりない。たとえばキリスト教では、週 1 回はミサのため集まり、その後はお茶を飲みつつ、おしゃべりをする機会が設けられている。またグラストンベリーではカトリックとイングランド国教会のみだが、教会の建物もほぼ毎日開いており、特にイングランド国教会のほうは町の高齢者の団欒の場と化している。また、あるスーフィズムのグループの場合、週に 1 回、コーランを唱え、ランチをともにする集まりがある。そのうえ、町の中にチャリティ・ショップを開いているので、特別な用事がなくても、ふらりと立ち寄れ、筆者もよく立ち寄っては、スーフィの人々とおしゃべりを楽しんできた。それに引き換え、グラストンベリー女神運動の場合、女神神殿という日常的に立ち寄れる場所はあるが、第 3 章 3-3 で覗いたように、基本的には 1 人での瞑想の場で雑談をできる雰囲気ではない。また、第 4 章でみた季節の祝祭は年 8 回しか開かれない。プリーステス・トレーニングやワークショップもあるが、機会も長さも限られている。つまり、ポトラック・サパーが始まるまで、日頃何となく集える場所や機会、そこに行けば友達とおしゃべりが楽しめる「たまり場」のような時間と空間が極端に少なかったのである。

ただし昔からイギリスでは、どんな小さな村にも、必ずパブと教会があり、パブは男性、教会は女性の社交場だと言われていた¹²³。話の共有に参加していた人の大半が女性であったこととあわせて考えると、女性が女神運動という宗教的実践の場を利用して、おしゃべりすることは、ある意味イギリス的だといえよう。

第 5 章では、グラストンベリーに移住してきたプリーステスは、一緒にいることで生まれるつながりを殊更に求めていることが多いと指摘した。しかしグラストンベリーに住むことだけでは、これは満たされない。そのため、機会の少なさを補うために、話を共有するという名目のもと、あえて集まる機会をつくっていたと考えられる。

3、適度な距離感の希求

第 2 節では、ともに過ごす時間をつくるため、話の共有が必要とされていたと指摘した。

¹²³ 女性のパブへの進出は最近のことである。今でもグラストンベリー等の田舎のパブに集まるのは、ほとんどが男性のみか、男女のグループである。女性だけで飲んでいるグループの大半は、外国人観光客である。

ここで、注意しなくてはならないのは、このような場で「共有」されている話の大半は、話の重ね合わせがみられた、事例 viii) のエマや事例 ix) のローズのような、自らも同様の苦しみを抱えていることによる体験の共有というより、事例 v) から事例 vii) のような相手の苦況を知っただけという、語りの共有であるという点である。佐藤 [2002] の調査したニューヨークのエイズのセルフヘルプグループや、Lawless [1993] の調査したアメリカ中西部の女性聖職者のランチの会では、当事者以外には理解されにくい問題を抱えた人々が、その問題を共有することで、関係は親密化し、集まりはよく継続していた。また、自らの慢性的な病の苦しみからの解放を求めて、イギリスで超越瞑想 (TM) やレイキやヨーガを実践していた Garrett は、これらの実践は自己を高める目的だけではなく、他の実践者と苦しみの身体的な体験を共有することにより、実践者たちが互いに結びつけられていくと指摘している [Garrett 2001]。このように、自分の弱さを曝け出すことで他者との共同性が新しく構築されていくという様子は、断酒会においても見出されている [葛西 2002]。しかし、グラストンベリー女神運動の話の共有の場で共有されていたのは、エマやローズのような体験の共有であっても、アルコール依存症やエイズ、女性聖職者であることなど、その苦しみを抱えた当事者以外には理解してもらいたい苦悩の体験や、超越瞑想などの身体的な体験というより、ずっと軽い悩みやちょっとした愚痴である。そのため、話を共有することの必要性は、これらの人々より低そうである。

このことを踏まえて、本節では話を共有することを目的としたポトラック・サパーと暗月の集いの始まりと終焉について取り上げ、彼らが望むグラストンベリー女神運動の積極的な参加者とのつながりについて考えてみたい。

3-1 続かないポトラック・サパーと暗月の集い

2009年1月、筆者は博士課程の調査のため、グラストンベリーに戻ったものの、女神運動の活動が低調化し、ほとんど困り果てていた。2006年にはあった新月や満月の儀式やワークショップがなくなり、人々の相互作用を観察できる機会は、季節の祝祭に限られてしまっていた。正直に言って、女神運動を博士論文の主な対象にすることは諦めかけていた。そんな筆者の目をもう一度、女神に向けさせてくれたのが、本節で取り上げるポトラック・サパーだったのである。

この集まりに参加するきっかけを作ってくれたのは、筆者のことを修士課程の調査の頃から何かと気にかけてくれていたサラだった。筆者は2006年、彼女がコーディネーターを務める女神神殿でよくメリッサをしていたのだが、2009年に再訪してからは足が遠のいていた¹²⁴。そんなある日筆者は、道で偶然出くわしたサラから、「今度の水曜日、7時半から、

¹²⁴ 理由の1つは、煙でハーブを燻すインセンスが推奨されたことだった。筆者は煙を吸うと咳が止まらなくなるため、担当のときには焚いていなかった。インセンスは必須ではないのだ

キャシーの家でプリーステスとメリッサの仲を深める集まりがあるからおいで」と誘われる。この連絡はメーリングリストでも流れていたもので、「わかった、たぶん行くね」と曖昧な返事をしたところ、少し険しい表情になり、「あなたのためになるから、絶対に来なさい」と念を押された。水曜日の晩、ジョーンズ宅には 22 人のプリーステスが集まった。持ち寄った夕食を楽しみ、知り合いどうしが歓談していたところ、ジョーンズは静かにするように言い、集まりの趣旨を説明し始めた。

最近、プリーステス・トレーニングをきっかけとしてグラストンベリーに引っ越してくるプリーステスが増えてきたよね。だから、グラストンベリーに女神コミュニティをつくるにはどうすればいいか話し合おう。

グラストンベリーに引っ越してきたものの、女神の友達と会う機会があまりないので、孤独を感じる人も少なくない。だから、医者や庭師などを紹介しあうといった支援体制を整えようとのことだった。話し合いの中で、その一環として、月に 2 回、女神会館で夕食を持ち寄りながら、お互いの「グラストンベリー体験」を共有する集まり「ポトラック・サパー」を開こうと提案される。「プリーステスとメリッサとそのパートナーとで、コミュニティをつくっていきましょう」とジョーンズが宣言し、その晩はお開きになった。

ポトラック・サパーを担当したのはサラだった。半月後の女神会館での第 1 回の集まりには、10 人もの人が集まり、夕食を食べながら、各自順番に、今考えていること、感じていることを、思いのままに語った。

ところが、初めの頃こそ 10 人ほど集まっていたものの、表 6-2 のように参加人数は徐々に減っていった。2~3 人しか来ずに、その場でキャンセルされることが続き、やがてサラはメーリングリストを通じて、前もって参加の意志を確認し、2 人以下だと事前にキャンセルするようになった。来なくなった人たちに、筆者がその理由を尋ねてみると、「その日は水彩画のレッスンがあった」、「夜は子供の個別指導の仕事をしている」、「ワークショップで、疲れてしまった」というように、習い事や仕事、家事や育児で忙しいとか、疲れたからという返事が返ってきた。このように人が集まらない状況を、オランダから移住してきたカリンは憂いていた。

私、ポトラック・サパーに行く度に、不安な気分になる。すごく落ち込んでしまう。

が、訪問者の中にはインセンスを希望する人もいて、焚かないことを申し訳なく思いボランテニアを控えていた。また、この頃から女神神殿内での雑談を禁じられ、訪問者と話しづらくなり、観察以上の調査が難しくなったこと、女神運動以外の研究テーマを探していたことも、大きな理由である。

何でだろうって思っていたんだけど、それはみんなの悩みをきいて、自分の番には自分のそういうことを明かすからだと思っただよね。それで、すごく疲れて、憂鬱になる。

これは、2010年2月の半ば頃、カリンがメーリングリストに流したメッセージである。メッセージでは、ポトラック・サパーは1ヶ月に1回にして、もう1回は各プリーステスを各自の特技の講師として招き、それをみんなで楽しむという集まりを開いてはどうかと提案されていた。

この提案に対し、賛成するプリーステスもいた。しかし、ジョーンズとサラはこの提案を快く思わず、月に2回のポトラック・サパーの必要性を主張し、それとは別にカリンが活動を始めようことを勧めた。これ以降もポトラック・サパーは活性化せず、キャンセルが相次いだ。3月のある日の集まりも、サラの急病のため、カリンと筆者しか来ず、キャンセルになった。その晩、カリンから再びメーリングリストにメッセージが流れてきた。

この集まりはもう必要ないの？ みんなうまくやってて、キャシー〔・ジョーンズ〕とサラがセッティングしてくれたこういう集まりは、もういらないの？（中略）前に私が提案したみたいに、2回に1回は何かするほうが良くない？ 個人的には、大変な思いをしているときに、定期的に集まって、話や特技を共有して、楽しい時間を過ごして、お互いに助け合うのはいい考えだと思うんだ。

結局、カリンの提案した話の共有はせずに「何かをする」活動共有サークル¹²⁵と、ポトラック・サパーが毎月1回ずつ開かれることになった。しかし、どちらの集まりも、それほど多くの人が集まることはなかった。主催者以外には、女神のあらゆる集まりへの常連メンバーであるエマと筆者に、数人が加わることもある程度だった。

一方の暗月の集いは、ジョーンズではなく、1人のプリーステスの発案で始まった。発案者のメルによると、これから満月に向かう暗月、つまり新月の夜は「エネルギー」が増大し始めるときなので、月を象徴の1つとする女性には特に意味のある夜であること¹²⁶、ネイティブ・アメリカンの文化をはじめ、月経の時期に女性が隔離される伝統をもつ文化は多く、そんなとき女性は日常の雑事から離れて、月経小屋に行き、同じ境遇の女性と自分を曝け出すような深い話をしていたことから、毎月この夜に開催することが決まった。

メルはこの当時、プリーステス・トレーニングの1年目を終え、2年目を始めようとし

¹²⁵ 筆者の滞在中に行われた活動は、ダンス、歌、詩の創作、パブでの夕食会、マッサージである。

¹²⁶ 女神運動やネオペイガニズムに限らず、ヨーロッパの多くの国々では、月を女性、太陽を男性に結びつける。

ていた。プリーステス・トレーニング 2 年目では、他の人を巻き込む何らかの女神と関係した活動をすることが求められるため、その準備の意味もありこの集まりを企画したのだった。2010 年 9 月、カリンが始めた活動共有サークルの特別版として開かれたパブでの夕食会の場でメルは自分の考えを参加者に伝え、集まりの連絡はグラストンベリー在住者専用のメーリングリストにも流され、10 月の暗月の夜から始まった。

この集まりはメルの自宅で 7 時半から開かれた。ポトラック・サパーとは異なり、初めに全員で手をつないで女神を呼んだり、軽く瞑想をしたり、ハーブを焚いて清めたりするなど、簡単な儀式めいたことも行われた夜もあった。基本的にはプリーステスとメリッサしか参加できない、閉鎖的なグループだったが、メンバーはその都度、異なっていた。メルの提案で、この 1 ヶ月の近況と次の 1 ヶ月の抱負について話し、抱負は彼女が記録し、翌月の集まりのときに達成具合を確認することが決まった。

参加人数をみると、表 6-2 に示したように、当初はポトラック・サパーより盛況だった。その理由として、両方に参加していたエマは「女神会館は広すぎて寒い。ここなら暖炉もあって、家庭的で心地よい」と居心地の良さを挙げていた。ハーブティーをいただいたり、手作りのケーキがふるまわれたりすることもあり、筆者も毎回心地よいひとときを過ごしていた。筆者は帰国に伴い、2011 年 1 月までの 4 回しか参加できなかったのだが、その間にメルのプリーステス・トレーニング 2 年目の活動のためだけではなく、継続していこうという話になり、実際その後の参加者とのメールやメーリングリストのメッセージを読むかぎり、3 月までは順調に継続している様子だった。しかし、5 月頃から徐々に様子が変わっていった。

筆者が最後に参加した 1 月の集まりのとき、メルは毎回自分の家で開くことは負担だから、他の参加者との交代制にしたいと話していた。しかし手を挙げた人は少なく、帰国後にメーリングリストでのやりとりをみるかぎり、5 月頃からはその人たちも渋るようになっていた。また、暗月の夜に集まることに意味があったはずなのに、都合をつけやすいようそれ以外の夜に開催する提案がされたり、メルが別の用事を入れて欠席したりするようになった。休暇で出かけてしまう人が増え、一般的に人が集まりにくい夏になると、集まりの提案すらなされなくなり、筆者が補足調査のために再訪した 2011 年 9 月には完全に消滅していた。

翌年 5 月、この集まりは「女性の暗月の儀式」と改名されて、再開された。しかし、話の共有が主な目的ではなく、呼吸法やダンスも組み込んだセラピーのようなもので、10 ポンドと有料になっていた。また、個人宅ではなく女神会館で開かれるうえ、プリーステスとメリッサに限らず、誰でも参加可能だった。つまり、プリーステスとメリッサを中心としたプライベートな話の共有の場から、自己成長を目指すオープンなワークショップという異なる性質の集まりに変貌したのである。

季節の祝祭前の打ち合わせ等、グラストンベリー女神運動の活動全体で、話の共有がなくなっただけではないが、話を共有することだけを目的とする集まりだった、ポトラック・サパーも暗月の集いもなくなった。このことは何を意味しているのだろう。

ポトラック・サパーでは、「話の共有」をして、プリーステスたちが集まる機会の少なさを補おうとしたが、徐々に人が集まらなくなった。筆者の調査期間中、積極的に参加し続けたのは、主催者のサラとエマと筆者だけだった。他のプリーステスが来なかったのは、筆者に語ったように、忙しかったり、疲れていたりしたのかもしれない。しかし、多忙や疲労というのは、何かを断りたいときに頻繁に使われる「言い訳」である。そのため、プリーステスたちの集まりへの不参加を、それだけに求めることはできない。

その日の集まりの終わりがけ、片づけをしながらカリンは「もっと沢山の人が来ればいいのになあ」と、活動共有サークルやポトラック・サパーに人が集まらないことをぼやいていた。それに対してメルは「誰が来るかわからないから、みんな安心して気がしないんじゃないかなあ」と小さく返事をした。カリンは、「でも、来るのは見知らぬ人ではなくて、プリーステスでしょう」と無然とした様子で応えた。

[2010年11月3日 活動共有サークル]

このメルの発言からは、話の共有には気が進まない様子が窺える。プライベートなことをそれほど他人に話したくなさそうなのである。メルの発言そのものには納得していないカリンも、先述したメーリングリストの中で、人の辛い話を聞くと落ち込むと言い、話の共有をそれほど望んでいない様子もみせる。当初は人が集まっていた暗月の集いも、人が集まらなくなり、この形態での集まりは終了した。

この一連の経過からわかるのは、要するに、プリーステスたちはともに過ごすことは求めている、話の共有そのものをそれほど必要としていなかった、つまり、頻繁に話を共有して、関係性を深めていくつもりはなかったということである。さらに、カリンが提案した話を共有しない集まりも続かなかったこと、女神会館での活動ではなくパブでの夕食会には多数が参加したこと、暗月の集いの評価された点の1つが女神会館ではなく自宅で開かれていたことを考えると、プリーステスたちは女神運動らしさのある枠組み、言い換えればスピリチュアルな香りのする雰囲気の中で頻繁に会うことを、それほど望んでいなかったと考えられる。話の共有だけでなく、感情を強く揺さぶるような深い体験や意識の共有は、ときどき儀式やワークショップに行くだけでよかったのである。

次に、パーティ、つまりグラストンベリー女神運動らしさの枠外で開かれるより気軽に時間と空間を共有する集まりを取り上げ、この人たちが作りだしたつながりの特徴について、さらに考えていく。

3-2 女神不在のパーティ

ポトラック・サパーが始まった頃から、個々人が誕生日や新居お披露目のパーティなど私的な集まりに、他のグラストンベリー女神運動に関わる人々をメーリングリストを通じて招待することが増えていった。類似の集まりはそれ以前にもあったが、それらはジョーンズが企画して開かれるものだった。また、個人的に特定の人を招待するようなパーティは以前から開かれていたが、メーリングリストというツールを用いて、そこに登録されているすべての者を個人が招待する形での集まりが増えていったのである。2009年11月～2011年1月と2011年9月の間で、そのような集まりは少なくとも10件開かれた。そのうち、筆者が参加した6件の参加人数は表6-3の通りで、積極的な参加者の平均参加人数は16人である。前節で取り上げたポトラック・サパーが8人、活動共有サークルが5.25人、暗月の集いが7.25人だったことを考えると、パーティに参加する人数のほうが圧倒的に多い。筆者が帰国して以降、パーティの開催はますます盛んになり、誕生日や新居お披露目パーティ、結婚式や赤ん坊の命名式など、現在に至るまで、個人が様々なパーティを主催している様子を、メーリングリストやフェイスブックから確認している。

誕生日パーティは、町のパブやカフェの一部を貸し切って、行われることもあったが、新居お披露目や大晦日の場合は自宅で行われていた。その場合、ゲストは食べ物や飲み物を持ち寄るのがふつうである。主催者はやってくる人数を事前には全く把握しておらず、参加者も好きなときに来て、好きなときに帰るといった具合である。女神運動と関係ない人も参加するが、表6-3のように女神運動の積極的な参加者、そのうち特にグラストンベリー在住者が大半を占めることが多い。たとえば2010年の大晦日の夜に、サラの家で開かれたパーティには、18人がやってきたが、サラの恋人の姪などを除く15人は、プリーステスなどの積極的な参加者だった。しかしこの晩、筆者は彼らの女神への関心のなさに驚かされることになる。

彼女の家に着いて間もなく、筆者は女神に祈ったり、今年1年のお礼をしたりするのかサラに尋ねた。彼女はまさかという顔をして、にやりと笑い、「今日は女神は忘れなさい」と言った。この発言に一瞬耳を疑ったが、開いた口から声が出る前にサラは呼び鈴を鳴らしたゲストに対応するためにいなくなってしまった。

(中略)

9時過ぎ、サラの恋人がテレビの傍で家庭用カラオケの準備を始める。目を見開いて驚く筆者の顔を面白そうに見ながら、「イギリスでは年越しのカラオケが伝統なんだよ」と説明し、過去に英語圏でヒットした歌100曲が入ったカラオケ用DVDをセットした。先ほどからソファの上ですっとじゃれあっていたエマとクレアが、酔っ払っているのか、けらけら笑いなが

ら、前へ飛び出し、マイクを握りしめ、熱唱を始める。テーブルのほうでその様子を見ている人々は、リズムを取りながらさびの部分と一緒に口ずさんだり、雑談を続けたり、猫と戯れたり、おつまみを口に放り込んだりと自由にくつろいでいる。熱唱中の2人の隣で、くねくねと踊り始める人も出てくる。

カラオケ発祥の国から来たということで筆者にもマイクが渡される。しかし、リストをみても知っている歌がほとんどない。そこで、「アカペラで女神の歌でも歌おうか・・・」と小声で提案してみるものの、筆者の声に気づいた人は渋い顔をするだけで、その場は白けてしまった。すると、見兼ねたサラと一緒に歌おうと、筆者が知っていた唯一の曲「マンマ・ミーア」をリクエストし、手をとってくれた。

参加者の大半がグラストンベリー女神運動を通じて知り合ったのに、この場では「女神」は話題にならなかったどころか、場の雰囲気にもそぐわない、避けられる話題になっていたのである。

ポトラック・サパーや暗月の集いがなくなっても、プリーステス・トレーニングや季節の祝祭の打ち合わせなど様々な場面で、話の共有は続いているので、話の共有はまだ必要とされているし、ポトラック・サパーや暗月の集いは、短命に終わったグラストンベリー女神運動の集まりにすぎなかったともいえる。しかし、それでも互いの近況を話し合う集まりが廃れる一方で楽しいパーティには人が集まるという傾向からは、彼らがプライベートに踏み込んだ話、特に苦しみのお話の共有をわざわざしたりすることをつねに望んでいるわけではなく、ときには心の距離をおいて、ともにある時間を同じ空間で楽しく過ごすことのみを求めているといえる。それがよく示されているのが、3-1 で提示した苦しみのお話の共有を拒否するカリンのメーリングリストへのメッセージや、話の共有に消極的なメルメルの発言である。2-2 の事例 vii) と事例 viii) でみた1人暮らしとシェアハウスの間で揺れるエマの葛藤も同様に説明できる。寂しいから1人は嫌だが、プライバシーを曝け出すような共同生活も嫌で、友達や子供とときどき楽しく過ごすことがもっとも望ましいのである。一緒にいることは望んでも、過度にプライバシーを共有し合うことで生まれるような深いレベルでのつながりはつねには求められていないのである。

ただし、このような集まりがこの時期育まれたのは、逆説的だが「ポトラック・サパー」のおかげだと考えられる。グラストンベリー女神運動には、すでにいる人たちに対して新しく加わりたい人が自己紹介するような場がなかった。ポトラック・サパーという「核」ができたことで、プリーステスどうしのコミュニケーションを活性化させる新たな機会が生まれた。半ば強制的に話をするすることで、互いの信頼感が生まれ、そこからジョーンズ主導という上からではなく、自発的な形での集まりが生じていったと考えられる。そのため、パーティなどで自発的に集まる機会が増えると、話の共有というやや重たいことだけを核

に集まるような場は役目を終えたと理解できるのである。

4、女神の役割

さて、ここまで筆者は、女神運動について、実践者の活動を中心にあれこれ取り上げてきたわけだが、肝心の「女神」の存在を彼らが信じていないのではないかと思わせるような記述をしてきた。第4章では儀式の際に女神を「演出」していることに意識的だと述べたし、第5章のエマ(2-1)やカリン(2-2)、ハリー(2-7)の事例の中では、女神は筆者から答えたくないことをきかれたときに、うやむやにしてしまうための手段として使われていたかのように書いた。本章でも集まりの中で女神はほとんど話題にならないことを示した。その他、以下のように女神をイメージのレベルで表面的に捉えている様子も観察された。

2009年の女神カンファレンスのステージで、筆者は「アマテラス・ダンス」を踊る「羽目」になった。その年のテーマが「火の女神」だったため、太陽の女神として有名な日本のアマテラスの踊りを日本人の筆者に踊ってほしいとジョーンズから頼まれたからである。もちろん、筆者に日本舞踊の経験などない。小学校で習った地元の盆踊りをかろうじて踊れる程度である。しかも、筆者が神道や神話の研究者や神楽などの民俗芸能関係者、宝塚歌劇団などに連絡をとり、調べたところ、そのような踊りは存在していなかった。しかしジョーンズは筆者に、それならば創作してほしいと頼んだ。「西洋にいる私たちにはなじみがないから、日本のドレスを着て、日本の伝統的な音楽を使ってね。私たちには、そういうのが、とてもすばらしく、特別なよ」と言い添えて。そこで、筆者は周囲のイギリス人に、日本の踊りのイメージを尋ねたうえで、図書館で借りた雅楽のCDをBGMに使い、地元の盆踊りと動画サイトの日本舞踊の映像を参考に適当に振りつけを創って、浴衣を着て踊った。日本の家族からは失笑されたが、女神カンファレンスの本番では好評を博し、筆者にアマテラスが乗り移っていたようだったと言う人までいて驚かされた。筆者はこのとき、もちろん嬉しかったが、日本人が日本の女神の名前を冠した踊りを踊っているというだけで評価されるという安直さに対し、そんなに軽く女神を扱っていいのかと戸惑いもおぼえたのだった。

しかしながら、彼らが女神の存在を全く信じていないとか、いつも軽々しく捉えていると断言したいわけではない。言いたいのは、超越的であり、内在的であれ、何であれ、「女神」の存在が、この人たちをまとめあげる継続的な求心力にはなりえていないのではないかということである。実は調査中、彼らと話をしている中で、女神と対峙しているのかもしれないと感じた実践は2つあった。

1つは、瞑想を通しての女神との1対1での対話である。サラへのインタビューの際、日常における女神との関わり方を尋ねると、「家にも〔職場の〕クリニックにも祭壇をしつ

らえていて、毎日女神に祈ったり、季節ごとに祭壇を変えたりしている」と答えた。何を祈るのか尋ねると、具合の悪い友人の回復といった具体的なことを祈ることもあるが、何かを迷っているときに話しかけることもあり、そうして答えが得られることもあると話してくれた。エマも同じような話をしてくれたことがある。「何か迷っていることがあるとき、答えがほしくて女神に尋ねる」と言うので、祭壇の前で？と尋ねた筆者に対し、エマは「トールを1人で歩いているときのほうが多いかな。歩きながら尋ねて、突然答えを得られたりするんだ」と答えた。

この2人はいずれもプリーステス・トレーニングを3年目まで受講したプリーステスなのだが、1人でいるときの瞑想状態の中で女神と対話することは、プリーステス・トレーニング3年目の経験に基づいていると思われる。3年目では、毎日1~3回、1回25~45分、瞑想を通して「アヴァロン島」に赴き、「アヴァロンの女神」と対話するという訓練を9ヵ月間続けることが求められる。これはヴィジュアルライゼーションの一種といえる。この体験についてはエマが「3年目は、アヴァロンの女神との1対1の経験ね。すごく深い経験をした、みんな自分がすごく変わると言っている」と興奮気味に話している場面に一度立ち会ったことがある。このように、プリーステスたちはプリーステス・トレーニングの中でアヴァロンの女神との長期にわたる1対1の対話を通して、本当の自分を発見できたなど、自己が変容していくことを感じたと言っている。

もう1つの実践は、女神の体現（embodiment）である。第4章の季節の祝祭の中に、プリーステスが女神を体現している様子を描写したが、女神の体現とは、季節の祝祭や女神カンファレンスの中で、このように女神役を務めることである。リズもプリーステス・トレーニングを3年目まで受講しているが、彼女はインタビューの中で女神を体現するときの感覚について、言葉を探るようにしながら、以下のように語った。

私自身はすごく小さくなって、ベッドの中にとんとんと押し込まれたみたいになるの。小さなリズがいるのよ。女神を招いて、自分の中を通すの。（中略）催眠状態みたいな感じ。自分の一部は何が起きているのかわかっているんだ。（中略）女神に降伏する感じよ。女神から解放される時、愛する人がいなくなった感じがする。

筆者が女神役を観察していたかぎりでも、女神の体現は、憑依というより、リズ本人も言っているように、意識のある催眠状態と理解してもよさそうだった。そのような状態で、自分の身体の内部で、自分とは別の存在として女神と出会っているといえる。

ここで挙げた人々の語りに出てくる「女神」は、声をかけたり、招いたりできるわけだから、ただのシンボルではなく、実体的な存在として認識されているといえる。そして、プリーステスが女神と対峙する体験は、個人の瞑想や催眠といった意識の中で生じている、

つまり女神とプリーステスの1対1の関係という、究極に個人的な関係である。そのため、本人と女神の二者関係に回収されてしまい、他の人々とともに体験したり、語り合ったりすることができない。女神との経験は語られることが稀である一方で、文章の形で綴られるほうが多いのだが、相互行為を伴いやすい語るという手段より、一方向的な書くという手段を好むことは、他者の介入を拒否しているともいえる。女神との体験が語られないという事実は、つねに話の共有が好まれなかったことと同様に、互いの心の距離感を保持するためともいえる。

ただしリズはインタビューのとき、プリーステス・トレーニングの受講を始める前に、「頭の中で音楽が流れ続けるように、小さな声が『プリーステス・トレーニングを始めなさい』と囁き出して、止まらなくなってしまう」という体験をしたが、「その声が女神の声だったのか、自分の一部だったのかは今でもわからない」とも述べている。リズがこの体験をしたのは、プリーステス・トレーニングを受講する前だが、3年目を終えたインタビュー時にもこの体験を女神からの声と確信するには至らず、自分の心の声にすぎなかったのかもしれないと疑問を捨てきれずにいる。当事者自身からも、女神という存在について、疑問を呈すような発言がきかれたということは、彼らもまた女神の存在について、悩みながら暮らしているのかもしれない。

この件について、本稿ではこれ以上の言及は避け、「女神」という存在が、第4章の最後に触れたようにプリーステス・トレーニング受講や女神神殿訪問の形で、人々をグラストンベリー女神運動に引き寄せるきっかけにはなっていない、継続的につなぎとめる力になりえていないことを記すに留めておく。

5、つながりのあり方

最後に、彼らのつながりについて検討する。

第4章と第5章で明らかにしたように、グラストンベリーに暮らすプリーステスをはじめとするグラストンベリー女神運動の積極的な参加者は、互いに時間と空間をともにし、体験や理解を共有しあって得られるような、共同性からもたらされるつながりの感覚を期待している。第2節でみたような話の共有は、ともにいる機会を提供していたと考えられる。しかし、第3節で示したように、彼らはずっと「苦しみ」の語りを分かち合ったり、一緒に女神に対して何かをしたりしたいわけではない。感情を強く揺さぶられるような話や神秘的な体験をすることより、むしろ楽しい体験を分かち合うなどの軽いこと、ただ一緒にいることを求めているといえる。以下では、やや抽象的にグラストンベリー女神運動に携わる人々の間にみられる「つながり」とはどのようなものなのか考えてみたい。

第5章と本章でみてきたような、配偶者との別れや家族との不安定な関係を、苦しみの体験と捉えているプリーステスがかなり多かったのは事実である。このような話は、筆者

が個人的に申し込んだインタビューの中でより、話の共有の集まりにおいて、明かされることが多かったため、具体的にどれぐらいの割合のプリステスが、そのような体験をもっているのかはわからない。

しかし、ここで注目すべきは、自分たちを「傷ついた存在」として捉えている人が多いという事実だろう。破壊された人間関係に傷ついた「不完全な自分」と自己認識し、苦しみを抱えた自分をそのまま許容してくれる他者である、グラストンベリー女神運動の仲間たちと関わっていく。このような行為を通して、抱えてしまった傷を癒そうとする¹²⁷。そして積極的に他者にも苦しみを明かすことを求め、それを共有することを通じて、つながりを育もうとする。しかし、手を差し出した他者、手を差し伸べてくれる他者との境界をなくして、相手と一体化してしまうことはない。他者との関わりを差し控えて、他者に入り込みすぎないことで、相手もまたもっている苦しみに自分がかかるダメージを最小限に抑えようとする。

町に暮らすグラストンベリー女神運動に集っている個人は、自分の抱える寂しさや悲しみといった苦しみに解放されるため、親密な関係性を殊更に求める。その意味で、彼らのつながりのあり方は他者依存的である。その一方で、自分が傷つきすぎないように、一定の距離を保とうとするわがままな側面ももつ。彼らが織り成す集合体は、人と人との共在 [Urry 2002] の中で他者を求めながらも、ときに回避しようとする、矛盾を孕んだ駆け引きの中で成り立っているのである。

¹²⁷ Moody [1974] は、アメリカの悪魔崇拝教会における儀式がこのようなプロセスを持つことを指摘しているし、女神運動でも同様の指摘がされている [Raphael 1996 : 201 ; Rountree 2004 : 7]。Harris は、小さなグループの中で、ヒーリングを目的とする儀式の事例を報告しているが [Harris 2005 : 258-261]、筆者の調査対象では、公のワークショップはあったものの、個人的な儀式は観察されなかった。

第3部 フィールドにおける自己と他者の立ち位置

第7章 フィールドワーカーを迎えて

これまでは私たちヨーロッパ人が他の地域の人々のことを調査していたけれど、これからは私たちだって調査されるべきよね。そうでないと不公平なもの。

2006年の夏のある昼下がり、友達（50代女性、専業主婦）と散歩をしていたことがあった。彼女は、私が文化人類学を専攻していて、その中でもイギリス人を調査対象にしていることを知ると、にっこりと微笑んで、こんな返事を返してくれた。

その2年後の同じく夏のある日、用事がある、アヴァロン島協会の事務所に仕事中のヘイゼルを訪ねたとき、事務所を共有しているマイクは私にこんな言葉をかけてくれた。

調査はどう？ 僕たちは君の研究にとっても興味があるんだ、ブリテン人はあまり調査されないからね。日本人である君が、僕らを調査してくれて嬉しいよ。

この2人のように、私はグラストンベリーに暮らしている間、幾度となくインフォーマントから自分たちを調査していることを歓迎されたり、感謝されたりしていた。もちろん、第4章で示したように、ありとあらゆることを調べられたがっているわけではなかったし、第1章1-3で述べたようにスポークスマンになってほしいという思いもあっただろう。しかし、イギリス人である自分たちが調査されているという状況にあることを面白がっているように私には思えた。フィールドワークを行うという行為は、被調査者の生活を乱し、迷惑になるかもしれないので、フィールドワーカーはその点をよく考えなくてはならないということは知っていたものの、被調査者が調査されたがるという話は聞いたことがなかったので、彼らの好意と積極性を嬉しく思う反面、戸惑いもしていた。

これまでの章とは少し趣の異なっている第7章では、ここまで提示してきたエピソードのうち、筆者とインフォーマントの関係が行動の中に現れているものを取り出し、それぞれが互いに対してどのような立ち位置をとっているのかという視点から改めて分析し直す。それにより、これまで時折顔を覗かせてきたものの、考察の対象からは除かれ、巧みに隠蔽されてきた「調査者」である筆者をインフォーマントたちの中に関係づけていく。それは鳥瞰図を目指して飛び回っていた筆者を、衆人環視を余儀なくされる地上に引きずりおろす作業である。そのうえで、ヨーロッパを文化人類学の対象とすることの意味を考えていく。

1、一参加者としての調査者

初めに、話の共有の場や季節の祝祭で筆者がおかれた状況について振り返ってみよう。

第6章 2-2 では、ある日の話の共有の場で、荷物の到着の遅れを不安に思っていたこと、飛行機のキャンセルでパニックになっていたことを話したとき、ついにその場にふさわしい話をしたと認められたエピソードを記した。ここからわかるのは、それまでの筆者は話の共有の場でインフォーマントたちが期待する行動をとっていなかったということである。その背景を考えてみる。

筆者はこの話の共有の場には、できるだけ調査者としての役割を意識するように心がけながら参加していた。集まりの特性上、筆者も話をすることが避けられない状況ではあったが、筆者が加わることによるインフォーマントたちの自然なやりとりを阻害したくない、このようなやりとりを耳にできる貴重な時間を自分の話で浪費したくないという思いから、それまでは室内の家具の移動といった、ごく短い話しかしてこなかった。しかし、実はインフォーマントたちは、そのような筆者の一步引いた態度を物足りないと不満に感じていたのである。彼らはおそらく、筆者に調査者ではなく、その場の一員として自分たちと同じような姿勢で集まりに臨み、話をすることを求めているのだろう。プリーステスたちは筆者を自分たちと同じ地平に位置づけていたのに対し、筆者は調査者と被調査者という立場を保とうとしていたため、齟齬が生じていたのである。このエピソードの後、筆者は相手からの反応を引き出せるようにと、できるだけネガティブな話をするように心がけるようになった。

第4章で考察した季節の祝祭の場でも、「調査する」こと自体は特に問題視されなかったが、「調査者」として特別な扱いを受けることはなかった。筆者はときには歌や踊りに加わらず、儀式の一部始終を外から自由な立場で観察していたかったし、写真やビデオの撮影を続けていたかった。しかし、「調査者」だからといって、例外は認められなかった。

ここで注意しておきたいのは、儀式の撮影という行為自体に何らかのタブーが存在していたわけではないことである。女神カンファレンスでは毎年、季節の祝祭では2010年以降、ジョーンズから頼まれたプロのカメラマンによる撮影が行われていた¹²⁸。つまり、第4章第3節での、積極的な参加者と一時的な参加者の間に隔たりが生じ、結果的に一時的な参加者の「見世物」になることを防いでいるという指摘と重なるが、筆者に認められなかったのは、撮影という行為ではなく、調査者という観察に終始するような立場に立つことだったと理解できる。一参加者として、他の人々と同じようにふるまううえで「観る」ことは特に問題とはされなかったが、あからさまに異なる立場から、その場にいることはよしとされない。「調査する」には彼らと同じ地平に立たなくてはならなかったのである。

¹²⁸ 筆者の調査時点で、撮影した映像の利用目的を知っているプリーステスは少なかった。サラの話では、カメラマン自身にプロダクションに持ち込んで販売してもらい、それによって女神運動を広めようというジョーンズの計画があるらしい。しかし、この企画は本稿の執筆段階ではまだ実現に動いておらず、詳細は不明である。

2、能動的な被調査者

続いて第1章3-3で触れた、インタビューの相手からおごってもらったという行為と第3章の終わりに触れたジョーンズから逆に質問された場面をどのように解釈できるか考えてみる。その後、類似の新しいエピソードも1つ紹介したい。

本稿の中ではとりたてて記さなかったが、カフェ等でのインタビューの際、筆者はほとんど毎回、インタビューをお願いした相手にお茶代を支払ってもらっていた¹²⁹。もちろん、初めからそうしてもらおうとしていたわけではない。しかしインタビュー後に会計を済ませるとき、相手のほうがさっと支払ってしまい、差し出したお金を受け取ってもらえなかったり、予め筆者が払うと何度言っても「いいから」と断られたりしてしまうのである。インフォーマントの立場から考えると、自分には特に利益にならないことのために呼び出され、時間を割いてあげた相手に対して、おごるという行為であり、奇妙に思える。しかし、このとき彼らは、これとは別の論理で行動していたと思われる。それはいわゆる長幼の序と経済状況である。

まず年齢だが、オルタナティヴ・スピリチュアリティの実践者には中高年の人が多いことを反映して、インタビュー相手は全員、その当時の筆者より年上であった。そのため、年下の筆者には1ポンドから2ポンドぐらいの紅茶（もしくはコーヒー）1杯ぐらいはおごってあげようという雰囲気があった。また彼らは、筆者が経済的に厳しい状況にあると思っている節があった。なぜなら、彼らには学生は多額の学資ローンを抱えているというイメージがあり、また自分たちの国は物価が高いと認識していた。そのため、学生なのに極東の国からわざわざやってきて、高物価に苦しんでいるだろう、だから少しぐらいなら払ってあげようじゃないかというわけである。そうはいつても、お金を払って飲み物を購入し、時間を楽しむカフェなどの飲食施設に赴く行為が、イギリスでは誰にとっても特別ではないこと、さらにイギリスと日本の経済格差がほとんどないことから、このような状況が自然発生的に誘発されたと思われる。

大家のヘイゼルやルビーなど身近にいた人から、そういう親切には素直に甘えたほうがよいとアドバイスされたこともあり、筆者も感謝しつつ、この好意を受け取ることにしていた。しかし、この「おごる」という行為は、インタビューを頼んだ筆者に対して、ただ一方的にインタビューされるという受動的な立場に甘んじるのではなく、年齢と経済の面で自分のほうが優位にあることを自ら働きかける行為だったと理解することもできよう。

もう1点、ジョーンズとの場面についても考えてみよう。筆者は彼女からグラストンベリーについての考え方をきかれたとき、その答えに対して含み笑いで返されて、恐ろしくなると第3章の終わりに書いた。彼女に限らず、グラストンベリーに来るまでの経緯や

¹²⁹ 一度だけ、筆者が支払ったことがある。相手は50代の男性で、資本主義社会からの脱却を目指して、金銭をなるべく使わずに生きようとしている人だった。

スピリチュアリティについての考え方を伺っていた相手から、筆者自身は同じ質問に関してどのように考えているのか、逆に質問攻めに遭うことは少なくなかった。

インタビューしてきている相手、つまり筆者に対して、自分がされたのと同じ質問を投げ返せるという状況はやや特異的である。なぜなら、相手が自分と同様の経験をもっていることを前提としたときに生まれてくるからである。確かに、酒井 [2011] がインタビューをした北アイルランドの紛争体験者や、佐藤 [2002] が調査をしたアメリカのエイズ患者と比べれば、グラストンベリー訪問やオルタナティヴ・スピリチュアリティの体験は、自らの判断で経験できるため、該当者はより広範囲に及び、筆者にそのような体験があると思われても別に不思議ではない。

自分も質問しているのだから、相手が知りたいことに答えるのは礼儀だと思い、質問には正直に答えようとしていたのだが、ときには戸惑いをおぼえさせられた。というのも、相手の断定的な口ぶりや表情から、自分たちと同様の経験をしてきたかどうか、精査されているような気がしてしまったのだ。ジョーンズの笑いへの違和感のもう1つの理由は、経験不足を笑われたように受け取ってしまったからだったと思う。つまり、オルタナティヴ・スピリチュアリティに関する調査というやや限定された状況で生じた、被調査者からの「インタビュー」という行為は、積極的に質問することで、カフェでの支払いと同様、能動的な調査者と受動的な被調査者という関係を逆転する試みだったといえる。

ここで、2006年の秋分の祝祭における似たようなエピソードを紹介したい ([河西 2008, 2011] 参照)。これは筆者が修士課程のフィールドワークを終え、グラストンベリーを去る1週間ほど前に開かれたものだった。第4章第2節のように、祝祭は順調に進行していき、ソフィーと彼女の友達による女神の歌の合唱が終わった。時間的にもそろそろ女神に別れを告げる頃かと、メモを取る手を止め、腕時計に目をやろうとしたそのときだった。

中央に出てきたサラが、「もうすぐ1人のメリッサが家に帰ることになりました」と言いながら、参加者の中にいた筆者のほうを向いて、手招きしたのである。突然のことに驚き、慌てて手にしていたメモ帳をバッグにしまい、中央に出ていく。サラは「この小さなエリコは神殿のためにとても素敵なエネルギーを注いでくれました。私たちはそれをとても嬉しく思います」と言って、筆者を抱きしめてくれた。会場のみんなが笑顔で拍手をしてくれる。「いつ帰るの?」という声があがり、「来週の土曜日」と答える。キャシー（・ジョーンズ）も私を抱きしめてくれた。何か一言お礼を言わなくてはと思ったが、突然のことに言葉が見つからず、「ありがとう!」とだけ言って、参加者の輪の中に戻った。

この事例は一見、微笑ましいものに映るかもしれない。しかし、見方を変えれば、参加者を観察している最中に、筆者は突然、調査者としての立場を剥奪され、完全な参加者と

いう立場に移ることを暴力的に要求されている。しかもそれだけでは済まされず、全参加者から逆に観られる立場に移行させられている。ここでもインフォーマントからの働きかけにより、調査者としての筆者と被調査者としてのインフォーマントの関係はひっくり返っているのである。

3、エスニシティとの結びつき

最後に筆者が「日本人」であることを求められた事例をみてみよう。

その代表は第6章第4節で触れたアマテラス・ダンスだろう。詳しい検討に入る前に、これが生まれた背景を説明しておく。日本の太陽の女神として、女神運動に携わる人々の間でよく知られているアマテラスオオミカミにまつわる踊りを、火の女神がテーマであった年の女神カンファレンスのプログラムに組み込もうとジョーンズが思いついたのは、日本人である筆者がたまたま身近にいたためだと推測される。実は依頼されたのは、その前年の女神カンファレンスの直後だった。この年の女神カンファレンスでの閉会の儀式の際にビデオカメラを回していたという行為をジョーンズからきつく咎められ、そのお叱りとセットで頼まれたのである。彼女の機嫌を損ねては調査を継続できなくなることは明らかで、断ることは不可能だった。つまりアマテラス・ダンスが生まれた要因の1つは、インフォーマントでもあったグラストンベリー女神運動の創始者が、筆者が調査したい人々に対して、多大な影響力をもっていた、すなわち調査の生殺与奪の権を握っていたため、そもそもこの女神運動に関わり続けたい筆者との関係が対等なものではなかったことだといえる。

さて、筆者は踊りを創作することになったのだが、ここで興味深く感じるのは、イベントのテーマに関係する「火」や「太陽」ではなく、「日本らしさ」がその踊りに求められた点である。日本らしいかどうかは女神カンファレンスの主旨とはそもそも無関係のはずである。それにもかかわらず、イベントにやってくる欧米人がイメージする日本の踊りに合致するようなパフォーマンスを披露することが期待されたのである。その結果、このパフォーマンスは鑑賞していた欧米人から「日本らしい」とみなされた。

しかし同時に筆者自身も「真正な」日本の踊りの習得に励むのではなく、裏でこっそり相手のもつイメージに合う踊りを創ろうとしていた。これは、日本人なのだから、日本の女神にまつわる踊りが可能なはずという相手からの一方的な決めつけに対する、ささやかな抵抗だったといえよう。

アマテラス・ダンスと同じような構図は、同じ第6章3-2で取り上げたサラの家でのパーティのカラオケの場面にも見い出せる。日本発祥の娯楽機器で楽しんでいたとき、その機器が発明されたのと同じ国から来たという連想により、筆者はその機器を用いて、場の盛り上げに一役買うことを求められた。その場には歌わなかった人もいて、筆者もそのう

ちの1人でありたかったのだが、日本人だからという理由で断りにくい状況が生み出され、インフォーマントの顔を立て、求めに応じてしまったのである。その一方で、カラオケではなくアカペラで歌おうとした試みは、失敗はしたものの、出身国が同じという共通点だけで生じた、応じたくない要求への小さな抵抗だったといえる。

この2つの事例で筆者は、インフォーマントから日本と結びつけた実践を求められている。これは互いのエスニシティの違いを明確にしていく方向に向かう行為である。筆者はこの差異の表出の回避まではいかないが、相手の求めにストレートに応じない形で、ささやかながらも逆らおうとしている。しかし、全体としてみると、相手の機嫌を損ねたくない、ひいては調査を成就させたいとの思いから、結局はインフォーマントの要求を受け入れ、エスニシティの違いが意識化される状況を生み出すことになった。

4、調査者と被調査者の境界の曖昧さ

ここまでみてきた調査の場における、筆者とインフォーマントのとった立場を整理したうえで、両者の関係を考えてみよう。

まずインフォーマントの立場である。第1節の事例では、調査者という特別な立場ではなく、自分たちと同じ参加者であることを求めた。第2節の事例では、ずっとインタビューされるとか観られるという受動的な立場に固定化されることを拒み、ときに受動と能動の立場を逆転させた。第3節の事例では、自分たちの抱えている日本から連想させられるイメージと結びつくような行動を筆者に期待し、結果としてエスニシティの違いが表面化した。一方の筆者はこの3つのすべての場合で、調査を円滑に進めるために相手と良好な関係を築きたいという思いから、紆余曲折はあれど彼らの求めを最終的には受け入れている。つまり調査の場において、筆者は少なくとも当初は、「調査者」として「調査」していることを念頭に、自分のインフォーマントたちに対峙しようとしていた。

しかし、筆者が思い描いていたこの調査者と被調査者の関係は、実際どれほどのリアリティをもって、その場に存在していたのだろうか。というのも、インフォーマントたちは調査者と被調査者という関係を、実はそれほど意識していなかったのではないと思われるからである。1人のインフォーマントの立場に立って、筆者との接触を考えてみよう。彼女または彼にとって、筆者という人間は自分の生活の中に突然登場してきた見知らぬ他者である。しかしそういう人物に遭遇することは、少なくともグラストンベリーで生活しているかぎり珍しくはない。調査者に会いやすいといっているわけではない。観光客が多く、オルタナティブ移住者の入れ替わりが激しいグラストンベリーでは、自分と同じくオルタナティブ・スピリチュアリティに関心をもつ「他者」という存在は珍しくないのである。ワークショップやイベント、ひいては道端といった日々の生活の中でこのような人々と出会う機会は頻繁で、接触を繰り返すうちに親しくなっていく。つまり、インフォーマ

ントは自分の生活のひとつまとして筆者と接触し、この行為を筆者は「調査」として解釈していたと考えられるのである。

第3章の冒頭に立ち戻ってみよう。ジョーンズは確かにインタビューに応じてくれた。しかしそれは女神カンファレンスの準備の片手間にである。第5章2-3で取り上げたスーとトムのインタビューの場合も、実は毎週恒例のカフェでのランチタイムの席にお相伴しながらだった。季節の祝祭の場を考えてみても、筆者にとってそこで行為する人々は被調査者だが、たとえば企画担当するサラは、その場にいる筆者を1人の手伝いのメリッサとして捉えていたはずである。

つまり筆者は、自分の「調査」の中に彼らとの接触を組み込んでいたが、彼らもまた筆者との接触を筆者以外の人々との接触と同様に、自分の生活の中に組み込んでいたのである。本章の冒頭でインフォーマントたちが調査されていることを歓迎する、感謝すると記したが、これは自分たちが調査されていると口に出すことで、被調査者としての受動的な立場にあることを回避し、「調査」という行為に応じている自分の能動的な行為として、筆者との接触を自分の生活の中に位置づけ直していたと解釈することもできる。だからこそ、筆者との関係性の中で、筆者が調査者であることが垣間見えてしまうような特権的な立場に立つこと、もしくは立ち続けることに、インフォーマントは不快感を示し、その代わりに相互交渉的であろうとしたのである。

しかし、被調査者が調査者を調査にやってきた者として位置づけずに受け入れるという関係性は、筆者の調査に特異的に生じたわけではない。続いては、オルタナティヴ・スピリチュアリティは調査者自身が当事者になりやすい研究対象である点に注目して、その理由を説明していく。

オルタナティヴ・スピリチュアリティは、文化人類学が伝統的に研究の対象としてきたような、ある土地と結びついた文化、そこに生まれついた人のみが背負うことができるとみなされるような文化ではない。対象が人間である点は共通しているが、個人が後天的に自らの意志で選択できるものなので、調査者自身も実践に共感し、当事者意識をもつことが十分に可能である。そうした調査者は、調査の際に部外者性をそれほど意識させられなくなるので、被調査者との間にあるとされる境界が崩れていきやすい。このような当事者意識をもって臨む調査は、新興宗教やオタク文化などの調査においても生じているだろう。

だとすれば、オルタナティヴ・スピリチュアリティに限らず、当事者性をもって行われる研究の調査では、「調査者」と「被調査者」という区分は大半の被調査者には認識されておらず、調査者の意識の中だけに存在していると思われる。自分の生活の中に「調査者」がやってきても、被調査者は自分たちの論理で日々を暮らしている。そんな暮らしの中の行為の一部が調査者にとって「調査」に応じてもらっていることになるのだ。つまりそこにあるのは、1つの場における二者、あるいは複数の個人が、互いに観る／観られる、利

用する／利用されるといった相互作用的な関係である。このような調査の場における調査者は、フィールドというタペストリーを生み出す特権的な織り手ではなく、他の被調査者と同様、タペストリーを構成する織り目の1つにすぎない。

さらに付け加えると、本章で提示した事例におけるインフォーマントと筆者は、ただ同じ時を共に過ごした共時間モードの中だけにいたわけではない。両者の間には「ツっこみ関係」[田中 2011 : 125] がみられるのだ。以下、田中 [2011] を参考にして、ここでいう「ツっこみ関係」について説明した後に、本章の事例を改めて分析し、自己と他者の関係について考える。

文化人類学の調査において、フィールドという現場でデータを収集する際には、被調査者の主張や行為が調査者の「常識」と照らし合わせていかに非合理的であろうと、通常はとりあえずそのまま受け入れる。これは異時間主義のモード、つまり一歩引いたところで被調査者を理解しようとする態度だといえる。このような態度は他者に寛容なようであり、相手の他者化と紙一重であり、最終的にはこの他者像が民族誌の執筆を通して固定化されていく。田中はこの一連の流れの中に「フーコー的権力の実践」[2011 : 124] をみる。フィールドの人々を「尊重」し、被調査者たちの発言や行動への個人的意見を差し控えることが、結果的にフーコー的な権力の発現につながっているというのである。

このように、調査者から被調査者への一方的な「尊重」の態度から、対等な相互理解の状況へとひとこま進めるのに必要なのは、他者への寛容さより、他者との積極的な議論である。しかしそれは、長期のフィールドワークに基づく互いの信頼関係がなくては生まれない。そのような自己と他者の関係に基づく一歩踏み込んだ関係が、「ツっこみ関係」なのである。以上を踏まえて、本章の事例をもう一度振り返ろう。

第1節の話の共有の事例では、筆者は当初、インフォーマントたちのやりとりを遮らないよう、控えめな態度をとっていたと記した。その後彼女たちの話の輪の中に積極的に入っていったことで、それまでの関係性は崩れ、筆者はインフォーマントたちに真剣に対峙させられることになった。しかしその一方で、第1節の季節の祝祭の撮影の事例と第2節のインタビューおよび季節の祝祭中に筆者が呼び出された事例は、インフォーマントの側が筆者に「ツっこ」んでいると理解できる。第3節の日本人であることを求められた2つの事例はより複雑である。インフォーマントのほうが、筆者に日本人であることに起因する「ツっこみ」をしかけ、筆者はそれに応える形で、不発に終わったものの、「ツっこみ」返そうとしているからである。

文化相対主義的な対応の仕方を超えた、こうした瞬間が生まれたのは、長期間にわたる接触を経て、相互の関係がより自然なものに変容していった結果である。これは、調査者と被調査者の関係を越えた他者との出会いの瞬間である。そして、こうした瞬間が繰り返されることで、他者と向き合っている自己という存在への省察が促される。そこから生ま

れた新たな自己が改めて他者と向き合ったとき、調査者と被調査者という枠組みを超えた、個人対個人という境界のない関係が生まれるのではないだろうか。

5、ヨーロッパ人類学という免罪符

続いて、ヨーロッパを文化人類学の研究対象とする意義について考える。初めに欧米人と非欧米人ということ意識しつつ、本章を振り返ってみよう。

第1節における催し物の場で同じ立場に立つことを求められた状況と、第2節におけるインタビューの場でインフォーマントからの積極的な働きかけによる能動と受動の逆転現象が生じたのは、調査者が欧米人か否かとは関係がなく、オルタナティブ・スピリチュアリティを研究する際に現れうる状況である。第1章2-2で取り上げた Prince や Ivakhiv は、被調査者との類似性から被調査者の中に隠れてしまいやすかったとしたが、より正確には「隠れた」のではなく、1人の参加者としてその場にいるために「隠れざるをえなかった」と解釈できる。その一方で、第3節でみてきた「エキゾチックな他者」としてみられる、言い換えれば異文化への好奇心から接近されるような状況は、欧米圏以外の調査でも外見や文化を全く異にする調査者であれば生じていると思われる。

しかし、外見や文化が異なるからといって、フィールドにおいて調査者であることが殊更に意識されるわけではない。かといって、外国人であることが全く意識されないわけでもない。これらの観点から改めて筆者とインフォーマントの間に生まれていた関係を考え直してみる。

調査にやってきた筆者を自分と同じ事柄に関心がある人とみなすことで、親近感が湧き、自分たちがつねには従属的な立場にはないことを確認したり、示したりすることによって安心感が生まれる。それらにより、筆者を前にしても、調査者としてというより、友達として受け入れやすい雰囲気がつくりだされていたといえる。その背景には第1節や第2節で挙げたような、共通のアイデンティティに基づく集合体の調査者であれば、欧米人でも当てはまりそうな状況もあった。その一方で、第1章2-2でみた酒井 [2011] を参考にすれば、本章第3節でみたように、筆者が欧米人でなかったことも関係していたと思う。

つまり物珍しさから、目の前に現れた筆者に対するハードルが下がり、ラポールが形成されやすくなっていた可能性があるということである。冒頭でも示したが、インフォーマントたちは、今まで調査する側であり、調査の対象から外れていた自分たちが調査されているという状況、つまりは逆転の構図を殊更に面白がり、快感をおぼえている。だから日本からやってきた筆者に興味を抱き、話をすることを承諾する。調査されているという状況を自分自身も楽しみつつ、調査に協力してくれるのである。

このような被調査者との「良好」なラポールの形成は、調査者にとって利点のように聞こえるかもしれない。しかし相手が調査ではなくプライベートな楽しみを目的として近づ

いてくる場合、被調査者の「友情」の網の目に絡みとられ、調査にかけられる時間を失っていく危険を孕んでいる。良好なラポールのおかげで、インタビューや参与観察が容易になるかもしれないが、良好な関係を保つため、被調査者を喜ばせようと、たとえばアマテラス・ダンスを創作し、練習に励む羽目に陥る。このように本来、調査とは関係がない事柄に多くの時間を費やす、つまり、調査の質を高めるため、調査の量的な時間が減っていくというジレンマを経験するのである。文化的背景が異なる者どうしが出会うことによって生まれる、このラポールとジレンマは、フィールドワーカーであれば、誰もが多かれ少なかれ経験していることだろう。

以上のような調査者と被調査者の関係を踏まえて、ヨーロッパを文化人類学において研究する意義について、筆者なりの考えを述べておく。

第1章 2-2 では、先行研究が指摘してきたヨーロッパ研究の意義として、ヨーロッパという地域と科学的合理性など欧米発祥の価値観の相対化を挙げた。その一方で、イギリス人被調査者に対し、従属的な地位におかれた状況に自らの有利さを見出した酒井 [2011] の事例から、この相対化の試みは必ずしも成功していないことを指摘した。それでは、ヨーロッパのマジョリティの白人を対象とするヨーロッパ人類学とは一体何なのだろうか。

欧米人の被調査者という文脈で考えれば、これまで欧米人調査者と非欧米人被調査者の間で成立していたであろう、異文化の接触に由来する良好なラポールを非欧米人調査者も享受できるようになったといえる。しかしそれだけではなく、筆者は「免罪符」の役割を果たしていると考え。かつて「未開の民族」と位置づけてきた人々の調査と同じ手法で、欧米人が欧米人を調査するという行為は、「未開の民族」と欧米人を同等に扱うという点において、政治や経済の分野における国力の強弱を背景に調査を行っていた、かつての文化人類学に対する免罪符だといえる。しかし、文化人類学という学問が欧米で成立し、ローカル化していったとはいえ世界のどの地域の文化人類学もその影響を免れ得なかったことを考えれば、ヨーロッパ人類学とは文化人類学という学問全体の十字架を背負っているともいえる。そして、この免罪符は決して過去の文化人類学に対してのみ、貼りつけられているわけではない。今でも欧米のマジョリティの白人以外の調査を行うときには、民族の政治経済の力の違いに由来する調査者と被調査者の権力関係についてしばしば指摘されている。それに対して、ヨーロッパ人類学という分野が存在していることで、文化人類学は欧米を研究対象から外していないと反論することが可能になる。この点でも、現在の文化人類学的調査の免罪符になっているのである。

第 8 章 結論

本稿では、グラストンベリー女神運動を事例に、現代のイギリスにおいて、オルタナティブ・スピリチュアリティに携わっていくとはどういうことなのか考えることを第一の目的としてきた。最終章となる本章では、第 2 章から第 6 章の記述に基づいて、第 1 章で提起した問題を検討していく。その後、第二の目的であった、民族誌を書くことについて、第 7 章の記述をもとに考察を深めたい。

1、現代のイギリスにおけるオルタナティブ・スピリチュアリティ

初めに第 1 章第 1 節での議論を振り返ってみよう。第二次世界大戦後の世界、とりわけ欧米における宗教の状況は、「世俗化」という言葉をキーワードに論じられてきた。ヨーロッパ、特にイギリスを中心として、近代化に伴って社会における宗教の重要性が低下していくという世俗化論が 1960～70 年代にもてはやされた。その一方で、このような現象は制度や組織をもつ形での宗教への関心が低下しているにすぎないとして世俗化論を否定する視点も出てきた。

本稿が対象とした「オルタナティブ・スピリチュアリティ」は、キリスト教の教会組織のような制度や絶対的な神の概念をもつ形での宗教現象ではなかったため、単なる娯楽として扱われ、世俗化の象徴のようにみなされることもあった。しかし、宗教は個人の内面に属するものと捉えれば、オルタナティブ・スピリチュアリティも宗教現象の現代的なあり方だといえる。

これまでの研究においてオルタナティブ・スピリチュアリティは、伝統宗教や主流社会とは相容れないアンチテーゼとして描かれてきた。たとえば、伝統宗教からの進化として論じる研究では、組織や制度に縛られている伝統宗教への関心が薄れる一方で、実践や信仰体系に関して実践者個人の自由度が高いオルタナティブ・スピリチュアリティへの関心が高まっていることを強調する。また、主流社会の補完という視点からすると、オルタナティブ・スピリチュアリティは主流社会では失われたが、人々が必要としている事柄、特に人と人とのつながりを提供する契機になっていると指摘されてきた。

擬似宗教とか、くだらないこととして等閑視するのではなく、宗教現象として議論されるようになったことは、現代の欧米社会における宗教のあり方を考えるうえで大きな功績だったと思う。そのうえで筆者は、これまでの議論は「イデオロギー」が呈示されやすい宗教を実践する場や著作物を中心に調査が行われてきたため、オルタナティブ・スピリチュアリティを伝統宗教や主流社会といった既存の価値観や社会との差異を強調しながらアンチテーゼとして位置づけており、伝統宗教や主流社会への抵抗として描いていることと、オルタナティブ・スピリチュアリティを理想的に提示していることという 2 つの問題があ

ることを指摘した。

このような先行研究の問題点を踏まえて筆者は、宗教的な領域以外にも目を向け、1つの実践を全体の中に位置づけたうえで、ミクロな視点からみていくことを提案した。具体的には、ある女神運動が創出され、発展していくプロセスを、イギリス社会の変動を意識しつつ地域社会と女神運動の流れの中で捉えていくことを目指した。それから、理想的に提示することを避けるため、当事者の日常的な生活にも注目した。

もう一度、各章の議論を振り返ってみよう。イギリスのオルタナティブ・スピリチュアリティの生成と変容の過程の提示をテーマとした第2章では、現在、オルタナティブ・スピリチュアリティが盛んな町として有名なグラストンベリーを事例として、この町にオルタナティブ・スピリチュアリティが受け入れられていったプロセスを、町の歴史やイギリスという国の政治や経済の側面と合わせて明らかにしていった。直接の起源が1960年代の対抗文化運動にあったという点では、オルタナティブ・スピリチュアリティの先行研究が指摘してきたような「抵抗」という側面ももっていたといえないこともない。しかし、グラストンベリーにおいて成長していく過程では、グラストンベリーのもつ、古いイギリスとの結びつきを想起される点が評価され、さらにイギリスの政治や経済の変容、支給しやすい給付金といった国家の制度と連動していたことを示した。そのうえで、イギリスにおける移民の増加に対する反応である可能性についても述べた。宗教以外の領域に目を向けたことで、オルタナティブ・スピリチュアリティがイギリスの主流社会に抵抗するより、むしろ活用したり、防衛的な役割を担ったりしていることを指摘できた。

続く第3章では、オルタナティブ・スピリチュアリティの1つである女神運動に注目し、ある女神運動が生まれ、発展していったプロセスを、グラストンベリーという地域社会とイギリスの女神運動の文脈から明らかにした。そして、女神運動が現在に至るまで一貫して、フェミニズムの傾向を保持し、伝統宗教や主流社会の規範や価値観に「抵抗」しているわけではなく、個人の内面を重視する穏やかな宗教的な実践へと変化していることを指摘したうえで、グラストンベリー女神運動とはこの女神運動の流れと第2章でみたグラストンベリーのオルタナティブ・スピリチュアリティが成長していったプロセスが交差したところに誕生した、イギリスにローカル化された、内向きの女神運動であることを明らかにした。

第4章から第6章では、儀式の場の観察と実践者へのインタビューだけでなく、実践者の日常生活の観察も踏まえつつ、理想視されてきた彼らの人間関係の特徴をミクロな視点から検討しようとした。第4章では、一見オープンなグラストンベリー女神運動の排他性を、儀式の観察から明らかにした。そしてその隔たりは、儀式という場が、グラストンベリー女神運動に積極的に参加している人々がその場に一緒にいて共通の体験をすることで、共同性の感覚を生み出す場であったゆえに生じた可能性を指摘した。

第5章では、積極的な参加者のグラストンベリーへの移住を題材として、彼らが引っ越そうとする背景について考えた。引っ越しを可能にするかどうかには、家族と収入源の状況が大きく影響を与えていたのだが、引っ越しを促す背景には親しい人を失ったという悲しみや孤独感、そして生活を一新したいという願望から、頻繁に面と向かって交流することで共同性が生じやすく、つながりの感覚を得られるようなグラストンベリー女神運動の人々の集合体を求めていたことを指摘した。そして、在住者の集合体の存在が移住に影響していることを述べた。これまでの女神運動やネオペイガニズムの研究でも、その実践者が親しい人間関係を失い、新しい関係性を女神運動やネオペイガニズムの実践者たちに求めるということが指摘されてきた [Berger 1999 ; Orion 1994 ; Pike 2001]。第5章で取り上げた人々の中でも、夫などの家族を失ったゆえに移住してきた／移住を希望している人々の事例、家庭生活が円満ゆえに移住を希望しない人の事例は、この指摘に当てはまると考えられる。しかし、移住後に、もしくは移住後にも、在住者の集合体の存在に救われている女性たちの事例からは、失った人間関係を補うためだけでなく、女神運動における関係性が内面の苦しみの解消のため、必要とされることもあることがわかる。さらに、一度女神運動での親しい関係性を失った人の事例からは、理想的ではなく、葛藤をももたらす両義的な性質を帯びてくることもわかる。

さらに第6章では話の共有に注目することで、彼らが自分の抱えた苦しみを解消するために、人と人とのつながりを希求している一方で、そのつながりをときには忌避しているというわがままな側面もあることを明らかにした。心の中を曝け出して語り合うことや、感情を激しく揺さぶられるような体験は、求めてはいるが、それらの共有に基づいてつながりを深めていくことをいつも必要としているわけではない。むしろそこで得られた新しい友達と少し心の距離をおきながら、パーティなどを楽しみたいのである。

以上のように、本研究では宗教的な事柄が実践される儀式や催し物、実践者の著作物以外の普段の生活にも目を向けて、女神運動において親密な関係がつけねには望まれていないこと、ときには避けられていたことを明らかにした。

繰り返しになるが、第4章から第6章では、共同性を求めつつも避けてしまう、深いレベルでの語りや体験の共有とともに場の共有から生じる軽いレベルでの楽しみに重点をおく、といった形でのつながりのあり方を提示した。以下ではこの点について、第1章1-4でのつながりと共同性の議論を踏まえつつ、より一般的な視点から考えてみる。

第1章1-2では、ネオペイガンたちがしばしば互いを親族名称で呼び合うという先行研究に触れたが [Berger 1999 ; Orion 1994 ; Pike 2001]、第5章2-1で取り上げたエマをはじめとする人々もグラストンベリー女神運動の仲間たちのことを「姉妹兄弟」と呼んでいた。一般的に、配偶者を除く家族は自分で選択するものではなく、所与のものとして与えられる。それゆえに生物学的な血縁関係の間柄にある人と人との間には強い絆があると考えら

れている。自ら選びとっていく友人関係に、このような絆を想起させる関係性を表す言葉を用いることは、擬似家族を創出し互いの関係の強化を図る試みだと理解することもできる。Carsten [2000] は、血縁関係に基づいて社会関係が構築されるという考え方を相対化した。本稿の事例からは、血縁関係があるからまとまっているのではなく、親族名称を用いて呼び合うことで、親しい関係性をつくっていたとみることもできる。親族名称を表す言葉が関係性を構築する役割を担っていたという理解である。

しかし、いくら強いつながりがイメージされる言葉で互いの関係を表したからといって、そこで得られる関係は実際の家族ほど永続的なものにはなりがたく、短期的なものに留まりやすい。グラストンベリー女神運動を例にとっても、この実践に集まってくる人々の集合体は続いている一方で、それを構成する成員は年々移り変わっていく。そのため、第5章第3節で述べたように、個々人ではなく、顔を思い浮かべることのできる個人がいる集合体が求められていると思われる。このようなグラストンベリー女神運動の集合体の脆弱さについて、もう少し考えてみよう。

近代社会において、人は自立した個人であることを求められてきた。その一方で、いきすぎた個人主義の風潮に疲れ、「コミュニティ」という言葉に象徴されるような、親密な関係を志向する傾向がみられることを本稿では指摘してきた。しかし、そこでみられたつながりは、集団から割りふられた社会的役割に自らを埋没させてしまうような、前近代的な性質はもっていなかった。個々人のプライバシーに配慮し、それぞれの自立性が前提とされているのである。以下、グラストンベリー女神運動における諸実践が、参加者全体を統合していく役割を十分に果たしていない理由を3つ挙げていく。

まず考えられるのは、規範が少ないこと、あっても強制力が弱いことである。たとえば、アヴァロンの女神や女神の輪という形で「コスモロジー」が存在しており、儀礼などの機会に目に見える形で表されるのだが、その内容の詳細は毎回変わるし、即興性も高い。つまり儀礼とは、参加者が決まり事を守るといった共同体的な行為ではなく、同じ世界観を有していることを一部の人（積極的な参加者）の間で意識的に再確認し、共同性の感覚を得ている場にすぎない。集団全体の結束の強化が図られているわけではないのだ。そのうえ、積極的な参加者と一時的な参加者の間で「コスモロジー」の共有のレベルに開きがあり、それをあえて埋めないで、儀礼の場全体の一体感も生まれにくい。

2点目として指摘したいのは、イギリスにはそもそも地域社会全体をまとめあげる「村祭り」のような宗教性を帯びた行事がなかった点である。ミサは宗派に分かれて行われていたし、遠くに巡礼に赴く際にも巡礼団はふつう教区の宗派ごとに組織されていた。そのため、イギリスにおける宗教的な儀礼は、特定の宗派や宗教的实践の内部に共同性を生み出す機能をもっていたかもしれないが、それを超えた人々の間（本稿でいえば積極的な参加者と一時的な参加者の間）に社会的な紐帯を生み出す役割を担っていなかったと考えら

れる。さらにいうと、イギリスでは宗派間の連帯が不十分だったため、教会が地域社会をまとめていく役割を十分に担えず、ウィルソンらが「世俗化」と称したような、ミサ出席者数の減少を招いたと思われる¹³⁰。

3点目として、イギリスの社会保障制度の手厚さを挙げたい。本稿中で繰り返し指摘してきたが、給付金をはじめ、イギリスの社会保障制度は非常に充実しているうえ、受給は権利であり恥ではないとする風潮がある。そのため、イギリス国籍、もしくは永続的な在留資格をもつ者であれば、経済的に他者に頼らず、生計を立てていくことができる。しかし、社会保障制度を活用した形での経済的な「自立」は、物や金銭の貸借を通じた人間関係の構築を阻害する。贈与研究が明らかにしてきたように、物の貸借には借り手は貸し手に対して負債の気持ちを、貸し手は借り手に対して優越の気持ちを抱かせる効果があり、それゆえに両者の結びつきを強めていく機能をもつ。しかし、社会保障制度を充実させたイギリス社会では、経済的に他者に依存することがなくなったため、貸借がもたらす濃密な社会的紐帯が失われてしまったのである。そのため、たとえ儀礼の場で世界観を共有して共同性の感覚が生じても、それが日常生活における濃密な結びつきまでには至らない。第6章 2-2の事例 v) で示したクレアでも、ランチ代は払ってもらったものの、友人から食べ物を恵んでもらったり、金を借りたりするようなことはしなかった。あの事例の直後に離婚して家を出たことによって、行き場のない女性を保護するシェルターへの入所資格を得られ、入居した。つまり、ハード面においてはグラストンベリー女神運動の仲間ではなく、行政からの支援を受けながら、生活の再建を図ることになったのである。社会保障制度は、近代化の進展によって生まれた地縁や血縁から切り離された、寄る辺のない個人を救済するという側面をもつ。その一方で、この制度の存在が人と人とのつながりを中途半端にしている状況は、イギリスに限らず、現代社会の至るところで見い出せるのではない。飛躍しすぎとの批判を承知でいうならば、これは近代社会の特色ともいえる社会保障制度のもつ、副作用の1つとも理解できよう。

さて、ここまでつながりの弱さをみてきたが、ここからは弱いながらもつながらせていた糸の1本である「苦しみの語り」の役割に触れつつ、本稿で取り上げたような共同性の性質について考えてみる。第6章では、グラストンベリー女神運動における、ポトラック・サパーや暗月の集いの開始と終焉、手軽なパーティの増加について触れた。この一連の騒動は、グラストンベリーに移住してくるプリーステスが急増し、一時的に混乱したグラストンベリー女神運動内部の人間関係を再構築し、新たな秩序を創っていく再組織化のプロセスだったとみることもできる。注目したいのは、互いの苦境を他者と語り合うことは、

¹³⁰ 現在、イギリスでは宗派の違いを乗り越えてまとまろうとするエキュメニカル運動が盛んになりつつあるが、これは宗派の違いを保持しようとするあまり、地域社会の統合に支障を来たした、これまでのキリスト教の活動に対する反省であるとも考えられる。

病いの語り研究では癒しの機能をもつとされてきたが、本稿の事例では必ずしも癒しにはなっていなかった。むしろ、互いの関係性を確認しあって共同体を再生産したり、共同体内の人間関係の密度を微調整したりする機能をもっていた。こうした彼らの育んだ共同性のあり方は、大杉が「非同一性による共同性」[大杉 2001: 292]と呼んだ関係性のあり方に類似している。その一方で、この共同性における非同一性の基盤となる差異は、大杉の想定した超えられない断絶を含むようなものではなく、成員が近代的な個人であることに由来するようなささやかな差異にすぎなかった。このような共同性のあり方は、非同一性に基づく共同性というより、ときに関係しあう個人たちとして理解すべきなのかもしれない。しかしこのことは同時に、私たちの日常にあふれているのは、大地溝帯のような埋めることのできないほどの深く大きな溝のある差異ではなく、かかると見つけるひび割れのような小さな差異であること、そうした小さな差異であっても、確実に差異と感じながら日々を生きていることを思い出させてくれる。

最後に、現代のイギリス社会においてオルタナティヴ・スピリチュアリティに携わっていくこと、そしてその意味を、本稿の事例をもとに考察する。グラストンベリー女神運動に携わる人々は、伝統宗教や主流社会と隔絶して活動しているわけではない。むしろ接しながら、グラストンベリー女神運動に関わるために諸制度を有効に活用している。そこには、既存の規範や価値観に憤り、抵抗するといった攻撃的な性格はみられず、古いイギリス的なものを志向し、男性を取り込み、キリスト教徒たちとも協調していくという穏やかさを心がけながら、暮らしている姿がみえてくる。

その一方で、グラストンベリー女神運動は決して、彼らが語るような、胸襟を開き、自分を曝け出して付き合っていくような「理想的」な人間関係から成り立っているわけではない。パートナーの喪失や孤独感といったものから逃れようと、友達を求めてやってきた人がいたことは否定できない。しかし、彼らが理想的に語る人と人との「つながり」は、現実の生活と折り合いをつけるためのみならず、自分の精神的な許容範囲の枠に収めるため、回避されるものでもあった。グラストンベリー女神運動をきっかけに知り合ったとしても、いつも濃密な関係が求められているというのではなく、むしろ深くなりすぎない程度の、ほどほどの付き合いをしながら、軽いことを一緒に楽しみたいのである。そこにみえるのは、新しい形での「お友達作り」の場を求めて、女神運動にやってくる人々の姿である。

グラストンベリーでの最後の調査となった 2011 年、町を離れる前日の晩に、大家のヘイゼルからきいた言葉は印象深く、今でも忘れられない。彼女はプリーステスではないが、ジョーンズやプリーステスたちと親しく、ジョーンズの夫マイクとは事務所を共有する同僚で、ジョーンズの女神に関する短期講座を受講したこともある。日頃から、「キャシー（・ジョーンズ）やマイクのような人は、2 人で手を携えあって、町で女神を推進していてす

ばらしい」と語り、スピリチュアリティに生涯を捧げているような2人を称賛していた。ヘイゼルはこの2週間後に、町を去ることになっていて、2人での最後のグラストンベリーの夜を記念すべきものにしようと夕食に出かけた。その帰り道、ヘイゼルは町を出て行く理由を次のように話してくれた。

私は女神とかシャーマンとか、スピリチュアルなことも好きだけど、お芝居とかコンサートとか、そういうもっと都会的なことも好きなの。スピリチュアルな会話はもう沢山。もっとふつうの会話がしたい。(中略) キャンピングカーを買ったから、いつでもグラストンベリーに戻って、ここでの友達には会えるしね。

[2011年9月30日]

筆者が恐ろしさをおぼえたジョーンズのような人、自分の主張を著書にまでしたためて出版してしまうような人は、24時間、365日スピリチュアリティと向きあって生きているかもしれない。しかし、この発言にあるように、ヘイゼルや第4章から第6章でみてきた、いわば「ふつうのオルタナティブ・スピリチュアリティに関心がある人々」は、いつもいつも誰かとスピリチュアルなことばかりしていたわけではないのである。しかし、またいつでも自分を受け入れてくれる「お友達」がそこに存在しているということ、そのことを知っているということが、ある種の救いであり、世俗化が進む現代のイギリスの宗教現象の1つのあり方だといえるのではないだろうか。

2、民族誌を記述する

続いて調査の場におけるインフォーマントと筆者の関係を、両者のとった立ち位置の観点から取り上げた第7章をもとに、民族誌の記述スタイルのあり方について考えたい。

第1章第2節の議論を、簡単に確認しよう。ライティング・カルチャー・ショック以降、民族誌の記述方法が再考されるようになった。マーカスらは、フィールドの人々にとっての意味づけに迫ろうとする解釈人類学に注目し、この解釈学的な方向性を修正し、発展させる形で、差異そのものの表象の仕方と、世界規模での政治経済の文脈における差異の表象の仕方を提示した。また、それとは別に筆者はより一般的な学術論文の問題として、文章表現についても言及した。

第7章で示したのは、筆者のフィールドワークの場では、調査者と被調査者という役割が曖昧で相互交渉的だった様子である。調査者である筆者は、グラストンベリーというフィールドで、インフォーマントが作りだしてきた共同性の内部に、その一員として埋め込まれていた。筆者は「調査する」という日常を生きていたが、インフォーマントたちも自分自身の日常を生きていた。フィールドにおいて、筆者とインフォーマントたちが出会

い、相互作用が生まれたとき、筆者にとってそれは「調査」であるが、インフォーマントたちにとっては彼ら自身の理屈で何か別の意味づけがなされていたのである。本章第1節では被調査者どうしの緩やかな共同性について論じたが、第7章と関連させていうならば、その共同性の中には調査者である筆者も含まれていたのである。この共同性は大杉[2001]や小田[2004]の議論の中では明確には示されていなかった、調査者も含めて相互作用しながらつくりあげられてきた共同性だったのである。

そのような平等な関係に基づいて得られたデータを、文化人類学では一般的に抽象的な理論を用いて分析していく。体で体験した事柄や観察した事象を、頭を使ってより一般的な枠組みに落とし込み、抽象度を上げる。そのようにして客観性を確保しようとする。しかし、データがそもそも個人的な関係に基づく主観性の高いものであることを考えれば、客観的な記述をあえて目指さず、筆者の主観を取り入れた手記のようなスタイルをとった民族誌がもっと出てきてもよいと思う。

民族誌の記述とは、執筆者にとっては、自分だけが利用できたデータや体験を他の人もアクセス可能にするような行為である。それゆえに、本稿がとったような筆者の一人称語りや口語表現を多用する方法は、潜在的な読み手に対して、民族誌を開いていくためにも有効ではないだろうか。

3、今後の課題

繰り返し述べてきたように、本稿はつかみどころのないオルタナティヴ・スピリチュアリティという宗教現象の氷山の一角を捉えようとした試みであり、これでオルタナティヴ・スピリチュアリティの全貌を示したというつもりは全くない。そのため、今後の課題をあげればきりが無い。

本稿で到達できなかった点を1つ挙げるとすれば、グラストンベリー女神運動に集ってくることと、癒しの関係である。ここまで記してきたように、この女神運動にやってくる人には、何らかの苦しみを抱えている人が少なからずいて、その解消が参加や移住の1つの大きな動機になっていた。しかしそれがどう解消されていくのか、いかないのか、そもそも解消されるとはどういうことなのかという点まで明らかにすることはできなかった。それを追及していくことは、心療内科の領域における臨床的応用につながる可能性をもつと思われる。しかし、そのためには医療分野など人類学以外も含めた、学際的なアプローチが必要になってくる。

その他にも、グラストンベリー女神運動に限っていえば、町から離れたところ、特に海外に暮らすプリーステスたちが町に暮らすプリーステスたちとどのように関係を保っているのか、彼らのグラストンベリーへの「巡礼」が、町の「女神コミュニティ」にどのように影響しているのかといったことも検討の余地があると思われる。また、オルタナティヴ・

スピリチュアリティ全体でいうと、メーリングリストやフェイスブックといったコミュニケーション・ツールとしてのテクノロジーが関わる人々のつながりにいかに寄与しているのか、グラストンベリーのような「パワースポット」で感じているとされる身体的な変容とはどういうものなのか。そもそもオルタナティブ・スピリチュアリティは、今後イギリスの中でどのような展開を辿っていくのか。このように問いが次々と生まれてくる。

オルタナティブ・スピリチュアリティという新しい宗教現象は、多様な形態で展開されているため、捕まえづらく、「解釈」しようとする私の手から、するりと抜けていこうとする。しかし、インフォーマントたちとともに生活しながら、彼らを観察しつつ、ときには観察されつつ、捕獲を試みる。それが、イギリスの新しい形での宗教現象を研究していくということなのだと思えるのである。

おわりに

なんて幸せに満ち足りた人たちなんだろう。

それが修士課程の頃のグラストンベリーのオルタナティブたちの印象だった。しかしその後、彼らの来歴に耳を傾けていくうちに、実はその笑顔の下に様々な葛藤を抱えこんでいること、家族をはじめとした人と人との関係にひどく苦しんできたことを知るようになっていった。人間関係を深刻に思い悩んだ経験のなかった私には、人との関係を非常に深刻に捉えてしまうこと、そして人間関係から傷を受けたにもかかわらず、また新たな人とのつながりを求めてしまうことは、正直大きな「謎」であり、理解しがたかった。

しかし同じ時期、昔とてもお世話になった友達から、職場の人間関係に悩まされ、心療内科に通っていたときかされる。親しい人がそのような状況に陥っていたという事実には驚愕したし、それ以上にとっても悲しかった。彼女が昔の友達を懐かしんでいる姿は、いつしか他者との関係に傷つけられながらも、また誰かを求めてしまうオルタナティブたちの姿と重なり合うようになっていった。本文中で、つながりと癒しについて明確に描くことはしなかったが、本研究の構想は、このような私の受けた衝撃から生まれた。

もう1つのトピック、調査者と被調査者の関係は反省から生まれた。2年間のフィールドワークから帰国して数ヵ月後に発表した大学院のゼミで、指導教員から「調査地で7割好きなどころがあったとして、あと3割嫌いなどころはどこだったのか」というようなことをきかれた。このときの発表内容はインフォーマントとの距離感が全くないとしてかなりの批判を浴びたのだが、その時点では正直、質問の意図すら理解できなかった。第1章3-4の記述とも重なるが、それほどまでに私はその「距離感」というものを見失っていたのである。実は私はフィールドワークの後半、何をすれば「調査」になるのか、「調査する」とは何なのかがわからなくなっていた。これまでの人生でベストの居心地の良さをグラストンベリーに見つけた私は、その心地良さに身を委ね、インフォーマントたちと交わりつつ、ただ時間を過ごすような日々を送ることが増えていた。博士論文という形で自分の研究を成就させるには、自分がフィールドの人々の一員であっても、その中のどこにいるのかを把握している必要があったのに、迷子になってしまったのだ。このゼミの後、私は被調査者との距離感とは何なのだろうと考えつつ、グラストンベリーでの日々のエピソードを一つひとつ思い返し、博士論文の構想と執筆を進めていたのである。

「はじめに」で出発し、第3章3-4で一休憩していた女神の行進だが、実はもう少し続きがある。その様子を記して、終わりたいと思う。

泉に続いて、最終目的地であるトールを目指す。列は次第にばらけていき、人々は思いのまま、一歩ずつ頂上へと歩みを進めていく。頂上に近づくにつれて、サマーセット平原を駆け抜

けてきた強風に煽られ、吹き飛ばされそうになる。それでも、のぼりを握りしめ、氣力を振り絞って、大地を踏みしめて上っていく。

海拔 145 メートルの聖マイケル塔を抱く丘のてっぺんに一足早く着いた私。目の前には夏の青空と緑の野原が広がっている。耳を澄ませば、荒ぶる風に混じって、女神の歌が聞こえてくる。

アヴァロンの女神よ 聖なる島の創造主 楽園のりんごの女王
アヴァロンの女神よ あなたの創造は尽きることがない
あなたは源で、そこに私たちは帰ります

男性陣がやっとの思いで柳の女神とともに到着した。人々はその周りを取り囲み、持参した果物を次々と供えていく、もうそこまで来ている収穫の季節に豊饒を願って。そして、セレモニアリストの召喚に合わせて、季節の祝祭のように、手を挙げて、くるりと回って、9人の女神を順番に呼んで、カンファレンスの成功を感謝する。もちろん、歌い、踊ることも忘れない。互いに声を掛け合って、その場の人々を巻き込んでいく。記すまでもなく、私も観察者であり続けることはできず、カメラとメモ帳をしまっ、差し出された手をとって、踊りの輪の中に加わっていく。

最後に、女神にお供えした果物をいただいた。夜露に濡れた大地に腰を下ろし、眼下に広がる平原と地平線を眺めながら。「こっちにおいて、一緒に食べよう」。そう誘ってくれた友達とおしゃべりを楽しみつつ、私も甘い果実の汁で渴いたのどを潤した。

グラストンベリーから持ち帰ったハーブティーを飲みながら、本論文を書き終えようとしている今、彼らと過ごしたこんな日々が、やはりただ懐かしい。

謝辞

本論文を考え、執筆し、提出することができたのは、沢山の方々のご指導とご助言と励ましのおかげです。

まず、指導教員である京都大学人文科学研究所の田中雅一先生には、修士課程の頃からずっとご指導いただき、共同研究のメンバーにも加えてくださり、大変お世話になりました。京都大学人間・環境学研究科の菅原和孝先生、風間計博先生、京都大学人文科学研究所の石井美保先生、そして退官された同研究科の故福井勝義先生、山田孝子先生、さらに文化人類学分野の諸先輩方と院生の方々にも、お世話になりました。国立民族学博物館の鈴木七美先生には共同研究に声をかけていただき、また日本学術振興会のPD特別研究員として受け入れていただきました。同博物館の菅瀬晶子先生はその後の外来研究員の受け入れを引き受けてくださいました。山中弘先生(筑波大学)、三木英先生(大阪国際大学)、堀江宗正先生(聖心女子大学)には、研究会を中心にお世話になりました。

それから海外渡航中には、イギリスの開放大学(Open University)のMarion Bowman先生に公私ともども大変お世話になり、また日本学術振興会の海外派遣事業における派遣の際、受け入れていただきました。Ronald Hutton先生(ブリストル大学、イギリス)、Michael York先生(元バース・SPA大学、イギリス)、Ahmet Arabaci先生(ファトゥー大学、トルコ)、Imre Lázár先生(カーロリ・ガースパール大学、ハンガリー)、Agita Luse先生(リガ大学、ラトビア)、Hanneke Minkjan博士(アムステルダム自由大学、オランダ)、Giselle Vincette博士(エジンバラ大学、イギリス)、Jo Overend博士(元ウィンチェスター大学、イギリス)、Miguel Farias博士(オックスフォード大学、イギリス)の各先生方にもよくしていただきました。その他、2002年から2003年にアメリカのイリノイ州立大学シカゴ校に留学していたとき、お世話になったMichael Lieber先生(元イリノイ州立大学シカゴ校)、そしてRahul Oka先生(ノートルダム大学、アメリカ)とVania Smith先生(ノートルダム大学、アメリカ)のご夫妻からはその後も励ましの言葉をいただきました。その当時知り合ったJeanne JesernikさんとCarolyn Powellさんからは、いつも励ましの言葉とともに英文校閲をお願いしてきました。

これ以上、お名前を挙げきれませんが、日本やイギリス、ヨーロッパ各地の色々な学会や研究会で出会った、先生方や院生の方々との出会いとその後の交流は実り多いものでした。とりわけ後述する学会や研究会での発表の折には、温かいアドバイスをいただき、励みになりました。その他、執筆にあたっては、引用文献に挙げた以外に、

多くの方々の博士論文を参考にさせていただきました。

みなさま、本当にありがとうございました。心の底から深謝いたします。

本論文中に登場する、大家の「ヘイゼル」さんと「ルビー」さん、そしてキャシー・ジョーンズさんや「サラ」さんをはじめとする、グラストンベリーとこの町を通して出会った人たちからは、研究に関係すること以外、たとえば物事の見方や前向きな生き方のこつなど、大切なことを沢山学ばせていただきました。今、1つだけ絶対に確信をもって言えることは、グラストンベリーをフィールドに選んだことに悔いはないということです。そんな場所に出会えたことだけで、私は幸せだし、満足しています。きらきらした毎日をありがとう。

この論文と向き合っていた1年は、論文のテーマとは裏腹に、対面的なつながりに乏しく、日々1人ぼっちでしたが、そのおかげで季節の移り変わりを敏感に感じる事ができました。夏の暑さと冬の寒さには参ったけど、春の桜と秋の稲穂には癒されました。私たちの周りには人以外の生き物が沢山暮らしていること、明るさは光のおかげでもたらされていること、いつも空はきれいなこと、そんな当たり前のことを改めて気づかせてもらいました。このように、論文に集中できる時間、そして何よりも調査にかかりきりになれる時間を過ごせたのは、2008年から2013年にわたり金銭的なご支援をいただいた日本学術振興会のおかげだと感謝しております（科学研究費補助金（特別研究員奨励費）の課題番号 20・7205、22・7515、および研究者海外派遣基金助成金（優秀若手研究者海外派遣事業））。

最後に、論文を考えるための空間を提供してくれた家族と親族にもお礼を言いたいと思います。

2013年3月2日 春の足音を聞きながら

河西瑛里子

学会や研究会での発表一覧

2007年6月3日

「日常実践としてのスピリチュアリティー英国グラストンベリーにおけるヒーリング実践と女神運動を事例として」、『日本文化人類学会 第41回学術大会』、愛知（名古屋大学）

2007年6月9日

「「スピリチュアリティ」という宗教実践ー英国の聖地グラストンベリーに集う人々の日常生活の視点から」（事前に申請した題目は「日々をスピリチュアルに生きるということー英国の聖地、グラストンベリーにおけるヒーリングの実践と女神運動を事例として）」、『「宗教と社会」学会 第15回学術大会』、東京（駒澤大学）

2007年9月16日

「グラストンベリーという聖地ー人々の日常実践の視点から」（事前に申請した題目は「日常生活の中でスピリチュアリティを実践するということ）」、『日本宗教学会 第66回学術大会』、東京（立正大学）

2007年10月6日

「女神運動の現在ーイギリス、グラストンベリーで始まった女神運動を事例として」、『宗教社会学の会』、大阪（関西学院大学梅田キャンパス）

2008年6月1日

「「ペイガニズム」という伝統ー英国グラストンベリーの人々との交流から見えてくるもの」、『日本文化人類学会 第42回学術大会』、京都（京都大学）

2008年6月14日

「スピリチュアリティ運動の聖地ーグラストンベリー女神運動を中心に」、『「宗教と社会」学会 第16回学術大会』、愛知（南山大学）

2008年9月14日

「ヨーロッパの女神運動ーイギリスとハンガリーの比較よりー」、『日本宗教学会 第67回学術大会』、つくば（筑波大学）

2009年5月30日

「ヨーロッパ人のスーフィ実践ー英国グラストンベリーのナクシャバンディ教団を事例として」、『日本文化人類学会 第43回学術大会』、大阪（国立民族学博物館）

2009年6月1日

「聖地グラストンベリーを構成するスピリチュアリティ実践の諸相とその相互関係」、『京都大学人文科学研究所共同研究班「複数文化接触領域の人文科学」』、京都（京都大学）

2010年4月9日

International Interdisciplinary Conference MEDICA VII “Illness for spiritual leaders”（エストニア、タルトゥ）

2010年4月19日

Adama Mickiewicz University の定期セミナー “The interrelationship among the different faith groups in Glastonbury, Somerset, England”（ポーランド、ポズナン）

2011年3月26日

「東日本大震災とスピリチュアリティ」、『スピリチュアリティ情報交換会議』、東京（聖心女子大学）

2011年5月29日

「コミュニティとしてのケアー英国グラストンベリーにおけるキリスト教教会を事例として」、『国立民族学博物館 共同研究「ウェルビーイング（福祉）の思想とライフデザイン」第1回研究会』、大阪（国立民族学博物館）

2011年5月30日

「女神・魔女運動がもたらす癒しとケア」、『国立民族学博物館 機関研究「包摂と自律の人間学」領域 プロジェクト「ケアと育みの人類学」第1回セミナー』、大阪（国立民族学博物館）

2011年6月11日

「聖地における癒しとコミュニティ」、『日本文化人類学会 第45回学術大会』、東京（法政大学）

2011年7月6日

Anthropology of Healing Arts and Art of Medicine III Budapest – Tiszanána Summer Course
“The Goddess Movement in Glastonbury”（ハンガリー、ティサナナ）

2011年7月16日

「歓迎されざる訪問者との共生 オルタナティヴ・スピリチュアリティの聖地グラストンベリーを事例として」、『宗教とツーリズム研究会』、東京（國學院大学）

2012年1月21日

「白人社会でのスーフィの暮らし方ーイギリスの田舎町を事例として」、『スーフィズム・聖者信仰研究会』、東京（上智大学）

2012年1月29日

「現代ヨーロッパのヒーリング・コミュニティ」、『国立民族学博物館 共同研究「ウェルビーイング（福祉）の思想とライフデザイン」研究会』、大阪（国立民族学博物館）

2012年2月12日

「現代の欧米の女神運動にひかれる人たちーイギリス、グラストンベリーの事例から」、『京都大学人文科学研究所 公募研究プロジェクト奥山班』、和歌山（高野山大圓院）

2012年3月10日

「女神のいる世界ーイギリス、グラストンベリーの女神運動の事例から」、『「宗教と社会」学会関西地区大会』、京都（佛教大学）

2012年3月27日

「女神運動とヒーリング」、『スピリチュアリティ情報交換会議』、東京（聖心女子大学）

2012年6月4日

「「つながり」への希求と忌避から生まれるヒーリングーグラストンベリーの女神運動にかかわる人たちを事例として」、『京都大学人文科学研究所共同研究班「トラウマ体験と記憶の組織化をめぐる領域横断的研究』、京都（京都大学）

初出一覧

第1章第1節1 オルタナティブ・スピリチュアリティとは？

2007年1月

『スピリチュアルな日常を生きる－英国グラストンベリーにおけるヒーリングの実践と女神運動を事例に』(京都大学大学院人間・環境学研究科 2006年度修士学位論文)

第1章第2節 民族誌の中の調査者

第7章第2節 能動的な被調査者

第8章第2節 民族誌を記述する

2008年3月発行

『コンタクト・ゾーン』第2号、pp.131-147 (題目「英国でコンタクト・ゾーンを考える－グラストンベリーにおける女神運動とドルイド教を事例として」)

2011年3月発行

『コンタクト・ゾーンの人文学 第1巻』(田中雅一・船山徹編)、pp.103-129 (題目「イギリスでコンタクト・ゾーンを考える－グラストンベリーにおける文化人類学的調査を事例として」)

第2章 オルタナティブな町 (ただしメインのテーマは、第5節 地元民からの視線)

2013年6月発行

『宗教と社会』第19号、pp.1-15 (題目「オルタナティブと対峙する地元民－イギリスのグラストンベリーにおけるニューエイジ産業をめぐって」)

第2章第2節 多彩なオルタナティブ・スピリチュアリティ

第2章第4節 町の長い歴史と豊かな伝説

第2章第5節 地元民からの視線

2012年11月発行

『聖地巡礼ツーリズム』(星野英紀・山中弘・岡本亮輔編)、pp.130-133 (題目「イギリスのグラストンベリー－キリスト教の聖地からスピリチュアリティの聖地へ」)

第2章第2節 多彩なオルタナティブ・スピリチュアリティ

第2章第4節 町の長い歴史と豊かな伝説

第3章第1節 魔女から女神へ

第3章第2節 生みの母の来歴

第3章第3節 「アヴァロン」の創出

第3章第4節1 男性の受け入れ

2009年12月発行

『人文学報』第98号、pp.269-296 (題目「女神にひかれる男たち－現代の欧米の新しい宗教的实践におけるジェンダーについて」)

第3章第1節 魔女から女神へ

2009年1月発行

『文化人類学事典』(日本文化人類学会編)、pp.396-397 (題目「スピリチュアリティと女神運動」)

引用文献

○日本語の文献○

- アイスラー、リーアン 1991 『聖杯と剣』(野島秀勝訳)、東京：法政大学出版局 (Riane Eisler, 1987, *The Chalice and The Blade: Our History, Our Future*, San Francisco: HarperSanFrancisco)
- 青山吉信 1992 『グラストンベリ修道院 歴史と伝説』、東京：山川出版社
- アドラー、マーゴット 2003 『月神降臨』(江口之隆訳)、東京：国書刊行会 (Margot Adler, 1979, *Drawing Down the Moon: Witches, Druids, Goddess Worshippers and Other Pagans in America Today*, Boston: Beacon)
- アーリ、ジョン 1995 『観光のまなざし』(加太宏邦訳)、東京：法政大学出版局 (John Urry, 1990, *The Tourist Gaze: Leisure and Travel in Contemporary Societies*, London: Sage)
- 池上正太 2011 『ケルト神話』、東京：新紀元社
- 伊藤雅之 2003 『現代社会とスピリチュアリティ』、広島：溪水社
- ウィルソン、ブライアン 1979 『現代宗教の変容』(井門富士夫・中野毅訳)、東京：ヨルダン社 (Brian Wilson, 1976, *Contemporary Transformation of Religion*, Tyne: University of Newcastle)
- 海野弘 1998 『世紀末シンドローム—ニューエイジの光と闇』、東京：新曜社
- 大杉高司 2001 「非同一性による共同性へ／において」、『人類学的実践の再構築 ポストコロニアル転回以後』(杉島敬志編)、京都：世界思想社、pp.271-296
- 小田亮 2004 「共同体という概念の脱／再構築」、『文化人類学』第 69 巻第 2 号、pp.236-246
- 岡本亮輔 2012 『聖地と祈りの宗教社会学 巡礼ツーリズムが生み出す共同性』、横浜：春風社
- 葛西賢太 2002 「正直であること、仲間であること—「飲まない生き方」を分かち合う共同体へ」、『スピリチュアリティを生きる』(檜尾直樹編)、東京：せりか書房、pp.13-27
- 河西瑛里子
2007 『スピリチュアルな日常を生きる—英国グラストンベリーにおけるヒーリングの実践と女神運動を事例に』(京都大学大学院人間・環境学研究科 2006 年度修士学位論文)
- 2008 「英国でコンタクト・ゾーンを考える—グラストンベリーにおける女神運動とドルイド教を事例として」、『コンタクト・ゾーン』第 2 号、pp.131-147
- 2009 「女神にひかれる男たち—現代の欧米の新しい宗教的实践におけるジェンダーについて」、『人文学報』第 98 号、pp.269-296
- 2011 「イギリスでコンタクト・ゾーンを考える—グラストンベリーにおける文化人類学的調査を事例として」、『コンタクト・ゾーンの人文学 第 1 巻』(田中雅一・船山徹編)、京都：晃洋書房、pp.103-129
- 2013 「オルタナティブと対峙する地元民—イギリスのグラストンベリーにおけるニューエイジ産業をめぐる」、『宗教と社会』第 19 号、pp.1-15
- ギンブタス、マリヤ 1989 『古ヨーロッパの神々』(鶴岡真弓訳)、東京：言叢社 (Marija Gimbutas, 1981, *The Goddesses and Gods of Old Europe: 6500-3500B.C. Myths and Cult Images*, London: Thames and Hudson Ltd.)

- クライスト、キャロル 1982 「なぜ女性には女神が必要なのか」、『女性解放とキリスト教』(奥田暁子・岩田澄江訳)、東京：新教出版社、pp.261-282 (Carol P. Christ, 1979, “Why Women Need the Goddess: Phenomenological, Psychological, and Political Reflections,” in Carol P. Christ & Judith Plaskow (eds.), *Womanspirit Rising: A Feminist Reader in Religion*, San Francisco: Harper & Row, pp.273-287)
- 小松加代子 2007 「女神信仰」、『ジェンダーで学ぶ宗教学』(田中雅一・川橋範子編)、京都：世界思想社、pp.166-182
- 佐伯順子 1998 「女神を求めてーアメリカにおける「女性の霊性」運動と日本」、『女神聖と性の人類学』(田中雅一編)、東京：平凡社、pp.357-389
- 酒井朋子 2011 「コンタクト・ゾーンとしてのライフ・ストーリー調査ー第二言語の聞き取り調査にまつわる方法論的考察ー」、『コンタクト・ゾーンの人文学 問題系』(田中雅一・船山徹編)、京都：晃洋書房、pp.79-102
- 佐藤知久 2002 「HIV とともに生きる身体ーニューヨーク市ブルックリンにおけるサポートグループの事例から」、『日常実践のエスノグラフィーー語り、コミュニティ、アイデンティティ』(田辺繁治・松田素二編)、京都：世界思想社、pp.265-285
- 塩路有子 2003 『英国カントリーサイドの民族誌 イングリッシュネスの創造と文化遺産』、東京：明石書店
- 島菌進 1996 『精神世界のゆくえ』、東京：東京堂出版
2007 『スピリチュアリティの興隆』、東京：岩波書店
- スターホーク 1994 『聖魔女術ースパイラル・ダンス』(鏡リュウジ・北川達夫訳)、東京：国書刊行会 (Starhawk, 1979, *The Spiral Dance: A Rebirth of the Ancient Religion of the Great Goddess*, San Francisco: Harper San Francisco)
- ストーム、レイチェル 2002 「共同性・文化・スピリチュアリティ」(葛西賢太・伊藤雅之訳)、『スピリチュアリティを生きる』(榎尾直樹編)、東京：せりか書房、pp.186-208
- スノードン、ポール & 大竹正次 1997 『イギリスの社会』、東京：早稲田大学出版部
- 高谷紀夫&沼崎一郎 2012 「序章」、『つながりの文化人類学』(高谷紀夫・沼崎一郎編)、仙台：東北大学学術出版会、pp.9-31
- 高平鳴海&女神探求会 1998 『女神』、東京：新紀元社
- 田中雅一
1996 「ヨーロッパ・アジア・フォーラム参加報告」、『民族学研究』第 61 巻第 2 号、pp.314-317
1998 「女神研究序論」、『女神 聖と性の人類学』(田中雅一編)、東京：平凡社、pp.5-28
2009 「エイジェントは誘惑する：社会・集団をめぐる闘争モデル批判の試み」、『集団ー人類社会の進化』(河合香吏編)、京都：京都大学学術出版会、pp.275-292
2011 「運命的瞬間を求めてーフィールドワークと民族誌記述の時間」『時間の人類学』(西井涼子編)、京都：世界思想社、pp.115-140
- 中央大学人文学研究所編 2001 『ケルト復興』、東京：中央大学出版部
- ナンシー、ジャン=リュック 2007(2001) 『無為の共同体 哲学を問い直す分有の思考』(西谷修・安原伸一朗訳)、東京：以文社 (Jean=Luc Nancy, 1999, *La communauté désœuvrée*, Paris: Christian Bourgoi Editeur)
- 原聖 2007 『興亡の世界史 07 ケルトの水脈』、東京：講談社

- ファガーソン、マリリン 1981 『80年代を変革する「透明の知性」アクエリアン革命』
 (松尾式之訳・堺屋太一監訳)、東京：実業日本社 (Marilyn Ferguson, 1980, *Aquarian
 Conspiracy: Personal and Social Transformation in Our Time*, Los Angeles: J. P. Tarcher)
- ブラッドリー、マリオン・ジマー [アヴァロンの霧シリーズ] 1988『異教の女王』、『宗
 主の妃』、『雄鹿王』、1989『円卓の騎士』(岩原明子訳)、東京：早川書房 (Marion Zimmer
 Bradley, 1982, *The Mist of Avalon*, New York: Alfred A. Knopf)
- ブレキリアン、ヤン 2011 『ケルト神話の世界』上下(田中仁彦・山邑久仁子訳)、東京：
 中央公論社 (Yann Brekilien, 1993, *La Mythologie Celtic*, Paris: Les Editions du Rocher)
- マーカス、ジョージ・E & マイケル・M・J・フィッシャー 1989 『文化批判としての人
 類学 人間科学における実験的試み』(永渕康之訳)、東京：紀伊国屋書店 (George E.
 Marcus & Michael M. J. Fischer, 1986, *Anthropology as cultural critique: An experimental
 moment in the human sciences*, Chicago: University of Chicago Press)
- マーカス、ジョージ・E & ジェイムズ・クリフォード 1996 『文化を書く』(春日直樹・
 和邇悦子・足羽與志子・橋本和也・多和田裕司・西川麦子訳)、東京：紀伊国屋書店 (James
 Clifford and George E. Marcus, 1986, *Writing culture*, Berkeley, Los Angeles, London:
 University of California Press)
- 松尾瑞穂 2011 「「他者」とともにある日常－インドにおけるコンタクト・ゾーンとして
 の国際結婚－」、『コンタクト・ゾーンの人文学 問題系』(田中雅一・船山徹編)、京都：
 晃洋書房、pp.257-282
- マフェゾリ、ミシェル 1995 『現代世界を読む スタイルとイメージの時代』(菊池昌実
 訳)、東京：法政大学出版局 (Michel Maffesoli, 1993, *La contemplation du monde: Figures
 du style communautaire*, Paris: le Bureau)
- 森明子 2004 「序 ヨーロッパ人類学の可能性」、『ヨーロッパ人類学』(森明子編)、東
 京：新曜社、pp.1-26
- 吉永進一 2002 「日本の霊的思想の過去と現在－カルト的場の命運」、『スピリチュアリ
 ティを生きる』(樫尾直樹編)、東京：せりか書房、pp.171-185
- リディトン、ジル 1996 『魔女とミサイル イギリス女性平和運動史』(白石瑞子・清水
 洋子訳)、東京：新評論 (Jill Liddington, 1989, *The long road to Greenham*, Little: Brown &
 Co Ltd)
- ルックマン、トーマス 1976 『見えない宗教－現代宗教社会学入門』(赤池憲昭・ヤン・
 スィンゲー訳)、東京：ヨルダン社 (Thomas Luckmann, 1967, *Life-World and Social
 Realities*, London: Heinemann Education Books)

○英語の文献○

- Ashe, Geoffrey 1986(1957) *King Arthur's Avalon: The Story of Glastonbury*, Glasgow:
 Fontana
- Beckford, James 1984 "Holistic Imagery and Ethics in New Religious and Healing
 Movements," *Social Compass* 31(2-3):259-272
- Benham, Patrick 1993 *The Avalonians*, Glastonbury: Gothic Image
- Berger, Helen A. 1999 *A Community of Witches: contemporary neo-pagan and witchcraft in
 the United States*, Columbia: University of South Carolina Press

- Bond, Frederick Bligh 1978(1918) *The Gate of Remembrance: The Story of the Psychological Experiment Which Resulted in the Discovery of the Edgar Chapel at Glastonbury*, Guildford: Thorsons
- Bowman, Marion
 1993 “Drawn to Glastonbury,” in Ian Reader & Tony Walter (eds.), *Pilgrimage in popular culture*, London: The Macmillan Press, pp.29-62
 1995 “The Noble Savage and the Global Village: Cultural Evolution in New Age and Neo-Pagan Thought,” *Journal of Contemporary Religion* 10(2):139-149
 2000 “More of the Same? Christianity, Vernacular Religion and Alternative Spirituality in Glastonbury,” in Steven Sutcliffe & Marion Bowman (eds.), *Beyond New Age: exploring alternative spirituality*, Edinburgh: Edinburgh University Press, pp.83-104
 2004 “Procession and Possession in Glastonbury: Continuity, Change and the Manipulation of Tradition,” *Folklore* 115:273-85
 2005 “Ancient Avalon, New Jerusalem, Heart Chakra of Planet Earth: The Local and the Global in Glastonbury,” *Numen* 52:157-190
- Bruce, Steve 2002 *God is dead: secularization in the West*, Padstow: Blackwell
- Bulmer, Martin 1987 *The social basis of community care*, London: Allen & Unwin
- Carey, Aine 1998 “1998 Glastonbury Goddess Conference,” *AVALON Magazine Autumn 1998* 10:18-21
- Carley, James P. 1996(1988) *Glastonbury abbey: The holy house at the head of the moors adventurous*, Glastonbury: Gothic Image Publications
- Carsten, Janet 2000 “Introduction: culture of relatedness,” in Janet Carsten(ed.), *Culture of relatedness: new approaches to the study of kinship*, Cambridge: Cambridge University Press, pp.1-36
- Chryssides, George D. 1996 “Healing at Bath: Report on 3rd Annual Conference, Bath College of Higher Education, Saturday 13 May 1995,” *Journal of Contemporary Religion* 11(1): 101-103
- Clare 2009 “Glastonbury, the hippies and the pop festival, c.1967-75: the Negotiation of a New Society,” unpublished (知人からもらったため、姓不明)
- Daly, Mary 1978 *Gyn/ Ecology: The metaethics of radical feminism*, Boston: Beacon Press
- Dashú, Max 2005 “Knocking Down Straw Dolls: A Critique of Cynthia Eller’s *The Myth of Matriarchal Prehistory*,” *Feminist Theology* 13(2):185-216
- Davie, Grace 1994 *Religion in Britain since 1945: Believing without belonging*, Oxford and Cambridge: Blackwell
- Eller, Cynthia
 1991 “Relativizing the Patriarchy: The Sacred History of the Feminist Spirituality Movement,” *History of Religions* 30(3):279-295
 1995(1993) *Living in the Lap of the Goddess: The Feminist Spirituality Movement in America*, Boston: Beacon

- 2000a(1999) "The Roots of Feminist Spirituality," in Wendy Griffin (ed.), *Daughters of the Goddess: Studies of Identity, Healing, and Empowerment*, Walnut Creek: AltaMira Press, pp.25-41
- 2000b *The Myth of Matriarchal Prehistory: Why an Invented Past Won't Give Women a Future*, Boston: Beacon Press
- Ellis, Peter 2010 "Mendip Hills An Archaeological Survey of the Area of Outstanding Natural Beauty," *Somerset County Council Archeological Projects*, Retrieved 8 November 2010
- Foltz, Tanice G. 2000(1999) "Thriving, Not Simply Surviving: Goddess Spirituality and Women's Recovery from Alcoholism," in Wendy Griffin (ed.), *Daughters of the Goddess: Studies of Identity, Healing, and Empowerment*, Walnut Creek: AltaMira Press, pp.119-135
- Fortune, Dion 2000(1930) *Glastonbury Avalon of the Heart*, London: Society of Inner Light Trading Ltd
- Frost, Brian 1989 *An unknown Glastonbury mystic: The reflection of Marjorie Milne through prose, poetry & prayer*, London: New World Publications
- Gallagher, Ann-Marie 2000(1999) "Woven Apart and Weaving Together: Conflict and Mutuality in Feminist and Pagan Communities in Britain," in Wendy Griffin (ed.), *Daughters of the Goddess: Studies of Identity, Healing, and Empowerment*, Walnut Creek: AltaMira Press, pp.42-58
- Garrard, Bruce 1989 "'Glastonbury Hippies' – A potted history," in Ann Morgan & Bruce Garrard (eds.), *Travellers in Glastonbury*, Glastonbury: The Glastonbury Gazette
- Garrett, Catharine 2001 "Transcendental Meditation, reiki and Yoga: Suffering, Ritual and Self-Transformation," *Journal of Contemporary Religion* 16(3):329-342
- Gerlach, Luether P. 2001 "The structure of social movements: environmental activism and its opponents," in John Arquilla & David Ronfeldt (eds.), *Networks and netwars: The future of terror, crime and militancy*, Santa Monica, Arlington and Pittsburgh: RAND, pp.289-309
- GCDT (Glastonbury Community Development Trust)
- 2004 "Survey of Glastonbury employers Final report," unpublished
- 2005 "Community survey 2003/04 Survey of Glastonbury employers," unpublished
- Gill, Robin, Kirk Hadaway & Penny Long Merler 1998 "Is Religious Belief Declining in Britain?" *Journal for the Scientific Study of Religion* 37(3):507-516
- Goldenberg, Naomi R. 1979 *Changing of the Gods: Feminism and the End of Traditional Religions*, Boston: Beacon Press
- Gordon, Rebecca 1995 "Earth star magic: A feminist theoretical perspective on the way of the witches and the path to the Goddess," *Social Alternatives* 14 (ページ数記載なし)
- Gottschall, Marilyn 2000(1999) "The Mutable Goddess: Particularity and Eclecticism within the Goddess Public," in Wendy Griffin (ed.), *Daughters of the Goddess: Studies of Identity, Healing, and Empowerment*, Walnut Creek: AltaMira Press, pp.59-72
- Greenwood, Susan
- 2000a *Magic, Witchcraft and the Other World: An Anthropology*, Oxford: Berg
- 2000b(1999) "Feminist Witchcraft: A Transformatory Politics," in Wendy Griffin (ed.), *Daughters of the Goddess: Studies of Identity, Healing, and Empowerment*, Walnut Creek:

- AltaMira Press, pp.136-150
- Griffin, Wendy
- 1995 "The Embodied Goddess: Feminist Witchcraft and Female Divinity," *Sociology and Religion* 56(1):35-48
- 2000(1999) "Crafting the Boundaries: Goddess Narratives as Incarnation," in Wendy Griffin (ed.), *Daughters of the Goddess: Studies of Identity, Healing, and Empowerment*, Walnut Creek: AltaMira Press, pp.73-88
- Harris, Grove 2005 "Healing in Feminist Wicca," in Linda L. Barnes & Susan S. Sered (eds.), *Religion & Healing in America*, New York: Oxford University Press, pp.254-263
- Harvey, Graham 1997 *Contemporary Paganism: listening people, speaking earth*, New York: New York University Press
- Hasselle-Newcombe, Suzanne 2005 "Spirituality and 'Mystical Religion' in Contemporary Society: A Case Study of British Practitioners of the Iyengar Method of Yoga," *Journal of Contemporary Religion* 20(3):305-321
- Heelas, Paul
- 1996 *The New Age movement: the celebration of the self and the sacralization of modernity*, Bodmin: Blackwell
- 2000 "Expressive Spirituality and Humanistic Expressivism: Sources of significance Beyond Church and Chapel," in Steven Sutcliffe & Marion Bowman (eds.), *Beyond New Age: exploring alternative spirituality*, Edinburgh: Edinburgh University Press, pp. 237-254
- 2006 "The Infirmary Debate: On the Viability if New Age Spiritualities of Life," *Journal of Contemporary Religion* 21(2):223-240
- Heelas, Paul & Linda Woodhead 2005 *The spiritual revolution: why religion is giving way to spirituality*, Padstow: Blackwell
- Hexham, Irving 1971 "New Age Thought in Glastonbury," unpublished M.A. thesis, University of Bristol
- Howard-Gordon, Francis 2010 *Glastonbury-maker of myth*, Glastonbury: Gothic Image
- Hutton, Ronald
- 1999 *The triumph of the moon: a history of modern pagan witchcraft*, Oxford: Oxford University Press
- 2003 *Witches, Druids, and King Arthur*, New York: Hambledon Continuum
- Ivakhiv, Adrian J. 2001 *Claiming sacred ground: pilgrims and politics at Glastonbury and Sedona*, Bloomington: Indiana University Press
- Jenkins, Palden 2005(1982) *Map of the ancient landscape around Glastonbury*, Glastonbury: Glastonbury Tribunal Ltd
- Jones, Kathy
- 1990 *The Goddess in Glastonbury*, Glastonbury: Ariadne Publications
- 1996 *On Finding Treasure: Mystery Plays of the Goddess*, Glastonbury: Ariadne Publications
- 1998 *Breast Cancer: Hanging on by a Red Thread*, Glastonbury: Ariadne Publications
- 2000 *In the Nature of Avalon: Goddess Pilgrimage in Glastonbury's sacred landscape*, Glastonbury: Ariadne Publications

- 2001a(1991) *The Ancient British Goddess: Goddess Myths, Legends, Sacred Sites & Present Revelation*, Glastonbury: Ariadne Publications
- 2001b *Chiron in Labrys*, Glastonbury: Ariadne Publications
- 2006 *Priestess of Avalon Priestess of the Goddess*, Glastonbury: Ariadne Publications
- Komatsu, Kayoko 1985 "Matriarchy Groups in U.K.," *Religion Today* 2(1):9
- Lawless, Elaine J. 1993 *Holy women, wholly women: sharing ministries of wholeness through life stories and reciprocal ethnography*, Philadelphia: University of Pennsylvania Press
- Lockley, Andrew 1976 *Christian Communes*, London: SCM Press
- Long, Asphodel 1994 "The Goddess Movement in Britain Today," *Feminist Theology* 2(5):11-39
- Lozano, Wendy & Tanice G. Folts 1990 "Into the Darkness: An Ethnographic Study of Witchcraft and Death," *Qualitative Sociology* 13(3):211-234
- Luhrmann, T. M. 1989 *Persuasion of the Witch's Craft – Paganism in the Modern World*, Cambridge: Harvard University Press
- Maltwood, Katherine E. 1982(1929) *Glastonbury's temple of the stars*, Cambridge: James Clarke & Co
- Michell, John
- 1969 *The View over Atlantis*, New York: Ballantine
- 1972 *City of Revelation*, London: Garnstone
- 1997(1990) *New Light on the Ancient Mystery of Glastonbury*, Glastonbury: Gothic Image
- Moody, Edward J. 1974 "Magical Therapy: An Anthropological Investigation of Contemporary Satanism" in Irving I. Zaretsky & Mark P. Leone (eds.), *Religious Movements in Contemporary America*. Princeton: Princeton University Press, pp.355-382
- Neitz, Mary J. 1993(1981) "In Goddess we trust," in Thomas Robbins & Dick Anthony (eds.), *In Gods we trust: New patterns of religious pluralism in America*, New Brunswick: Transaction Publisher
- Orion, Loretta 1994 *Never Again: The Burning Times: Paganism Revived*, Prospect Heights: Waveland Press
- Panton, Kenneth J. & Keith A. Cowlard 2008 *Historical Dictionary of the Contemporary United Kingdom*, Lanham: The Scarecrow Press
- Parman, Susan 1998 "Introduction: Europe in the Anthropological Imagination," in Susan Parman (ed.), *Europe in the Anthropological Imagination*, New Jersey: Prentice Hall, pp.1-16
- Pike, Sarah 2001 *Earthly Bodies, Magical Selves: Contemporary Pagans and the Search for Community*, Berkeley: University of California Press
- Powys, John Cowper 1975(1933) *A Glastonbury romance*, London: Pan Books
- Preston, James J. 1987 "Goddess Worship: Theoretical Perspectives," in Mircea Eliade (ed.), *Encyclopedia of Religion* vol. 6, New York: The Macmillan Press, pp.53-59
- Prince, Ruth & David Riches 2000 *The New Age in Glastonbury: The Construction of Religious Movements*, New York: Berghan Books
- Rahtz, Philip & Lorna Watts 2009(1993) *Glastonbury: Myth & Archaeology*, Stroud: History Press

Raphael, Melissa

1996 "Truth in Flux: Goddess Feminism as a Late Modern Religion," *Religion* 26:199-213

2000(1999) "False Goddess: Theological Reflections on the Patriarchal Cult of Diana, Princess Of Wales," in Wendy Griffin (ed.), *Daughters of the Goddess: Studies of Identity, Healing, and Empowerment*, Walnut Creek: AltaMira Press, pp.89-102

Rose, Stuart 2000 "Healing in the New Age: It's Not What You Do But Why You Do It," in Marion Bowman (ed.), *Healing and Religion*, Enfield Lock: Hisarlik Press, pp. 69-80

Rountree, Kathryn

1997 "The New Witch of the West: Feminists Reclaim the Crone," *Journal of Popular Culture* 30(4):212-229

1999 "The Politics of the Goddess: Feminist Spirituality and the Essentialism Debate," *Social Analysis* 43(2):138-165

2001 "The Past is a Foreigners' Country: Goddess Feminists, Archaeologists, and the Appropriation of Prehistory," *Journal of Contemporary Religion* 16(1):5-27

2002 "Goddess pilgrims as tourists: inscribing the body through sacred travel," *Sociology of Religion* 63(4):475-496

2004 *Embracing the witch and the goddess: feminist ritual-makers in New Zealand*, London and New York: Routledge

2006 "Performing the Divine: Neo-Pagan Pilgrimages and Embodiment at Sacred Sites," *Body & Society* 12(4):95-115

2007 "Archaeologists and Goddess Feminists at Çatalhöyük: An Experiment in Multivocality," *Journal of Feminist Studies of Religion* 23(2):7-26

Sage, Vanessa 2005/2006 "Sitting with Your Own Tree: Pilgrims and Pilgrimages in Glastonbury," *International Journal of the Humanities* 3 (ページ数記載なし)

Salomonsen, Jone

1998 "Feminist Witchcraft and Holy Hermeneutics," in Joanne Pearson, Richard H. Roberts & Geoffrey Samuel (eds.), *Nature Religion Today*, Edinburgh: Edinburgh University Press, pp.143-156

2002 *Enchanted feminism: ritual, gender and divinity among the Reclaiming witches of San Francisco*, London and New York: Routledge

Sjöö, Monica 1999 *Return of the Dark/Light Mother or New Age Armageddon? Towards a Feminist Vision of the Future*, Austin: Plain View Press

Taylor, Barry 2010 *A pilgrim in Glastonbury*, Glastonbury: Abbey Press

Urry, John 2002 "Mobility and proximity," *Sociology* 36(2):255-274

Weaver, Mary Jo 1989 "Who is the Goddess and Where Does She Get Us?," *Journal of Feminist Studies in Religion* 5(1):49-64

Welch, Christina 2010 "The Spirituality of, and at, Greenham Common Peace Camp," *Feminist Theology* 18(2):230-248

Wheeler, Elisabeth 2003-2004 "Assignment: Investigating Glastonbury," unpublished

Wheeler, Martin 2004 "Alternative Glastonbury Complementary Medicine and Alternative Therapies: Practitioners and Practices," unpublished

Wuthnow, Robert 1998 *After heaven: spirituality in America since the 1950s*, Berkeley: University of California Press

York, Michael 1995 *The Emerging Network - A Society of the New Age and Neo-Pagan Movement*, Lanham: Roman & Littlefield Publishers

○ホームページ○

BBC homepage http://www.bbc.co.uk/somerset/content/image_galleries/glastonbury_goddess_conference_2006_gallery.shtml?1 (2006/8/10 アクセス)

Census (Somerset Interactive Area Profiles Towns Census)

<http://www.somerset.gov.uk/somerset/statistics/2001census/> (2008/2/9 アクセス) (国勢調査のデータに「グラストンベリー」というカテゴリーはないので、町の4つの教区の値を合わせたものをグラストンベリーのデータとして使用した)

Citizens Advice Bureau Advice Guide

http://www.adviceguide.org.uk/index/your_money/benefits.htm (2012/8/3 アクセス)

Directgov <http://www.direct.gov.uk/en/MoneyTaxAndBenefits/index.htm>

(2012/8/3 アクセス)

Department for Work and Pensions <http://www.dwp.gov.uk/> (2012/8/3 アクセス)

Glastonbury Festival <http://www.glastonburyfestivals.co.uk> (2011/12/1 アクセス)

Googlemap <http://maps.google.co.jp> (2012/11/16 アクセス)

National Literacy Project <http://projects.literacytrust.org.uk/project/ReadingConnects/early/search/?region=South+West> (2012/6/30 アクセス)

NHS Somerset <http://www.somerset.nhs.uk/welcome/services/> (2012/6/30 アクセス)

UK Independent Party <http://www.ukip.org/regions> (2012/6/30 アクセス)

○新聞○

Central Somerset Gazette, Wells: Mid Somerset News Papers

○冊子、雑誌○

Goddess Conference Programme (2006, 2008, 2009, 2010)

Resident Handbook Glastonbury and Street (Standbrook Guides, 2006)



図 2-1 イギリスにおけるグラストンベリーの位置 [Googlemap]



図 2-2
 イングランドの地方+スコットランド、ウェールズ、アイルランド [UK Independent Party]

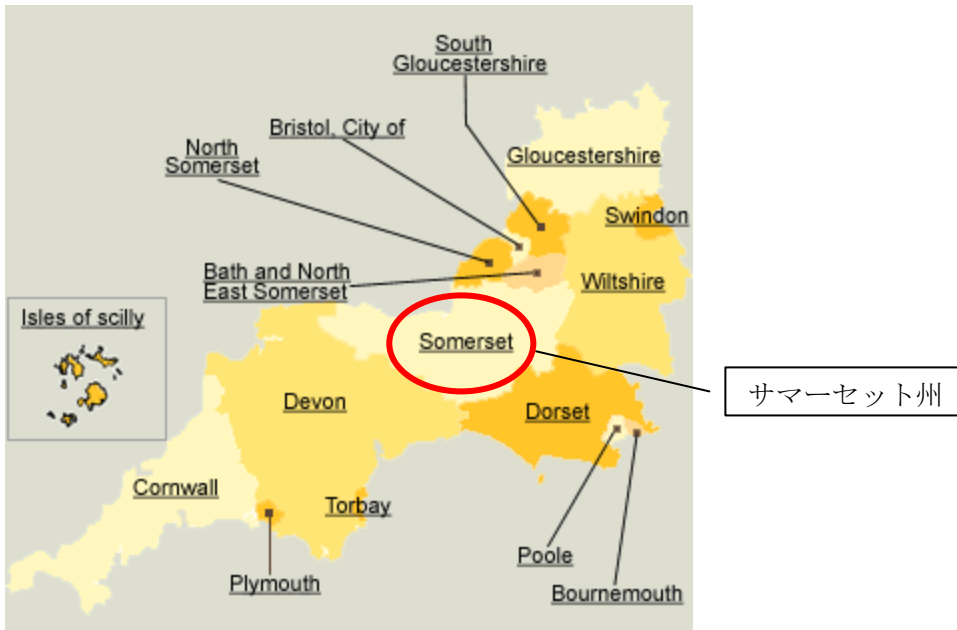


図 2-3 南西部地方の州 [National Literacy Project]

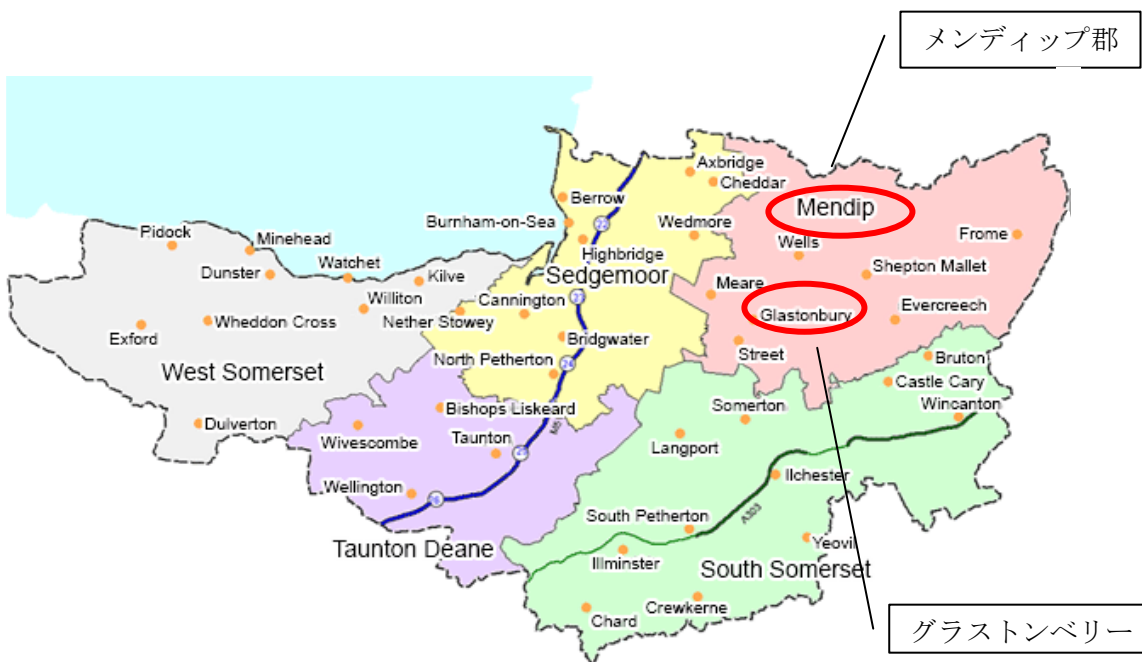
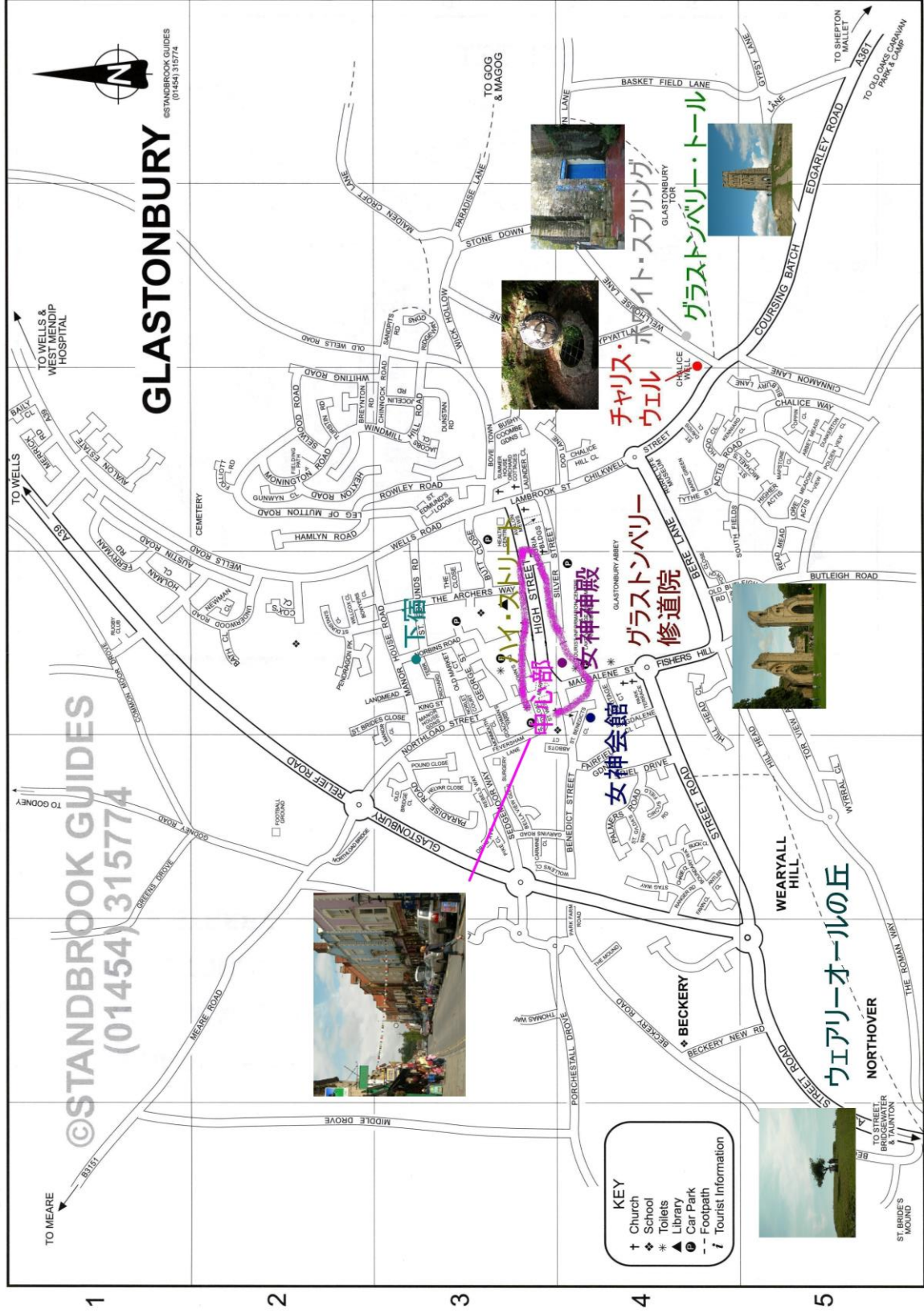
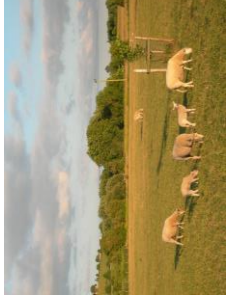


図 2-4 サマーセット州と 5 つの行政郡 [NHS Somerset]



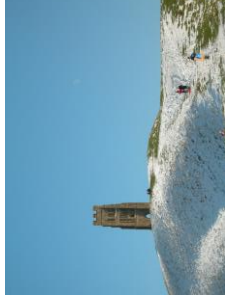
町を取り囲む野原 (春)



草を食む羊 (夏)



たわわに実るりんご (秋)



雪の積もったトール (冬)

※ 写真と日本語は筆者が挿入

図 2-5 グラストンバリーの町の地図

[Resident Handbook Glastonbury and Street]

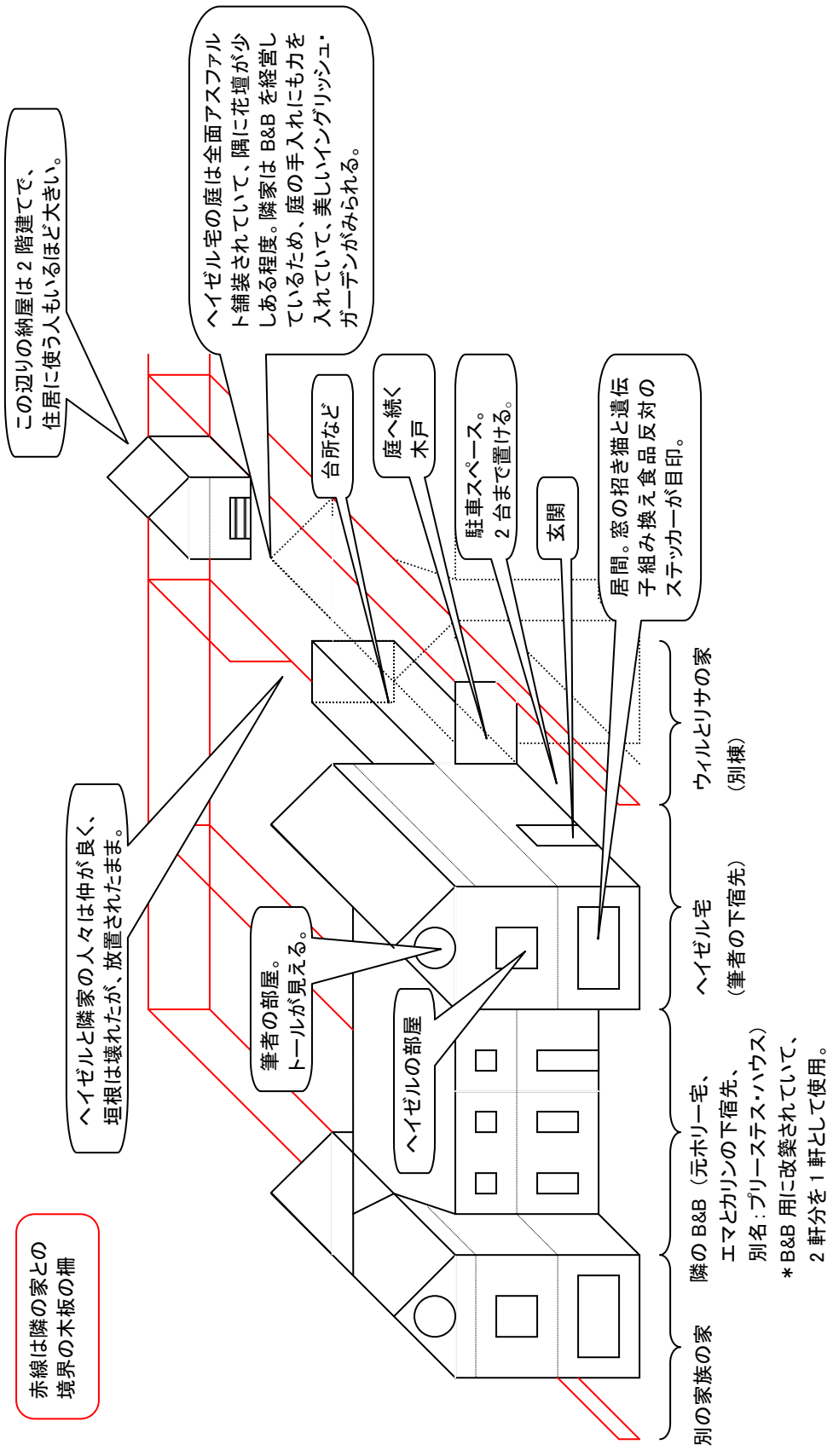


図 2-7 下宿先の家見取り図

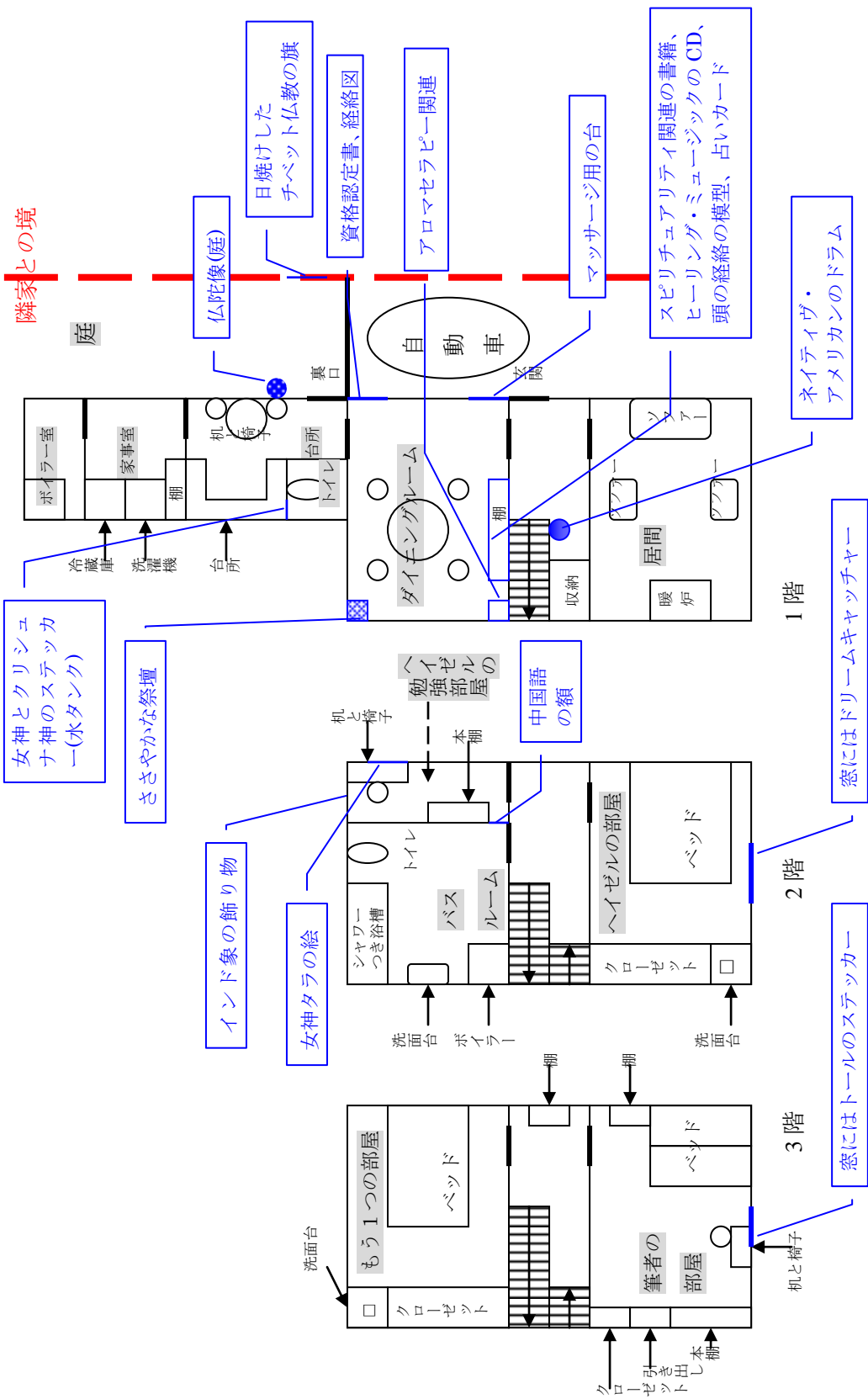


図 2-8 下宿先の部屋の間取り図 * 黒い太線はドア

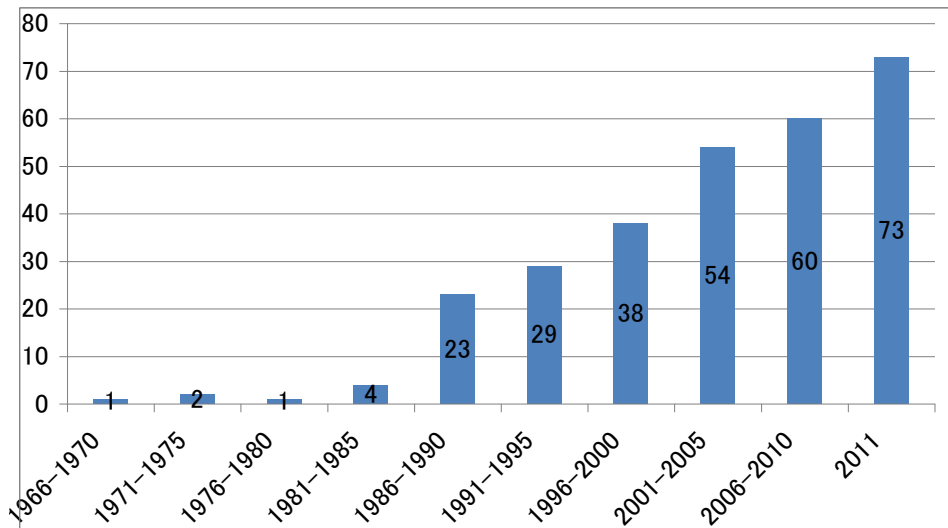


図 2-9 オルタナティブ・スピリチュアリティ関係の店舗数の変遷
(筆者の調査に基づき作成)

1960年代後半から2011年までの町の中心部の店の変遷を、店主への聞き取りや当時の雑誌の広告、電話帳などから調べ、ある建物の店舗がどのような職種の店で占められていたかを、できるかぎり遡って明らかにした表をつくり、5年ごとにその店舗を占めている期間がもっとも長い店をその期間の代表的な店とし、その中のオルタナティブ・スピリチュアリティ関係の店の数を数えてグラフにしたものである。なお、5年の中で店が変わっても、店の職種は変わらないこともあったし、数ヶ月しか存在しなかったような店もあり、5年ごとに区切ったことの弊害は少なかったと思う。



図 3-2 ブリジット・アナ/ブリタニアの聖なる輪 [Jones 2001 : 35]

* ここには図示されていないが、中央の女神は Morgan la Fay と
Lady of Avalon [Jones 2001 : 37]



図 3-3 ノラヴァ、ブリタニア、9人のモーガンの輪 [Jones 2006 : 77]

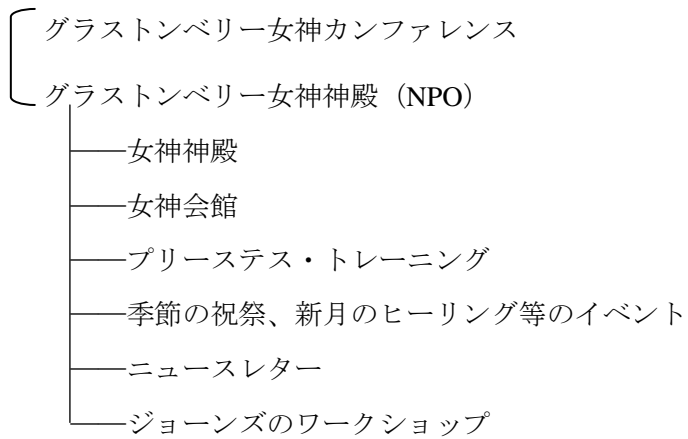


図 4-1 グラストンベリーの女神運動の運営形態 (筆者作成)

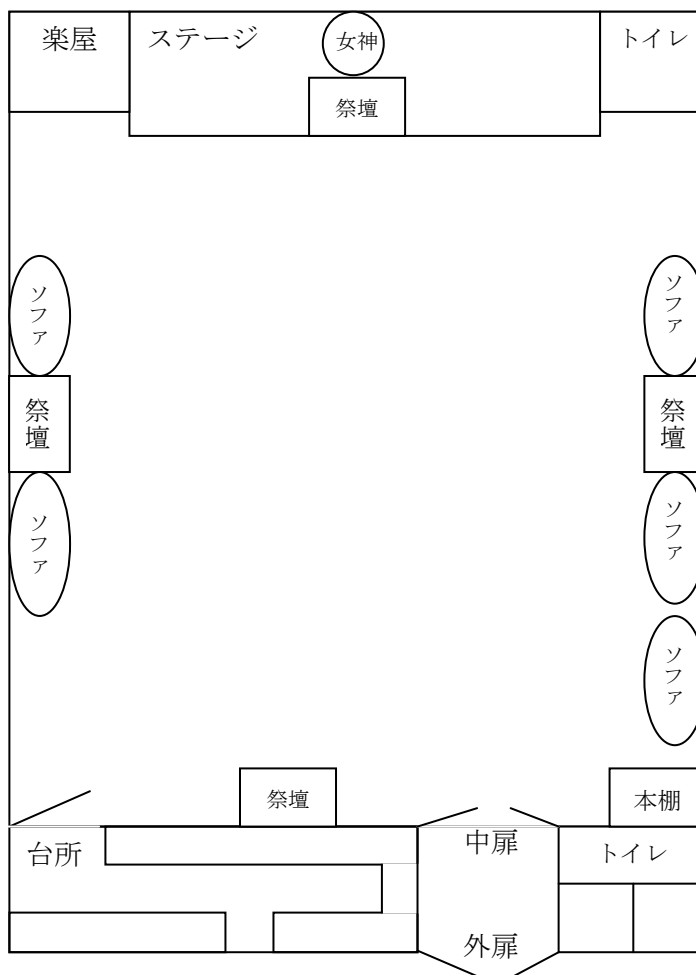


図 4-2 普通の女神会館見取り図 (下方が北方向)

表 1-1 女神運動関係の論文における、この運動の名称について

論文の発行年	1990	1991, 1995, 2000a	1993	1995	1995, 2000	1996, 2000	1997, 1999, 2002, 2004, 2006, 2007	1998	2000	2000	2000	2000	2000b	1998, 2002	2000, 2004, 2005	2007	合計 数
著者名	Lozano & Foltz	Eller	Neitz	Gordon	Griffin	Raphael	Rountree	田中	Gallagher	Gottschall	Foltz	Greenwood	Salomonsen	Bowman	小松		
女性のスピリチュアリティ(運動)	1990							1998								2	
女神のスピリチュアリティ(運動)					2000		1997, 1999, 2004, 2006		2000		2000			2004, 2005		9	
女神運動			1993		1995		1999, 2001, 2002, 2007			2000			2002	2004, 2005		10	
女神崇拜/信仰(*1)				1995			1999	1998 ^a						2000, 2004	2007	6	
(現代の)女神の宗教						1996	1999									2	
女神のフェミニズム	1990					2000	1999, 2001, 2007									5	
スピリチュアル・フェミニズム(*2)								1998								2	
フェミニスト・スピリチュアリティ(*2)	1990	1995, 2000 a					1999	1998 ^a								5	
フェミニスト魔女神		1991	1993		1995		1997, 2004					2000b	1998			7	
ペイガン・フェミニスト(*3)									2000							1	

*それぞれの論文中にみられる名称について、発行年を記した。1つの論文に複数の名称がみられる場合、2ヶ所以上に発行年を記してある。

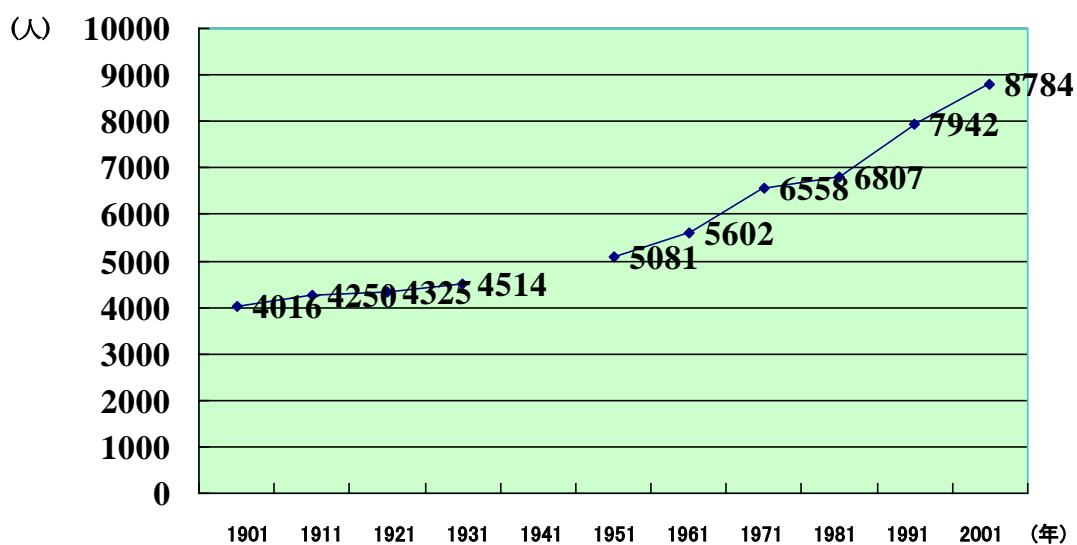
*フェミニスト神学を扱ったものや、歴史学や考古学分野からの女神運動批判の研究は、ここでは取り扱っていない。

*1 「女神崇拜/信仰」を1つのカテゴリーとしたのは、どちらも英語の Goddess Worship の翻訳だからである。

*2 「スピリチュアル」「スピリチュアリティ」はそれぞれ「霊性」と訳されていることもある。

*3 本文中には実践ではなく実践者を指す「ペイガン・フェミニスト」という言葉しかみつからなかったが、参考のため一覧に加えた。

表 2-1 人口の変移



*Census [2001] をもとに筆者が作成

*1941 年は第二次世界大戦のため、世論調査が実施されなかった

表 2-3 メンディップ郡の市町村別の人口とキリスト教の教会と活動拠点の数

	グラストン ベリー	ストリート	ウェルズ	フロム	シェプトン・ マレット	その他 小さな村	合計
人口(2001)	8784	11066	10406	24050	9700	/	/
イギリス国教会	2	1	2	1	1	31	38
メソジスト	1	1	1	2	1	6	12
合同改革教会	1	1	0	0	0	0	2
カトリック	1	0	1	0	1	0	3
バプテスト	0	1	1	1	1	1	5
クウェーカー	0	1	1	0	0	0	2
救世軍	0	1	0	0	1	0	2
ゴスペルホール	1	0	0	0	0	0	1
ペンテコステ*	1	0	0	0	0	0	1
エホバの証人	1	0	1	0	0	0	2
合計	8	6	7	4	5	38	68

*各宗派のホームページ記載のデータをもとに筆者が作成

*ペンテコステ派は Midsomerset Community Church というグループ。独自の教会は持たないので、活動拠点の数を記した

表 2-2 グラストンベリーの年間行事と天候 (はケルト暦の季節の祝祭)

冬時間、 閑散期	11 月前半	ガイフォークスの日、英霊記念日、グラストンベリー・カーニバル (電気装飾された山車のパレード。この地域に 400 年以上続く伝統行事)、収穫作物のコンテスト
	11 月後半	【どんよりとした日が増えてくる】
	12 月前半	クリスマス・フェア 【雪が降り始める】
	12 月後半	冬至、クリスマス、大晦日 【雪が積もり始める、暗くて寒く、湿気る】
	1 月前半	大掃除 【雪が融けず、暗くて寒く、湿気る】
	1 月後半	ワッセイル (りんご酒を飲みながら踊りなどを楽しむ、この地域の伝統的な祝宴) 【寒さは続く】
	2 月前半	インボルク 【寒さはまだ続く】
	2 月後半	町民有志の劇
	3 月前半	母の日 【少しずつ明るくなり始める】
	3 月後半	春分、四旬節 (年による) 【急速に日が長くなっていく】
夏時間、 観光シーズン	4 月前半	復活祭 (年による) 【だいぶ明るくなる、少しずつ暖かくなる】
	4 月後半	ベルテーン 【過ごしやすくなる】
	5 月前半	五月祭、マラソン大会 【暖かく緑がきれい】
	5 月後半	町長就任の日、メガリトマニア (巨石文化愛好家の集い) *1、Open Gorsedd (ドルイドの詩や音楽のコンテスト) 【晴れる日が多い】
	6 月前半	【からりと晴れる】
	6 月後半	夏至、グラストンベリー・フェスティバル*2、イングランド国教会の巡礼 【汗ばむような日もある一番暑い時期】
	7 月前半	カトリックの巡礼 【晴れ間が続く】
	7 月後半	Glastonbury Symposium (ミステリー・サークル愛好家の集い) *3 【雨が増える】
	8 月前半	ラマス、女神カンファレンス、Extravaganza (修道院でのコンサート)、Children's Festival (子供向けのイベント) 【雨が続き、涼しくなり始める年も】
	8 月後半	Healing Weekend (チャリス・ウェルでの様々なヒーリング体験ができるイベント) 【涼しくなり始める】
	9 月前半	Tor Fair (移動遊園地)、Pink Picnic (ゲイとレズビアンが集まり)
	9 月後半	秋分、Somerset Art Weeks (芸術作品の展示会) 【急速に日が短くなっていく】
	10 月前半	魔女グッズのマーケット
	10 月後半	Apple Day (りんごの収穫とジュース作りのイベント)、ソーウイン 【寒くなり始める】

*1 巨石を用いた遺跡。イギリスではサマーセット州の隣のウィルトシャー州のストーンヘンジやエイブベリーがよく知られている。多くは巨石が環状に並べられていて、かつてグレート・ブリテン島に暮らしていた人たちの跡だとされている。

*2 グラストンベリー・フェスティバルは、グラストンベリーではなくピルトン村のイベントだが、グラストンベリーとも関係するため記載した。

*3 小麦、大麦、とうもろこし、菜の花などの畑に、6~8 月に出現する幾何学模様で、ウィルトシャー州によく現われる。出現が始まった 1990 年代当初のものは円形だったが、近年では円形以外のものも出現している。宇宙人が創ったと話題になったが、今では人が創ったと考えられている。しかし、宇宙人から啓示を受けてミステリー・サークルを創っていると主張する人も現われてきている。

表2-5 中心部の店や施設の種類一覧

()内の数字は2軒以上あった店や施設の数

スピリチュアリティ産業の店や施設(73)		公共施設(6)		飲食店(21)	
グッズ(オルタナティブ・スピリチュアリティ一般) (7)		町役場兼公民館		一般のカフェ(5)	
グッズ(ネオペイガン) (7)		図書館と市民助言局		軽食(1)	
グッズ(パワーストーン) (5)		酒と麻薬の相談センター		テイクアウト(4) (カレー、ケバブ、中華2)	
グッズ(アジア) (4)		雇用促進等の事務所		レストラン(4) (フィッシュアンドチップス、伊、印2)	
グッズ(アフリカ)		郵便局		パブ(7)	
グッズ(飾り)		排水局		チャリティ(6)	
グッズ(カワイイ)		医療関係(6)		チャリティ、中古品(4)	
スピリチュアリティ系出版社		診療所		チャリティの事務所(2)	
スピリチュアリティ系書店(4)		歯医者		宿泊施設(4)	
家具(インド)		眼科医		乗り物関係(2)	
洋服(10)		薬局(2)		自転車屋	
カバン		介護		自動車修理	
ベジタリアンカフェ(6)		銀行(4)		民間施設(4)	
自然食品		弁護士事務所(2)		保守党クラブ(パブ、集会所)	
エコ用品		教会(4)		フリーメーソン・ホール	
フェアトレード		食料品(7)		アセンブリー・ルーム(集会所)	
チョコレート		八百屋(2)		観光案内所兼博物館	
セラピーセンター(4)		肉屋		不動産屋(4)	
美容サロン		パン屋		美容院、床屋(12)	
足のケア		デリカテッセン(2)		花屋(2)	
カイロプラクティス		スーパー		一般の雑貨、グッズ(3)	
画廊(3)		文具(1)		おもちゃ	
ビーズ		ニュースエージェント(3)		ぬいぐるみ	
チャリティ		一般衣料品(2)		お風呂雑貨	
麻製品・麻薬吸引器(2)		洋服		その他(8)	
タトゥー		靴		保険代理店	
瞑想センター		日用品(10)		旅行代理店	
女神神殿		金物		クリーニング	
アヴァロン島協会		カーテン		水道工事	
アヴァロン図書館		カーペット		設計事務所	
巡礼者受付センター		家具(2)		賭け屋	
芸術関係(8)		家具製作		DVD	
アートセンター		1ポンドショップ		印刷	
音楽(2)		PC用品		空き室(4)	
画廊		ペット(2)			
時計、宝石(3)					
アンティーク					

表2-6 ネオペイガン・グッズ一覧 (2013.6.27-29調べ) ※括弧内の数字のうち、助数詞のないものは、その商品の種類数を示している

種類	素材	その他特記事項	値段	自社製、ブランド名
祭壇用具	木製	画像、大きさ、木の種類、その他		
祭壇用盤	木製	ラピリス	£15.60	自社製
祭壇用盤	木製	ラピリス	£21.60	自社製
祭壇用盤	木製	ラピリス	£34.80	自社製
祭壇用盤	木製	ラピリス	£38.40	自社製
祭壇用盤	木製	スパイラル	£14.40	自社製
祭壇用盤	木製	スパイラル	£24.00	自社製
祭壇用盤	木製	トリブル・スパイラル	£28.80	自社製
祭壇用盤	木製	トリブル・スパイラル	£30.00	自社製
祭壇用盤	木製	トリブル・ムーン	£32.40	自社製
祭壇用盤	木製	トリブル・ムーン	£33.60	自社製
祭壇用盤	木製	三角形	£39.60	自社製
祭壇用盤	木製	三角形	£50.40	自社製
祭壇用盤	木製	六芒星	£14.40	自社製
祭壇用盤	木製	3つの交差する三日月	£28.80	自社製
祭壇用盤	木製	3つの交差する三日月(色つき)(2)	£33.60	自社製
祭壇用盤	木製	3つの交差する弧(triquatre)	£26.40	自社製
祭壇用盤	木製	3つの交差する弧(triquatre)	£28.80	自社製
祭壇用盤	木製	ケルトの紐模様	£31.20	自社製
祭壇用盤	木製	ウイレンドーフ(オーストリア)のヴァーナス	£16.80	自社製
祭壇用盤	木製	ウイレンドーフ(オーストリア)のヴァーナス	£24.00	自社製
祭壇用盤	木製	女神	£16.80	自社製
祭壇用盤	木製	有角像	£36.00	自社製
祭壇用盤	木製	アイビー	£12.00	自社製
祭壇用盤	木製	オークの葉とドングリ	£12.00	自社製
祭壇用盤	木製	杖とほうき	£28.80	自社製
祭壇用盤	銅	トリブル・ムーン	£24.00	自社製
祭壇用盤	銅	五芒星とトリブル・ムーン	£45.00	自社製
祭壇用布	銅	女神(3)	£24.00	自社製
祭壇用布	ビロード	大(30インチ×60インチ)	£114.00	自社製(特注)
祭壇用布	ビロード	中(24インチ×48インチ)	£68.40	自社製(特注)
祭壇用布	ビロード	中(24インチ×36インチ)	£58.80	自社製(特注)
祭壇用布	ビロード	小(18インチ×12インチ)	£34.80	自社製(特注)
祭壇用旗	ビロード	小(12インチ×12インチ)	£26.40	自社製(特注)
祭壇用旗	ビロード	屋外用(11インチ×17インチ)	£94.80	自社製(特注)
祭壇用台	クロム	五芒星(6インチ)	£16.80	
祭壇用台	クロム	五芒星(9インチ)	£28.80	
祭壇用台	合金	五芒星(3インチ)	£15.00	
祭壇用台	陶磁器	五芒星	£38.40	
祭壇用台	陶磁器	生箭樹	£38.40	
祭壇用台	木製	五芒星、オーク製	£24.00	
祭壇用台	木製	五芒星、オーク製	£26.40	
祭壇用台	木製	五芒星、オーク製	£28.80	
祭壇用台	木製	五芒星、オーク製	£31.20	
祭壇用台	木製	五芒星、オーク製、青と白一風	£28.80	
祭壇用台	木製	五芒星、オーク製、深緑一地	£24.00	
祭壇用台	木製	五芒星、オーク製、樟と黄一火	£24.00	
祭壇用台	木製	五芒星、オーク製、不透明な青一水	£24.00	
祭壇用台	木製	五芒星、オーク製、青と白一スピリット	£24.00	
祭壇用台	木製	五芒星、オーク製、紐模様	£26.40	

種類	素材	その他特記事項	値段	自社製、ブランド名
祭壇用台	木製	五芒星、オーク製、三重線	£28.80	
祭壇用台	木製	五芒星、オーク製、5色	£36.00	
祭壇用台	木製	五芒星、オーク製、アレクサンダー風	£46.80	
祭壇用台	木製	五芒星、オーク製、ガードナー風	£46.80	
祭壇用台	木製	五芒星、オーク製、オークの葉とどんぐり	£57.60	
祭壇用台	木製	五芒星、プナ製	£26.40	
祭壇用台	木製	五芒星、プナ製、エボナ女神のシンボル	£57.60	
祭壇用台	木製	五芒星、セイウイチイ製	£19.20	
祭壇用台	木製	五芒星、セイウイチイ製	£26.40	
祭壇用台	木製	五芒星、セイウイチイ製	£32.40	
祭壇用台	木製	五芒星、ケルトの年の輪	£50.40	
祭壇用の机	木製		£300.00	特注(友人が製作)
祭壇用の机	木製	鉄製の枠	£180.00	特注
呼び鈴	真鍮	五芒星	£10.80	
瞑想用の石	石製	無地	£24.00	
瞑想用の石	石製	野ウサギ	£24.00	
瞑想用の石	石製	トリブル・スパイラル	£24.00	
刀剣類		柄頭の画像と素材、刃渡りの長さ、刃の形、用途、木の種類		
短剣(athema)	銀		£540.00	
短剣	金属	柄頭にスパイラル(14インチ)	£102.00	
短剣	金属	柄頭に角(14インチ)	£102.00	
短剣	青銅	柄は雌鹿の角	£168.00	
短剣	青銅		£210.00	
短剣	真鍮	五芒星(3インチ)	£15.00	
短剣	真鍮	五芒星(6インチ)	£16.80	
短剣	真鍮	五芒星(9インチ)	£28.80	
短剣	鉛	五芒星	£11.40	
短剣	鋼	曲線	£198.00	
短剣	鋼	直線	£198.00	
短剣	鋼	柄は銀	£540.00	
短剣	鋼	曲線、柄は木製	£145.20	
短剣	鋼	直線、柄は木製	£145.20	
短剣	鋼	曲線、黒刃、柄は木製	£145.20	
短剣	鋼	直線、黒刃	£157.20	
短剣	鋼	女神の形、柄は合金	£66.00	
短剣	鋼	柄はオーク	£96.00	
刀(blade)	金属	柄頭に子羊	£204.00	
刀	金属	柄頭にスパイラル	£204.00	
刀	金属	柄頭に蛇と水晶(28インチ)	£276.00	
刀	金属	刃が曲線(28インチ)	£318.00	
刀	金属	柄頭に雄鹿の角(48インチ)	£438.00	
刀	鋼	7-8インチ	£90.00	
刀	鋼	7インチ	£16.80	
刀	ステンレス	7インチ	£26.40	
刀	ステンレス	7インチ	£30.00	
石板とケース	木製	オークの柄、5インチ	£102.00	
石板とケース	木製	ツゲの柄、5インチ	£102.00	
石板とケース	木製	サンザシの柄、6インチ	£102.00	
石板とケース	木製	ハンパミの柄、10インチ	£102.00	

蜘蛛の巣	グラス	グラス	£43.20	Elfineware社製
三日月	グラス	グラス	£43.20	Elfineware社製
五芒星(2)	グラス	グラス	£43.20	Elfineware社製
アイビーとヴェスカ・パイプス	グラス	グラス	£21.60	Elfineware社製
ボウル	木製	木製	£96.60	
ボウル	木製	木製	£48.80	特注
ボウル	木製	木製	£38.40	
ボウル	陶器	陶器	£72.00	
ボウル	瑠璃	瑠璃	£44.40	
ボウル	青瑠璃	青瑠璃	£68.40	
ボウル	グラス	グラス	£18.00	
ボウル	3インチ	3インチ	£34.80	
ボウル	2インチ	2インチ	£72.00	
ボウル	石英	石英	£108.00	
ボウル	3インチ	3インチ	£14.40	
ボウル	龍	龍	£14.40	
ボウル	十二宮	十二宮	£14.40	
皿	木製	木製	£28.80	
皿	スパイラル	スパイラル	£28.80	
皿	女神	女神	£15.60	
皿	五芒星	五芒星	£17.40	
誓願用皿	グラス	グラス	£60.00	
誓願用インセンス皿	陶器	陶器	£48.00	
誓願用インセンス皿	陶器	陶器	£48.00	

木の種類、サイズ、画像				
小杖	木製	木製	£28.80	
小杖(wand)	木製	木製	£36.00	
小杖	木製	木製	£48.00	
小杖	木製	木製	£34.80	
小杖	木製	木製	£66.00	
小杖	木製	木製	£28.80	
小杖	木製	木製	£43.20	
小杖	木製	木製	£60.00	
小杖	木製	木製	£28.80	
小杖	木製	木製	£45.60	
小杖	木製	木製	£36.00	
小杖	木製	木製	£28.80	
小杖	木製	木製	£36.00	
小杖	木製	木製	£36.00	
小杖	木製	木製	£28.80	
小杖	木製	木製	£28.80	
小杖	木製	木製	£46.80	
小杖	木製	木製	£36.00	
小杖	木製	木製	£43.20	
小杖	木製	木製	£48.00	
小杖	木製	木製	£36.00	
小杖	木製	木製	£28.80	
小杖	木製	木製	£28.80	
小杖	木製	木製	£36.00	
小杖	木製	木製	£33.60	
小杖	木製	木製	£36.00	
小杖	木製	木製	£28.80	
小杖	木製	木製	£43.20	
小杖	木製	木製	£28.80	
小杖	木製	木製	£28.80	
小杖	木製	木製	£32.40	
小杖	木製	木製	£34.80	

石板とケース	木製	楓の柄、5インチ	£102.00	
石板とケース	木製	オークの柄、4.5インチ	£102.00	
石板とケース	木製	ニシキギの柄	£102.00	
石板とケース	木製	セイヨウイチイの柄	£102.00	
短剣の刃ノ骨の槍	骨	雄鹿の柄	£114.00	
鞘	皮製	ケルトの紐模様	£19.80	
鞘	青銅	ケルト風	£33.60	
鍔	青銅	曲線	£16.80	
鍔	青銅	直線	£16.80	
鍔	青銅	平ら	£16.80	
鍔	ニッケル	ケルト風	£20.40	
鍔	ニッケル	曲線	£20.40	
鍔	ニッケル	直線	£20.40	
柄頭	真鍮	五芒星	£16.80	
柄頭	真鍮	平らな五芒星	£19.20	
柄頭	ニッケル	平らな五芒星	£19.20	
柄頭	青銅	グリーンマン	£19.20	
柄頭	ニッケル	グリーンマン	£22.80	
柄頭	銀	グリーンマン	£54.00	
調度品	銀		£30.00	
鎌	銀		£498.00	
鎌	青銅	柄頭に鹿の角	£132.00	
鎌	青銅		£162.00	
鎌	木製	セイヨウイチイ製	£168.00	
斧	木製	オークの柄、4インチ	£126.00	
作業用ナイフ	木製	柄頭に鹿の角(8インチ)	£294.00	
作業用ナイフ	ステンレス	ハープ用、木工用	£106.80	
作業用ナイフ	鋼	木工用、木工用、儀式用	£106.80	
作業用ナイフ	鋼	木工用、飾り(2.5インチ)	£174.00	
作業用ナイフ	鋼	木工用、飾り(4.5インチ)	£234.00	
食事用ナイフ	鋼		£28.80	

杯、ボウル、皿、台		画像、サイズ		
聖杯(graill)	木製		£54.00	
杯(chalice)	木製		£34.80	
杯	木製	女神	£38.40	
杯	木製	トリプル・ムーン(2)	£38.40	
杯	木製		£45.60	
杯	木製		£46.80	
杯	木製	(2)	£66.00	
杯	木製	ワッセル用	£78.00	
杯	木製	月と五芒星	£48.00	
杯	ガラス	ケルトの紐模様	£29.99	
杯	ガラス	五芒星	£56.40	Elfineware社製
杯	ガラス	トリプル・ムーン	£56.40	Elfineware社製
杯	真鍮	五芒星	£21.00	特注
杯	銀	妖精の七芒星	£23.40	
杯	銀	トリプル・ムーン	£23.40	
杯(goblet)	木製	(3)	£32.40	
杯	木製		£42.00	

小杖	木製	ブラックソーン製	£28.80	
小杖	木製	ブラックソーン製	£36.00	
小杖	木製	マツ製、水晶つき	£60.00	
小杖	木製	ヤナギ製	£28.80	
小杖	木製	ヤナギ製	£36.00	
小杖	木製	ヤナギ製、水晶つき	£43.20	
小杖	木製	ヤナギ製、水晶つき	£57.60	
小杖	木製	リンゴ製	£28.80	
小杖	石製	特大	£540.00	
小杖	石製	大	£96.00	
小杖	石製	小	£66.00	
水晶つき小杖		4.75インチ	£94.80	
水晶つき小杖		6.25インチ	£126.00	
水晶つき小杖		6.25インチ	£210.00	
水晶つき小杖		6.5インチ	£198.00	
水晶つき小杖		7インチ	£114.00	
水晶つき小杖		7インチ	£226.80	
水晶つき小杖		7インチ	£300.00	
水晶つき小杖		8インチ	£154.80	
水晶つき小杖		8インチ	£174.00	
水晶つき小杖		8インチ	£264.00	
水晶つき小杖		17インチ	£954.00	
水晶つき小杖	木製	バラの木製	£16.80	
水晶つき小杖	木製	バラの木製	£57.59	
水晶つき小杖	木製	バラの木製	£106.80	
水晶つき小杖		瑠璃と石英つき	£82.80	
水晶つき小杖		黄方解石と瑠璃つき	£106.80	
小杖入れ	ビロード		£7.14	
小杖の上の飾り		パン神とその配偶者	£834.00	
小杖の上の飾り		顔	£48.00	特注
歩行用の杖	皮製		£19.20	

ロウソク	蜜蝋	「海のスピリット(Mor)」	£6.30	自社製
ロウソク	蜜蝋	「アイビーのスピリット(Goat)」	£6.30	自社製
ロウソク	蜜蝋	「エニシダのスピリット(Nigetal)」	£6.30	自社製
ロウソク	蜜蝋	「オークのスピリット(Duir)」	£6.30	自社製
ロウソク	蜜蝋	「木立のスピリット(Kord)」	£6.30	自社製
ロウソク	蜜蝋	「サンザシのスピリット(Huath)」	£6.30	自社製
ロウソク	蜜蝋	「セイウチイチョウのスピリット(Toho)」	£6.30	自社製
ロウソク	蜜蝋	「スイカズラのスピリット(Uilleand)」	£6.30	自社製
ロウソク	蜜蝋	「蔓のスピリット(Muin)」	£6.30	自社製
ロウソク	蜜蝋	「トネリコのスピリット(Nuin)」	£6.30	自社製
ロウソク	蜜蝋	「ナナカマドのスピリット(Luis)」	£6.30	自社製
ロウソク	蜜蝋	「ニシキギのスピリット(Oir)」	£6.30	自社製
ロウソク	蜜蝋	「ニフトコのスピリット(Ruis)」	£6.30	自社製
ロウソク	蜜蝋	「ハシハミのスピリット(Coll)」	£6.30	自社製
ロウソク	蜜蝋	「ハリエニシダのスピリット(Omn)」	£6.30	自社製
ロウソク	蜜蝋	「ハンノキのスピリット(Fearn)」	£6.30	自社製
ロウソク	蜜蝋	「ヒイラギのスピリット(Tinne)」	£6.30	自社製
ロウソク	蜜蝋	「フナノスピリット(Phagos)」	£6.30	自社製
ロウソク	蜜蝋	「ブラックソーン」のスピリット(Straif)」	£6.30	自社製
ロウソク	蜜蝋	「ヘザー」のスピリット(Ur)」	£6.30	自社製
ロウソク	蜜蝋	「ポプラのスピリット(Eadha)」	£6.30	自社製
ロウソク	蜜蝋	「マツのスピリット(Ailim)」	£6.30	自社製
ロウソク	蜜蝋	「ヤナギのスピリット(Saille)」	£6.30	自社製
ロウソク	蜜蝋	「リンゴのスピリット(Quert)」	£6.30	自社製
ロウソク	蜜蝋	「カハラの祭壇」	£6.30	自社製
ロウソク	蜜蝋	「春の祭壇」	£6.30	自社製
ロウソク	蜜蝋	「春分の祭壇」	£6.30	自社製
ロウソク	蜜蝋	「ベルテーンの祭壇」	£6.30	自社製
ロウソク	蜜蝋	「夏至の祭壇」	£6.30	自社製
ロウソク	蜜蝋	「ルナサの祭壇」	£6.30	自社製
ロウソク	蜜蝋	「秋の祭壇」	£6.30	自社製
ロウソク	蜜蝋	「ソールウィンの祭壇」	£6.30	自社製
ロウソク	蜜蝋	「冬至の祭壇」	£6.30	自社製
ロウソク	蜜蝋	「預言者の才能」	£6.30	自社製
ロウソク	蜜蝋	「シヤーマンの鼓動」	£6.30	自社製
ロウソク	蜜蝋	「白いバツファローの女性」	£6.30	自社製
ロウソク	蜜蝋	「ハンドファスティング用愛のスパイラル」	£6.30	自社製
ロウソク	蜜蝋	「愛を引き寄せる」	£6.30	自社製
ロウソク	蜜蝋	「オアシスの召喚」	£6.30	自社製
ロウソク	蜜蝋	「ホルスの召喚」	£6.30	自社製
ロウソク	蜜蝋	「セトの召喚」	£6.30	自社製
ロウソク	蜜蝋	「セクメトの召喚」	£6.30	自社製
ロウソク	蜜蝋	「トトの召喚」	£6.30	自社製
ロウソク	蜜蝋	「女神の召喚」	£6.30	自社製
ロウソク	蜜蝋	「ディーヴァのスピリットの召喚」	£6.30	自社製
ロウソク	蜜蝋	「ヘカテの召喚」	£6.30	自社製
ロウソク	蜜蝋	「ケリドゥインの召喚」	£6.30	自社製
ロウソク	蜜蝋	「ドルイドの召喚」	£6.30	自社製
ロウソク	蜜蝋	「ガーティアンの召喚」	£6.30	自社製
ロウソク	蜜蝋	「オーク王の召喚」	£6.30	自社製
ロウソク	蜜蝋	「ヒイラギ王の召喚」	£6.30	自社製
ロウソク	蜜蝋	「ハーーン」	£6.30	自社製

ロウソク	バラファイン	長さ、色、「」内はロウソクのテーマ名	£3.60	自社製
ロウソク	バラファイン	8インチ、2本(儀式用、長い)	£3.00	自社製
ロウソク	バラファイン	12インチ、2本(儀式用、長い)	£5.70	自社製
ロウソク	バラファイン	4インチ(祭壇用、太い)	£9.54	自社製
ロウソク	バラファイン	7インチ(祭壇用、太い)	£5.70	自社製
ロウソク	蜜蝋	(祭壇用、長い)	£5.34	自社製
ロウソク	蜜蝋	黒と白、各2本セット(祭壇用)	£9.90	自社製
ロウソク	蜜蝋	黒と白、各4本セット(祭壇用)	£9.00	自社製
ロウソク	蜜蝋	7色	£3.90	自社製
ロウソク	蜜蝋	赤、黒、白(月の魔法用)	£7.80	自社製
ロウソク	蜜蝋	8本セット	£7.20	自社製
ロウソク	蜜蝋	4本セット、大	£5.34	自社製
ロウソク	蜜蝋	赤、黄、青、緑が各1本セット	£9.90	自社製
ロウソク	蜜蝋	赤、黄、青、緑が各2本セット	£5.34	自社製
ロウソク	蜜蝋	4本セット(呪文用)	£4.74	自社製
ロウソク	蜜蝋	2本セット、大(呪文用)	£6.30	自社製
ロウソク	蜜蝋	「満月の祭壇」	£6.30	自社製
ロウソク	蜜蝋	「暗月の祭壇」	£6.30	自社製
ロウソク	蜜蝋	「アイビーの祭壇」	£6.30	自社製
ロウソク	蜜蝋	「エジプトの祭壇」	£6.30	自社製
ロウソク	蜜蝋	「アズバスへの祈願」	£6.30	自社製
ロウソク	蜜蝋	「バストへの祈願」	£6.30	自社製

壁用の飾り板	木製	Goddess Bless	£19.20
壁用の飾り板	木製	Hail and Welcome	£26.40
壁用の飾り板	木製	Labyrinth	£31.20
壁用の飾り板	木製	Love and Light	£19.20
壁用の飾り板	木製	Love Is the Law	£26.40
壁用の飾り板	木製	Merry Meet	£26.40
壁用の飾り板	木製	Merry Meet, Merry Part ...	£30.00
壁用の飾り板	木製	So Mote It Be	£26.40

像、人形	陶磁器	画像	
像	陶磁器	バホメット	£150.00
像	陶磁器	ケリドゥイン	£144.00
像	陶磁器	大地の母	£144.00
像	樹脂	大地の母	£50.40
像	樹脂	大地の母	£38.40
像	樹脂	男神と女神	£113.90
像	陶磁器	男神と女神	£180.00
像	陶磁器	ヘカテ	£150.00
像	陶磁器	パン(3)	£156.00
像	陶磁器	ハーントケリドゥイン	£144.00
像	陶磁器	ハーン	£108.00
像	樹脂	有角神	£100.20
像	陶磁器	イニス	£150.00
像	陶磁器	処女、母、老女(2)	£144.00
像	陶磁器	月の女神	£144.00
像	木製	ガーティアン	£54.13
像	木製	モリガン	£50.40
像	木製	オーク王	£9.19
像	木製	年の輪	£7.20
像		セクシーな魔女ーほうぎに乗る	£21.60
像		セクシーな魔女ー愛の媚薬をつくる	£32.40
像		セクシーな魔女ーほうぎに乗る	£34.80
像		セクシーな魔女ー立っている	£34.80
像		セクシーな魔女ー呪文をかける	£52.80
女神像	布	チャクラ色の女神	£24.00
女神像	布	ソーウインの女神	£26.40
女神像	布	さそりの女神	£13.20
女神像	布	ユメヤ像	£57.60
人形		妖精	£222.00
人形		闇の女司祭	£198.00
人形		ほうぎに乗った魔女	£198.00
人形		紫の女司祭	£198.00
人形		はぎれの魔女	£198.00
人形		海の女司祭	£198.00
人形		魔女の緋色	£198.00
人形		魔女の格好のねずみ	£7.20

各種置物		大きさ、画像、その他	
各種木工製品			£48.60
ヤマアラシの針	針	2インチ5本組	£3.24
ヤマアラシの針	針	3-4インチ2本組	£3.00
ヤマアラシの針	針	5-7インチ	£3.12
ヤマアラシの針	針	8インチ以上	£3.42

猫の頭蓋骨	骨			£50.40
ジャッカルの頭蓋骨	骨			£54.00
馬の頭蓋骨	骨	漂白済み		£300.00
馬の頭蓋骨	骨	天然		£402.00
豚の頭蓋骨	骨			£28.80
亀の甲羅	甲羅			£42.00
馬の尻尾	尾			£45.60
烏の羽根	羽			£51.00
置物	黒ガラス	頭蓋骨		£90.00
置物	フルオライト	頭蓋骨		£24.00
置物	緑のガラス	頭蓋骨		£42.00
置物	石英	頭蓋骨		£56.40
置物	バラ石英	頭蓋骨		£50.40
置物	金属	五芒星		£72.00
置物	銀	五芒星、第一級		£21.60
置物	銀	五芒星、第二級		£20.40
置物	銀	五芒星、第三級		£21.60
置物		龍の角		£234.00
置物	石	メンヒル		£180.00

箱		デザイン、大きさ		
箱	木製	ゴシック風の五芒星		£28.80 特注
箱	木製	魔術書風(2)		£29.99
箱	木製	葉、6インチ×4インチ		£9.60
箱	木製	葉、8インチ×5インチ		£12.00
箱		五芒星		£17.99
箱		グリーンマン		£26.39
小箱	銀	小		£9.60
小箱	銀	中		£13.20
小箱	木製	フロウ		£9.59
小箱	木製	雪のフロウ		£9.59
小箱	木製	龍		£9.59
小箱	木製	黒ウサギ		£13.19
儀式用道具の収納箱	木製			£150.00 特注
儀式用道具の収納箱	木製			£160.20 特注
儀式用道具の収納箱	木製			£204.00
儀式用道具の収納箱	木製			£210.00 特注
儀式用道具の収納箱	木製			£214.20 特注
蝶番のついた箱	木製	5インチ		£42.00
蝶番のついた箱	木製	6インチ		£40.80
蝶番のついた箱	木製	6インチ		£40.80
蝶番のついた箱	木製	7インチ		£58.80
蝶番のついた箱	木製	7インチ		£62.40
蝶番のついた箱	木製	8インチ		£70.80
蝶番のついた箱	木製	9インチ		£82.80
錠剤箱	木製			£9.60
錠剤箱	木製			£12.00
錠剤箱	木製			£14.40
錠剤箱	木製			£18.00
錠剤箱	木製			£22.80
ふたつき箱	木製	6インチ		£33.60
宝石箱	木製	影の書の上に乗った魔女		£23.99
引き出しつき箱	木製			£102.00

ミニドレス	黒と白、黒と暗赤	£77.99	黒と白、黒と暗赤	£77.99	ガウン	エリザベス朝	£210.00
ミニドレス	黒・黒と暗赤・黒とライラック	£65.99	黒・黒と暗赤・黒とライラック	£65.99	ガウン	初期中世風	£144.00
ミニドレス	黒・黒と赤・黒とライラック	£83.99	黒・黒と赤・黒とライラック	£83.99	ブラウス	中世風	£80.40
ミニドレス	黒・黒と赤	£59.99	黒・黒と赤	£59.99	ブラウス	中世風	£78.00
ミニドレス	黒・黒と赤	£65.99	黒・黒と赤	£65.99	短い上着	キャメロット風	£120.00
ブーツ	ゴシック、黒	£46.80	ゴシック、黒	£46.80	コルセット	ピンストライプ、黒と暗赤	£47.99
男性用シャツ	ゴシック、フリル、海賊風、黒・白・天然	£29.99	ゴシック、フリル、海賊風、黒・白・天然	£29.99	コルセット	ジャガー模様、黒・黒と暗赤	£47.99
男性用シャツ	ゴシック、Dリング、黒・白	£35.99	ゴシック、Dリング、黒・白	£35.99	スカート	Laughing Vampire社製、ゴシック&魔女スタイル、12種類	£81.60
男性用シャツ	ゴシック、フリル、黒	£41.40	ゴシック、フリル、黒	£41.40	スカート	黒	£29.99
男性用シャツ	ゴシック、フリル、白	£41.99	ゴシック、フリル、白	£41.99	スカート	黒と赤	£33.00
男性用シャツ	ゴシック、黒・白	£35.99	ゴシック、黒・白	£35.99	スカート	黒・黒と白・黒と暗赤・黒とライラック	£39.59
男性用シャツ	ゴシック、中世風、黒・白	£39.59	ゴシック、中世風、黒・白	£39.59	スカート	黒・黒と暗赤	£45.59
男性用シャツ	中世風、黒・白・天然	£35.99	中世風、黒・白・天然	£35.99	スカート	タータン	£47.99
男性用シャツ	ゴシック、中世風、黒・白・天然	£33.59	ゴシック、中世風、黒・白・天然	£33.59	スカート	タータンミニ	£23.99
トップス	Laughing Vampire社製、ゴシック&魔女スタイル、15種類		Laughing Vampire社製、ゴシック&魔女スタイル、15種類		スカート	タータン、蜘蛛の巣模様	£23.99
トップス	長袖	£93.60	長袖	£93.60	スカート	ミニ	£180.00
トップス	袖なし	£69.60	袖なし	£69.60	スカート	ロング	£66.00
トップス	黒・黒と紫・黒と暗赤、五芒星	£33.59	黒・黒と紫・黒と暗赤、五芒星	£33.59	レグウェア	網目織り	£11.94
トップス	黒・暗赤・緑、ピクシー風	£47.99	黒・暗赤・緑、ピクシー風	£47.99	レグウェア	網目織り(5)	£5.94
トップス	黒・黒と暗赤	£47.99	黒・黒と暗赤	£47.99	ベルト	皮製	£33.60
トップス	黒・黒と暗赤	£41.99	黒・黒と暗赤	£41.99	バッグ		£17.99
トップス	黒・黒と暗赤・黒とライラック	£53.99	黒・黒と暗赤・黒とライラック	£53.99	バッグ	(4)	£17.99
トップス		£162.00		£162.00	バッグ	皮	£21.59
王冠		£2,400.00		£2,400.00	肩掛けカバン	茶色、葉	£58.80
ティアラ		£156.00		£156.00	肩掛けカバン	緑、葉	£58.80
外套とドレス		£349.00		£349.00	肩掛けカバン	緑、果物	£58.80
外套	黒(2)	£162.00	黒(2)	£162.00	肩掛けカバン	皮	£58.80
外套		£180.00		£180.00	肩掛けカバン	皮	£58.80
外套		£190.80		£190.80	肩掛けカバン	皮	£58.80
外套	黒	£226.80	黒	£226.80	肩掛けカバン	皮	£51.60
外套		£162.00		£162.00			
長い外套		£18.00		£18.00			
外套につけるアップリケ	ケルト風の模様(2)	£30.00	ケルト風の模様(2)	£30.00			
外套につけるアップリケ	ケルト風の模様	£26.40	ケルト風の模様	£26.40			
クロークピン		£22.20		£22.20			
外套の留め金	輪	£22.20	輪	£22.20			
外套の留め金	蹄鉄	£22.20	蹄鉄	£22.20			
外套の留め金	スバイラル	£162.00	スバイラル	£162.00			
フードつきケープ		£162.00		£162.00			
フードつきケープ		£162.00		£162.00			
フードつきケープ		£180.00		£180.00			
フードつきケープ		£186.00		£186.00			
フードつきケープ		£206.40		£206.40			
ローブ	黒	£99.00	黒	£99.00			
ローブ	チャクラ色	£99.00	チャクラ色	£99.00			
ローブ	黒・白・茶・金・灰・栗・橙・赤・紫・紫味青・オフホワイト・クリーム・濃い青・明るい青・ライラック・オリーブ・トルコ石・エメラルド	£99.00	黒・白・茶・金・灰・栗・橙・赤・紫・紫味青・オフホワイト・クリーム・濃い青・明るい青・ライラック・オリーブ・トルコ石・エメラルド	£99.00			
フードつきローブ	白と天然・黒	£117.00	白と天然・黒	£117.00			
フードつきローブ	黒・白・茶・金・灰・栗・橙・赤・紫・紫味青・オフホワイト・クリーム・濃い青・明るい青・ライラック・オリーブ・トルコ石	£117.00	黒・白・茶・金・灰・栗・橙・赤・紫・紫味青・オフホワイト・クリーム・濃い青・明るい青・ライラック・オリーブ・トルコ石	£117.00			

アークセサリー、お守り			画像、色、長さ、「」内はテーマ名	
ペンダント	金	£128.40	五芒星	£128.40
ペンダント	金	£150.00	アンク(エジプト十字架)	£150.00
ペンダント	金	£150.00	小さいオーム(aum、庵)	£150.00
ペンダント	金	£180.00	五芒星	£180.00
ペンダント	金	£180.00	生命樹	£180.00
ペンダント	金	£225.60	五芒星、宝石つき	£225.60
ペンダント	金	£234.00	オーム	£234.00
ペンダント	合金	£15.00	クリーンマン(2)	£15.00
ペンダント	合金	£15.00	野ウサギ	£15.00
ペンダント	合金	£15.00	月の女神	£15.00
ペンダント	合金	£15.00	フクロウ	£15.00
ペンダント	合金	£15.00	ワタリガラス	£15.00
ペンダント	合金	£15.59	五芒星	£15.59
ペンダント	銀	£18.00	五芒星(2)	£18.00
ペンダント	銀	£21.60	五芒星	£21.60
ペンダント	銀	£37.20	五芒星	£37.20
ペンダント	銀	£43.20	五芒星	£43.20
ペンダント	銀	£50.40	五芒星	£50.40
ペンダント	銀	£52.80	五芒星	£52.80
ペンダント	銀	£67.20	五芒星(2)	£67.20
ペンダント	銀	£130.80	五芒星	£130.80
ペンダント	銀	£174.00	五芒星(2)	£174.00
ペンダント	銀	£18.00	2つの五芒星	£18.00

ペンダント	銀	五芒星、寶石つき	£44.40	ペンダント	銀	ファンタジーの龍	£67.20
ペンダント	銀	五芒星、寶石つき	£91.20	ペンダント	銀	海の龍	£67.20
ペンダント	銀	五芒星と陰陽のシンボル	£91.20	ペンダント	銀	火の龍	£79.20
ペンダント	銀	五芒星と陰陽のシンボル、宝石つき	£91.20	ペンダント	銀	まどろむ龍	£110.40
ペンダント	銀	五芒星と3つの交差する弧(triquetra)	£21.60	ペンダント	銀	陰陽の龍	£138.00
ペンダント	銀	五芒星と三日月	£21.60	ペンダント	銀	ペンギン	£38.40
ペンダント	銀	五芒星とケルトの月	£43.20	ペンダント	銀	ペンギン	£40.80
ペンダント	銀	五芒星とケルトの月	£57.60	ペンダント	銀	飛ぶ鳥	£48.00
ペンダント	銀	五芒星と月、宝石つき	£67.20	ペンダント	銀	飛ぶ鳥、円筒状	£40.80
ペンダント	銀	五芒星と月、宝石つき	£79.20	ペンダント	銀	オオカミ	£67.20
ペンダント	銀	五芒星と五色の円	£150.00	ペンダント	銀	鳥	£40.80
ペンダント	銀	五芒星とターペ文字、縞瑪瑙つき	£79.20	ペンダント	銀	鹿の角(2)	£16.80
ペンダント	銀	五芒星と葉	£160.80	ペンダント	銀	オロボルスの蛇	£29.40
ペンダント	銀	五芒星と花	£21.60	ペンダント	銀	アイビー	£144.00
ペンダント	銀	五芒星とぶどうの蔓	£26.40	ペンダント	銀	マントレイク	£23.99
ペンダント	銀	五芒星と紐模様	£42.00	ペンダント	銀	ヒールリング	£22.80
ペンダント	銀	五芒星と紐模様	£67.20	ペンダント	銀	シマルタ(イタリアのお守り)、小	£288.00
ペンダント	銀	五芒星とケルトの渦巻きと紐模様	£67.20	ペンダント	銀	シマルタ(イタリアのお守り)、大	£396.00
ペンダント	銀	五芒星と雄鹿	£50.40	ペンダント	銀	バスト	£18.00
ペンダント	銀	五芒星と蛇	£67.20	ペンダント	銀	ホルスの目	£13.20
ペンダント	銀	五芒星とトビトカゲ	£32.40	ペンダント	銀	イシス	£22.80
ペンダント	銀	五芒星とローブ模様	£18.00	ペンダント	銀	マート	£25.20
ペンダント	銀	五芒星とワタリガラス	£57.60	ペンダント	銀	セクメト	£22.80
ペンダント	銀	五芒星とワタリガラス	£67.20	ペンダント	銀	スフィンクス	£26.40
ペンダント	銀	五芒星とケルトのワタリガラス	£79.20	ペンダント	銀	セルヌノス	£33.00
ペンダント	銀	五芒星と子羊	£32.40	ペンダント	銀	アंक	£10.80
ペンダント	銀	五芒星と猫	£33.60	ペンダント	銀	アंक	£18.00
ペンダント	銀	五芒星と飛ぶフクロウ	£40.80	ペンダント	銀	オーム(aum、呪)	£13.20
ペンダント	銀	五芒星と惑星のシンボル	£23.40	ペンダント	銀	アーウエン(Awen)	£102.00
ペンダント	銀	ペイガン風の五芒星	£32.40	ペンダント	銀	アーウエン(Awen)と矢じり	£26.40
ペンダント	銀	ウイッカのカヴンの五芒星	£20.40	ペンダント	銀	矢じり	£26.40
ペンダント	銀	影の五芒星	£23.40	ペンダント	銀	斧	£50.40
ペンダント	銀	バフォメットの五芒星	£36.00	ペンダント	銀	斧、ケルト模様	£67.20
ペンダント	銀	モルダヴィア風の五芒星	£70.80	ペンダント	銀	ハイキングの斧	£40.80
ペンダント	銀	モルダヴィア風の五芒星とトリブル・ムーン	£69.60	ペンダント	銀	十二宮の斧	£69.60
ペンダント	銀	五芒星、鹿の角、第三級	£62.40	ペンダント	銀	短剣	£23.99
ペンダント	銀	五芒星、鹿の角、3つの交差する弧	£62.40	ペンダント	銀	3つの交差する弧	£21.60
ペンダント	銀	五芒星、鹿の角、3つの交差する弧	£79.20	ペンダント	銀	「愛」	£22.80
ペンダント	銀	鹿の角、3つの交差する弧	£79.20	ペンダント	銀	「繁栄」	£22.80
ペンダント	銀	七芒星	£25.20	ペンダント	銀	円かじつ	£23.99
ペンダント	銀	三日月と星	£20.40	ペンダント	銀	ルーン文字	£23.99
ペンダント	銀	半月	£438.00	ペンダント	銀	グリーンマン	£23.99
ペンダント	銀	コウモリ(3)	£43.20	ペンダント	銀	魅惑的な女性	£23.99
ペンダント	銀	龍	£177.00	ペンダント	銀	ガイア	£159.59
ペンダント	銀	2頭の龍	£30.00	ペンダント	銀	女神	£20.40
ペンダント	銀	ケルトの龍	£43.20	ペンダント	銀	女神	£26.40
ペンダント	銀	ケルトの龍	£90.00	ペンダント	銀	3人の女神	£30.00
ペンダント	銀	ケルトの龍	£114.00	ペンダント	銀	女神、3つの交差する弧	£40.80
ペンダント	銀	ケルトの龍、五芒星	£67.20	ペンダント	銀	羽の生えた女神	£79.20
ペンダント	銀	ケルトの龍、五芒星	£93.60	ペンダント	銀と木	女神	£22.80
ペンダント	銀	ケルトの龍、五芒星	£96.00	ペンダント	純銀	野ウサギ、琥珀と黒曜石つき	£180.00
ペンダント	銀	ケルトの龍、月	£67.20	ペンダント	純銀	フクロウ、琥珀と黒曜石つき	£234.00
ペンダント	銀	ケルトの龍、月	£90.00	ペンダント	純銀	ワタリガラス、琥珀と黒曜石つき	£288.00

ペンダント	純銀	女神、宝石つき	£210.00	プレスレット	琥珀	(3)	£19.20
ペンダント	純銀	五芒星	£168.00	プレスレット	琥珀、瑠璃		£19.20
ペンダント	青銅	女神	£13.20	プレスレット	琥珀、ソーダ石		£19.20
ペンダント	陶器	アンモナイト	£6.00	プレスレット	琥珀、トルコ石		£19.20
ペンダント	角	ケルトの犬	£22.80	プレスレット	琥珀、トルコ石		£21.60
ペンダント	角	ケルトの男	£22.80	プレスレット	ソーダ石、アイオライト		£20.40
ペンダント		小さな龍	£52.80	プレスレット	真珠	黒とシヤンパン色	£21.60
ペンダント	木製	ルーン文字	£4.74	プレスレット	真珠	黒と白	£19.20
ペンダント	木製	オガム文字	£4.74	プレスレット	真珠	黒とシヤンパン色	£19.20
ペンダント	木製	ケルト十字	£5.94	プレスレット	真珠、瑠璃		£16.80
ペンダント	木製	五芒星	£5.94	プレスレット	真珠、赤鉄鉱		£16.80
ペンダント	木製	ケルトの犬	£10.80	プレスレット	頭蓋骨のビーズ		£7.80
ペンダント	木製	ケルトの男	£10.80	プレスレット	木製	ナナカマド製	£7.14
ペンダント	木製	女神	£10.80	プレスレット	チャクラ色		£18.00
ネックレス	銀	羽根の生えた龍	£180.00	イヤリング	金	五芒星	£192.00
ネックレス	銀	ドリームキヤッチャー、羽つき	£22.80	イヤリング	銀	五芒星(2)	£22.80
ネックレス	銀	トルコ石のイルカ	£19.80	イヤリング	銀	月	£72.00
ネックレス	銀	碧玉の飛ぶ鳥	£33.60	イヤリング	銀	アング(エジプト十字架)	£19.20
ネックレス	銀	オパールつき	£33.60	イヤリング	銀	バスト(エジプトの女神の名前)	£19.20
ネックレス	銀	オパールつき	£24.00	イヤリング	銀	妖精	£22.80
ネックレス	銀	骨と珊瑚つき	£50.40	イヤリング	銀	角	£22.80
ネックレス	銀	砂金石とサファイヤつき	£40.80	イヤリング	銀	ヒラギ	£26.40
ネックレス	銀	アイオライトと瑠璃つき	£39.60	イヤリング	銀	オオカミ	£26.40
ネックレス	銀	青の砂金石つき	£30.00	イヤリング	銀	ワタリガラス	£96.00
ネックレス	銀	黒曜石と珊瑚つき	£42.00	イヤリング	銀	ドリームキヤッチャー(2)	£16.80
ネックレス	銀	バイキングの斧	£91.20	イヤリング	銀	ドリームキヤッチャー(2)	£19.80
ネックレス	琥珀	蜂蜜色(2)	£32.40	イヤリング	銀	ドリームキヤッチャー、小	£16.20
ネックレス	琥珀	乳白色とブランドー色(2)	£32.40	イヤリング	銀	ドリームキヤッチャー、中	£20.40
ネックレス	琥珀	多色	£32.40	イヤリング	銀	ドリームキヤッチャー、羽つき	£22.80
ネックレス	琥珀		£66.00	イヤリング	純銀	木、宝石つき	£187.20
ネックレス	琥珀		£150.00	イヤリング	琥珀		£14.40
ネックレス	琥珀、瑠璃(2)		£40.80	イヤリング	琥珀と角		£20.40
ネックレス	琥珀、黒玉		£48.00	イヤリング		ケルトの紐模様	£22.80
ネックレス	琥珀、黒玉(2)		£52.80	イヤリング		ケルトの盾	£22.80
ネックレス	琥珀、黒玉		£78.00	イヤリング		蜘蛛	£22.80
ネックレス	琥珀、黒玉		£90.00	イヤリング		三日月	£22.80
ネックレス	琥珀、黒玉		£96.00	イヤリング		三日月	£42.00
ネックレス	琥珀、黒玉		£102.00	イヤリング		羽のついたスカラベ	£25.20
ネックレス	琥珀、月長石		£42.00	イヤリング		魔女と月	£26.40
ネックレス	琥珀、黒玉、骨型ビーズ		£62.40	イヤリング		月の女神	£51.60
ネックレス	琥珀、黒玉、木		£90.00	ブローチ	銀	妖精	£28.80
ネックレス	琥珀、黒玉、木		£42.00	ブローチ	銀	走る馬	£22.80
ネックレス	琥珀、黒玉、黒琥珀		£46.80	ブローチ	銀	オオカミ	£26.40
ネックレス	石英		£50.40	指輪	純銀	野ウサギ	£151.20
ネックレス	角	ルーン文字	£19.20	指輪	銀	16インチ、ボックス	£15.00
ネックレス	木製	ナナカマド製	£13.14	指輪	銀	18インチ、ボックス	£17.40
ネックレス		ケルトの年輪を示す石	£58.80	指輪	銀	18インチ、カーブ	£21.00
プレスレット		各種ヒーリング・ストーン	£9.00	指輪	銀	16インチ、カーブ	£16.80
プレスレット	銀	頭蓋骨のビーズ	£22.80	指輪	銀	18インチ、カーブ	£24.00
プレスレット	銀	五芒星	£33.60	指輪	銀	20インチ、カーブ	£22.80
プレスレット	銀	ネイティブ・アメリカン	£11.40	指輪	銀	16インチ、ベルチャー	£16.80
プレスレット	銀	五芒星	£32.40	指輪	銀	18インチ、ベルチャー	£18.00
プレスレット	瑠璃		£11.40	指輪	銀	20インチ、ベルチャー	£22.20
プレスレット	珊瑚、黒曜石		£21.60	指輪	銀	22インチ、ベルチャー	£22.80

銀	18インチ、トレース	£16.20	21種類	ダイアン・フォーチュンの著書	
銀	20インチ、トレース	£22.80	4種類	ケネス・グラントの著書	
お守り(amulet)	3頭の龍	£91.20	41種類	魔法術の参考書	
お守り	逆田鍬形のアブラカダブラ	£11.40	3種類	1人での魔法術の参考書	
お守り	アング(エジプト十字架)	£15.00	7種類	呪文の魔法術の参考書	
お守り	「脳の力」(カバラ風)	£14.40	4種類	ティーンエイジャー向け魔法術の参考書	
お守り	ケルト十字	£15.00	49種類	エンテリック一般	
お守り	「大地の力」(蛇と十字架)	£10.20	17種類	ウイッカ	
お守り	ホルスの目	£10.20	7種類	トルイド	
お守り	「誠実」(五芒星のついた十字架とG)	£10.20	6種類	グリーンマン	
お守り	「幸運」(六芒星、田など)	£14.40	8種類	占い	
お守り	ヒエログリフ	£11.40	9種類	フィクシオン	
お守り	七芒星	£10.20	15種類	ヒーリング	
お守り	内的な力(8本のアステリスク)	£10.20	2種類	我が店の歴史	
お守り	エデンの五芒星(星とアダムが一体化)	£10.20			
お守り	「関係」(流線形の縮んだ十字架、JとK)	£14.40			
お守り	シリヤントラ(つながりがありあつた三角形)	£10.20			
お守り	ソロモンの星(六芒星)	£10.20			
お守り	太陽	£10.20			
お守り	生命樹	£10.20			
お守り	「安寧」	£10.20			
お守り(charm)	斧	£10.80			
お守り	仏陀の誕生	£22.80			
お守り	角の女神	£22.80			
お守り	ルーン文字	£12.00			
お守り	ルーン文字	£4.80			
お守り	ブリジットクロス	£12.00			
お守り	ナナカマド製、小	£4.74			
お守り	ナナカマド製、大	£9.54			
お守り(talisman)	アフロデューテの花(8枚花弁の花)	£12.00			
お守り	Chu Hua(花)	£12.00			
お守り	五芒星	£12.00			
お守り	太陽(六芒星)	£12.00			
お守り	「幸運」(八芒星)	£12.00			
お守り	「生命の環」(八芒星)	£12.00			
お守り	「大地の星と花」(八芒星)	£12.00			
お守り	法輪(2)	£12.00			
お守り	鳳凰	£12.00			
お守り	雙(中国の龍)	£12.00			
お守り	「愛」(2羽の鳥)	£12.00			
お守り	鶴	£12.00			
お守り	オーム(aum、唵)	£12.00			
お守り	ネトラグラマトン	£12.00			
お守り	マーキュリー(ヘルメスの杖)	£12.00			
お守り	トール神のハンマー	£33.00			
お守り	天の女王(イシユタル)	£92.40			
お守り	旅行用(逆三角形、太陽など)	£12.00			
お守り	石英	£7.14			

本	種類数		雑誌、CD、DVD(タイトル)	タイトル	
稀観本	54種類		雑誌	Avalon Magazine	£3.50
古代のシステム	10種類		雑誌	Faeries and Enchantment	£4.25
オースティン・オスマン・スヘアの著書	1種類		雑誌	Four Winds	£2.80
アレイスター・クローリーの著書	30種類		雑誌	More to Life	£3.00
			雑誌	Pentacle	£3.25
			雑誌	Sage Woman	£3.95
			雑誌	Spiders Web	£3.00
			雑誌	The Hedgewytch	£3.00
			雑誌	The Inner Light	£4.00
			雑誌	White Dragon	£3.00
			CD	Alex Archer	£14.39
			CD	Loreena Mckennett	£17.94
			CD	Bronwen Harrison	£16.80
			CD	Cauda Pavonis(3)ーゴス	£16.79
			CD	Cauda Pavonisーゴス	£15.59
			CD	Terry Oldfieldーケルト	£14.40
			CD	Dam the Bard(2)ーペイガン	£17.99
			CD	Dam the Bard(3)ーペイガン	£14.40
			CD	Stephen Page(2)	£14.40
			CD	Stephen PageとRichard Churchyard	£14.40
			CD	Dragonsflyーフオーク	£17.99
			CD	Dragonsfly(2)ーケルト	£18.00
			CD	Jack Welton	£15.60
			CD	Inner Alchemy(10)ー癒しや瞑想	£16.80
			CD	Jim Faupel	£18.00
			CD	Kellianna	£14.40
			CD	Medwyn Goodall(2)ーケルト	£14.40
			CD	Medwyn Goodallーケルト	£26.40
			CD	Fridrik Karlsson(5)ーリタクス	£14.40
			CD	Mediaeval Baebes	£16.74
			CD	Mediaeval Baebes(5)	£17.99
			CD	Mediaeval Baebes	£23.99
			CD	Silver on a Tree	£16.80
			CD	Magenta Pixie	£13.20
			CD	Barbara Meiklejohn Free	£16.80
			CD	Jeni Meliaー17世紀	£15.59
			CD	Jeni MeliaとChristopher Goodwin	£15.59
			CD	Sonia Guinnessーペイガン	£16.80

影の書	樹脂	夢用	£25.20
影の書	樹脂	龍	£20.40
影の書	樹脂	龍、呪文用	£28.80
影の書	樹脂	龍の王国	£9.59
占い、ダウジング	ハンパミ	大きさ、図像、色、その他	
占いの棒(divining rod)	真鍮		£26.40
占いの棒セット	透明の石英		£27.60
ルーン文字占いのセット	バラ石英	Elder Futhark社製	£30.00
ルーン文字占いのセット	ソーダ石	Elder Futhark社製	£30.00
ルーン文字占いのセット	紫水晶	Elder Futhark社製	£30.00
ルーン文字占いのセット	黄水晶	Elder Futhark社製	£33.60
ルーン文字占いのセット	木に銅の文字		£57.60
ルーン文字占いのセット	木製	Elder Futhark社製	£46.80
ルーン文字占いのセット	木製	Elder Futhark社製	£38.40
ルーン文字占いのセット	木製	Elder Futhark社製	£38.40
ルーン文字占いのセット	石版	Elder Futhark社製	£43.20
ルーン文字占いのセット	石版	Elder Futhark社製	£46.80
ルーン文字占いのセット	雄鹿の角		£30.00
ルーン文字占いのセット	赤鉄鉱		£106.80
ルーン文字占いのセット	瑪瑙	入れ物つき	£130.80
ルーン文字占いのセット	瑪瑙		£44.40
オガム文字占いのセット	木製	解説書つき	£82.80
オガム文字占いのセット	木製		£18.00
占いの鏡(scrying mirrors)		小(1.25インチ)	
占いの鏡		中(1.5インチ)	£21.00
占いの鏡		大(2インチ)	£24.00
占いの鏡		4インチ	£72.00
占いの鏡		5インチ	£84.00
占いの鏡		6インチ	£96.00
占いの鏡		7インチ	£114.00
占いの鏡		ゴシック風・田舎風	£78.00
占いの鏡		ゴシック風・田舎風	£84.00
占いの鏡		ケルトの紐模様	£114.00
タロットカード		アヴァロン	£20.39
タロットカード		アーサー王	£38.39
タロットカード		マーリン	£23.39
タロットカード		ケルト	£20.39
タロットカード		指輪物語	£21.00
タロットカード		龍	£20.40
タロットカード		ドルイド	£24.00
タロットカード		ドルイド術	£24.00
タロットカード		魔女	£21.59
タロットカード		魔女	£29.99
タロットカード		女神	£22.80
タロットカード		ネイティヴ・アメリカン	£21.00
タロットカード		エジプト	£20.39
タロットカード		古い道	£22.80
タロットカード		古い道(解説書つき)	£47.99
タロットカード		イーノック	£27.59
タロットカード		新しい神祕のタロット	£15.59
タロットカード		猫の人々	£21.59
タロットカード		無地	£12.00

タロットカード		Rider Waite	£16.79
タロットカード		Rider Waite(解説書つき)	£23.99
タロットカード		Rider Waite(携帯用)	£18.00
タロットカード		Rider Waite(携帯用)	£20.40
タロットカード		Rider Waite(ユニヴァーサル版)	£21.59
オラクルカード		妖精	£20.39
オラクルカード		女神	£14.39
オラクルカード		ドルイドの動物	£20.39
オラクルカード		ドルイドの動物(解説書つき)	£25.19
オラクルカード		ドルイドの植物	£23.99
オラクルカード		ケルトのオガム文字	£21.59
その他、類似のカード		ケルトのトーマス動物	£23.99
その他、類似のカード		アレキスター・クローリーとトト神(解説書つき)	£22.20
その他、類似のカード		黄金の睡団の瞑想(解説書つき)	£28.80
カード用のバッグ		紫、オガム文字	£11.94
カード用のバッグ		紫、オームの字	£11.94
カード用のバッグ		黒、杯	£11.94
カード用のバッグ		黒、龍	£11.94
カード用のバッグ		黒、ホルスの目	£11.94
カード用のバッグ		黒、男神の象徴	£11.94
カード用のバッグ		緑、男神の象徴	£11.94
カード用のバッグ		黒、3つの交差する弧(triquetra)	£11.94
カード用のバッグ		紫、3つの交差する弧(triquetra)	£11.94
カード用のバッグ		黒、三脚巴紋(triskele)	£11.94
カード用のバッグ		黒、ユニコーン	£11.94
カード用のバッグ		黒、蜘蛛の巣	£11.94
カード用のバッグ		紫、魔女	£11.94
カード用のバッグ		紫、魔女	£11.94
カード用のバッグ		赤、魔女	£11.94
タロットカード用のバッグ		黒、龍	£11.40
タロットカード用のバッグ		黒、五芒星	£11.40
タロットカード用のバッグ		黒、トリプル・ムーン	£11.40
タロットカード用のバッグ		黒、3つの交差する弧	£11.40
タロットカード用のバッグ		黒、三脚巴紋(triskele)	£11.40
タロットカード用のバッグ		黒、オガム文字	£11.40
タロットカード用のバッグ		紫、妖精	£11.40
タロットカード用のバッグ		紫、トリプル・ムーン	£11.40
タロットカード用のバッグ		黒、3つの交差する弧	£11.40
タロットカード収納箱		木製	£8.40
タロットカード収納箱		木製	£10.80
タロットカード収納箱		木製	£16.80
ダウジング用ふりこ(pendulum)		カトガラス	£10.20
ダウジング用ふりこ		木製	£13.20
ダウジング用ふりこ		木製	£13.20
ダウジング用ふりこ		銅と水晶	£15.00
ダウジング用ふりこ		寶石	£21.60
ダウジング用ふりこ		龍と羽	£11.40
ダウジング用ふりこ		宝石(選択可)	£16.30
ダウジング用ふりこ		アメジスト	£10.20
ダウジング用ふりこ		瑪瑙	£16.80
ダウジング用ふりこ		銀	£69.60
ダウジング用ふりこ		銀	£120.00

ダウジング棒(dowsing rod)	鉄	£29.64	
呪文	「」内はテーマ名	£1,200.00	自社製(特注)
呪文		£22.80	
呪文のキット	「自分を守る」	£23.40	
呪文のキット	「豊富」	£23.40	
呪文のキット	「目標に達する」	£23.40	
呪文のキット	「愛を引き寄せる」	£23.40	
呪文のキット	「幸福をもたらす」	£23.40	
呪文のキット	「いじめっこ、いなくなれ！」	£23.40	
呪文のキット	「ビジネスの成功」	£23.40	
呪文のキット	「子供の祝福」	£23.40	
呪文のキット	「夢を叶える」	£23.40	
呪文のキット	「豊饒」	£23.40	
呪文のキット	「許しを請う」	£23.40	
呪文のキット	「フレッシュなスタート」	£23.40	
呪文のキット	「幸運」	£23.40	
呪文のキット	「傷ついた心を癒す」	£23.40	
呪文のキット	「ヒーリング」	£23.40	
呪文のキット	「家の祝福」	£23.40	
呪文のキット	「平和を作る」	£23.40	
呪文のキット	「旅行の安全」	£24.00	
呪文のキット	「サイキックな自己防衛」	£24.00	
呪文のキット	「成功を願う」	£24.00	
呪文のキット	「願いを叶える」	£35.40	
呪文のキット	「秋分」	£50.40	
呪文のキット	「恋人を戻らせる」		

水差し	石製	カノーブスの水差し	£26.40
水差し	石製	カノーブスの水差し	£34.80
像	樹脂	フアラオ	£28.80
像	石製	ツタンカーメン	£14.40
像	石製	ツタンカーメン	£8.40
ブックエンド		ラムセス9世	£58.80
像		クレオパトラの帆船	£57.60
像	木製	アムン・ラー神	£34.80
像		オシリス、イシス、トト	£90.00
像		イシスとオシリス	£56.40
像	石製	イシス	£8.40
像	石製	イシス	£22.80
像	樹脂	イシス	£30.60
像	樹脂	イシス	£42.00
像	樹脂	イシス	£46.80
像	陶磁器	イシス	£150.00
像		ロウソク立て	£29.99
像		ロウソク立て	£44.40
像		鏡	£41.99
像		鍵かけ	£44.40
像		宝石箱	£66.00
像	石製	オシリス	£12.00
像	樹脂	オシリス	£25.20
像	石製	セクメト	£32.40
像	石製	セクメト	£8.40
像	樹脂	セクメト	£25.20
像	石製	アヌビス	£8.40
像	石製	アヌビス	£14.40
像	石製	アヌビス	£19.20
像	石製	アヌビス	£22.80
像	樹脂	アヌビス	£28.58
像	木製	アヌビス	£30.00
像		アヌビス	£56.40
像	石製	トト	£8.40
像	石製	トト	£13.20
像	石製	バスト	£32.40
像	樹脂	バスト	£28.80
像	石製	バスト	£23.80
像	樹脂	バスト	£25.19
像	樹脂	バスト	£9.59
像	木製	バスト	£28.80
像	石製	ハトホル	£8.40
像	樹脂	ハトホル	£25.20
像	石製	ホルス	£8.40
像	石製	ホルス	£22.80
像	石製	ホルス	£25.20
像	樹脂	ホルス	£25.20
像	鏡	ホルス	£54.00
像	木製	ホルス	£24.00
像	木製	ホルスの目	£27.60
像	木製	ホルスの目	£32.40
像	木製	ホルスの目(色つき)	£24.00
像	樹脂	ラー・ホルアクティ(ホルスの別名、太陽神)	£28.80
像	樹脂	コンス(月の男神)	£25.20

エジプト	図像、大きさ		
ロウソク立て	コブラ	£15.59	
ティーライト立て	コブラ	£15.59	
エッセンシャルオイルの容器	コブラ	£46.80	
ロウソク立て	コブラをもつ女性	£26.40	
ティーライト立て	女同祭	£35.99	
像	アング(Ankh)、大	£26.40	
像	アング(Ankh)、中	£21.60	
像	アング(Ankh)、小	£18.00	
像	アング	£16.80	
像	ピラミッド、大	£19.20	
像	ピラミッド、中	£15.60	
像	ピラミッド、小	£12.00	
像	ピラミッド	£8.40	
像	サルコファガス(エジプトの石棺)	£30.00	
像	スフィンクス	£13.20	
像	スフィンクス	£27.60	
像	スフィンクス	£28.80	
像	オベリスク	£13.20	
像	オベリスク	£10.80	
像	オベリスク	£8.40	
像	スカラベ(2)	£4.80	
像	スカラベ	£8.40	
像	スカラベ	£9.60	
像	スカラベ	£22.80	
箱	スカラベ	£23.99	

妖精(faery realm)				
妖精のドア	木製		£6.00	自社製
妖精のドア	木製		£19.20	
妖精のドア	木製		£22.80	
妖精の願いのコイン			£23.99	
ゴシック様式コレクション	画像			
クリスタル・ボウル	水晶	如女、母、老女	£62.40	
遺物	黒曜石	頭蓋骨	£58.80	
小箱	樹脂	龍	£28.80	
ボウル	龍	龍	£18.00	
ドリーム・キャッチャー	樹脂	トリプルクームーン、五芒星	£27.60	
オイル燃焼容器	樹脂	如女、母、老女	£30.00	
祭壇用台	陶器	五芒星	£10.80	
祭壇用台	樹脂	バラと蔓	£26.40	
影の書	樹脂	アイビー、五芒星	£20.40	
影の書	樹脂	ケルト十字	£24.00	
影の書	樹脂	バラと蔓	£24.00	
箱	樹脂	バラと蔓	£28.80	
杯	樹脂	バラと蔓	£27.60	
杯	ガラス	バホメット	£26.40	
その他(miscellany)	画像、文字			
鏡	黒曜石		£77.94	
ドアノック	真鍮	ゴシック風のコウモリ	£28.80	
ドアノック	真鍮	ウエールズの龍	£28.80	
ドアノック		グリーンマン	£34.80	
ドアノック		グリーンウーマン	£34.80	
車のステッカー		A Day without Faeries	£2.40	
車のステッカー		Be Witched	£2.40	
車のステッカー		Born on the First Time	£2.40	
車のステッカー		Child of the Goddess Consciousness	£2.40	
車のステッカー		Dear God Save Me	£2.40	
車のステッカー		Do not Meddle in the Affairs	£2.40	
車のステッカー		Earth First	£2.40	
車のステッカー		Earth, Air, Fire & Water	£2.40	
車のステッカー		Enchanted	£2.40	
車のステッカー		Goddess Bless	£2.40	
車のステッカー		Hand to Hand	£2.40	
車のステッカー		Harm None	£2.40	
車のステッカー		Have a Faerie Nice Day!	£2.40	
車のステッカー		I Believe in Angels	£2.40	
車のステッカー		I Believe in Dragons	£2.40	
車のステッカー		I Believe in Magic	£2.40	
車のステッカー		I Thank the Goddess	£2.40	
車のステッカー		I wasn't Created in	£2.40	
車のステッカー		I'm in the Witchcraft Industry	£2.40	
車のステッカー		In Goddess We Trust	£2.40	
車のステッカー		It's a Witch Thing	£2.40	
車のステッカー		Life is a Witch	£2.40	
車のステッカー		Love Your Enemies	£2.40	
車のステッカー		Magic Happens	£2.40	

車のステッカー				Merry Meet	£2.40
車のステッカー				Pagan & Proud	£2.40
車のステッカー				Protected by Angels	£2.40
車のステッカー				She Changes	£2.40
車のステッカー				So Mote It Be	£2.40
車のステッカー				Something Wiccan	£2.40
車のステッカー				The Old Ways Are Alive	£2.40
車のステッカー				Three Pentacles	£2.40
車のステッカー				Trust Me	£2.40
車のステッカー				Walk the Path	£2.40
車のステッカー				Walker between the World	£2.40
車のステッカー				Warning - Invisible Dragon	£2.40
車のステッカー				We Are Everywhere	£2.40
車のステッカー				White Witch	£2.40
車のステッカー				Witches Don't Die...	£2.40
車のステッカー				Witches Heal	£2.40
車のステッカー				空飛ぶ魔女	£21.00
ライター	合金			五芒星	£21.00
風鈴(windchime)	合金			フオーク	£24.00
風鈴				スプーン	£19.20
風鈴				フオークとスプーン	£21.60
冷蔵庫の磁石				黒猫	£3.00
冷蔵庫の磁石				黒猫、4つセット	£10.80
冷蔵庫の磁石				龍	£3.00
冷蔵庫の磁石				龍、4つセット	£10.80
冷蔵庫の磁石				死神	£3.00
冷蔵庫の磁石				死神、3つセット	£7.80
冷蔵庫の磁石				ゴシック風の龍	£3.00
冷蔵庫の磁石				ゴシック風の龍、3つセット	£7.80
マグカップ				月と草、3つセット	£9.00
マグカップ				魔法のビール	£7.66
瓶オリーブナー	陶磁器			龍	£10.20
瓶のストッパー	合金			龍	£10.20
キーホルダー	アメジスト				£5.40
キーホルダー	黄水晶				£5.40
キーホルダー	石英				£5.40
キーホルダー	合金			猫とほろき	£6.60
キーホルダー	樹脂			龍	£3.54
キーホルダー	木製			妖精	£2.34
キーホルダー	木製			ほろぎに乗った魔女	£5.94
キーホルダー	合金			フオーク	£6.60
キーホルダー	合金			月の女神	£6.60
キーホルダー	合金			五芒星	£6.60
キーホルダー	合金			魔法の帽子	£6.60
キーホルダー	合金			シーラナギ	£6.60
キーホルダー	合金			五芒星	£14.40

表2-7 イベントの種類(週間)

*ジ・オラクルの2010年6月号の週間イベントに掲載されているイベントのうち、

グラストンベリーで開かれているもののみを整理した

*GEとはグラストンベリー・エクスピリエンスの略

種類	曜日／詳細	料金	場所
	月曜日		
ヨーガ	アシタンガ・ヴィンヤサ・ヨーガ	記載なし	カトリック教会の会館
太極拳	禅スタイル太極拳	5ポンド	聖エドモンド・コミュニティ会館
太極拳	太極拳	記載なし	グラストンベリー・レジャーセンター
瞑想	ラマナ・マハラシ瞑想	記載なし(無料)	主催者宅
瞑想	超越瞑想	記載なし(無料)	スター・ルーム(GE)
仏教	仏教瞑想とダルマの討論	3ポンド	シェキナシュラム(B&B)
ヒーリング	NFSHヒーリングセンター	記載なし	カトリック教会の会館
ダンス	5リズム	10ポンド	町の公民館
不明	笑いのクラブ	5/3ポンド	古天使ミカエル・センター
	火曜日		
ヨーガ	ヴィンヤサ・フロー・ヨーガ	5ポンド	グラストンベリー・ヨーガシャラ
ヨーガ	ヘレンとのヨーガ	6ポンド	ナナカマド・センター
気功	気功	5ポンド	シェキナシュラム(B&B)
仏教	フレンドリーな地元の仏教徒のグループ(トリラトナ/ブダフィールドの一部)、瞑想・実践・議論	記載なし(無料)	主催者宅
討論グループ	グラストンベリー2012研究グループ	記載なし	ミラクル・ルーム(GE)
ドラム	アフリカのハンド・ドラミング	7ポンド	聖エドモンド・コミュニティ会館
ダンス	シャクティ・ダンス	記載なし	シェキナシュラム(B&B)
音楽(一般)	ライブ	記載なし	あるレストラン
音楽(一般)	合唱グループ	記載なし	詳細不明
教育	GLOWとの5-11歳のホームスクールの児童向けの活動	記載なし	聖エドモンド・コミュニティ会館
バザー	ビザンティウム・バザール	記載なし(無料)	アセンブリー・ルーム
マーケット	グラストンベリー・カントリー・マーケット	記載なし(無料)	町の公民館
	水曜日		
ヨーガ	小さな親しみあるヨーガ教室	記載なし	詳細不明
ヨーガ	ヴィンヤサ・フロー・ヨーガ	5ポンド	グラストンベリー・ヨーガシャラ
太極拳、気功	太極拳と気功	記載なし	メソジスト教会の会館
気功	気功	7ポンド	女神会館
武道	スタヴの武道教室	5/3ポンド	カトリック教会の会館
瞑想	超越瞑想	記載なし(無料)	スター・ルーム(GE)
セラピー	女性のサイコセラピーグループ	記載なし	主催者宅
ドラム	人生の輪の回りでの聖なる詠唱とシャーマンのドラム	7/5ポンド	ミラクル・ルーム(GE)
ドラム	シャーマンのドラム	7/6ポンド	アセンブリー・ルーム
ダンス	ダンス能力:あらゆる能力への創造的な動きとダンス	記載なし	町の公民館
ダンス	無限のリズムのダンス	記載なし	町の公民館
音楽(オルタナティブ)	テゼ共同体の合唱グループ	3ポンド	聖マーガレット・チャペル
教育	GLOWとの5-11歳のホームスクールの児童向けの活動	記載なし	聖エドモンド・コミュニティ会館
教育	森林教室	記載なし	郊外の有機農法の農場
	木曜日		
ヨーガ	ヴィンヤサ・フロー・ヨーガ	5ポンド	グラストンベリー・ヨーガシャラ
太極拳	太極拳	記載なし	イングランド国教会の会館
瞑想	天使瞑想	記載なし	主催者宅
ヒーリング	アンソニーとの銅鑼の音の風呂	記載なし	シャンバラ・リトリート(B&B)
ヒーリング	クンダリーニ・ヨーガ	8/6ポンド	シェキナシュラム(B&B)
ドラム	アフリカのハンド・ドラミング	7ポンド	聖エドモンド・コミュニティ会館
ダンス	ベリーダンス	5ポンド	シェキナシュラム(B&B)
教育	GLOWとの5-11歳のホームスクールの児童向けの活動	記載なし	聖エドモンド・コミュニティ会館
マーケット	ブライディ・ヤード有機食品Coop	記載なし(無料)	ブライディ・ヤード
不明	男性のクラブ	記載なし	詳細不明
	金曜日		
ヨーガ	シヴァナンダ・ヨーガ	5ポンド	シェキナシュラム(B&B)
ヒーリング	クリスタルボール・サウンドヒーリング	5ポンド	シェキナシュラム(B&B)
ヒーリング	銅鑼の風呂の聖なるヒーリング	5ポンド	シェキナシュラム(B&B)
ダンス	サークル・ダンス	3.5ポンド	カトリック教会の会館
音楽(オルタナティブ)	バジャン	3ポンド	シェキナシュラム(B&B)
マーケット	ブライディ・ヤード有機食品Coop	記載なし(無料)	ブライディ・ヤード
	土曜日		
ピラティス	ピラティス教室	記載なし	聖エドモンド・コミュニティ会館
ヒーリング	クンダリーニ・ヨーガ	記載なし	女神神殿
ヒーリング講座	ラケルとのすごいヒーリング初心者コース	記載なし	シャンバラ・リトリート(B&B)
教育	森林教室	記載なし	郊外の有機農法の農場
	日曜日		
ヨーガ	穏やかで統合されたヨーガ	7ポンド	シェキナシュラム(B&B)
儀式	ヴェーダの火の儀式	寄付金	シェキナシュラム(B&B)
音楽(一般)	裏口 男性ブルース・ジャム	無料	あるパブ

表2-8 イベントの種類(月間)

*ジ・オラクルの2010年6月号の月間イベントに掲載されているイベントのうち、
 グラストンベリーで開かれているもののみを整理した
 *GEとはグラストンベリー・エクスピリエンスの略

種類	日にち／詳細	料金	場所
	6月1日(火)		
ヒーリング	マオリ・ヒーラーとのボディワーク・セッション、6月1日～9日	記載なし	詳細不明
	6月2日(水)		
積極思考(講演)	潜在性のカ:考えることが成しうることだ!、ジョナサン・チュター【グラストンベリー・ポジティブな生き方グループ】	5/4ポンド	町の公民館
チャネリング	トニー・サマラとのサットサング	記載なし	あるオルタナティブの洋服の店
	6月3日(木)		
ヒーリング	過去世の探索、ジュディス・ゴールドスミス	70ポンド	デイジー・センター(B&B)
ネオペイガン(講演)	【グラストンベリー星の下ペイガン・ムート】	記載なし	パブ
	6月4日(金)		
ヒーリング	セルフ・ヒーリングのエクササイズを伴うチャクラのエネルギーへの経験的つながり	170ポンド	詳細不明
ダンス	エクスタシー・ダンス	10ポンド	カトリック教会の会館
エコロジー思想(講演)	聖樹と他のエコロジーの驚き、ルーシー・グッティソンのイラスト付講演	1ポンド	アセンブリー・ルーム
	6月5日(土)		
ネオペイガン(ワークショップ)	暗黒の女神のワークショップーヘカテ、リズ・ウィリアムズ博士、ビジュアリゼーション・瞑想・儀式	87.50ポンド	詳細不明
セラピーの講座	天使のレイキ レベル1と2 従事者のトレーニング	記載なし	詳細不明
意識の覚醒(ワークショップ)	子宮の知恵、アナイヤ・アオン・プラカシャ、5日と6日、タントラ・ヨーガとともにキリストの意識の教えと一体になる	175ポンド	シェキナシュラム(B&B)
ルーン文字	ダイヤモンド・イングズの光のトレーニング、5日と6日、コスミック・エネルギーとワークする	145ポンド	ナナカマド・センター
天使(ワークショップ)	覚醒しつつある過程の天使のワークショップ、5日と6日	記載なし	デイジー・センター(B&B)
ヒーリングの講座	マオリ・ヒーラーとともに伝統的マオリのヒーリング・アートを学ぶ、5日と6日	200ポンド	詳細不明
シャーマニズム	シャーマンの召還 お試しセッション、ジェイとケストラル・オークウッド、年間シャーマン・トレーニングの1日体験	65ポンド	ミラクル・ルーム(GE)
音楽(一般)	アリオソ・ストリング・カルテット、ハイドン	10ポンド	チャリス・ウェル庭園
	6月6日(日)		
工芸	フェルト作りワークショップ、豪華な薄いスカーフ作り	30ポンドと材料代	聖エドモンド・コミュニティ会館
ダンス、宗教	ダンス・オヴ・ユニヴァーサル・ピース、フィリップ・タンセン・オドノホー	12ポンド	チャリス・ウェル庭園
	6月7日(月)		
記念出版会	トニー・サマラとノミ・シャロン	記載なし	あるカフェ
シャーマニズム	バッファローの講演と祈りのサークル	5/3ポンド	あるオルタナティブ・グッズ(アジア)の店
ヒーリング	グラストンベリー再誕生呼吸法グループ	記載なし	女神会館
瞑想、天使	覚醒しつつある天使の瞑想	5ポンド	デイジー・センター(B&B)
	6月8日(火)		
ヒーリング	クンダリーニ・ヨーガ	7/4ポンド	女神会館
ヒーリング	ヴィマル・プラフル・スッタとの音とヒーリングの愛の風呂、できればクッション/ヨーガマット/毛布を持参で	20/15ポンド	聖マイケル・チャペル
ヒーリング	銅鑼・ほら貝・ボールのサウンド・ヒーリングのセッション	5ポンド	アヴァロン・ルーム(GE)
不明(講演?)	この神の事柄を探して、ダレン・ドオージー	5/3ポンド	アセンブリー・ルーム
	6月9日(水)		
チャネリング	トニー・サマラとのサットサング	記載なし	デイジー・センター(B&B)
マヤ・2012(講演)	マヤの前:オルメク・ケツァルコアトル・2012の暦の神秘的な起源、シュー・ニューマン【グラストンベリー・ポジティブな生き方グループ】	5/4ポンド	町の公民館
不明(講演?)	マスターたちの帰還、合法の反乱の講演	7/3ポンド	アセンブリー・ルーム
	6月10日(木)		
ヒーリング	クンダリーニ・ヨーガ	7/4ポンド	グラストンベリー・ヨーガシャラ
	6月11日(金)		
シャーマニズム	シャーマンの旅サークル	7/5ポンド	ミラクル・ルーム(GE)
ダンス	トランス・ダンス	10ポンド	カトリック教会の会館
演劇(オルタナティブ)	自発的な劇場(タッチ・アンド・ゴー劇場)	記載なし	プライディ・ヤード
	6月12日(土)		
アロマセラピー	ケルトの植物のヒーリング・パワー、アンジェラ・パイン、12日と13日【アヴァロン島協会】	110ポンド	詳細不明
自然系のセラピー	マリアン・グリーンとの自然の魔術の日	30ポンド	アヴァロン・ルーム(GE)
バザー	テーブル・トップ・セール	記載なし	アセンブリー・ルーム
チャネリング	コミュニケーションの前のヒーリング、より高い知性からのコミュニケーション	6ポンド	シェキナシュラム(B&B)
音楽(オルタナティブ)	無限の集合体が新月の音楽を存在させる	8ポンド	アセンブリー・ルーム
	6月13日(日)		
女性一更年期(ワークショップ)	魔術的な更年期、この変容のエネルギーとの意識的な働きかけ方	記載なし	ナナカマド・センター
詩の会	アヴァロンの詩人、ゲストの詩人はイタ・オドネル	3ポンド	アビー・ハウス

	6月15日(火)		
ヒーリング	クンダリーニ・ヨーガ	7/4ポンド	女神会館
詩の会	毎月の詩のワークショップ	4/3ポンド	アヴァロン図書館
	6月16日(水)		
チャネリング	トニー・サマラとのサットサン	寄付金	あるオルタナティブの洋服の店
意識変容(講演)	無意識から意識への顕示、コリーン・タッカー【グラストンベリー・ポジティブな生き方グループ】	5/4ポンド	町の公民館
音楽(オルタナティブ)	女神聖歌隊、私たちの夏至の祝祭で歌うために来て学ぼう	2ポンド	女神神殿
演劇(一般)	お気に召すまま(トントンの演劇)	記載なし(有料)	グラストンベリー修道院
	6月18日(金)		
女性一ヶ月(ワークショップ)	月経期の神秘、女性のエンパワーメントのワークショップ、情熱のカップ	25ポンド	女神会館
ヒーリング	ムナイー気、18日~20日、アメリカの古代の儀式を受け取る	記載なし	ヒーリング・ウォーター(B&B)
女神(講演)	我々の現在の女神のスピリチュアリティの古代のルーツ、キャシー・ジョーンズのイラスト付講演	5ポンド	女神会館
音楽(オルタナティブ)	ニア:精神・身体・スピリットの祝い	10ポンド	カトリック教会の会館
天使	天使を集める	5ポンド	デイジー・センター(B&B)
演劇(オルタナティブ)	ライセンス(演劇)、ジョナサン・ブラウン	記載なし	フライディ・ヤード
	6月19日(土)		
ヒーリング	クンダリーニ・ヨーガ	7/4ポンド	女神神殿
カンファレンス	神秘的な地球のスピリットのフェア	1ポンド	アセンブリー・ルーム
ヒーリング	人生のエネルギーチャクラ体系の新しい見方、キャロライン・ショーラ・アレフ、19日と20日【アヴァロン島協会】	110ポンド	詳細不明
占星術	記憶の錬金術一かに座、占星術学的な一年の輪、ジョン・ワズワースとアンソニー・ソーンリー	125ポンド	詳細不明
天使(ワークショップ)	アヴァロンの天使・マーリン・マグダラ(のマリア)のワークショップ、グラストンベリーでの様々な聖地で愛と光と美とヒーリングと昇天を共有	記載なし	デイジー・センター(B&B)
セラピーの講座	EFT-感情解放「光」のテクニック・グラストンベリー、ロウエナ・ブモン、EFTのレベル1と2必須	記載なし	詳細不明
意識変容(ワークショップ)	高所恐怖症ワークショップ、19日と20日	記載なし	シェキナシュラム(B&B)
自己成長(ワークショップ)	ウィリアム・ブルームとの君の英雄との旅、スピリチュアルな成長の心理学	記載なし	詳細不明
気功	深いヒーリングの医学的な気功、19日と20日、パリー・スペンド	記載なし	チャリス・ウェルの部屋
	6月20日(日)		
カンファレンス	神秘的な地球のスピリットのフェア	1ポンド	アセンブリー・ルーム
天使-無料開放	天使の称賛、私たちの5日目の開放日	記載なし	デイジー・センター(B&B)
夏至の祝祭(女神)	夏至の祝祭	寄付金	女神会館
	6月21日(月)		
アビー・ハウス無料開放日	アビー・ハウスと敷地の開放日	記載なし(無料)	アビー・ハウス
音楽(一般)	アビー・ハウス、夜のジャズコンサート	12ポンド	アビー・ハウス
夏至の祝祭	夏至の祝祭	寄付金	デイジー・センター(B&B)
夏至の祝祭	夏至の瞑想	記載なし(無料)	チャリス・ウェル庭園
儀式	グラストンベリー・トール、エルサレムの平和への大きな抱擁との同時平行のイベント、皆さんやってきて私たちのグラストンベリーの平和をエルサレムに送ろう	記載なし(無料)	屋外
シャーマニズム	バッファローの講演と祈りのサークル	5/3ポンド	あるオルタナティブ・グッズ(アジア)の店
瞑想、天使	渦巻きヒーリングとともに覚醒しつつある天使の瞑想	5ポンド	デイジー・センター(B&B)
夏至の祝祭(ネオペイガン)	日暮れの夏至の祝祭、【グラストンベリー星の下ペイガン・ムート】	記載なし(無料)	屋外
	6月23日(水)		
地球外生命体(講演)	私たちは宇宙で1人ではない-他の惑星の生物、フィロミン・プリンペ【グラストンベリー・ポジティブな生き方グループ】	5/4ポンド	町の公民館
	6月25日(金)		
ヨーガ	献身の心ヨーガ・リトリート	記載なし	シェキナシュラム(B&B)
瞑想	満月の瞑想	記載なし(無料)	スター・ルーム(GE)
シャーマニズム	シャーマンの旅サークル	7/5ポンド	ミラクル・ルーム(GE)
	6月26日(土)		
マーケット	グラストンベリー農民のマーケット	記載なし(無料)	屋外
意識変容(ワークショップ)	夏至の鍛冶開放の日、鍛冶のデモンストレーションと創作りのアート	記載なし	詳細不明
	6月27日(日)		
仏教	仏教徒の瞑想実践の日	寄付金	主催者宅
音楽(オルタナティブ)	ブジャリとタブラ・トムのキルタン	記載なし	シェキナシュラム(B&B)
	6月28日(月)		
仏教	地球のサンガに触れる-テク・ナト・ハンの伝統を実践する	寄付金	ミラクル・ルーム(GE)
	6月29日(火)		
ヒーリング	クンダリーニ・ヨーガ	7/4ポンド	女神会館
	6月30日(水)		
足相読み(講演)	足相読み-あなたの感情があなたの本当の「自己」を反映する、ポリー・ホール【グラストンベリー・ポジティブな生き方グループ】	5/4ポンド	町の公民館

表2-7

種類	のべ回数		
エクササイズ	ヨーガ、ピラティス	9	21
	太極拳、気功、武道	7	
	ダンス	6	
宗教的なもの	瞑想	4	6
	仏教	2	
療法	ヒーリング、セラピー	8	8
アート、創作	音楽(一般)	3	9
	音楽(オルタナティヴ)	2	
	ドラム	4	
教育			5
バザー、マーケット			4
不明			2
その他(儀式、討論グループ)			2
合計			58

表2-7

場所	数		
公共施設	町の公民館	4	12
	聖エドモンド・コミュニティ会館	7	
	グラストンベリー・レジャーセンター	1	
教会関係	イングランド国教会の会館	1	7
	メソジスト教会の会館	1	
	カトリック教会の会館	4	
	聖マーガレット・チャペル	1	
オルタナティヴ関係	アセンブリー・ルーム	2	30
	グラストンベリー・エクスペリエンス内	4	
	女神神殿、女神会館	2	
	ナナカマド・センター(アートセンター)	1	
	古天使ミカエル・センター(ヒーリングセンター)	1	
	グラストンベリー・ヨーガシャラ(ヒーリングセンター)	3	
	シェキナシュラム(B&B)	11	
	シャンバラ・リトリート(B&B)	2	
	郊外の有機農法の農場	2	
	ブライディ・ヤード(上記の農場が別の郊外に所有する物件)	2	
飲食施設(パブ、レストラン)			2
主催者宅			4
詳細不明			3
合計			58

表2-8

種類	のべ回数		
エクササイズ	ヨーガ	1	5
	気功	1	
	ダンス	3	
意識、思想	意識の覚醒、意識の変容、積極志向、自己成長	6	14
	チャネリング	4	
	エコロジー思想	2	
	地球外生命体	1	
	マヤ・2012	1	
	宗教的なもの	瞑想	
瞑想+天使	2		
天使	4		
仏教	2		
シャーマニズム	5		
ネオペイガン	2		
夏至の祝祭(含ネオペイガン1、女神1)	4		
女神	1		
女性	女性のからだ	2	2
療法	ヒーリング、セラピー	18	20
	占い	2	
アート、創作	音楽(オルタナティヴ)	4	12
	音楽(一般)	2	
	演劇(オルタナティヴ)	2	
	演劇(一般)	1	
	詩の会	2	
	記念出版会	1	
カンファレンス			2
バザー、マーケット			2
不明			2
その他(平和の儀式)			1
その他(工芸、アビー・ハウス無料開放日)			2
合計			83

表2-8

場所	数		
公共施設	町の公民館	5	6
	聖エドモンド・コミュニティ会館	1	
教会関係	カトリック教会の会館	3	8
	グラストンベリー修道院	1	
	アビー・ハウス	3	
	聖マイケル・チャペル	1	
オルタナティヴ関係	アセンブリー・ルーム	7	48
	グラストンベリー・エクスペリエンス内	7	
	アヴァロン図書館	1	
	女神神殿、女神会館	9	
	ナナカマド・センター(アートセンター)	2	
	グラストンベリー・ヨーガシャラ(ヒーリングセンター)	1	
	シェキナシュラム(B&B)	5	
	デイジー・センター(B&B)	9	
	ヒーリング・ウォーター(B&B)	1	
	チャリス・ウェル	4	
ブライディ・ヤード	2		
オルタナティヴ系の店			4
飲食施設(パブ、レストラン)			2
主催者宅			1
屋外			3
詳細不明			11
合計			83

表 3-1 ノラヴァ、ブリタニア、9人のモーガンの輪（図 3-3）の女神の出典、説明一覧

方角	女神の名前		出典	出典中での位置づけ、造語の意味
北東	ブリジット	Brigit	ケルト神話、 キリスト教の聖女	ケルト神話の女神、キルダエの聖女
	ブライディ	Bridie		ブリジットの別名
	カーナビビー	Kernababy	造語	赤ん坊のカー
東	アーサ	Artha	造語	侵略の書に登場する P(artha)lon 族より
	グラニーヤ	Grainne	レンスターの書	コーマック・マク・アート王の娘
	オスターラ	Eostre	サクソン系	アングロ=サクソンのイースターの女神
南東	リアノン	(Le)Rhiannon	マビノギオン	ダヴェド大公の妻で、馬術に優れる
	オルウェン	Olwen	マビノギオン	巨人の娘
	エレン	Elen	マビノギオン	4世紀のケルト系ブリトン人の長の娘？
	ブロダイウェズ	Blodeuwedd	マビノギオン	花からつくりだされた人造人間
南	ドムヌ	Domnu	侵略の書	フォモール神族の女神
	深みの女王	Queen of the Deep	不明（造語?）	ドムヌのこと？
	泉の女神	Lady of the Spring & Wells	マビノギオン	オウアインの妻
	湖の女神	Lady of the Lake	アーサー王伝説	聖剣エクスカリバーの所有者、湖の騎士ランスロットの養育者、魔術師マーリンを監禁した女性 など
南西	カー	Ker	侵略の書	ノアの孫娘セザール（Kersair）より
	穀物の女神	Grain Goddess	不明	
	マドロン	Madron	マビノギオン	アヴァラク族の娘
西	バンバ	Banbha	侵略の書	トゥアハ・デ・ダナン神族、アイルランドの地の女神
	ブリガンティア	Brigantia	ケルト神話	ケルトの女神。ブリジットの別名ともされる
	アーサ	Ertha	サクソン系	ドイツ、サクソンの大地の女神
	ガイア	Gaia	ギリシャ神話	大地の女神
北西	闇の母	Dark Mother	不明	
	ケリドウイン	Keridwen	マビノギオン	テジド・グウェルの妻で、魔術の使い手
	シーラ・ナ・ギグ	Sheela na Gig	イギリス各地の彫刻	女陰をあらわにした彫刻
北	ダヌ	Danu	侵略の書、マビノギオン	トゥアハ・デ・ダナン神族の母神
	アヌ	Anu	侵略の書、マビノギオン	ダヌの別名
	アリアンロード	Arianrhod	マビノギオン	ダヌの娘
	カリャク	Cailleach	スコットランドの伝説	スコットランドの冬の女神
	骨の女	Bone Woman	不明	
	石の女	Stone Woman	不明	
中央	ノラヴァ	Nolava	造語	Avalon の逆さ読み
	アヴァロンの女神	Lady of Avalon	小説『アヴァロンの霧』?	
	ブリタニア	Britannia	イギリスの神格化	グレート・ブリテン島の女神
	ブリジット・アナ	Brigit Ana	造語	グレート・ブリテン島の女神
	ブリジットの島の女神	Lady of the Brigit's Isle	造語	グレート・ブリテン島の女神
	モーガン・ラ・フェイ	Morgen la Fey	アーサー王伝説	アーサーの異父姉
9人のモーガン	Nine Morgens	マーリン物語	アヴァロン島の女司祭、9人姉妹	

* 『侵略の書』はアイルランド、『マビノギオン』『レンスターの書』『マーリン物語』はウェールズの伝承物語。
 * Jones [2001, 2006] の他、池上 [2011]、高平&女神探求会 [1998]、ブレキリアン [[2011(1993)] を参照した。
 * Thisis, Cliton, Thetis, Gliten, Glitones, Moronoe, Mazoe, Tyronoe は、モーガン・ラ・フェイ以外のモーガン。

表 4-1 2010 年グラストンベリー女神運動参加者一覧 *()内は男性の数

グラストンベリーと周辺町村在住 ⁽¹⁾	プリーステス ⁽³⁾	28(2)	43(8)
	オランダのプリーステス ⁽⁴⁾	1	
	プリーステス以外の関係者 ⁽⁵⁾	4(2)	
	プリーステスの家族 ⁽⁵⁾	7(4)	
	その他 ⁽⁶⁾	3	
ロンドン在住	プリーステス	9(1)	10(1)
	その他 ⁽⁷⁾	1	
近隣地域在住 ⁽²⁾	プリーステス	19(3)	25(6)
	プリーステス以外の関係者	1(1)	
	プリーステスの家族	5(2)	
それ以外のイギリス在住	プリーステス	9	13(2)
	プリーステス以外の関係者	1(1)	
	プリーステスの家族	1(1)	
	その他 ⁽⁸⁾	2(1)	
海外在住	プリーステス	24(2)	28(2)
	オランダのプリーステス	2	
	その他 ⁽⁹⁾	2	
合計			119(19)

- (1) 日常、気軽に車でスーパーに買い物に行くなど、生活圏内の町村。具体的にはミア、ストリート、ボルトンズバラ、シェプトン・マレット。
- (2) イングランド南西部や南ウェールズなど、気軽に日帰りできる地域。
- (3) ジョーンズも含む。
- (4) グラストンベリー女神運動のプリーステス・トレーニングを受講したオランダ人がオランダで始めたプリーステス・トレーニングの受講者。通常はグラストンベリーのプリーステス・トレーニング受講者と同等に扱われる。
- (5) プリーステス・トレーニング未受講のプリーステスの家族のうち、女神神殿のメリッサなど、プリーステスである家族抜きでも、自分から積極的に関わっている人は、「プリーステスの家族」ではなく、「プリーステス以外の関係者」に含めた。
- (6) ジョーンズの古くからの友人たち。
- (7) ロンドンに暮らすプリーステスたちとともに、ロンドンでグラストンベリー女神運動の儀式やワークショップを企画運営している。
- (8) 女神カンファレンスとプリーステスやメリッサの親睦を深める「マドロンの日」の常連の老夫婦で、ジョーンズの「ブリジット・リトリート」というワークショップを受講した。その受講修了者は、「プリーステス・オヴ・ブリジッド」を名乗ることができ、夫婦もそう名乗ることもある。
- (9) 1人は第1回女神カンファレンスからほぼ毎年参加し、受付を担当している、カナダ在住の女性。もう1人は、ジョーンズの著書に強い影響を受け、女神神殿やプリーステス・トレーニングなどグラストンベリー女神運動と同様の活動をしているアメリカ在住の女性。

表 4-2 2010 年グラストンベリー女神運動参加者年齢別一覧

年代	全体		全プリーステス		グラストンベリー在住 の全プリーステス	
	(人)	(%)	(人)	(%)	(人)	(%)
10代	5	4%	0	0%	0	0%
20代	3	3%	2	2%	0	0%
30代	22	18%	21	23%	5	17%
40代	38	32%	34	37%	12	41%
50代	27	23%	20	22%	6	21%
60代	21	17%	14	15%	6	21%
70代	2	2%	0	0%	0	0%
不明	1	1%	1	1%	0	0%
合計	119	100%	92	100%	29	100%

* 「全プリーステス」には、オランダのプリーステスも含めてある。

表 4-3 2010 年グラストンベリー女神運動参加者のうち海外在住者の居住地一覧

*()内は、居住国の国籍以外を保持している人の数とその国籍

国名	プリーステス	その他
オランダ	4人	2人 (*3)
ドイツ	3人 (1人はイギリス人)	
スウェーデン	2人	
スペイン	3人 (1人はイギリス人)	
イタリア	1人	
フランス	1人	
エジプト	1人 (ハンガリー人) (*2)	
アメリカ	6人 (1人はアイルランド人)	1人
カナダ	2人 (1人はイギリス人)	1人 (イギリス人)
アルゼンチン	1人 (*1)	
オーストラリア	1人 (*1)	

*1 プリーステス・トレーニング受講時はグラストンベリー在住

*2 プリーステス・トレーニング受講時はハンガリー在住

*3 オランダのプリーステス・トレーニング受講者

表 4-4 主な収入からみる職業別人数

(ジョーンズとプリーステスの家族を除くグラストンベリー在住者)

職業	人数	具体的な内容 *()内の数字は複数いる場合の人数
会社勤め	4	看護師(2)、法律関係、チャリティ
自営(一般)	5	衣装製作、ウェブデザイン、個人教師、ドラム講師、庭師
自営(スピリチュアル)	6	セラピスト(3)、占星術師など、霊媒、フリーペーパー編集
パート掛け持ち	2	清掃、アイロンがけなど
主婦	3	
家賃収入+α	2	
退職、年金	4	現役時代の職業：看護師、医療関係、軍隊など
給付金	8	
不明	1	
合計	35	

*セラピストの3人は副収入あり

表 4-6 季節の祝祭の筆者の調査状況 *●は筆者が該当、または参加したもの

	2005	2006	2006	2006	2006	2008	2009
	12/20	4/30	6/21	8/1	9/22	7/29	2/1
	冬至	バレンタイン	夏至	ラマス	秋分	ラマス	イボルク
一参加者として参加	●	●	●	●	●	●	●
メリッサとして参加							
打ち合わせ							
打ち合わせ後の昼食会							
昼食会後の散歩							
	2009	2009	2009	2009	2009	2009	2010
	3/20	4/30	6/20	7/28	10/31	12/21	2/1
	春分	バレンタイン	夏至	ラマス	ソーウイン	冬至	イボルク
一参加者として参加			●	●	●		
メリッサとして参加	●	●				●	●
打ち合わせ						●	
打ち合わせ後の昼食会							
昼食会後の散歩							
	2010	2010	2010	2010	2010	2010	2011
	3/20	6/21	8/1	9/22	10/31	12/21	9/23
	春分	夏至	ラマス	秋分	ソーウイン	冬至	秋分
一参加者として参加		●	●				●
メリッサとして参加	●			●	●	●	
打ち合わせ	●			●	●		
打ち合わせ後の昼食会	●			●	●		
昼食会後の散歩	●			●			

表 4-5 2010 年イベントスケジュール

(個人ではなく、女神神殿として実施し、公に公開されていたもののみ)

日付	イベント	金額
1月2日	セレモニアル・ヒーリング	最低寄付金 10 ポンド
1月15日	新月のヒーリング	最低寄付金 5 ポンド
2月1日	インボルクの祝祭	寄付金
2月14日	新月のヒーリング	最低寄付金 5 ポンド
2月20日	セレモニアル・ヒーリング	最低寄付金 10 ポンド
2月27日	アヴァロンの女神を称える儀式	寄付金
3月13日	バザー	無料
3月15日	新月のヒーリング	最低寄付金 5 ポンド
3月20日	春分の祝祭	寄付金
4月10日	セレモニアル・ヒーリング	最低寄付金 10 ポンド
4月14日	新月のヒーリング	最低寄付金 5 ポンド
4月28日	満月の祝祭と女神の体現	10 ポンド
4月30日	ベルテーンの祝祭	寄付金
5月14日	新月のヒーリング	最低寄付金 5 ポンド
5月31日	セレモニアル・ヒーリング	最低寄付金 10 ポンド
6月12日	新月のヒーリング	最低寄付金 5 ポンド
6月21日	夏至の祝祭	寄付金
7月11日	新月のヒーリング	最低寄付金 5 ポンド
7月28日～8月1日	女神カンファレンス	予約時期、経済状況による
8月1日	ラマスの祝祭	寄付金
8月10日	新月のヒーリング	最低寄付金 5 ポンド
8月21日	セレモニアル・ヒーリング	最低寄付金 10 ポンド
9月5日	プリーステス・トレーニング説明会	10 ポンド
9月8日	新月のヒーリング	最低寄付金 5 ポンド
9月22日	秋分の祝祭	寄付金
10月7日	新月のヒーリング	最低寄付金 5 ポンド
10月9日	セレモニアル・ヒーリング	最低寄付金 10 ポンド
10月31日	ソーウィンの祝祭	寄付金
11月6日	新月のヒーリング	最低寄付金 5 ポンド
12月5日	新月のヒーリング	最低寄付金 5 ポンド
12月21日	冬至の祝祭	寄付金

* 「最低寄付金」とは、最低の額を示した寄付金(minimum donation)。「寄付」なのに金額が指定されるのは、腑に落ちない気もするが、イギリスでは何かへのお金を集めたいときに、主催者は一切利益を得ず、全額を機関なりプロジェクトに寄付するという形で、しばしば行われる。ただし、筆者が観察した限り、示された額を寄付するかどうかは、寄付金を入れる状況によって大きく異なっていた。つまり衆人環視の状況の場合、示された額を入れるが、誰も見ていない場合、寄付しない人も少なくなかった。

表 5-1 2010 年、グラストンベリー女神運動の運営担当者の一覧 (2010 年にグラストンベリー在住者は色つきのセル、本文中に登場した人は記名)

番号	名前	担当	セレモニ アリスト	GCプリ ーステス	GT 理事	GT ボラン ティアー コーディネ ーター	ブリーステ ス・ト レーニン グ講師	ニュー スレ ター編 集	ウェブ サイ ト担 当	季節の祝 祭企 画担 任者	新月のヒ ーリン グ担 任者	ヒーリン グの 日担 任者	マドロ ンの 日担 任者	GT 模 様替 え 担 任者
1	ジョーンズ		●		●		●					●		
12	ソフィー		●		●									
	ソフィーの娘		●											
			●											
			●											
7	サラ			●	●	●								
16	ヘレン				●		●			●				
21	リズ			●	●									
10	スー				●						●			
13	トム										●			
4	カリン			●										
				●										
	ハリーの元妻								●					
2	マイク			●	●									
5	クレア		●											●
19	マリカ		●		●			●						
			●											
			●											
					●									
					●									
8	ジョー												●	
				●										
				●										
				●										
				●										

* GC=女神カンファレンス、GT=女神神殿、マドロンの日=定期的な寄付者、積極的な参加者、その家族が親睦を深める日

* グラストンベリーと周辺在住者・・・のべ25人、それ以外・・・のべ14人

* 番号は「登場人物一覧」に対応

表 5-2 女神カンファレンスと季節の祝祭の運営者の居住地別人数

	女神カンファレンス (2006, 2008, 2009, 2010 年の 4 回)	季節の祝祭 (2005～11 年の合計 21 回)
グラストンベリーと周辺在住	のべ 52 人(46.4%)	のべ 91 人(61.5%)
それ以外在住	のべ 60 人(53.6%)	のべ 57 人(38.5%)
合計	のべ 112 人	のべ 148 人

表 5-3 グラストンベリーと周辺在住者の出身一覧 (単位は人)

地域	属性	プリーステス	オランダの プリーステス	プリーステス 以外の関係者	プリース テス家族	その他	合計
グラストンベリー					1		1
南西部地方		2			2		4
ロンドン		8		1	1		10
南東部地方		2		2	1		5
西ミッドランド地方		4					4
北西部地方		2					2
ヨークシャーと 北リンカンシャー		1					1
北東部地方		2					2
ウェールズ					1		1
スコットランド					1		1
海外(イギリス国籍)		1(アルゼンチン、フランス)				1(マルタ)	2
海外(外国籍)		1(アメリカ)	1(オランダ)		1(チェコ)		3
不明		5				2	7
合計		28	1	3	8	3	43

表6-1 話の共有の参加者一覧

年	2009	2010	2010	2010	2009	2010	2010	2010	2010	2010	2010	2010	2010	2010	2010	2010	2010	2010	2010	2010
月日	12/21	3/20	9/22	10/31	11/26	1/12	1/26	2/9	5/17	10/11	10/7	11/6	12/5	1/4	6/3	9/1	9/28	11/3		
	季節の祝祭打ち合わせ				ポトラック・サパー						暗月の集い				活動共有サークル					
	冬至	春分	秋分	ソーウイン																
プリーステス																				
1	キャンシー・ジョーンズ	◎																		
7	サラ	●		◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎										
16	ヘレン				●	●														
3	エマ	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
4	カリン					●	●	●							●	◎	◎	◎	◎	◎
21	リズ	●	●	●		●	●								●		●	●		
20	メル			●		●		●			◎	◎	◎	◎				●	●	
9	シーラ				●		●		●											
22	ローズ	●		●		●				●					●					
			●			●	●				●									●
			◎	●			●													
13	トム	●		●	●															
10	スー	●		●																
												●	●	●						
											●		●	●						
		●											●							
5	クレア		●	●								●	●	●						
			●	●																
		●			●	●														
19	マリカ		●																	
8	ジョー		●																	
			●																	
6	コリン			●																
17	ホリー				●															
				●										●						
プリーステス以外(ともにメリッサ)																				
		●			●					●										
プリーステスの家族																				
	リズの夫					●	●													●
	サラの恋人						●													
	カリンの恋人																		●	●
積極的な参加者以外																				
	PTのみの参加者				●															●
	PTのみの参加者						●													
	PTのみの参加者							●												
	PTのみの参加者										●									
	PTのみの参加者											●								
	クレアの友人													●						

* 本文中に登場した人とその関係者のみ名前を記した。
 * ◎は主催者、●は参加者
 * []はそのときグラストンベリーに在住していた人
 * 名前の横の番号は「登場人物一覧」に対応

表 6-2 話の共有と活動共有サークルの参加人数一覧 (筆者含む)

季節の祝祭の打ち合わせ前(*1)	
日づけ	参加人数(人)
2009/12/21	11 (6, 5)
2010/3/20	11 (6, 5)
2010/9/22	12 (9, 3)
2010/10/31	8 (4, 4)
参加者の平均参加人数	42/4=10.5(人)
グラストンベリー在住者の全参加者に占める割合	25/42=0.595

暗月の集まり	
日づけ	参加人数(人)
2010/10/7	5 (5, 0)
2010/11/6	7 (4, 3)
2010/12/5	8 (6, 2)
2011/1/4	9 (7, 1)
参加者の平均参加人数	29/4=7.25(人)
グラストンベリー在住者の全参加者に占める割合	23/29=0.77

活動共有サークル	
日づけ	参加人数(人)
2010/6/3	5 (5, 0)
2010/9/1	3 (3, 0)
2010/9/28	9 (9, 0) (*3)
2010/11/3	4 (4, 0)
参加者の平均参加人数	21/4=5.25(人)
グラストンベリー在住者の全参加者に占める割合	21/21=1

ポトラック・サパー	
日づけ	参加人数(人)
2009/11/26	10 (7, 3)
2010/1/12	10 (10, 0)
2010/1/26	12 (11, 1) (*2)
2010/2/9	5 (5, 0)
2010/2/23	キャンセル
2010/3/9	キャンセル
2010/3/29	キャンセル
2010/5/17	5 (4, 1)
2010/6/14	キャンセル
2010/9/13	キャンセル
2010/10/11	6 (6, 0)
2010/11/8	キャンセル
2010/12/7	キャンセル
参加者の平均参加人数	48/6=8(人)
グラストンベリー在住者の全参加者に占める割合	43/48=0.895

4つの集まりの平均人数・・・140/18=7.8(人)

カッコ内の数字のうち、前者は在住者で後者は非在住者。なお、この他、筆者は参加しなかったが、2009/12/29にポトラックサパー（参加人数3人）が、2010/5/10に活動共有サークル（参加人数4人）が開かれている。

- *1 ジョーンズの依頼で参加していたカメラマンの数は含めていない。
- *2 話の共有は行われなかった。
- *3 パブでの夕食会の日。

表 6-3 パーティへの参加人数

イベント(主役名)(*1)	日づけ	積極的な参加者の参加人数(人)(*2)	全参加人数(人)
新居お披露目(リズ)	2010/1/17	12 (12, 0)	46(*3)
新居お披露目(サラ)	2010/10/2	25 (19, 6)	36
誕生日会(カリン)	2010/6/4	9 (8, 1)	22(*4)
誕生日会(エマ)	2010/11/19	17 (15, 2)	18
誕生日会&新居お披露目	2011/9/17	18 (16, 2)	26
大晦日(サラ)	2010/12/31	15 (14, 1)	18

○ 積極的な参加者の平均参加人数・・・ $96/6=16$ (人)

○ グラストンベリー在住の積極的な参加者の全積極的な参加者に占める割合・・・ $84/96=0.875$

この他、正確な参加人数は不明だが、少なくとも新居お披露目パーティが2回（筆者は一部参加）、誕生日会（筆者は不参加）が1回、大晦日のパーティ（筆者は不参加）が1回開かれている。

*1 本論に登場した人が主役の場合、カッコ内にその名前を記入。

*2 筆者はメリッサをしていたため、この表中ではこちらの人数に含めている。またカッコ内の数は、順に在住者と非在住者の人数。

*3 主催者夫婦が、アマチュアの楽団や隣近所も招いて、盛大に開いたため、女神運動の積極的な参加者以外の参加人数が相対的に多くなっている。

*4 グラストンベリーを訪問中のエマの長女、長男、次男、孫、合わせて4人が参加したため、女神運動の積極的な参加者以外の参加人数が相対的に多くなっている。



写真 2-1 魔女グッズ店の一角



写真 2-2 魔女グッズ店とたたずむ魔女の店員



写真 2-3
車用ステッカー



写真 2-4 ネイティブ・アメリカン風
アクセサリー



写真 2-5 パワーストーンつかみとり

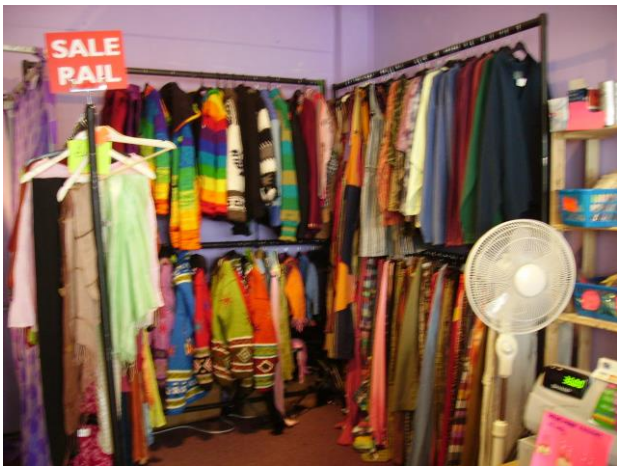


写真 2-6 ヒッピー風の服(2007年頃閉店)



写真 2-7 インドやチベットのグッズの店



写真 2-8 魔女グッズ店のショーウィンドー



写真 2-9 パワーストーンの店



写真 2-10 魔女グッズ店の
立て看板



写真 2-11 ヒーリング・センターの
立て看板



写真 2-12 タトゥーの店の看板



写真 2-13 麻薬吸引器の店の看板



写真 2-14 小さな店が立ち並ぶ通り



写真 3-1 グラストンベリー・エクスペリエンス (2011/9/29)



写真 3-2 女神神殿外観 (2011/9/10)



写真 3-3 ベルターンの女神神殿右方全景 (2010/5/23)



写真 3-4 アヴァロンの女神の絵と人形 (2009/12/21)



写真 3-5 冬至の右の祭壇 (2009/12/21)



写真 3-6 冬至の左の祭壇 (2009/12/21)



写真 3-7 床の冬至の祭壇 (2009/12/21)



写真 3-8 9人のモーガン (2010/3/20)

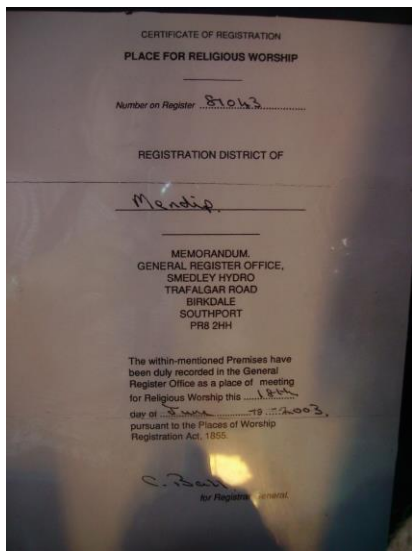


写真 3-9 登録証明書(2008年8月)



写真 3-10 物品販売コーナー (2009/6/25)



写真 3-11 ハイ・ストリートを行く (2010/8/1)



写真 3-12 チャリス・ウェルに立ち寄る
(2009/8/2)



写真 3-13 トールの頂上へと向かう (2006/8/6)



写真 3-14 女神と男性陣 (2009/8/2)



写真 4-1 話し合いで話題になっていた「たまご」 (2010/3/20)



写真 4-2 春分のお散歩 (2010/3/20)



写真 4-3 インボルクの式の直前の様子 (2010/2/1)



写真 4-4 女神会館の外観 (2009/6/16)



写真 4-5 インボルクの正面兼水の祭壇 (2010/2/1)



写真 4-6 インボルクの火の祭壇 (2010/2/1)



写真 4-7 インボルクの地の祭壇 (2010/2/1)



写真 4-8 インボルクの風の祭壇 (2010/2/1)



写真 4-9 ブライディ・クロス作り (2010/2/1)



写真 4-10 ブライディ・クロス完成品 (2010/2/1)

※ 撮影は全て筆者

＝登場人物一覧＝

	年齢	性別	出身地	居住地	その他
女神運動関係者					
1 キャシー・ジョーンズ	60代	女	北東部地方	グラストンベリー	グラストンベリー女神運動を始めた人。
2 マイク・ジョーンズ	50代	男	ロンドン	グラストンベリー	キャシーの夫。ジ・オラクル編集長。
3 エマ	50代	女	西ミッドランド地方	グラストンベリー	詩人のプリーステス。
4 カリン	40代	女	オランダ	グラストンベリー	オランダのプリーステス。
5 クレア	40代	女	不明	南西部地方	アマチュア画家のプリーステス。2011年、グラストンベリーに移住。
6 コリン	40代	男	北西部地方	ロンドン	ロンドン在住のプリースト。出版・装丁業。
7 サラ	50代	女	ロンドン	グラストンベリー	グラストンベリー女神運動に、非常に熱心に携わるプリーステス。占星術師、カウンセラー、女神風の儀式を執り行う仕事などをしている。
8 ジョー	50代	女	不明	南西部地方	グラストンベリーによくやってくるプリーステスの1人。教師。
9 シーラ	60代	女	ロンドン	グラストンベリー	退職後、ヒーラーをしているプリーステス。
10 スー	30代	女	西ミッドランド地方	グラストンベリー	元看護師のプリーステス。トムの子。
11 ソニア	40代	女	南西部地方	サマーセット州	元保育園の看護師のプリーステス。
12 ソフィー	60代	女	南米、フランス	グラストンベリー	歌手で霊媒師のプリーステス。海外育ちのイギリス人。
13 トム	40代	男	北西部地方	グラストンベリー	元看護師のプリースト。スーの夫。
14 パメラ	40代	女	アメリカ	ロンドン	ロンドンに暮らすプリーステス。専業主婦。
15 ハリー	60代	女	西ミッドランド地方	ブリストル	グラストンベリーやハンガリーに暮らしていたプリースト。
16 ヘレン	60代	女	アメリカ	グラストンベリー	プリーステス・トレナーニング講師のプリーステス。アメリカ人。
17 ホリー	60代	女	ブリストル	サマーセット州	かつてグラストンベリーに暮らし、筆者の隣家でB&Bを営んでいたプリーステス。ヘイゼルと親しい。2012年死去。
18 マーラ	60代	女	西ミッドランド地方	西ミッドランド地方	トランスジェンダーのプリーステス。グラストンベリーへの移住を希望。
19 マリカ	40代	女	オランダ	南西部地方	イギリスに暮らすオランダ人のプリーステス。2011年、グラストンベリーに移住。
20 メル	40代	女	サマーセット州	グラストンベリー	踊りが得意なプリーステス。
21 リズ	40代	女	南東部地方	グラストンベリー	個人教師のプリーステス。
22 ローズ	30代	女	ロンドン	グラストンベリー	歌手のプリーステス。

その他の人々		年齢	性別	出身地	居住地	その他
24	ハイゼル	50代	女	ロンドン近郊	グラストンベリー	筆者の大家。一時期、アヴァロン島協会で働く。
25	ルビー	60代	女	北西部地方	グラストンベリー	筆者が一時居候していた家の人。元看護師兼大学講師。
26	バリー・テイラー	80代	男	ロンドン	グラストンベリー	元実業家で、グラストンベリーのオルタナティブ産業発展の立役者の1人。
27	ハリーン・コッパヤン	／	女	オランダ	(天国?)	グラストンベリー・エクスピリエンスの所有者。テイラーと同じ年だが、1998年に死去。
28	ウィル	30代	男	グラストンベリー	グラストンベリー	ハイゼルの隣人。エンジニア。リサの夫。
29	リサ	20代	女	南西部地方	グラストンベリー	ハイゼルの隣人。専業主婦。ウィルの妻。
30	ルイス氏	50代	男	グラストンベリー	グラストンベリー	町議員でカフェを営む地元民。
31	ロイド氏	70代	男	グラストンベリー	グラストンベリー	町議員でレストランを営む地元民。
32	スミス氏	60代	男	グラストンベリー	グラストンベリー	町議員でミネラル・ウォーターの販売を手がける地元民。
33	ケリー氏	60代	男	グラストンベリー	グラストンベリー	町議員で地元企業を退職した地元民。
34	ジム	30代	男	グラストンベリー	グラストンベリー	図書館勤務の地元民。

＝用語集＝

アーサー王	King Arthur	ケルト伝説の最大の英雄。グラストンベリーの一帯で活躍したといわれている。
アヴァロン大学	University of Avalon	オルタナティブ・スピリチュアリティ系のワークショップを企画運営する団体。後のアヴァロン島協会。
アヴァロン島	Isle of Avalon	ケルト伝説で西のほうにあるといわれる魔法の島。死者が復活のときを待つとされる。現実の世界グラストンベリーと重なり合っているとされる。
アヴァロン島協会	Isle of Avalon Foundation	オルタナティブ・スピリチュアリティ系のワークショップを企画運営する団体。ヘイゼルが一時、代表を務めていた。
アヴァロン図書館	Library of Avalon	秘教思想関連書籍を集めた私設図書館。1988年開館。
『アヴァロンの霧』	The Mist of Avalon	アーサー王伝説を女性の視点から描いた小説。多くの女神運動の実践者の愛読書。
アヴァロンの女神	Lady of Avalon	グラストンベリー女神運動の主女神。
アセンブリー・ルーム	Assembly Room	オルタナティブ・スピリチュアリティ関係のイベントが多く開かれている町の集会所。
アリアドネ	Ariadne	ギリシヤ神話に登場する、クレタ島の王女。迷宮に閉じ込められた怪物ミノタウロスを退治しに来たテセウスを助ける。
アリアンロード	Arianrhod	マビノギオンに出てくる運命を司る女神。
アリマテアのヨセフ	Joseph of Arimathea	キリストを十字架から下ろしたことで知られる聖人。イギリスでは、キリストの死後、聖杯をもってグラストンベリーにやってきて、イングランド初の教会をつくった人物として知られる。
暗月の集い	Dark Moon Gathering	グラストンベリー女神運動の中で、2010年10月から始まった集まり。
意識覚醒グループ	consciousness raising group	1960年代後半のアメリカのフェミニストがよく取り入れていた手法。定期的に、個人が自分の体験や感情を語り、他者と共有することで、意識の改革を目指そうとする。
イングランド国教会	Church of England	イングランドの(女)王を長とするキリスト教の一派。イングランド以外ではアングリカン(Anglican)、または聖公会として知られる。
インセンス	incense	乾いたハーブを混ぜたもの。燃やして香りを楽しむ。
インボルク	Imbolc	2月1日。ブリジットの日。冬が終わり、春になっていく、つまり生命が育っていくことを祝う。
ヴィジュアルイゼーション	visualisation	瞑想しながら、頭の中で何かのイメージをつくる。イメージ・トレーニングのようなもの。ファンタジー的な物語の語りやドラマの音を聞きながら行うことが多い。
ウィッカ	Wicca	ジェラルド・ガードナーが、魔女とされる老女から集めた民俗学的な知識と自らのオカルト趣味を融合させて創り出した、今日もともよく広がっている魔術。少人数の集団で行う儀式を重視する。
ウェアリーオールルの丘	Wearyall Hill	アリマテアのヨセフが聖なる山査子を植えたことで知られる丘。この山査子はクリスマスと復活祭の時期に花を咲かすことで有名だが、2010年12月、何者かによって切り倒され、大騒動になった。

オスターラ	Ostara	春分。新しい生命の始まり、つまり草木が芽吹きなどを祝う。
ガイア仮説(ガイア理論)	Gaia hypothesis (Gais theory)	1960年代に科学者であるジェームズ・ラヴロックによって提唱された説で、地球が1つの生命体(有機体)のように自己調節の能力をもってしているとみなす。
活動共有サークル	Activity Sharing Circle	グラストンベリー女神運動の中で、2010年5月から始まった集まり。
季節の祝祭	seasonal festival	ケルト暦に基づき、6〜7週間ごとの年8回のお祝い。
給付金	benefit	政府から支給される生活費。年金等も含まれるが、通常は日本でいう生活保護費を指す。
巨石文化	megalithic culture	一般的には、新石器時代の大きな石で作られた建造物のことを指す。作られた目的がよくわからないものが多く、謎と神祕のイメージがまとわりつく。
グウィナップナド	Gwyn ap Nudd	トールの下に暮らすとされる妖精王。
9人のモーガン	Nine Morgens	12世紀に編纂された「マーリン物語」というイギリスの伝承集に登場する9人姉妹の妖精たち。グラストンベリー女神運動では女神とされてきた。
グラストンベリー・エクスピリエンス	Glastonbury Experience	町の中心部にある、オルタナティブ・スピリチュアリティ関係の店をテナントとして入れた複合施設。コッペヤンが始め、テイラーが軌道に乗せた。
グラストンベリー修道院	Glastonbury Abbey	中世に大繁栄を誇った。町の中心にその跡が残る。
(グラストンベリー・トール	Glastonbury Tor	グラストンベリーの郊外の丘。頂に塔をいただく町のシンボル。頂上からは辺り一帯の平原が見晴らせて、とても心地よい。
グラストンベリー・フェスティヴァル	Glastonbury Festival	ヨーロッパ最大の野外ロック・フェスティヴァル。
(グラストンベリー)女神カンファレンス	(Glastonbury) Goddess Conference	年1回のグラストンベリー女神運動の大きなイベント。
(グラストンベリー)女神神殿	(Glastonbury) Goddess Temple	ジョーンズ創設の女神を祀る場所。独立した建物ではなく、グラストンベリー・エクスピリエンス内の建物の一部屋。
グリーンランズ農場	Greenlands Farm	グラストンベリーの郊外にあった農場。1985年頃、トラベラーの溜まり場となる。
グレナム・コモン	Greenham Common	イングランド南部にある、アメリカ軍の基地がある町。1980年代、女性たちによる激しい反核運動が起こった。
ケルト暦	Celtic calendar	古代ケルト人が使っていたとされる暦で、8つの季節に分かれていたとされる。この8つの季節を円で表したものは年輪 (wheel of the year) と呼ばれる。
合同改革教会(URC)	United Reformed Church	1972年にイングランドとウェールズの長老派と会衆派が合併して成立したプロテスタント教会。ただし、スコットランドでは合併しておらず、スコットランド国教会は長老派である。
菜食主義	vegetarianism	動物由来の食品を摂らない。ただし、魚、乳製品、卵など、一部は食べる人もいる。
サマーセット田園生活博物館	Somerset Rural Life Museum	昔の農民の生活に使われていた農機具などが展示されている町にある施設。民俗資料館に近い。
『ジ・オラクル』	The Oracle	オルタナティブ・スピリチュアリティ系のイベントのフリーペーパー。マイクが編集長。

シャーマン	shaman	「シャーマンの旅」という言葉でよく使われる。オルタナティブ・スピリチュアリティの文脈において、この実践は、ネイティブ・アメリカン文化由来の手法として、瞑想の中で別の世界に旅をするイメージを創り出し、そのような作業を通じて自己変容を目指すなど、サイコセラピー的な側面が強い。
巡礼者受付センター	Pilgrim Reception Centre	テイラー夫妻が始めた、観光案内所。
心霊主義	Spiritualism	霊媒を介して死者の霊と交信すること。
水脈探し	dowsing	棒を用いて、地上から地中にある水脈を見つけること。
スターホーク	Starhawk	女神運動のスター。アメリカ人。環境保護活動家として知られる。
ストーンサークル	stone circle	石を環状に並べた古代の遺跡。イギリスでは南西部地方ウィルトシャー州のストーンヘンゲンジやエイブベリーのものが有名。
ストリート	Street	グラストンベリーの隣村。世界的な靴メーカー、クラークスの本社がある。
聖劇	sacred drama	神話に題材をとった劇。
絶対菜食主義	vegan	乳製品や卵、蜂蜜など、動物由来の食品を一切摂らない、いわゆるビーガン。
セドナ	Sedona	アメリカのアリゾナ州にある有名なパワースポット。
セレモニアリスト	Ceremonialist	女神カンファレンスの儀式を創り出す人々。実質的な運営者といえる。
『セントラル・サマーセット・ガゼット』	Central Somerset Gazette	地元の週間新聞。主にグラストンベリーと隣村ストリートの事柄を扱う。
ソーウイン	Samhain	10月31日。死者を弔う。今では形を変えて、ハロウインとして祝われることも増えている。
地形(風景、景観)	landscape	丘や谷、川や山など、地球上のでこぼこの形。
チャリス・ウエル／聖杯の泉／赤の泉	Chalice Well, Red Spring	グラストンベリーの泉。鉄分を含んでいるため、水はわずかに赤っぽく、血を薄めた味がする。
超越瞑想(TM)	transcendental ,meditation	口をつぐんで真言を唱えるなどして、精神的、肉体的に自己を解き放つことを目指す瞑想。
低所得者用住宅	council house	低所得者向けの賃貸用公営住宅。払い下げられることも少なくない。
デメテル	Demeter	ギリシヤ神話の豊饒の女神。ペルセポネの母で、娘が連れ去られたとき、悲しみのあまり、大地に作物が実らなくなってしまう、大騒ぎになった。
トラベラー	traveler	現在では主に、キャンピングカーやバスなどの乗り物で生活する人のことを指す。
ドリームキャッチャー	dream catcher	オルタナティブ・スピリチュアリティの実践者に愛好される、クモの巣状に細いひもを張った輪に羽根などをつけた、ネイティブ・アメリカン文化のお守り。
ドルイド	Druid	ケルト人の信仰ドルイド教の神官のこと。現在みられるドルイドは、その復興を目指す人々で、主に屋外で白いローブを着て、季節の祝祭を祝ったりしている。
ニューエイジ	New Age	宗教、医療、食事など、多岐の分野にわたって、規範とされているやり方とは別のやり方を求める。直接の起源は、1960年代後半に盛り上がった対抗文化運動だとされる。

ネオパイガニズム	Neopaganism	ペイガニズムの復興運動。新異教主義と呼ばれることもある。
話の共有	sharing	複数の人々が順番に自分の思いを率直に語り、他の人はその話にただ耳を傾けること。
B&B	bed and breakfast	イギリスでよくみられる、自宅の一部を改築した朝食つきの宿泊施設。
秘教思想	esotericism	ヨーロッパで発展した、自然の中の潜在力を認め、そこに操作的に関与することで自らを変容させるような術と知識。
ヒッピー	hippy	1960年代後半に出現した、既成の価値観や規範を拒否した人々。しばしば幻覚剤を使用していた。
ピルトン	Pilton	グラストンベリー・フェスティヴァルが開催されている村の名前。行政的には、グラストンベリーではなく、シェプトン・マレットに属する。
フェイスブック	Facebook	世界最大のソーシャル・ネットワーク・サービス。
フェミニスト魔女術	feminist witchcraft	フェミニズムと魔女術を合わせたような新しい宗教的实践。近年ではこの名称が使われることは少なくともなってきた。
ブライディ	Bride	ケルト神話の女神で、キリスト教の聖女。ブリジットの別名。
ブライドの塚	Bride's Mound	グラストンベリーの野原。ブリジット来訪伝説がある。
プリーステス、プリースト	Priest/ess	グラストンベリー女神運動のプリーステス・トレーニングの受講者、受講修了者の名称。
プリーステス・トレーニング	Priestess Training	グラストンベリー女神運動の講座。ジョーンズの女神体系を学ぶだけでなく、自己変容を目指すサイコロラビーのようでもある。
パイガニズム	Paganism	キリスト教、ユダヤ教、イスラーム教以外の、多神教的な信仰のことを指すこともあるが、本稿ではヨーロッパにかつてあってたとえられる信仰に限定して用いている。異教主義とも呼ばれる。
ベジタリアンカフェ	vegetarian café	動物性由来の食べ物を出さない店。
ペルセポネ	Persephone	デメテルとゼウスの娘で、冥界を治めるハデスに連れ去られ、妻となる。
ベルテーン	Beltane	4月30日。女神と男神の結婚と、そこから生まれる豊饒を祝う。伝統的には焚き火をたき、その上を飛び越える形で祝う。また柱を色鮮やかなリボンで巻き上げて飾りつけていくメイポールのダンスが開かれたりもする。五月祭としても知られる。
ポトラックサパー	Potluck Supper	グラストンベリー女神運動の中で、2009年11月から始まった持ち寄りの夕食会。
ホワイト・スプリング／白の泉	White Spring	グラストンベリーの泉。カルシウム分が多く、水はほんのり白味を帯びている。
マーガレット・サッチャー	Margaret Thatcher	イギリス初の女性首相(1979-90)。強硬な経済政策で知られる。いわずとした鉄の女。
まじないの輪	Medicine Wheel	ネイティブ・アメリカン文化にある方角と色を対応させた輪。
魔女術	Witchcraft	ネオパイガニズムの1つ。色々な宗派があるが、もともとも知られているのはウィッカ。一方、主にハーブ療法やまじないに携わる1人で活動する魔女ヘッジウィッチもいる。魔女には男性性もある。

『マビノギオン』	Mabinogion	ウェールズの伝承物語集。
マボン	Mabon	秋分。収穫の時期を祝う。
ミステリー・サークル	crop circle	小麦、大麦、とうもろこし、菜の花などの畑に、6～8月に出現する幾何学模様で、ウィルトシャー州によく現れる。かつては宇宙人の仕業とされた。
女神運動	Goddess movement	フェミニズムとネオパイガニズムを合わせたような新しい実践。最近では宗教的な傾向が強い。
女神会館	Goddess Hall	グラストンベリー女神運動のイベントが催される建物。元教会の会館。
女神学	thealogy	フェミニスト神学、つまりキリスト教内部におけるフェミニズムから離れ、ネオパイガニズムの女神をシンボリックに取り入れた。実践より、思想的な側面が強い。デイレイ(Daly)に影響されたGoldenberg[1979: 96]の造語である。
(女神の)体現	embodiment	儀式やワークショップの場で、女神の役をすること。憑依とは少し違うよう。
メリッサ	Melissa	グラストンベリー女神運動内でのボランティアの名称。
モーガン・ル・フェイ	Morgen le Fey	9人のモーガンの1人で、もともとよく知られる。アーサー王の父違いの姉とされ、妖姫モーガンとも呼ばれる。
ユール	Yule	冬至。1年で最も日が短い日。これから日が長くなっていき、物事が再生していくことを祝う。
ラマス／ルナサ	Lammas / Lughnasadh	8月1日。収穫の時期の始まりを祝う。
リーサ	Litha	夏至。1年で最も昼間が長い日であること、収穫の時期に向かうことを祝う。
リクレイミング	Reclaiming	スターホークが始めたグループ。現在では組織化され、アメリカ以外にも広がっている。
リトリート	retreat	瞑想など、スピリチュアルなことをしてゆったりと過ごす休暇のこと。
りんご酒	cider	サマーセット州の名産品の発泡酒。フランスのノルマンディも産地であり、日本ではフランス語のシードルとしても知られる。りんごの種類により、甘いものも苦いものもあり、後者の味はビールに似ている。
レイ(ライン)	ley (line)	古代の遺跡、中世の教会、古代の墓地、古い泉、丘の頂上など、重要とされる場所を結んだ1直線。
霊媒	clairvoyant, medium	心霊主義において、死者の言葉をクワイアントに伝える人を指すことが多い。